

第IV章 第VI層 L文化層

第1節 概要

第VI層 L文化層は第VI層中位から下位にかけて包含された石器群で、槍先形尖頭器を伴い、石刃素材のナイフ形石器を主体とする文化層である。その具体的な内容は、第2次調査と第4次調査とにおいて確認されたA・B-10~14区に位置する石器ブロック1と第1号礫群の分析によってすでに提示されている（小林・谷口編 1992、谷口・宮尾編 1994）が、第7次調査で発掘対象にした範囲であるC-7~9区、A・B、W~Z-6~9区については、第VI層に調査深度が及んでいなかったため、わずかな資料が第3次調査に際して提示されているに過ぎない（永峯・谷口編 1993）。

第7次調査では、C-7~9区、A・B、W~Z-6~9区の第VI層以下で、第VI層 L文化層に帰属すると判断される礫群5基、石器ブロック2か所を把握した。出土資料は、石器70点、剥片・碎片926点、礫1755点の合計2751点である。石器70点の器種別内訳は、ナイフ形石器8点、搔器1点、拇指状搔器1点、細部調整剥片16点、挟入石器5点、微細剥離痕を有する剥片8点、楔形石器1点、石刃・石刃状剥片18点、石核12点である。

これらの資料の出土層位では、第V層文化層の主体をなす細石刃なども含まれていたが、第1次調査、第2次調査、第3次調査の出土資料とともに検討した平面分布と垂直分布とに見られる第V層文化層の石器群のまとまりと、第VI層 L文化層の石器群のまとまりとの相違に基づいて分離し、A・Z・Y-6・7区の石器群のまとまりを石器ブロック2とし、W・X-6~8区の石器群のまとまりを石器ブロック3としている。これらの石器ブロックで把握された第VI層 L文化層への帰属は、母岩別資料分析を経て蓋然性を高めている。なお、第7次調査における母岩別資料分析では、これまで報告されている4つの母岩別資料に新たな接合例、同一母岩資料を加えたほかに、12個の母岩別資料を改めて追加している。

また、第VI層 L文化層全体あるいは石器ブロックそれぞれの石器器種組成に注目した場合、今回の調査では槍先形尖頭器が出土していないが、発掘区の一部重複する第3次調査において検出され、当該文化層に帰属する石器群としてナイフ形石器とともに報告されている槍先形尖頭器が、その出土位置から判断して石器ブロック2や石器ブロック3に含まれるものと考えられる。それゆえに各石器ブロックの石器器種組成の提示にあたってはこれらの石器群を含めて提示している。

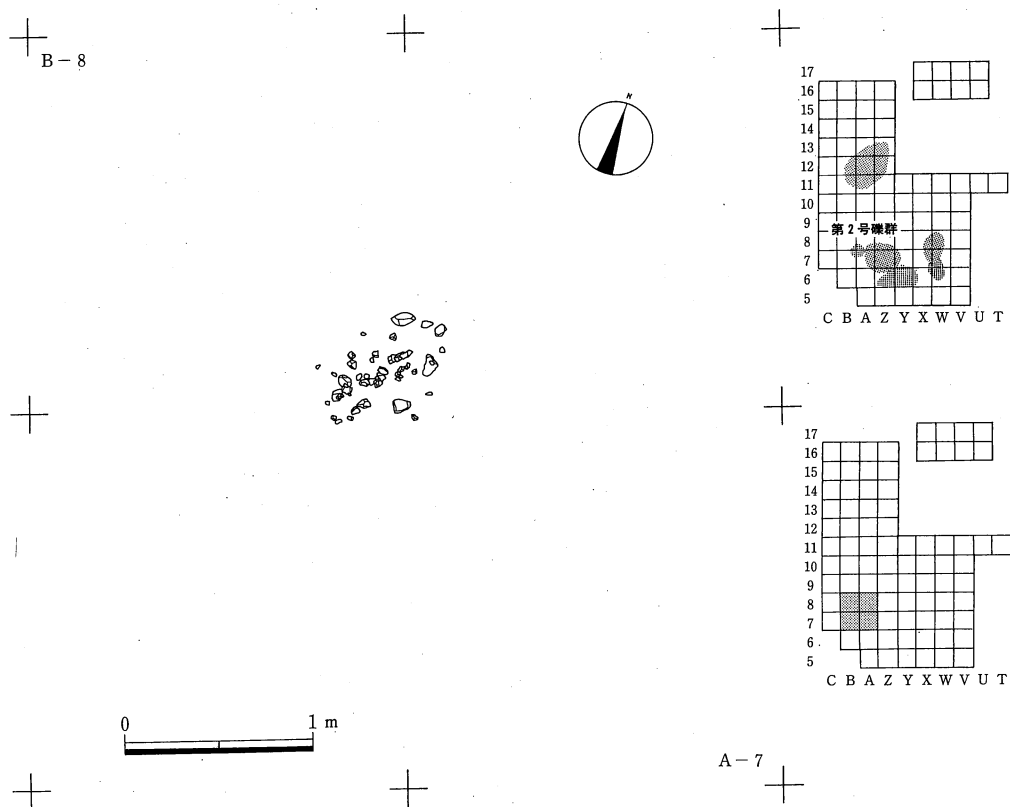
また、礫群はA・B-7・8区に第2号礫群を、A、Y、Z-6~8区に第3号礫群と第4号礫群とを、W・X-6~8区に第5号礫群と第6号礫群とを把握した。これらの礫群と石器

ブロックとには位置関係のうえで関連が認められ、石器ブロック2は第3号礫群と第4号礫群とを、石器ブロック3は第5号礫群と第6号礫群とを、それぞれ覆うように形成されており、注意される。特に第5号礫群と第6号礫群に関しては、第3次調査で確認された第V層文化層の第2号礫群や第3号礫群がちょうど同じW・X-6~8区の上に位置していたために、その下部とも考えられたが、今回の調査で確認された第VI層L文化層石器ブロック3の下位に今回確認された礫群は位置することから、第VI層L文化層への帰属するものと判断し、第5号礫群と第6号礫群とした。
(田村令子)

第2節 礫群の位置と内容

(1) 各礫群の位置

W・X-6~8区、A、Y、Z-6~8区、A・B-7・8区、B・C-8・9区、C-7区それぞれに礫のまとまりがあり、A・B-7・8区を第2号礫群として、A、Y、Z-6~8区を第3号礫群と第4号礫群として、W・X-6~8区を第5号礫群と第6号礫群として、それぞれを把握し、第VI層L文化層に帰属するものと判断した。



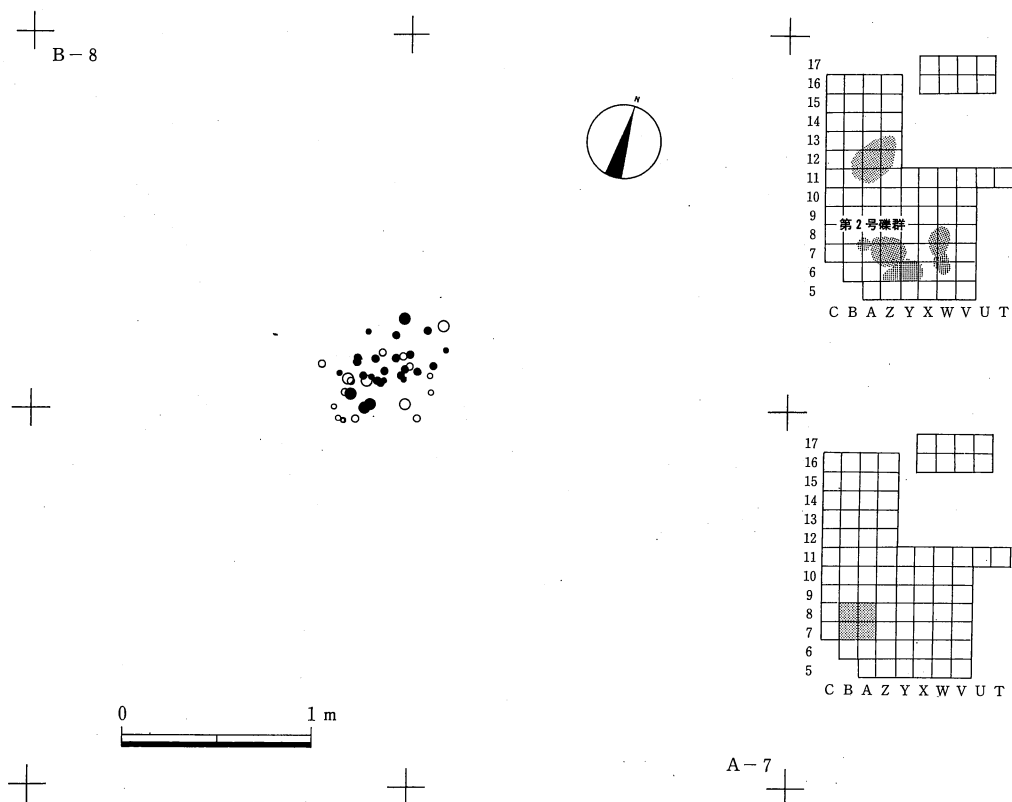
第65図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第2号礫群(1/40)

第2節 礫群の位置と内容

これらの礫群は、後述する第VI層L文化層の石器ブロックと平面位置に関連が認められ、第3号礫群と第4号礫群とは石器ブロック2と、第5号礫群と第6号礫群とは石器ブロック3と、それぞれ重複する位置関係を示す。垂直分布ではいずれの礫群も石器ブロックの下位に位置しており、平面分布のうえで第3次調査（永峯・谷口編 1993）で確認されている第V層文化層の礫群と重複する場合もあるが、当該文化層の石器ブロックを介して明確に分離される。また、第4次調査の成果（谷口・宮尾編 1994）を参照したうえで、検出層位に基づいて第VII層文化層の礫群としたB・C-8・9区の礫群、C-7区の礫群とは、平面分布のうえで明瞭に異なっている。

なお、A、Y、Z-6~8区とW・X-6~8区とに見られた礫のまとまりは、それぞれにひとまとまりの礫群とも判断できたが、構成礫の接合状況の集中している単位、あるいは構成礫の石材が均質な単位を礫群と捉え、それぞれ2基の礫群の重複する状態と判断し、第3号礫群と第4号礫群、第5号礫群と第6号礫群とした。

ただし、同時に構成礫の接合では、礫群相互にまたがる接合状況が多数確認できる。特に第2次調査（小林・谷口編 1992）と第4次調査（谷口・宮尾編 1994）とで検討されたA・B、Z-

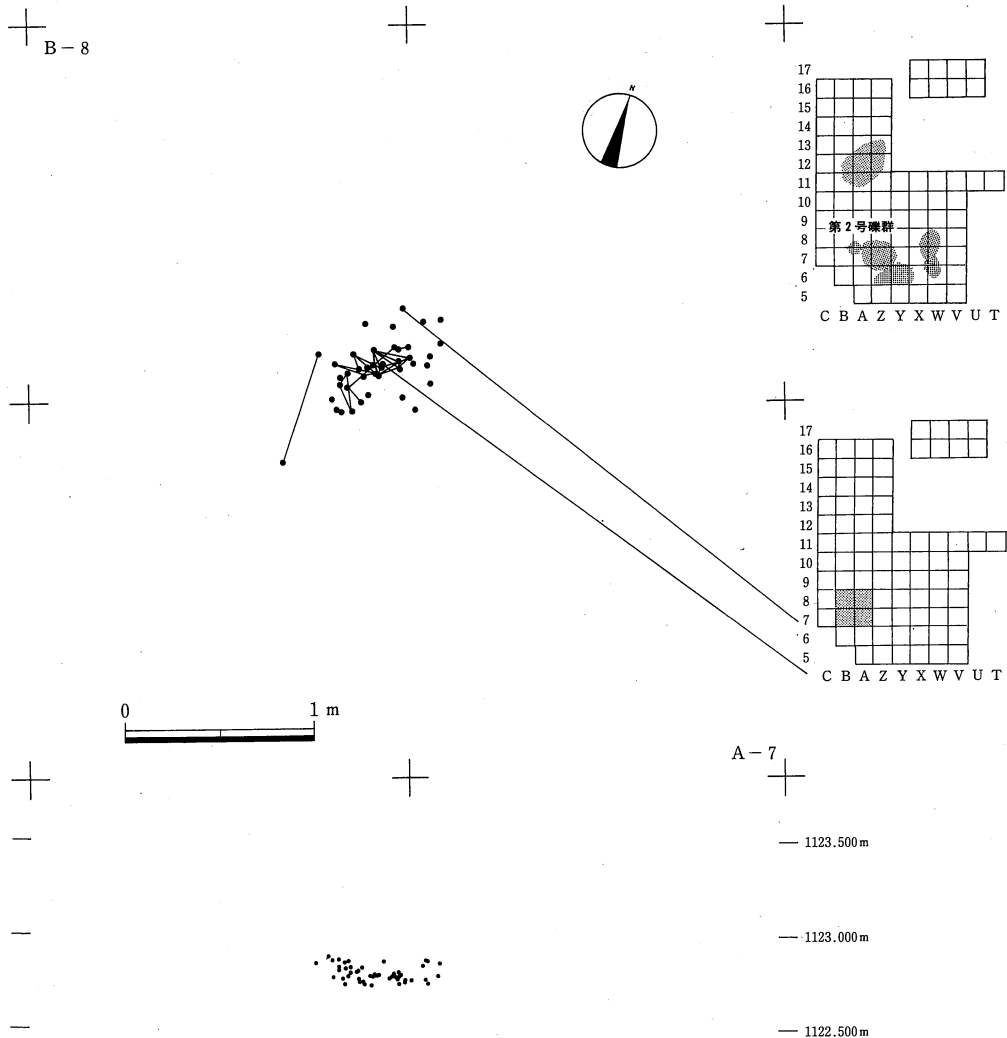


第66図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第2号礫群 構成礫の重量・被熱状態(1/40)

第IV章 第VI層L文化層

11~14区にひろがる第VI層L文化層第1号礫群を含めて第VI層L文化層の6基の礫群相互での構成礫の接合状況は多数確認され、第VI層L文化層への帰属を傍証するものである。

しかしながらその一方で、第V層文化層の礫群や第VII層文化層の礫群への文化層をまたがる接合状況も確認される。このような文化層を越える礫群の構成礫の接合状況は、すでに第4次調査報告(谷口・宮尾編 1994)でも指摘されていることであり、各礫群の構成礫の中には文化層誤認定のものが含まれていることは否めないが、構成礫の接合状況の集中している単位、あるいは構成礫の石材が均質な単位を礫群と捉えたうえで、より新しい文化層の礫群を構成する礫破碎片のほうが大形であることと、各文化層毎に礫群と石器群とが関連するように形成されていることとを重視し、使用可能な礫群の構成礫破碎片の持ち出し、持ち込みと考えたい。



第67図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第2号礫群 接合状態(1/40)

第2節 礫群の位置と内容

表3 第VI層L文化層第2号礫群 構成礫諸属性

遺存度 (g)	A		B		C		D		E	
	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱
990-1000										
980-990										
970-980										
960-970										
950-960										
940-950										
930-940										
920-930										
910-920										
900-910										
890-900										
880-890										
870-880										
860-870										
850-860										
840-850										
830-840										
820-830										
810-820										
800-810										
790-800										
780-790										
770-780										
760-770										
750-760										
740-750										
730-740										
720-730										
710-720										
700-710										
690-700										
680-690										
670-680										
660-670										
650-660										
640-650										
630-640										
620-630										
610-620										
600-610										
590-600										
580-590										
570-580										
560-570										
550-560										
540-550										
530-540										
520-530										
510-520										
500-510										
490-500										
480-490										
470-480			1							
460-470										
450-460	1		1							
440-450										
430-440										
420-430										
410-420										
400-410										
390-400										
380-390										
370-380										
360-370	1		1							
350-360										
340-350										
330-340					1					
320-330										
310-320						1				
300-310										
290-300										
280-290										
270-280										
260-270										
250-260		1			1					
240-250										
230-240										
220-230										
210-220										
200-210										
190-200							1			
180-190										
170-180										
160-170				1						
150-160										
140-150										
130-140										
120-130										
110-120									1	
100-110							1			
90-100									1	
80-90									2	
70-80									1	
60-70										
50-60									1	1
40-50									1	
30-40									2	
20-30									4	1
10-20									3	6
0-10									4	8
TOTAL	2	1	3	1	3	0	2	0	18	18

なお、第VI層L文化層の6基の礫群の形成された場所は、第5次調査（小林・宮尾編 1996）や第6次調査（永峯・宮尾編 1996）で確認された傾斜する旧地形に対して弧状に展開している点は注意される。礫群の形成場所は文化層別に相違しており（小林・宮尾編 1996）、旧地形の変遷と関連して、当時の場の利用について示唆的である。

以下に各礫群について記載するが、構成礫の遺存状態については第3次調査報告（永峯・谷口編 1993）で提示した基準に従い、A：完形、B：全体の約3/4以上を残す破碎礫、C：全体の約1/2を残す破碎礫、D：全体の約1/4を残す破碎礫、E：小部分の破碎に分類してある。

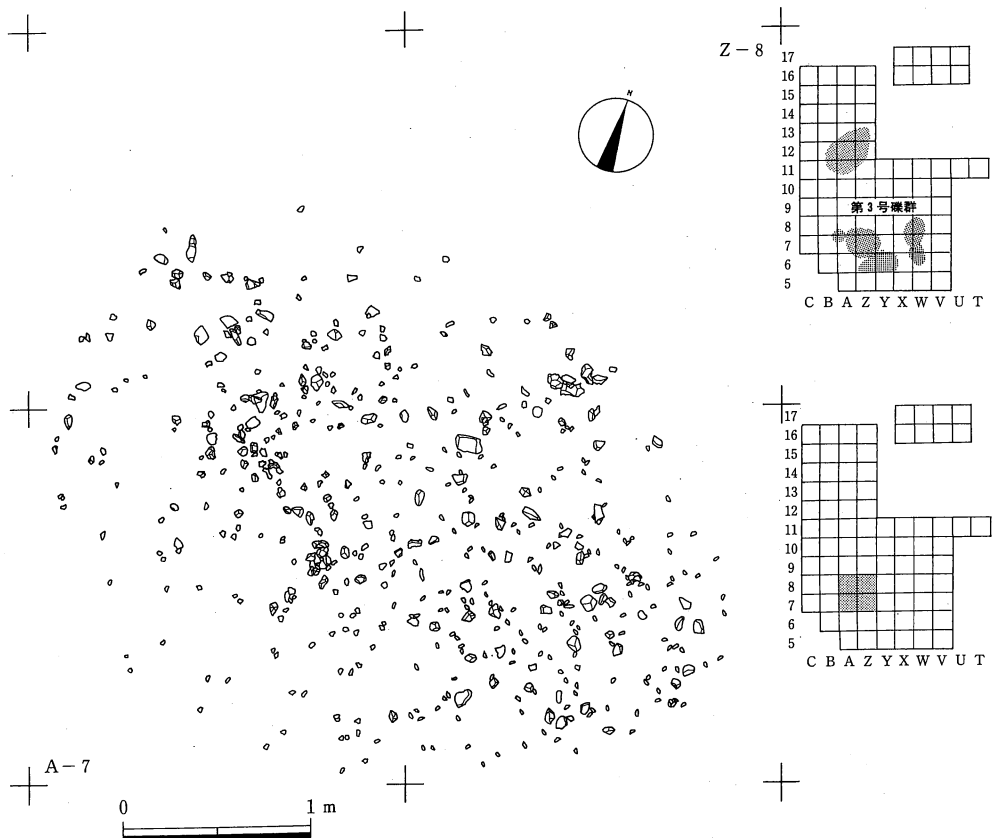
(2) 第2号礫群（第65～67図）（表3）

〈規模と形状〉

A・B-7・8区で長径約0.8mの楕円形状を呈してひろがる。構成礫の総数は48点で、総重量4164.82gである。他の当該文化層の礫群と比較して、範囲と構成礫の点数が小規模である。

〈構成礫の石質〉

石材別点数比はチャート29点（60.4%）、砂岩11点（22.9%）、安山岩8点（16.7%）で、チャートが半数以上の高い割合を占めているが、石材別総重量ではチャート1122.69g（27.0%）、砂



第68図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第3号礫群(1/40)

第2節 礫群の位置と内容

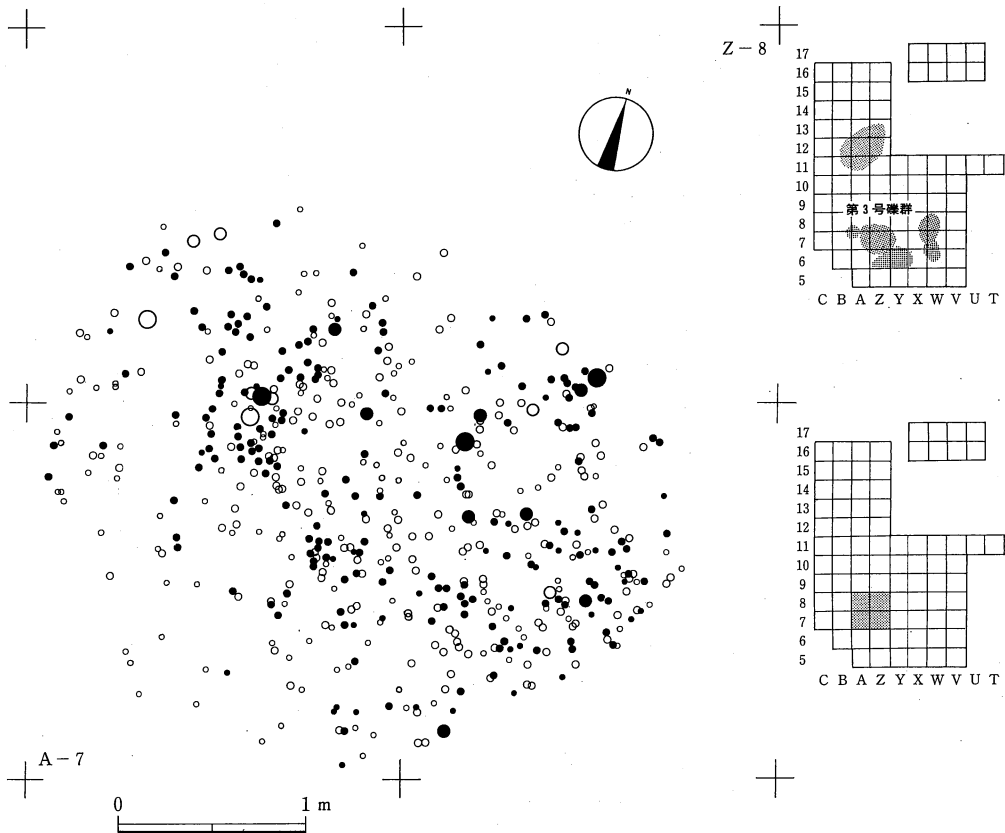
岩840.85g (20.2%)、安山岩2201.2g (52.8%) となり、安山岩が逆転する。

〈構成礫の遺存状態〉

遺存状態別内訳は、A (完形礫) 2点 (4.2%)、B 4点 (8.3%)、C 3点 (6.2%)、D 2点 (4.2%)、E 37点 (77.1%) で、圧倒的に小破碎礫が多い。小破碎礫はいずれもチャートであるのに対して、完形礫はともに安山岩であり、不明瞭ながら敲打痕も観察される。なお、構成礫中最大の474.90gのものは安山岩で遺存状態は完形に近いBである。構成礫のうち大形のものが小形のものを囲むように分布し、恰もチャートの岩塊を安山岩や砂岩で粉碎した直後のような状況を呈する。すでに石器ブロックと礫群との形成場所の関連性が指摘されているが、第VI層L文化層第2号礫群は、より積極的に石器製作と関わって評価すべきかもしれない。

〈構成礫の被熱状態〉

構成礫48点のうち27点 (56.3%) に被熱の痕跡が認められた。そのうち完形礫は1点、破碎礫は26点である。石質別に点数を見るとチャート13点、砂岩9点、安山岩5点とチャートが多いが、比率ではチャート44.8%、砂岩81.8%、安山岩52.5%と砂岩や安山岩の被熱率が高い。被熱礫は礫群内に散在しており、前述したように石器製作との関わりを積極的に評価すれば、

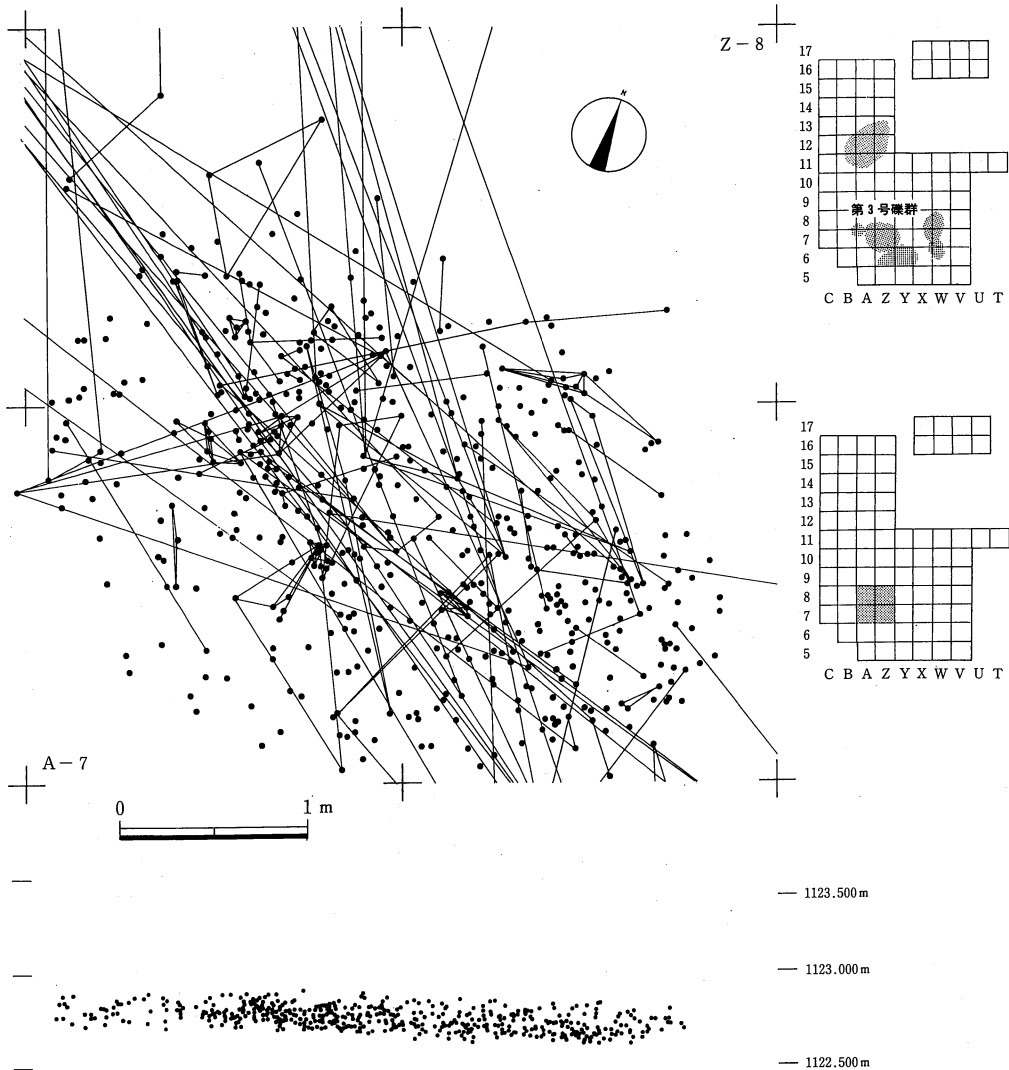


第69図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第3号礫群 構成礫の重量・被熱状態(1/40)

砂岩や安山岩を主要構成礫とした礫群において、チャートの粉碎を行った結果とも評価できよう。この場合、石器製作に関わってチャートを加熱するような行為を想定できるかもしれないが、他にその痕跡を示す積極的な状況は認められない。

〈構成礫の接合状態〉

礫群のひろがりのほぼ中央に分布するチャートの小形の破碎礫間に多くの接合が認められる。その一方で、それらを取り巻くように分布する安山岩や砂岩のやや大形の破碎礫間にはほとんど接合はない。わずかに第VI層L文化層第4号礫群の構成礫との間に接合が認められる点が注意される。繰り返しになるが、このような接合状況からもチャートの破碎を目的とした礫群であった可能性が指摘できるのではないだろうか。



第70図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第3号礫群 接合状態(1/40)

第2節 礫群の位置と内容

表4 第VI層L文化層第3号礫群 構成礫諸属性

遺存度 (g)	A		B		C		D		E	
	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱
990-1000										
980-990										
970-980										
960-970										
950-960										
940-950										
930-940										
920-930			1							
910-920										
900-910										
890-900										
880-890										
870-880										
860-870										
850-860										
840-850										
830-840										
820-830										
810-820										
800-810										
790-800										
780-790										
770-780										
760-770										
750-760		1								
740-750	1									
730-740										
720-730										
710-720										
700-710										
690-700										
680-690										
670-680										
660-670										
650-660										
640-650										
630-640										
620-630										
610-620										
600-610										
590-600										
580-590										
570-580										
560-570				1						
550-560										
540-550										
530-540										
520-530	1									
510-520										
500-510										
490-500										
480-490										
470-480										
460-470										
450-460	1									
440-450										
430-440										
420-430										
410-420	1									
400-410	1	1								
390-400					1					
380-390										
370-380			1							
360-370										
350-360										
340-350										
330-340			1							
320-330							1			
310-320		1								
300-310	1							1		
290-300										
280-290				1						
270-280	1		1							
260-270					1	1	1			
250-260	1						2			
240-250										
230-240										
220-230			1						1	
210-220							1			
200-210		1								
190-200	1	1					1			
180-190	1	1			1		2			
170-180										
160-170			2				1		1	
150-160		1							1	
140-150	4						1		1	
130-140					1		3	2		
120-130										2
110-120	1		1		1				2	1
100-110							1		3	
90-100	1	1					1	1	8	3
80-90									4	2
70-80							6		5	3
60-70							4	1	5	3
50-60							1		18	7
40-50									13	11
30-40									14	9
20-30									25	14
10-20		1							32	49
0-10									45	235
TOTAL	17	9	8	2	4	1	26	5	176	339

(3) 第3号礫群 (第68~70図) (表4)

〈規模と形状〉

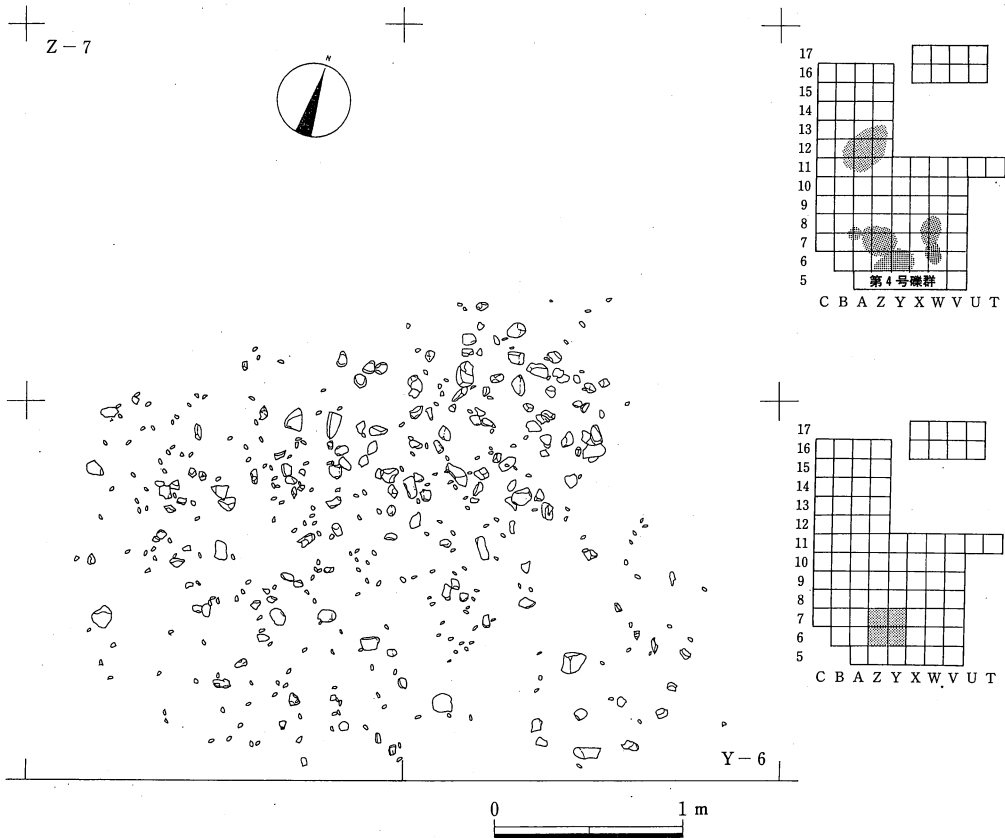
A・Z-7・8区に位置し、長径約3.8mの規模で不整楕円形を呈してひろがる。完形・破碎の区別なく大形礫が全体に散在しており、構成礫の中では目立っている。構成礫総数587点、総重量26459.79gである。

〈構成礫の石質〉

構成礫587点の石質別内訳は、チャート385点 (65.6%)、砂岩133点 (22.6%)、安山岩68点 (11.6%)、凝灰岩1点 (0.2%) とチャートの点数のうえでは比率が高い。

〈構成礫の遺存状態〉

構成礫587点の遺存状態別内訳は、A (完形礫) が26点 (4.4%)、Bが10点 (1.7%)、Cが5点 (0.9%)、Dが31点 (5.3%)、Eが515点 (87.7%) となっている。完形礫は100~300gのものが最も多く、特に150gほどに集中する。完形礫中最大のものは、755.42gを量る砂岩で、次いで746.92gを量る安山岩となる。一方、最少のものは14.01gを量る安山岩である。破碎礫では400gを越えるものが極端に少なく、925.83gを量る安山岩と552.88gを量るチャートのみで2点



第71図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第4号礫群(1/40)

第2節 礫群の位置と内容

にとどまり、破碎礫561点中519点(92.5%)は100g未満である。完形礫の総重量は7020.22gで平均270.01g、破碎礫の総重量は19439.57gで平均34.65gである。

〈構成礫の被熱状態〉

構成礫587点中231点(39.4%)に被熱痕跡が認められた。このうち特に遺存状態状態Eを除く比較的大形の礫では、72点中55点(76.4%)に被熱痕跡が認められる。また、被熱礫中5点には黒色付着物が認められた。被熱礫は全体に散在しており、偏在する傾向は認められない。

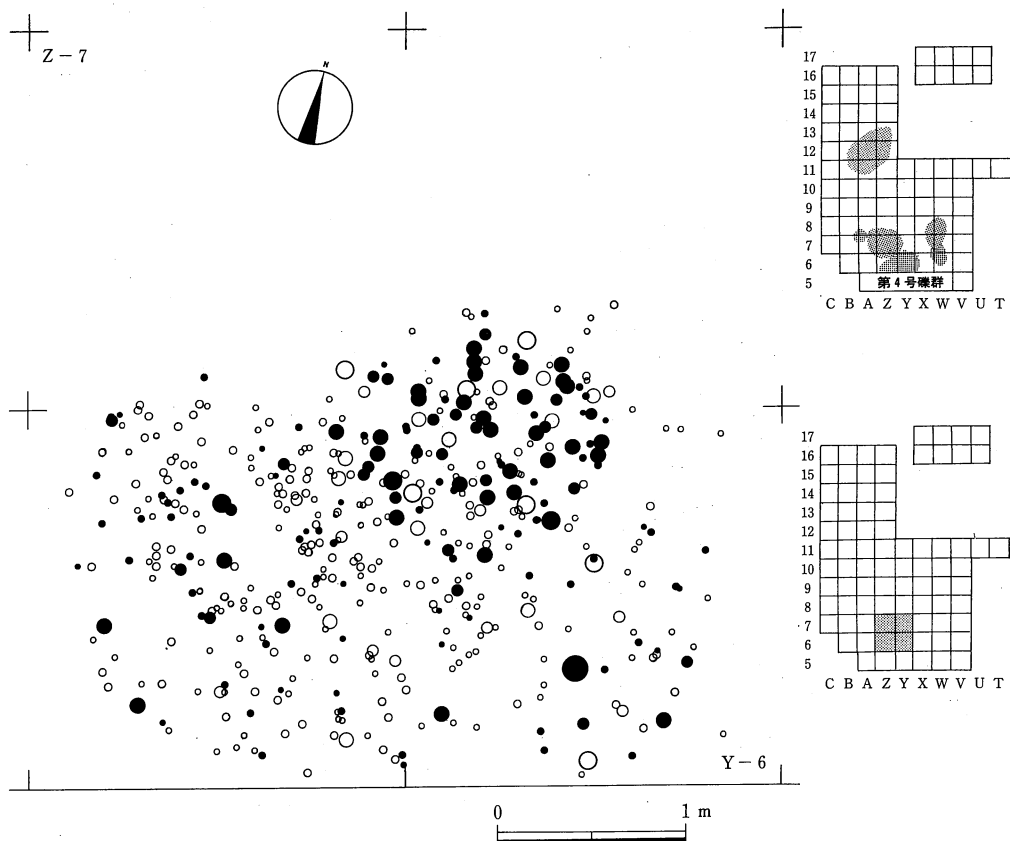
〈構成礫の接合状態〉

構成礫相互の接合は第3号礫群全体にわたって認められ、ほぼ完形にまで復元されるような完結する接合が多い。同時に第VI層L文化層第1号礫群の構成礫や南側に近接する第VI層L文化層第4号礫群の構成礫と接合する例がある。その一方で西側に近接する第VI層L文化層第2号礫群の構成礫とは接合する例が見られない。

(4) 第4号礫群(第71~73図)(表5)

〈規模と形状〉

Y・Z-6・7区に位置し、長軸約3.6mの不整楕円形を呈する。今回の発掘区の南辺にあたり、

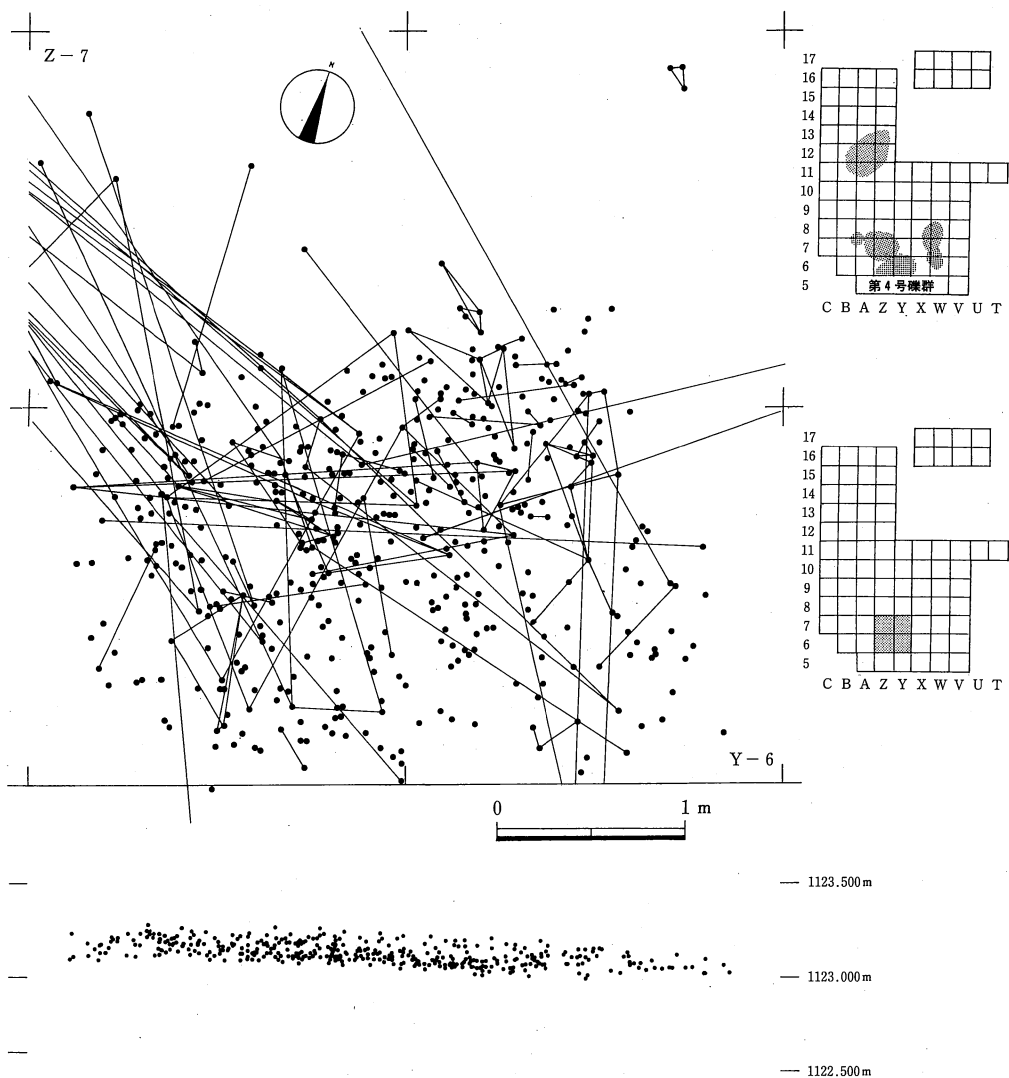


第72図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第4号礫群 構成礫の重量・被熱状態(1/40)

一部未確認の可能性もある。検出されている範囲に関する限り北側の礫の分布密度が高く、南側の礫の分布密度が低い傾向にある。完形・破碎の区別に関わらず大形の礫が目立ち、特に北東部分へ集中する傾向がある。構成礫は476点で、総重量35488.64gである。

〈構成礫の石質〉

構成礫476点の石質別内訳は、チャートが294点（61.8%）、砂岩が74点（15.5%）、安山岩が108点（22.7%）とチャートが大半を占めている。しかし、構成礫に遺存状態と関連させて見た場合、完形礫45点中チャート2点（4.4%）、砂岩4点（8.9%）、安山岩39点（86.7%）と安山岩が大半を占め、逆に破碎礫431点中チャート292点（63.7%）、砂岩70点（16.2%）、安山岩69点（16.0%）とチャートが跳び抜けて多くを占めている。



第73図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第4号礫群 接合状態(1/40)

第2節 礫群の位置と内容

表5 第VI層L文化層第4号礫群 構成礫諸属性

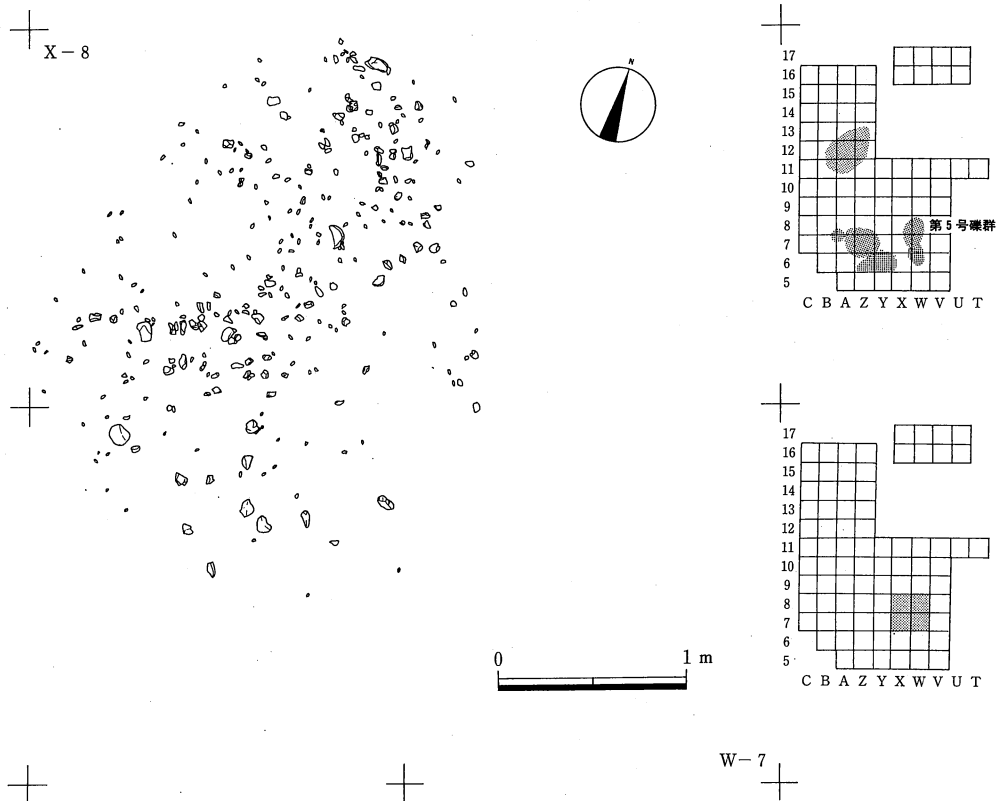
遺存度 (g)	A		B		C		D		E	
	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱
1050-1060										
1040-1050										
1030-1040										
1020-1030										
1010-1020										
1000-1010					1					
990-1000										
980-990										
970-980										
960-970										
950-960										
940-950										
930-940										
920-930										
910-920										
900-910										
890-900										
880-890										
870-880										
860-870										
850-860										
840-850										
830-840										
820-830										
810-820										
800-810										
790-800										
780-790										
770-780										
760-770										
750-760										
740-750										
730-740										
720-730										
710-720		1								
700-710					1					
690-700										
680-690										
670-680										
660-670			1							
650-660										
640-650										
630-640	1									
620-630										
610-620		1								
600-610										
590-600						1				
580-590										
570-580		1			1					
560-570				1						
550-560										
540-550										
530-540										
520-530		1								
510-520			1							
500-510			1							
490-500								1		
480-490								1		
470-480								1		
460-470	1	1						1		
450-460	1									
440-450	1									
430-440										
420-430		1						1		
410-420	1	1						1		
400-410										
390-400										
380-390	1									
370-380	1									
360-370	1									
350-360					2		1			
340-350			1							
330-340		1								
320-330		2								
310-320			1		1					
300-310	1									
290-300										
280-290	1									
270-280		1					1			
260-270	2	1								
250-260	1				1			1		
240-250	1			1						
230-240	1		2							
220-230										
210-220	3							1		
200-210		1	1							
190-200	2								1	
180-190					1					
170-180	1	1			1		1			
160-170	1					1	1			
150-160										
140-150	2				1					
130-140	1				1		2	1	1	
120-130							4			
110-120							1	1		1
100-110							2	3	1	
90-100	1	1		1			1	3		
80-90							2	3	2	1
70-80							3	3	3	2
60-70	1	1		1			2	3	2	3
50-60							1	3	7	4
40-50							3	2	6	7
30-40							2	2	9	16
20-30							3	2	12	18
10-20								1	8	41
0-10				1				1	27	175
TOTAL	29	16	8	5	11	2	35	22	80	268

〈構成礫の遺存状態〉

構成礫476点の遺存状態別内訳は、A（完形礫）が45点（9.5%）、Bが13点（2.7%）、Cが13点（2.7%）、Dが57点（12.0%）、Eが348点（73.1%）となっている。当該文化層の他の礫群に比べ完形礫の比率が著しく高い。完形礫の重量は最大712.83g、次いで629.26gのものがある。最少は75.77gである。最大最小ともに安山岩で、500g以上を量る完形礫は安山岩3点、砂岩2点である。また、破碎礫の中にも最大1005.20gの安山岩があり、それ以外にも500gを越える破碎礫として安山岩3点、チャート2点がある。しかしながら、その一方で破碎礫431点中397点（92.1%）が140g以下に集中し、さらに半数以上の203点（51.1%）は10g以下のものである。破碎礫の多くはチャートであり、完形・破碎の区別なく大形の礫に安山岩や砂岩が目立っていることと対称的である。なお、完形礫の総重量は13600.48g、平均302.23g、破碎礫の総重量は21888.16g、平均50.78gである。

〈構成礫の被熱状態〉

構成礫中476点163（34.2%）に被熱痕跡がある。このうち特に遺存状態Eを除く比較的大形の礫では、128点中83点（64.8%）と高い比率で被熱痕跡が認められている。また被熱礫中8点



第74図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第5号礫群(1/40)

第2節 礫群の位置と内容

には黒色付着物がある。被熱礫は完形・破碎の区別なく大形の礫が比較的集中する北東部分にまとまっている。

〈構成礫の接合状態〉

構成礫相互の接合は第4号礫群全体にわたって認められ、ほぼ完形にまで復元されるような完結する接合が多い。同時に第VI層L文化層第1号礫群、第2号礫群、第3号礫群、第6号礫群それぞれの構成礫と接合する構成礫があり、当該文化層の礫群間の密接な関連を示している。その中でも特に第1号礫群や第3号礫群の構成礫と接合する場合が多い。

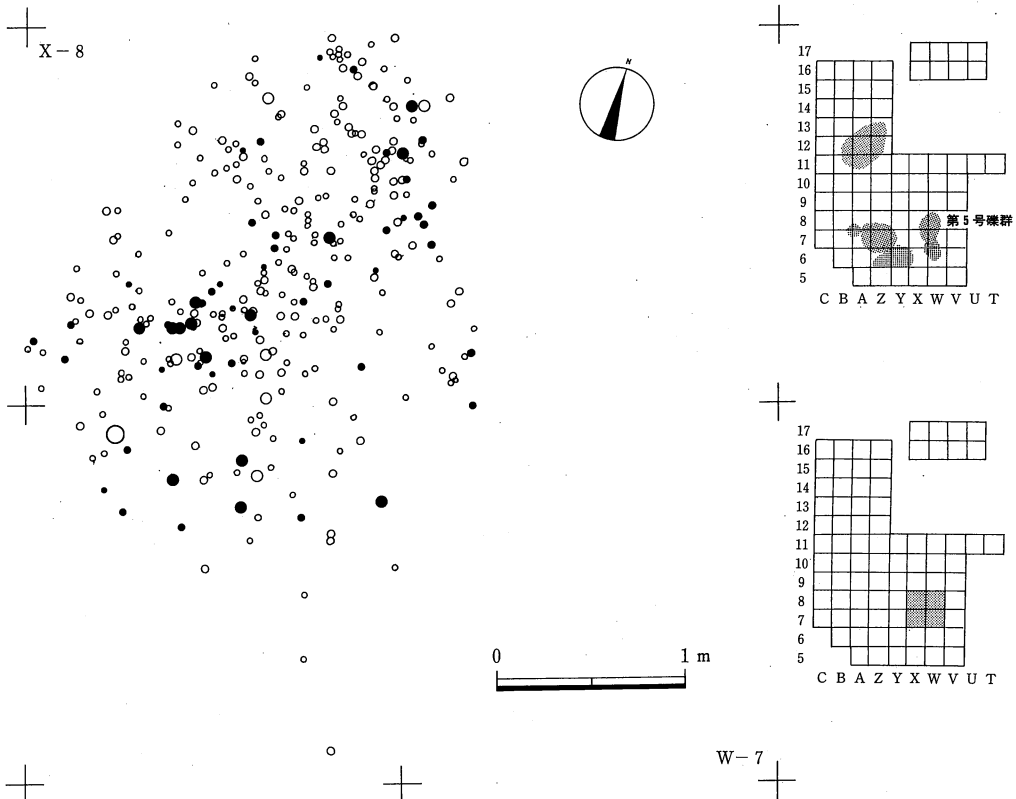
(5) 第5号礫群 (第74~76図) (表6)

〈規模と形状〉

W・X-7・8区に位置し、長軸約3.0mの不整楕円形を呈する。分布密度は全体的に散漫で、特に北西部分は希薄で、南東部分に弧状に完形・破碎の区別に関わらず比較的大形の構成礫が偏在している。構成礫は313点で、総重量9583.43gである。

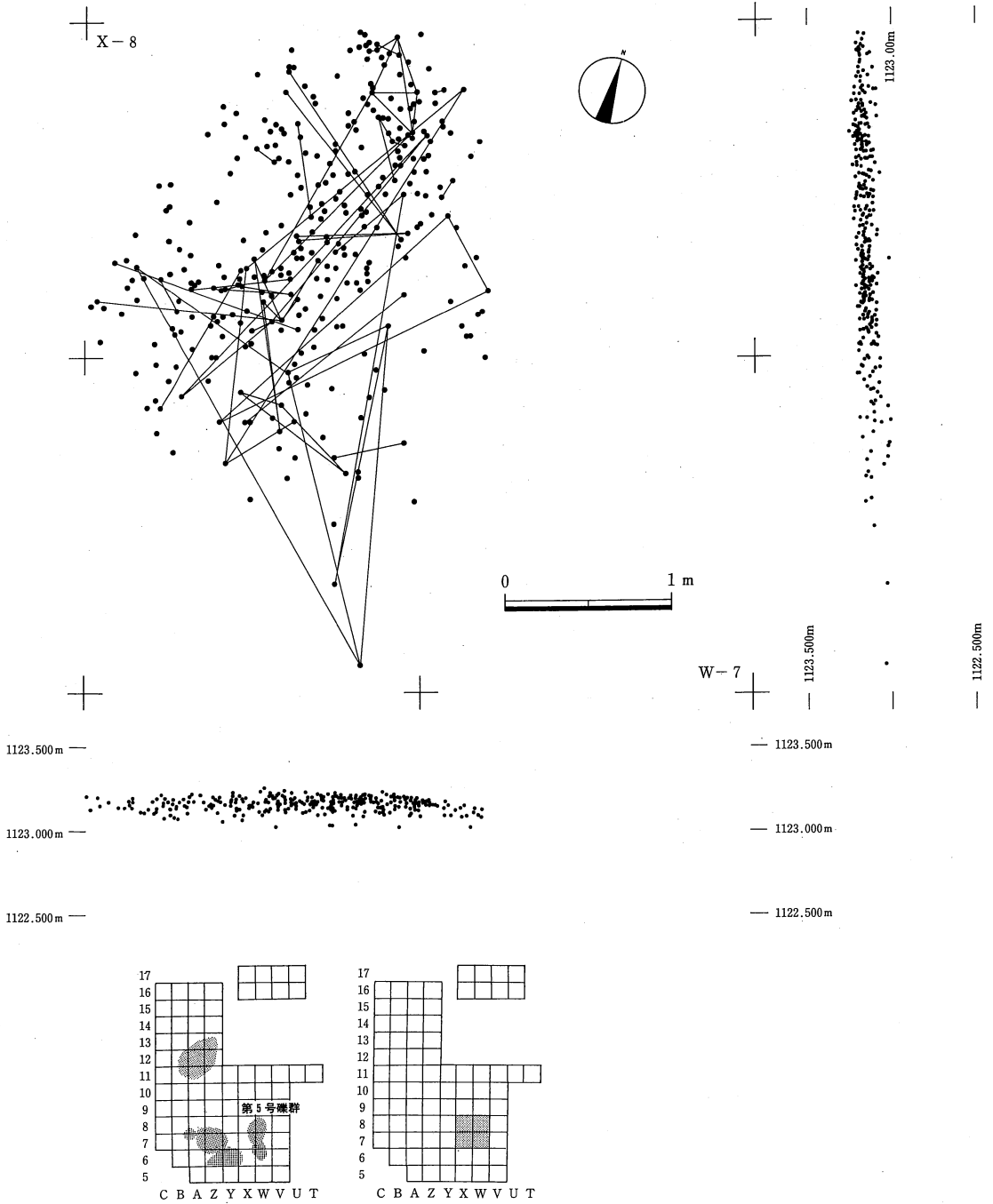
〈構成礫の石質〉

構成礫313点中の石質別内訳は、チャートが157点 (50.2%)、砂岩が109点 (34.8%)、安山岩



第75図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第5号礫群 構成礫の重量・被熱状態(1/40)

第IV章 第VI層L文化層



第76図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第5号礫群 接合状態(1/40)

第2節 礫群の位置と内容

表6 第VI層L文化層第5号礫群 構成礫諸属性

遺存度 (g)	A		B		C		D		E	
	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱
990-1000										
980-990										
970-980										
960-970										
950-960										
940-950										
930-940										
920-930										
910-920										
900-910										
890-900										
880-890										
870-880										
860-870										
850-860										
840-850										
830-840										
820-830										
810-820										
800-810										
790-800										
780-790										
770-780										
760-770										
750-760										
740-750										
730-740										
720-730										
710-720										
700-710										
690-700										
680-690										
670-680										
660-670										
650-660										
640-650										
630-640										
620-630										
610-620										
600-610										
590-600										
580-590										
570-580										
560-570										
550-560										
540-550										
530-540										
520-530										
510-520		1								
500-510										
490-500										
480-490										
470-480										
460-470										
450-460		1								
440-450										
430-440										
420-430										
410-420										
400-410										
390-400										
380-390										
370-380										
360-370										
350-360										
340-350										
330-340										
320-330										
310-320				1						
300-310				1						
290-300										
280-290										
270-280										
260-270					1					
250-260										
240-250					1					
230-240										
220-230					1					
210-220										
200-210										
190-200										
180-190					1	1				
170-180							1		1	
160-170							1	1	1	
150-160										
140-150										
130-140										
120-130										2
110-120					1		1		1	
100-110					1				2	
90-100									2	
80-90							1		1	2
70-80								1	1	3
60-70							1	2	1	1
50-60								1	1	5
40-50								1	1	8
30-40						1			4	14
20-30									3	11
10-20									5	20
0-10									5	41
TOTAL	0	2	0	2	6	2	5	4	34	258

が47点(15.0%)である。他の礫群に比べ完形礫は安山岩2点、砂岩1点と少ないが、破碎礫も含めて砂岩の割合が高い。この点は近接する第6号礫群と分離にあたって、構成礫の接合状態とそのまとまりを基準としながら、かつ、構成礫の石質の違いを考慮したことを反映しており、恣意的な傾向といえるかもしれない。

〈構成礫の遺存状態〉

構成礫313点の遺存状態別内訳は、A(完形礫)が3点(0.9%)、Bが2点(0.6%)、Cが9点(2.9%)、Eが291点(93.0%)となっている。500.56gを量る砂岩、454.85gを量る安山岩の完形礫2点を除くと、400g以上の構成礫はなく、100g未満のものが292点(93.3%)とほとんどを占めている。完形礫の総重量は1037.99g、平均346.00g、破碎礫の総重量は8545.44g、平均27.57gである。

〈構成礫の被熱状態〉

構成礫313点中45点(14.4%)に被熱痕跡がある。完形礫3点には被熱痕跡が見られない。被熱痕跡のある礫を石質別に見るとチャート7点、砂岩30点、安山岩8点となり、砂岩の被熱率が高い。被熱礫は南東部分に弧状に偏在しており、比較的大形の構成礫の分布と共通性が認められる。

〈構成礫の接合状態〉

構成礫に見られる接合は、ほとんど第5号礫群内で完結し、他の礫群の構成礫との間に接合が認められない。ただし、南側に近接する第6号礫群とは一部形成場所が重複しており、構成礫の石質や接合状況によって礫群相互を分離しているため、第5号礫群の南側にある構成礫の中には、第6号礫群の構成礫とすべきものを誤認している可能性がある。この2つの礫群に関しては近接していて、構成礫の石質の違いが主要な礫群分離の根拠になっているために、あるいはまた、1つの礫群を2つに分離してしまっている可能性も否定できない。

(6) 第6号礫群(第77~79図)(表7)

〈規模と形状〉

W・X-6~8区に位置し、長軸約2.8mの不整楕円形を呈している。特にW・X-7区に完形・破碎の区別と関わらない大形の礫が集中する。平面分布と垂直分布とを一見すると、北西のまとまりと南西のまとまりとに分かれるが、後述する構成礫の石質の均質性と接合を重視して1つの礫群と判断した。構成礫は332点で、総重量17883.48gである。

〈構成礫の石質〉

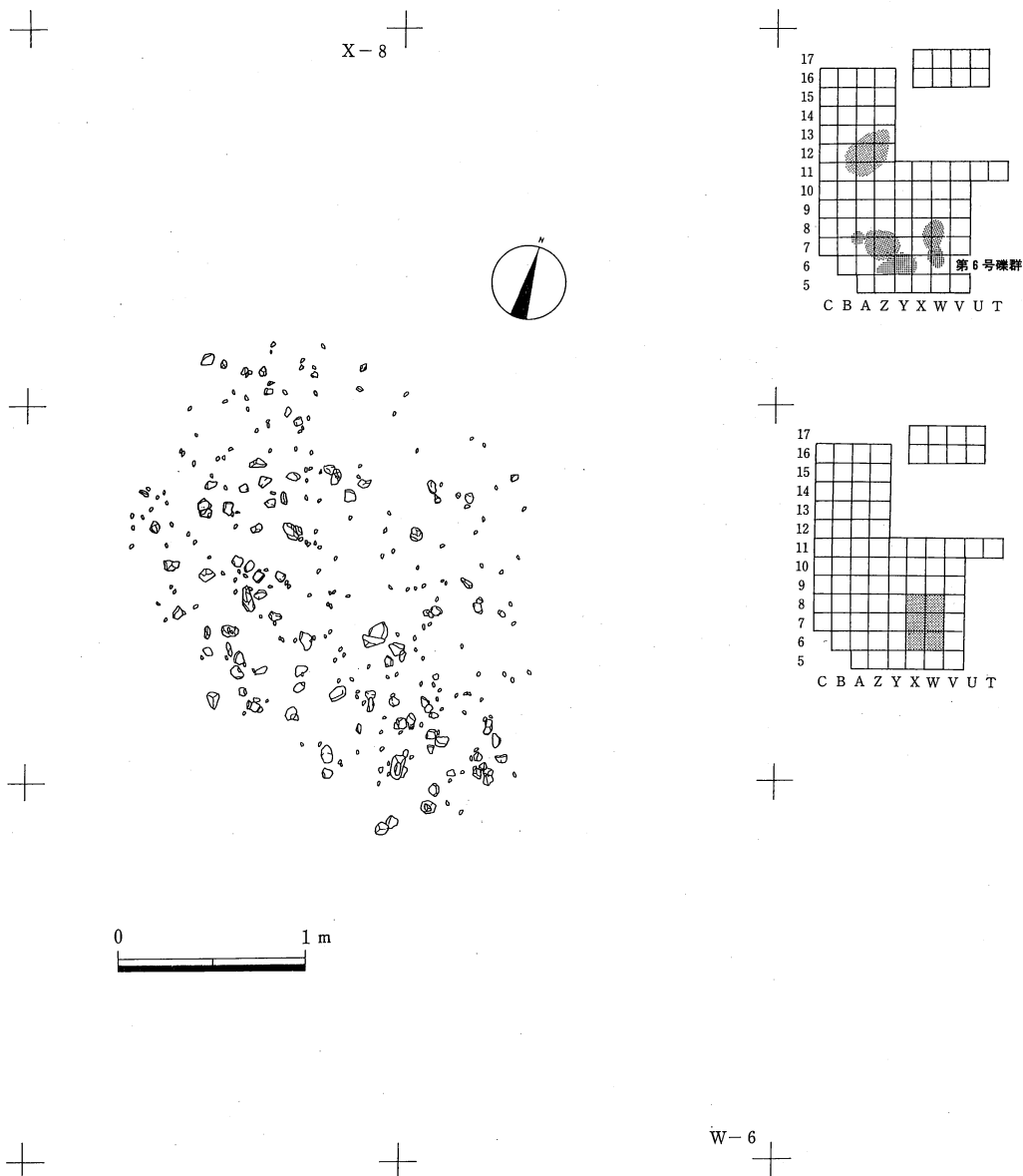
構成礫332点の石質別内訳は、チャートが239点(72.0%)、砂岩が52点(15.7%)、安山岩が41点(12.3%)である。ひじょうにチャートの占める割合が高い。特に破碎礫310点中238点をチャートが占めており、砂岩49点、安山岩23点と比較して突出している。同時に完形礫22点について石質を見るとチャートは1点のみで、砂岩3点、安山岩18点と安山岩が多いことが注意されるが、

第2節 礫群の位置と内容

他の礫群に比べてチャートの比率が高く、構成礫の石質が均質である。この点は近接する第5号礫群と分離にあたって、構成礫の接合状態とそのまとまりを基準としながら、かつ、構成礫の石質の違いを考慮したことを反映しており、恣意的な傾向といえるかもしれない。

〈構成礫の遺存状態〉

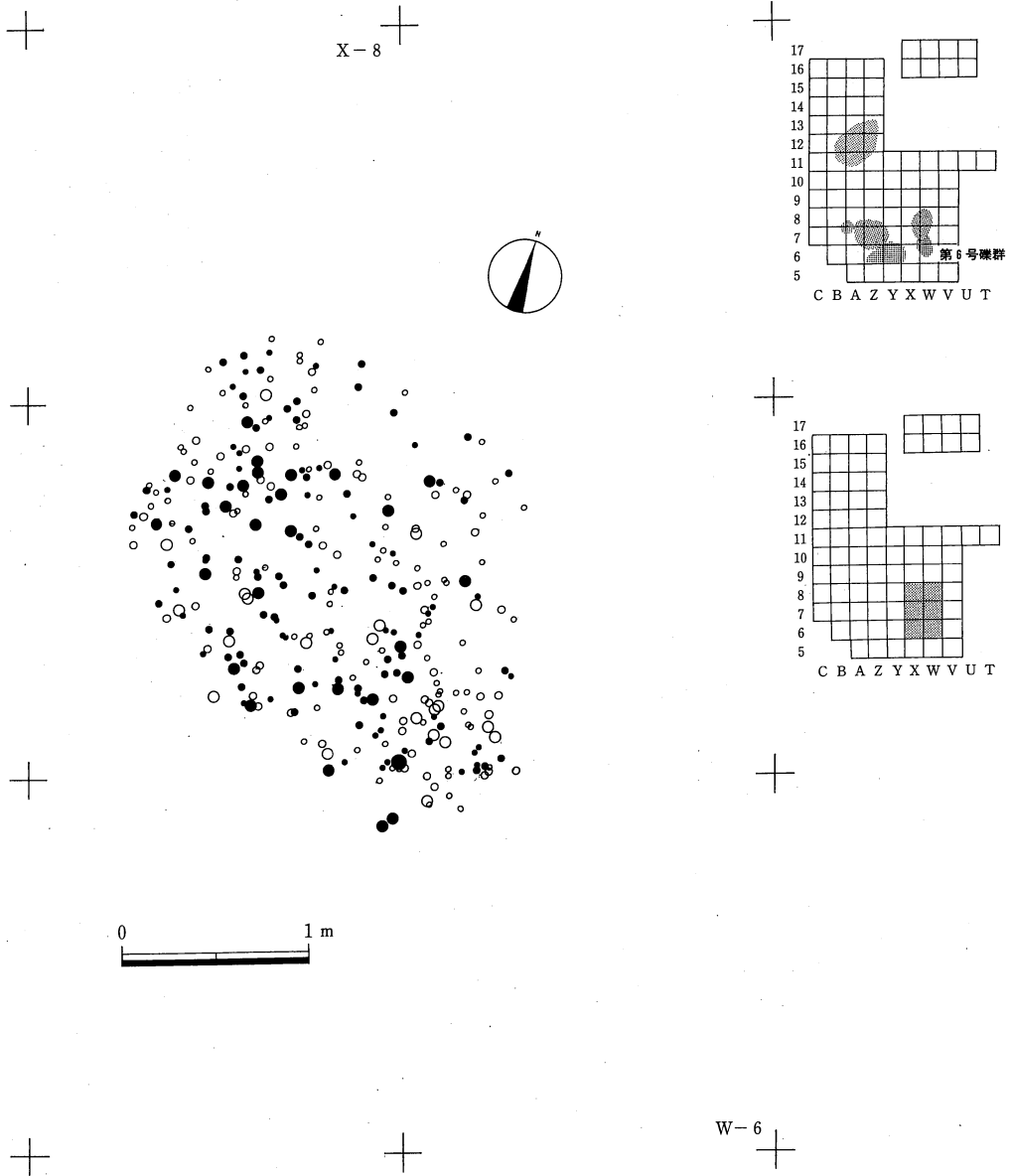
構成礫332点の遺存状態別内訳は、A（完形礫）が22点（6.7%）、Bが6点（1.8%）、Cが16点（4.8%）、Dが18点（5.4%）、Eが270点（81.3%）となっている。



第77図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第6号礫群(1/40)

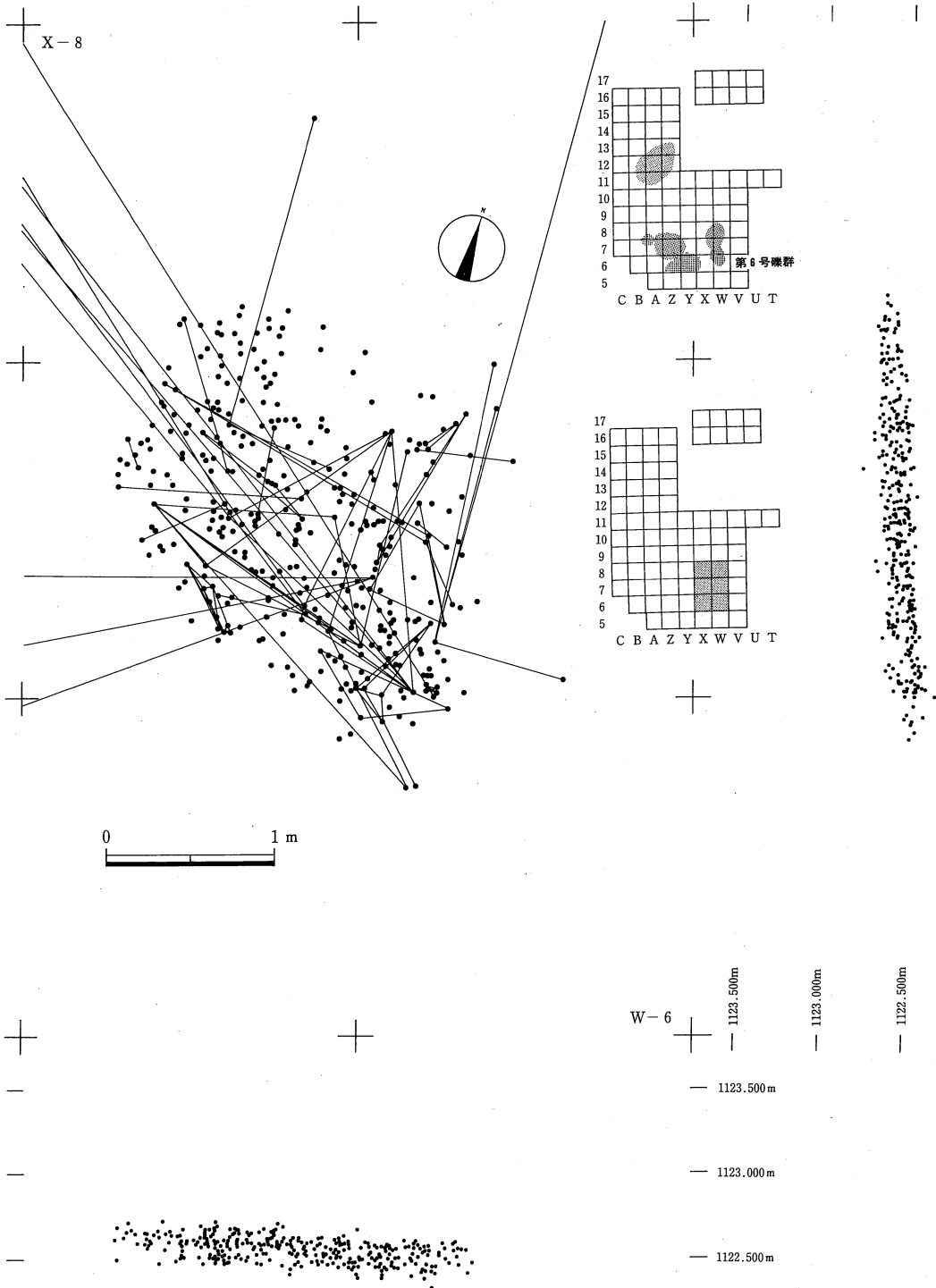
第IV章 第VI層L文化層

80.90gを量る安山岩の完形礫を除くと、500g以上のものは見られない。完形礫である遺存状態Aや、比較的大形な礫である可能性が高い遺存状態Bの大部分は100~450gにまとまっており、それよりも小形の礫である可能性の高い遺存状態C~Eの多くは、150g以下のものしかない。完形礫の総重量は6461.83g、平均293.72g、破碎礫の総重量は11421.65g、平均36.84gである。



第78図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第6号礫群 構成礫の重量・被熱状態(1/40)

第2節 礫群の位置と内容



第79図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層第6号礫群 接合状態(1/40)

第IV章 第VI層L文化層

表7 第VI層L文化層第6号礫群 構成礫諸属性

遺存度 (g)	A		B		C		D		E	
	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱
990-1000										
980-990										
970-980		1								
960-970										
950-960										
940-950										
930-940										
920-930										
910-920										
900-910										
890-900										
880-890										
870-880										
860-870										
850-860										
840-850										
830-840										
820-830										
810-820										
800-810										
790-800										
780-790										
770-780										
760-770										
750-760										
740-750										
730-740										
720-730										
710-720										
700-710										
690-700										
680-690										
670-680										
660-670										
650-660										
640-650										
630-640										
620-630										
610-620										
600-610										
590-600										
580-590										
570-580										
560-570										
550-560										
540-550										
530-540										
520-530										
510-520										
500-510										
490-500										
480-490										
470-480										
460-470										
450-460										
440-450										
430-440				1						
420-430		2								
410-420		2								
400-410										
390-400										
380-390										
370-380		1								
360-370										
350-360		1								
340-350										
330-340	1									
320-330	1									
310-320										
300-310			1							
290-300		1								
280-290										
270-280		1								
260-270										
250-260										
240-250	1	1	1	2				1		
230-240		1								
220-230		1					1			
210-220		1								
200-210					1	1			1	
190-200										
180-190							2			
170-180		1					1			
160-170			1							
150-160		1			1	2				
140-150	1					2				
130-140									1	2
120-130						1			2	
110-120							1		1	
100-110	1				1			2		2
90-100										
80-90					1	1			3	3
70-80					2		1		3	5
60-70								1	3	4
50-60								1	5	3
40-50									5	4
30-40									3	10
20-30		1					1	2	8	16
10-20								1	11	21
0-10		1						1	14	137
TOTAL	5	16	3	3	7	9	9	9	62	208

第3節 石器

〈構成礫の被熱状態〉

構成礫332点中86点(25.9%)に被熱痕跡がある。なお、の中には完形礫は被1点も含まれておらず、概して大形の破碎礫である。被熱礫は礫群全体に散在しており、部分的な集中は認められない。

〈構成礫の接合状態〉

構成礫に見られる接合は第6号礫群内で完結する場合と、第VI層L文化層第4号礫群の構成礫をはじめとする他の礫群にまたがる場合とがある。例数の上では少ないが第V層文化層第2号礫群や第3号礫群の構成礫との接合もあり、帰属する文化層を誤っている構成礫の存在も否定できない。また、南側に近接する第6号礫群とは一部形成場所が重複しており、構成礫の石質や接合状況によって礫群相互を分離しているため、第5号礫群の南側にある構成礫の中には、第6号礫群の構成礫とすべきものを誤認している可能性も棄てがたい。この2つの礫群に関しては近接していて、構成礫の石質の違いが主要な礫群分離の根拠になっているために、あるいはまた、1つの礫群を2つに分離してしまっている可能性も否定できない。(森 一欽)

第3節 石器

第7次調査の結果、第VI層L文化層に該当する資料として、石器70点、剥片・碎片926点の合計996点が新たに追加された。本節における資料点数および提示資料は、第7次調査における検出資料のみに限定している。石器ブロックに関わる分析とその記載にあたっては、第2次調査(小林・谷口編 1992)や第3次調査(永峯・谷口編 1993)における出土資料を合わせ、それらについて改めて帰属文化層の認定を行った結果に基づいている。これらの石器ブロックの分布状態とその内容についての詳細は、第4節に記載しているので参照されたい。

(1) 石器器種組成と石器石材

石器器種組成

石器70点の器種別内訳は、ナイフ形石器8点、搔器1点、拇指状搔器1点、細部調整剥片16点、挟入石器5点、微細剥離痕を有する剥片8点、楔形石器1点、石刃・石刃状剥片18点、石核12点である(表1・2)。

第VI層L文化層は、槍先形尖頭器を伴うナイフ形石器を主体とした石器群である。ナイフ形石器のブランティング部位はバラエティーに富むが、二側縁調整(A類)、基部調整(D類)、部分調整(E類)が卓越する傾向が見られる。また、素材には石刃が用いられ、折断技法によって形状を整える場合が多い。

剥片剥離技術の観点から石器群をみると、石核の打面形成には両設・単設・複設などのバラエティーがあるものの、特に両設打面の形成に特徴があり、ナイフ形石器の素材となる石刃は

両設打面の石核を用いている。

このような点を鑑みて第VI層L文化層はいわゆる「砂川期」に比定されている（小林・谷口編 1991、永峯・谷口編 1993、谷口・宮尾編 1995）。今回の調査で確認されたナイフ形石器についても、同様の傾向が認められ、これまでの指摘を逸脱するものではない。

なお、今回の発掘では第VI層L文化層に帰属する槍先形尖頭器は検出されていないが、第3次調査報告（永峯・谷口編 1993）で報告されている槍先形尖頭器が、本文化層に帰属することを分布状態の検討で確認している。

ところで今回報告する第VI層L文化層の石器群のなかでは、5点を数える挟入石器が注意される。これまでに試掘、第1次調査（小林編 1990）で11点の挟入石器が出土しているが、表土から検出されたものであったため文化層を特定することができなかった。その後の調査成果に基づいて、これらの挟入石器のうちで2点に関してのみ、それぞれ1点づつを細石刃を主体とする第V層文化層と槍先形尖頭器を伴うナイフ形石器の第VI層L文化層とに帰属することを判断した（谷口・宮尾編 1995）。その後、第6次調査において第V層文化層に帰属するものと判断した挟入石器が3点検出されている（永峯・宮尾編 1996）が、第VI層L文化層に伴う挟入石器は、第4次調査で報告した1点を数えるに過ぎなかった。

東海・関東地方の挟入石器を検討した山下秀樹（1995）は、諏訪間順（1988）による相模野台地の編年、段階VI・VIIにわたって同地域の挟入石器が盛行することを指摘し、関連する地域の遺跡として柳又遺跡A地点の挟入石器にも注意を払っている。

今回の調査で検出された5点の挟入石器は、いわゆる「砂川期」に位置づけられる第VI層L文化層に帰属し、諏訪間順（1988）の相模野台地の編年、段階VIにあたることから、山下の見解とうまく整合するものであろう。

しかしながらその一方で、挟入石器が槍先形尖頭器を主体とする石器群以降には急速に衰退するとされている点で、柳又遺跡A地点の事情は若干問題を含んでいる。すなわち、第VI層L文化層が槍先形尖頭器を伴っていることと、続く第V層文化層が細石刃を主体として、槍先形尖頭器が比較的まとまっていながら、挟入石器も4点を数えることが挙げられる。

石器石材

今回新たに追加された石器の石材別内訳は、チャート製851点が最も多く、次いで黒曜石製129点、玻璃質安山岩製13点、その他4点となっている（表1・2）。当該文化層における石器石材はチャートが圧倒的に多く、石器器種組成と照らしてみた場合にも、チャートとの関連が強く示される。

その中で黒曜石が第VII層文化層に比して多く利用される傾向にある点は注意される。特にナイフ形石器、挟入石器、楔形石器などに黒曜石製のものが多く見られ、後述するように母岩別資料分析を通してそれらに伴う調整剥片や破片が多く確認できながら、石器素材となる剥片や

第3節 石器

石刃、石核をほとんど含んでいない点が特徴的である。

石器石材の原産地との関わりを考慮すれば、石器石材の入手過程や石器器種の製作に関わって、本遺跡のセトルメントを考えるうえで重要であろう。この点に関しては、玻璃質安山岩の利用が第V層文化層や第VII層文化層に比して低調である点が、第VI層L層文化層の石器石材の利用における特徴であることも併せて考察する必要があるだろう。

特に第VII層文化層においては、玻璃質安山岩の利用がチャートに伍して多い一方で、黒曜石の利用が低調であって、第VI層L文化層とは対称的なあり方を示しており、文化層の推移とともに変化する石器石材の選択傾向を考えるうえで示唆的であることを考慮すべきであろう。

(2) 石器

ここでは石器71点を提示し、器種別に記述する。石器器種組成で示した点数と一致していないのは、7年次の調査を通して得られた資料の中で登録番号が判別できなくなっていたものがあり、その中に母岩別資料分析を通して文化層を判断できたため、併せて提示したものがあり、逆に今回検出された資料の中でも凶化していないものがあるためである。なお、本文中の石器番号は凶中の文化層別の通し番号であり、石器それぞれの各種計測値は巻末にまとめた出土グリッド登録番号順に配列した石器計測一覧を参照されたい。

ナイフ形石器 (第80図1～8)

8点出土した。石材別内訳は黒曜石製4点、チャート製4点である。

1は黒曜石製の石刃を素材とした左刃形の二側縁調整ナイフ形石器である。素材の打点側を基部とし、その両側縁に腹面からブランディングを施している。素材の打面は残されていない。母岩別資料18に属する。石器ブロック2出土。

2と3とは接合して、1点のナイフ形石器となるが、2の部分の折損後に3が再調整されており、2+3で1点に、3だけでも1点に数えている。第6次調査(永峯・宮尾編 1996)で触れた破碎と再調整の過程を推察できるナイフ形石器と同様に「石器の扱い」を窺われる資料である。黒曜石製の原礫面を残す石刃を素材とする左刃形の二側縁調整のナイフ形石器である。素材の打点側を基部とし、その両側縁に腹面からブランディングを施している。なお、素材の打面は調整により除去されている。

2+3の刃部先端部分に折損が見られることから推察して、2+3の使用に際して2は斜めに折損したことがわかり、3は鋭利な縁辺をもつ折損面の一部を刃部として残しつつ、ブランディングを施して整形している。

母岩別資料18に属する。2・3ともに石器ブロック2で出土しており、ナイフ形石器の使用場所を考えるうえで示唆的な出土状況である。

このようなナイフ形石器の再調整過程を示す資料は、第6次調査資料で確認されている(本報告書第229図37～40)。第6次調査の資料はチャート製の石刃を素材とする部分調整ナイフ形

石器で、製作工程における破碎と再調整の過程を示す資料である。

一方、今回検出された2+3は石刃素材であることは共通するが、2+3の状態では二側縁調整のナイフ形石器として用いられ、折損したようすが観察所見から考えられ、使用に関わる破碎と再調整を示している点で異なっている。

また、本資料の石材は黒曜石であり、チャートと石材とする第6次調査資料例とは異なっている。「石器の扱い方」として、第VI層L文化層における石器石材の利用状況、石器器種組成と石器石材との関わりも考慮すべきであるが、一定の「かたち」に固執するようすが窺えて興味深い資料である。

4は黒曜石製の縦長剥片を素材とした左刃形の部分調整ナイフ形石器である。素材の打面が基部側に残置されている。左側縁の鋭利な縁辺を刃部とし、連続的な微細剥離痕が見られる。ブランディングは右側縁の一部に腹面から施されている。

母岩別資料19に属する。石器ブロック2出土。

5はチャート製の石刃を素材とした左刃形の部分調整ナイフ形石器である。素材の打点側を基部としている。上部を斜めに折断し、その部位に腹面からブランディングを施している。また基部の両側縁にも背面からブランディングを施している。

石器ブロック3出土。

6はチャート製の石刃を素材とした右刃形の部分調整ナイフ形石器である。ブランディングは左側縁の上部に施されている。右側縁上部には連続的な微細剥離痕が観察される。素材の打面は基部に残され、左横方向からの単剥離面打面である。背面を構成する剥離面は対向する上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。

石器ブロック3出土。

7はチャート製の石刃状剥片を素材とした一側縁調整ナイフ形石器で、上半部は折損している。ブランディングは左側縁に腹面から施され、打面も同時に除去している。

8はチャート製の石刃状剥片を素材とした基部調整ナイフ形石器で、上半部は折損している。基部の右側縁には背面→腹面、左側縁には腹面→背面方向にブランディングが施されている。基部にも背面から調整が行われ、素材の打面が除去されている。

搔器 (第80図9)

9はチャート製の縦長剥片を素材とする。素材剥片の頭部と端部、つまり長軸上の上下両端に、急斜度の調整により刃部を作出した複刃搔器である。その他、側縁部の調整は施されておらず、粗雑な印象を受ける搔器である。

母岩別資料13に属する。石器ブロック3出土。

拇指状搔器 (第80図10)

10は黒曜石製。剥片の頭部付近を腹面→背面方向に折断して素材とする拇指状搔器である。

第3節 石器

調整は折断面を除くほぼ全周に連続的に微細なものが施されている。素材の背面の一部に原礫面を残す。

母岩別資料7に属する。石器ブロック3出土。

楔形石器 (第85図44、45・46)

楔形石器は黒曜石製のものが1点出土した。下端がすばまる四角形状を呈する。両極剥離は長軸方向・短軸方向ともに観察されることから、長・短両方向に加撃されたことが窺われる。右側縁から下端にかけて原礫面が残されている。

なお、45と46はそれぞれ44の楔形石器に接合する。楔形石器の使用に伴って生じた碎片で、両極剥離を示す。これらの接合によって、本来の楔形石器の形状は原礫面を持つ不定形な角礫状であったことが理解される。

母岩別資料19に属する。石器ブロック3出土。

抉入石器 (第81～84図13・16・30・34・35)

5点を確認した。石器群の分布のまとまりで見るとその大部分は石器ブロック2に含まれており、また、石器ブロック2にはナイフ形石器が含まれている点、あるいはナイフ形石器のランテイングチップが含まれている点とともに、場の性格を考えるうえで示唆的な資料である。同時に黒曜石製の抉入石器は、ナイフ形石器と同一母岩であることが肉眼観察上窺える資料であり、石器石材の選択と利用に関わっても注意されるべきところである。

13はチャート製の分厚い不定形剥片を素材としている。抉入部は下端を除き右側縁下部から左側縁にかけて施されている。背面を構成している剥離面に統一性はない。打面は複剥離面打面で、背面方向から打面調整が施されている。

母岩別資料9に属する。石器ブロック3出土。

16はチャート製の縦長剥片を素材とする。抉入部は右側縁の中央部に施されている。

母岩別資料9に属する。石器ブロック2出土。

30はチャート製の幅広の縦長剥片を素材とする。抉入部は右側縁の上部に腹面→背面方向に作出され、下部には連続的に細部調整が施されている。背面を構成する剥離面は腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。

母岩別資料10に属する。

34は黒曜石製の剥片を素材とし、左側縁から下部にかけて抉入部が作出されている。打面は左横方向からの単剥離面打面である。

母岩別資料19に属する。石器ブロック2出土。

36は黒曜石製の剥片を素材とし、右側縁に抉入部が作出されている。上部は背面→腹面方向に折断されている。

母岩別資料19に属する。石器ブロック2出土。

細部調整剥片 (第81～87図11・12、14・15、17～20、23・24、26、31、37・38、40、54)

11は大形の縦長剥片を素材とする。細部調整は左側縁に背面→腹面方向に施されている。背面を構成する剥離面は腹面と同じ方向のものと、90°横方向からのもので構成され、一部節理面が残されている。また、左側縁の裏面側には断続的に微細剥離痕が観察される。母岩別資料12に属する。石器ブロック2出土。

12はチャート製の幅広の剥片を素材とし、下端は腹面方向から折損している。細部調整は末端部に連続的に施されているが、折損しているため一部に残存しているだけである。背面を構成する剥離面は腹面と同じ上方向からの剥離を示しており、右側縁には原礫面が残されている。打面は左横方向からの単剥離面打面である。母岩別資料11に属する。石器ブロック3出土。

14はチャート製の不定形剥片を素材とし、上面は右横方向から折損している。細部調整は右側縁の下部に断続的に施され、下端にも施されている。背面を構成する剥離面に統一性はない。母岩別資料9に属する。石器ブロック3出土。

15はチャート製の不定形剥片を素材とし、上半部は背面方向から折損している。細部調整は末端部に断続的に施されている。背面を構成する剥離面はすべて腹面と同じ上方向からのものである。母岩別資料11に属する。石器ブロック3出土。

17はチャート製の幅広の縦長剥片を素材とする。下端に調整を加える際に3つに折損している。細部調整は右側縁には背・腹両面に、左側縁は背面→腹面に施されている。母岩別資料9に属する。石器ブロック2出土。

18はチャート製の不定形剥片を素材とする。左側縁は折損する。細部調整は下端に腹面→背面方向に連続的に施されている。背面を構成する剥離面に統一性はない。打面は点状打面である。母岩別資料9に属する。石器ブロック2出土。

19はチャート製の幅広の剥片を素材とする。細部調整は左側縁の上部に腹面→背面方向に施されている。背面を構成する剥離面求心的で、加撃方向に統一性はない。打面は腹面方向からの単剥離面打面である。母岩別資料9に属する。石器ブロック2出土。

20はチャート製の縦長剥片を素材とするが、上半部は腹面方向から折損している。細部調整は右側縁には腹面→背面方向に断続的に、左側縁は腹面→背面方向に連続的に施されている。背面を構成する剥離面に統一性はない。母岩別資料9に属する。石器ブロック3出土。

23はチャート製の不定形剥片で、右側縁は折損している。細部調整は下端に腹面→背面方向に連続的に施されている。母岩別資料9に属する。石器ブロック2出土。

24はチャート製の横長剥片を素材とする。上部は腹面→背面方向に折断し、その折断面に断続的に細部調整が施されている。素材端部には原礫面が残されている。背面を構成する剥離面に統一性はない。母岩別資料4に属する。

26はチャート製の横長剥片を素材とする。細部調整は打面の背面側に連続的に施されている。

第3節 石器

背面を構成する剥離面に統一性はない。母岩別資料12に属する。

31はチャート製の縦長剥片を素材とする。右側縁の中央部には腹面→背面方向に連続的に細部調整が施されている。背面を構成する剥離面は腹面とは逆の剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。母岩別資料10に属する。

37は黒曜石製の縦長剥片を素材とし、下部は腹面→背面方向に折損している。右側縁の一部に背面→腹面方向の細部調整が施されている。打面は腹面方向からの単剥離面打面である。背面には原礫面が残されている。母岩別資料19に属する。石器ブロック2出土。

38は黒曜石製の石刃状剥片で、下半部は腹面方向から折断されている。細部調整は右側縁の一部に連続的に施されている。背面には節理面が残され、剥離面は腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は複剥離面打面で、打面調整が背面方向から並列に行われている。石器ブロック2出土。

40は黒曜石製の横長の不定形剥片を素材としている。右側縁の上部には背面→腹面方向に、右側縁の中部と末端には腹面→背面方向に細部調整が施されている。背面を構成する剥離面に統一性はない。打面は右横方向からの単剥離面打面である。母岩別資料20に属する。石器ブロック3出土。

54はチャート製の縦長剥片で、下部は折損している。細部調整は左側縁の下部に連続的に施されている。背面には大きく原礫面が残されており、剥離面は腹面と同じ上方向からのものである。打面は背面方向からの単剥離面打面である。母岩別資料4に属する。

微細剥離痕を有する剥片（第81～84図11、21・22、25、27～29、32・33、35、39、41・42）

21はチャート製の幅広の剥片である。背面を構成する剥離面は腹面と同じ上方向からの剥離を示している。打面は右横方向からの単剥離面打面である。両側縁には断続的な微細剥離痕が観察される。母岩別資料9に属する。石器ブロック2出土。

22はチャート製の幅広の不定形剥片である。背面を構成する剥離面に統一性はない。打面は背面方向からの単剥離面打面である。背面・腹面の右側縁に断続的な微細剥離痕が観察される。母岩別資料9に属する。

25はチャート製の小形の縦長剥片である。背面を構成する剥離面は右側縁側のものが右斜め上方向からの剥離によるものであるが、それ以外は腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は腹面方向からの単剥離面打面である。左側縁の下半部には断続的に腹面側に微細剥離痕が観察される。母岩別資料4に属する。

27はチャート製の幅広で平面形状が三角形を呈する縦長剥片を素材とする。背面を構成する剥離面はすべて腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。右側縁の下半部には連続的な微細剥離痕が観察される。打面は複剥離面打面で、左横方向から打面調整が行われている。母岩別資料15に属する。

28は不定形な剥片で、上部は折損している。下部の腹面側に微細な剥離痕が観察される。母岩別資料17に属する。

29はチャート製の分厚く断面形が三角形となる剥片である。原礫面、節理面が大きく残る。図上の正面の下端の一部に連続的な微細剥離痕が観察される。母岩別資料10に属する。

32はチャート製の幅広の剥片で、上半部は背面方向から折損している。背面を構成する剥離面はすべて腹面と同じ上方向からの剥離を示している。右側縁には連続的な微細剥離痕が観察される。母岩別資料9に属する。

33はチャート製の分厚い剥片で、上半部は折断されている。背面には大きく原礫面が残されている。上部の折断面には断続的に微細剥離痕が観察される。母岩別資料10に属する。

35は黒曜石製の縦長剥片である。打面は右横方向からの単剥離面打面である。打面を除くほぼ全周に微細な剥離痕が観察される。母岩別資料20に属する。

39は黒曜石製の不定形剥片である。上部を背面→腹面、右側縁を腹面→背面方向に折断されているため形状は明らかでないが、背面には原礫面が残されている。末端部に断絶的に微細な剥離痕が観察される。母岩別資料20に属する。石器ブロック3出土。

41は黒曜石製の不定形剥片で、上部、左側縁が腹面→背面方向に折断されている。右側縁には原礫面が残されている。左側縁に微細な剥離痕が観察される。

42は黒曜石製の縦長剥片である。打面は複剥離面打面であり、打面調整が並列に施されている。また微細な頭部調整も見られる。打面を除くほぼ全周に微細な剥離痕が観察される。なお、43の小形の剥片が主要剥離面に接合する。母岩別資料18に属する。石器ブロック2出土。

石刃・石刃状剥片（第86～88図47～49、50～53、55～63）

47はチャート製の大型で断面形が三角形を呈する分厚い石刃で、上半部と下半部に折断されたものが接合している。背面には大きく原礫面が残されており、剥片剥離の初期の段階に剥離されたものと推定される。背面を構成する剥離面は対向する上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。打面は複剥離面打面である。

48はチャート製の石刃である。背面を構成する剥離面は対向する上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。打面は複剥離面打面で、打面調整が施されている。

49はチャート製の石刃で、下半部は腹面→背面方向に折断されている。背面を構成する3枚の剥離面は上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。打面は右横方向からの単剥離面打面である。石器ブロック3出土。

50は黒曜石製の石刃である。背面を構成する剥離面は腹面と同じ上方向からの剥離を示している。打面は右横方向からの単剥離面打面である。腹面はウートラパッセを起こしている。石器ブロック3出土。

第3節 石器

51は黒曜石製の石刃状剥片で、上部は背面→腹面方向に折断されている。背面を構成する剥離面は腹面と同じ上方向からの剥離を示しており、端部には原礫面が残されている。母岩別資料19に属する。石器ブロック3出土。

52は玻璃質安山岩製の石刃である。背面を構成する剥離面は腹面と同じ上方向からの剥離を示している。打面は背面方向からの単剥離面打面である。石器ブロック3出土。

53は玻璃質安山岩製の石刃で、下半部は背面→腹面方向に折断されている。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は背面方向からの単剥離面打面である。石器ブロック3出土。

55はチャート製の石刃である。上部、中部、下部の3つに折断されたものの上部と中部が接合している。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離である。打面は背面方向からの単剥離面打面である。

56はチャート製の石刃状剥片で、下部は腹面→背面方向に折断されている。背面を構成する剥離面は上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。打面は左横方向からの単剥離面打面で、微細な頭部調整が観察される。石器ブロック2出土。

57はチャート製の石刃で、上下両端は背面→腹面方向に折断されている。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離である。

58はチャート製の石刃で、下部は背面→腹面方向に折断されている。背面を構成する剥離面は上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。打面は背面方向からの単剥離面打面である。石器ブロック3出土。

59はチャート製の石刃状剥片で、下半部は背面→腹面方向に折断されている。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離を示している。打面は右横方向からの単剥離面打面である。石器ブロック2出土。

60はチャート製の石刃で、上部は左横方向から、下部は腹面側から折断されている。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離を示している。石器ブロック2出土。

61はチャート製の石刃状剥片で、下半部は腹面→背面方向に切断されている。背面には原礫面が残されている。打面は左横方向からの単剥離面打面である。

62はチャート製の石刃状剥片で、上下両端は共に折断されている。背面を構成する剥離面は上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。石器ブロック3出土。

63はチャート製の石刃である。背面には原礫面が残され、構成する面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離である。打面は右横方向からの単剥離面打面である。石器ブロック2出土。

石核 (第89～91図64～71)

64はチャート製の単設打面石核である。正面を作業面とし、幅広の剥片を剥離している。打

面は裏面の節理面を利用し、石核形状が山形となっている。母岩別資料10に属する。石器ブロック3出土。

65はチャート製の単設打面石核である。作業面は正面に位置し、不定形剥片を剥離している。正面には原礫面が残されており、拳大の河原石が素材と考えられる。母岩別資料10に属する。石器ブロック3出土。

66はチャート製の複設打面石核である。正面を作業面とし、縦長剥片や幅広の剥片を剥離している。裏面には大きく原礫面が残されており、拳大の河原石が素材であったと考えられる。母岩別資料10に属する。石器ブロック3出土。

67はチャート製の複設打面石核である。作業面は正面から右側縁、裏面に至り、小形の縦長剥片を連続して剥離している。正面から右側縁側に作業面を並行に移動し、再度正面に移動して剥片剥離を行っている。この際の打面は上面で、正面方向からの単剥離面打面である。微細な頭部調整も観察される。また、その後90°打面転位をして作業面を裏面に移し、図上の左側縁を打面として小形の縦長剥片を剥離している。微細な頭部調整も観察される。剥片剥離の際に頭部調整を行うことが特徴である。形状がほぼ正四角形を呈し、大形の素材が剥離できず小形の剥片しか剥離できなくなったことから、放棄された残核と考えられる。母岩別資料11に属する。

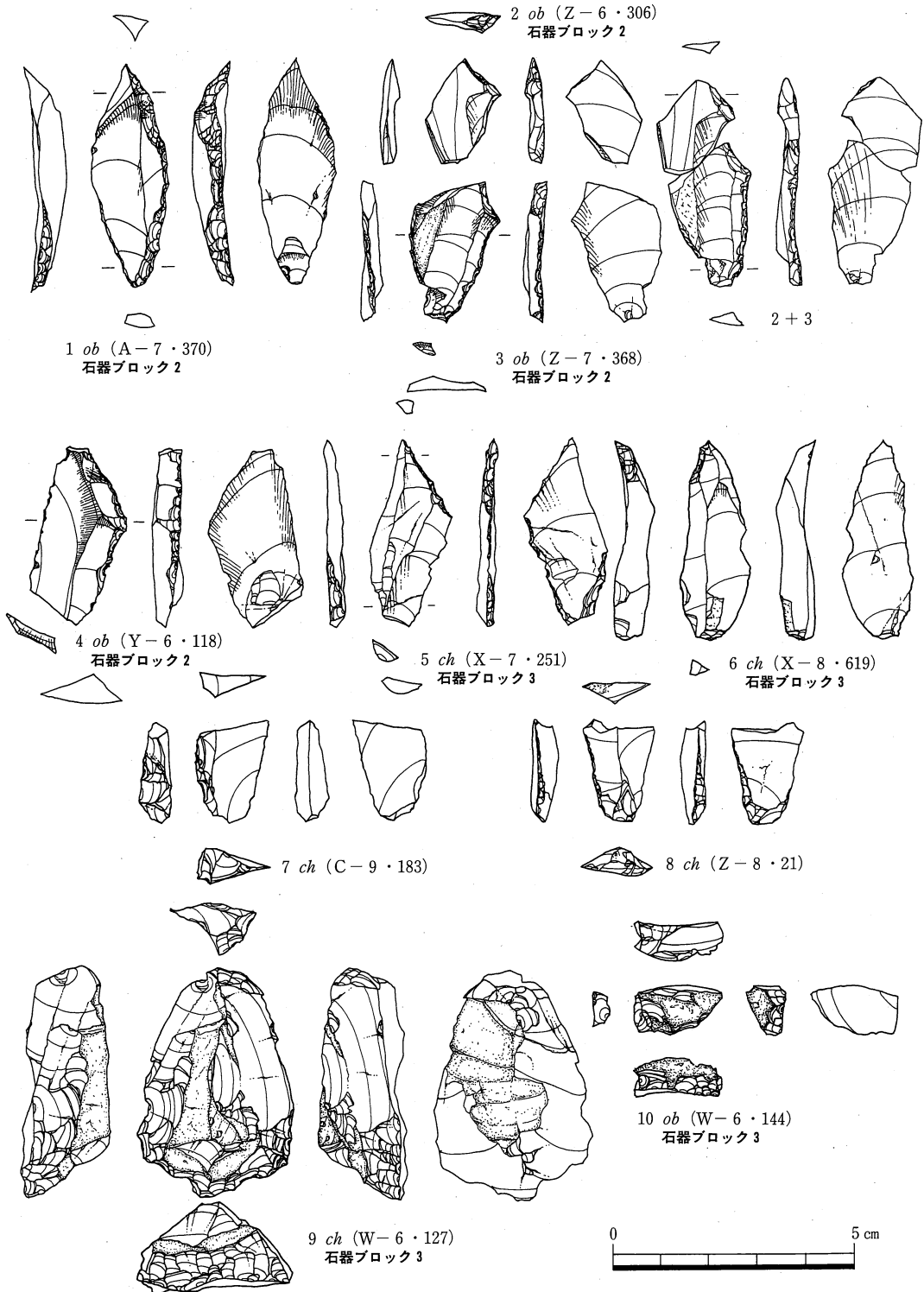
68はチャート製の石核である。母岩別資料分析によって両設打面石核であることが判明した。正面を作業面とし、幅広の縦長剥片を上設下設の2つの打面から剥離している。打面、側面には石核整形の剥離面が残されている。母岩別資料9に属する。石器ブロック2出土。

69はチャート製の石核である。裏面には大きく原礫面が残され、偏平な形状を呈していることから、剥片剥離工程の最終段階の残核と思われる。作業面は正面に位置し、裏面の原礫面を打面として横長剥片を剥離している。母岩別資料9に属する。

70はチャート製の複設打面石核である。作業面は正面に位置し、小形の横長剥片を剥離している。両側縁、上下両面は石核整形の調整が行われているため、形状が船底形を呈している。裏面には原礫面が残る。母岩別資料13に属する。石器ブロック3出土。

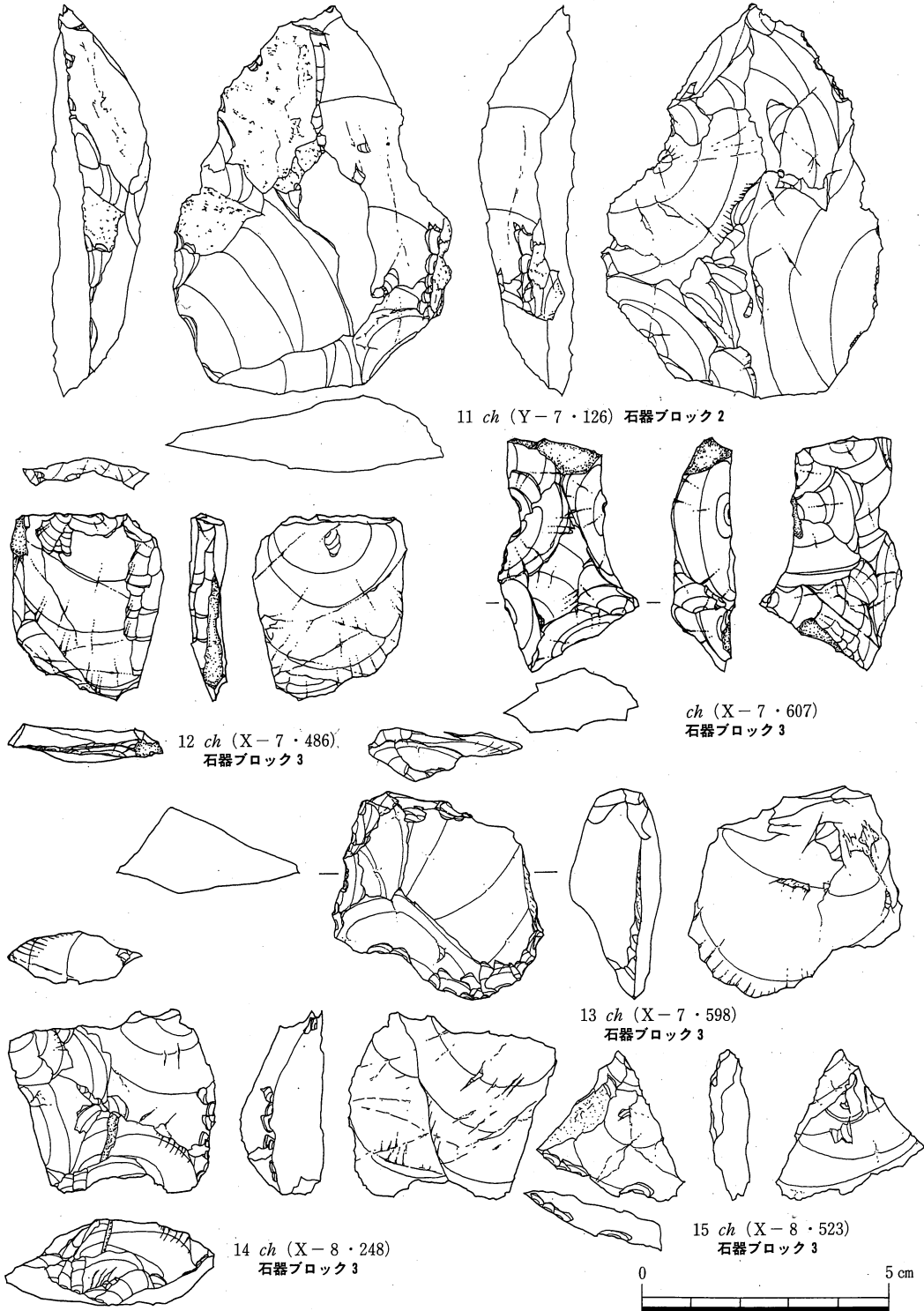
71はチャート製の石核である。作業面は正面ならびに裏面に位置している。まず、正面側の作業面では裏面を打面として不定形剥片を剥離し、その後裏面に作業面を移して正面の作業面を打面として不定形剥片を剥離している。そのため、形状は亀甲状を呈している。裏面には大きく原礫面が残されている。母岩別資料13に属する。石器ブロック2出土。 (笠井洋祐)

第3節 石器



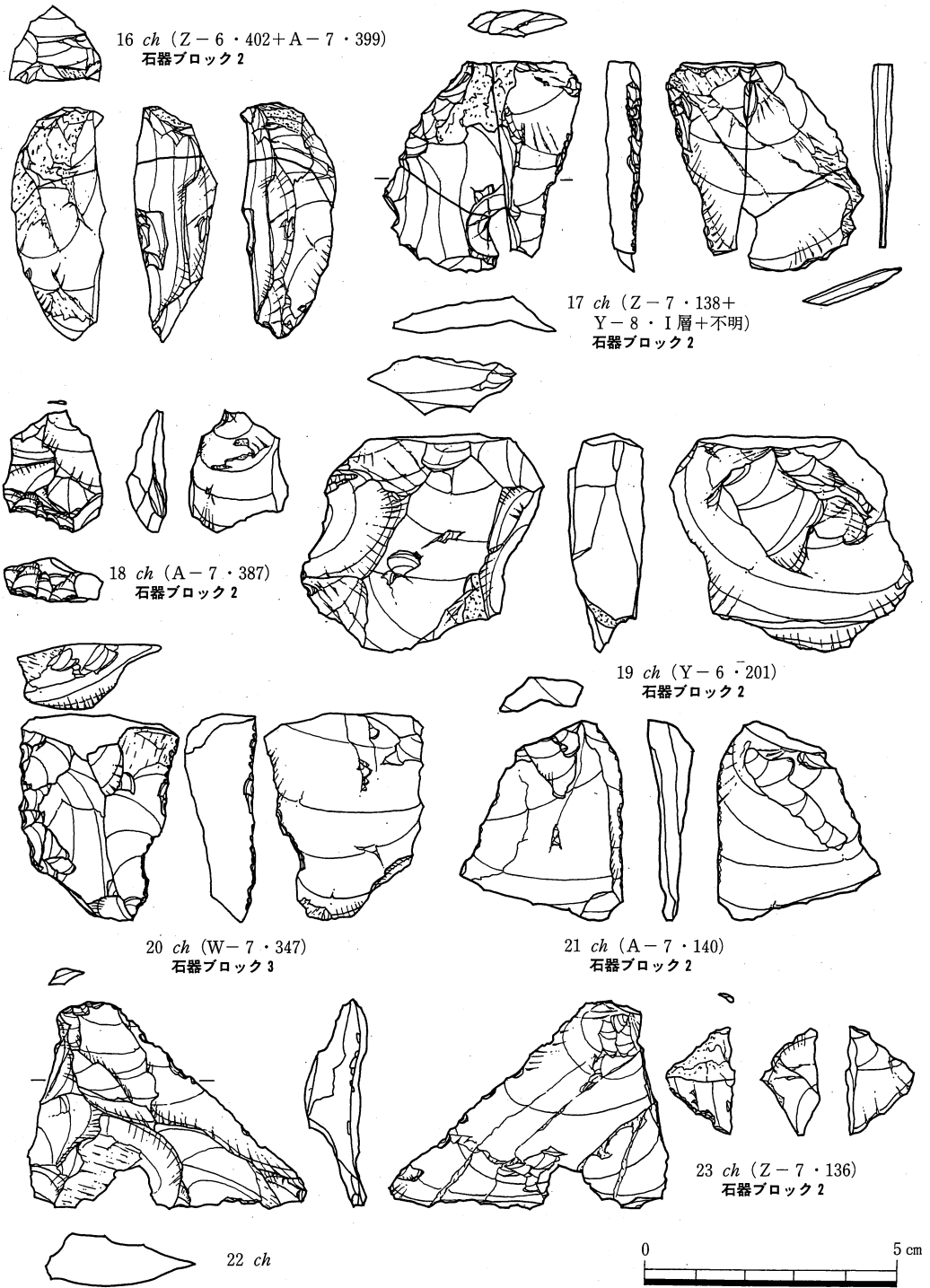
第80図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(1)ナイフ形石器、搔器、拇指状搔器(3/4)

第IV章 第VI層L文化層



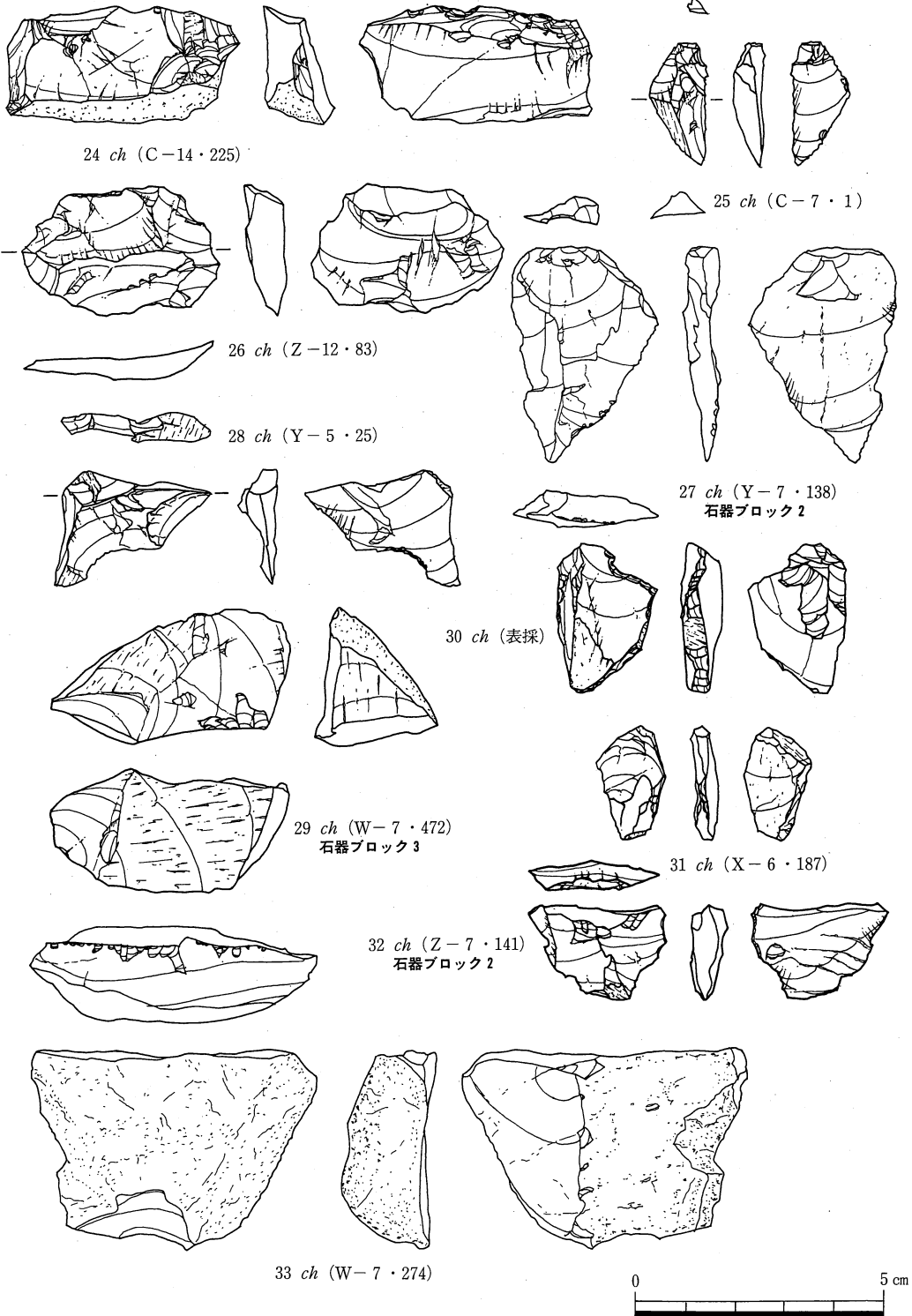
第81図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(2)細部調整剥片・削器(3/4)

第3節 石器



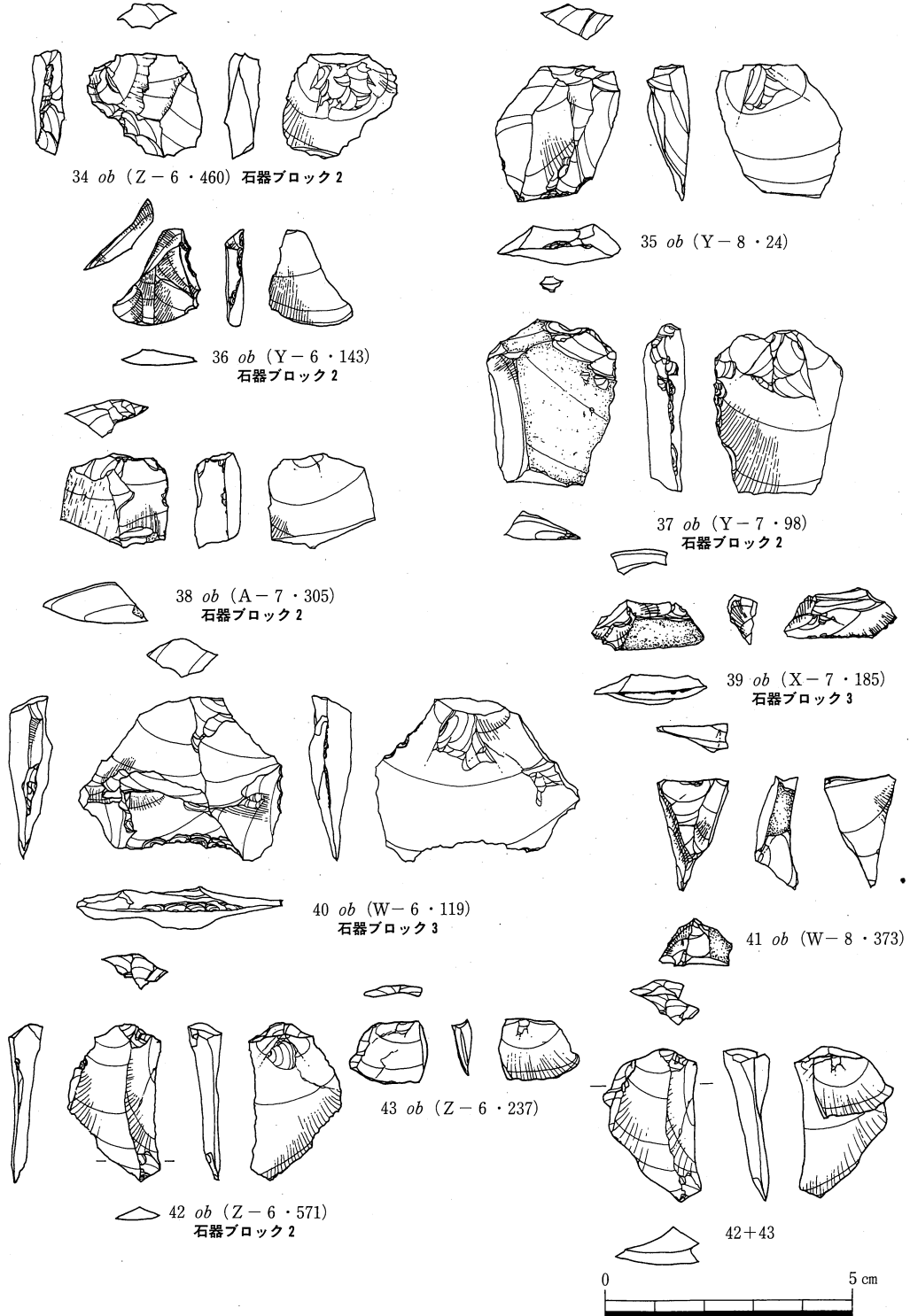
第82図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(3)挟入石器、細部調整剥片、微細剥離痕を有する剥片(3/4)

第IV章 第VI層L文化層

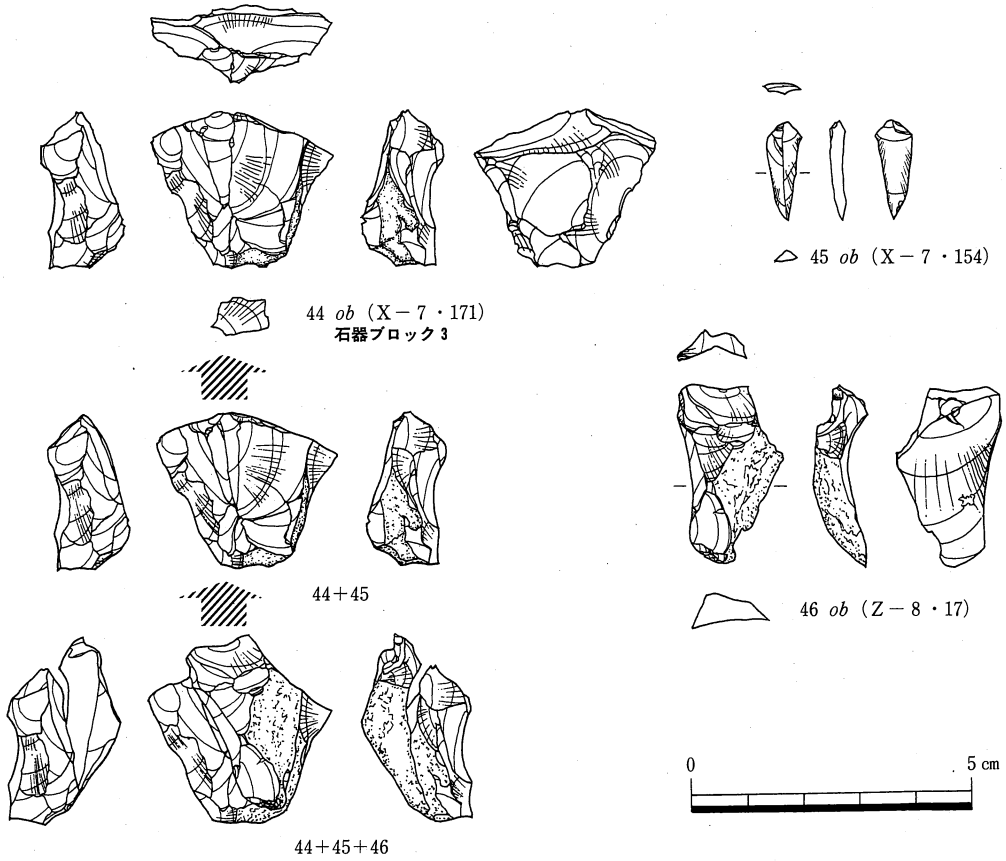


第83図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(4)抉入石器、細部調整剥片、微細剝離痕を有する剥片(3/4)

第3節 石器

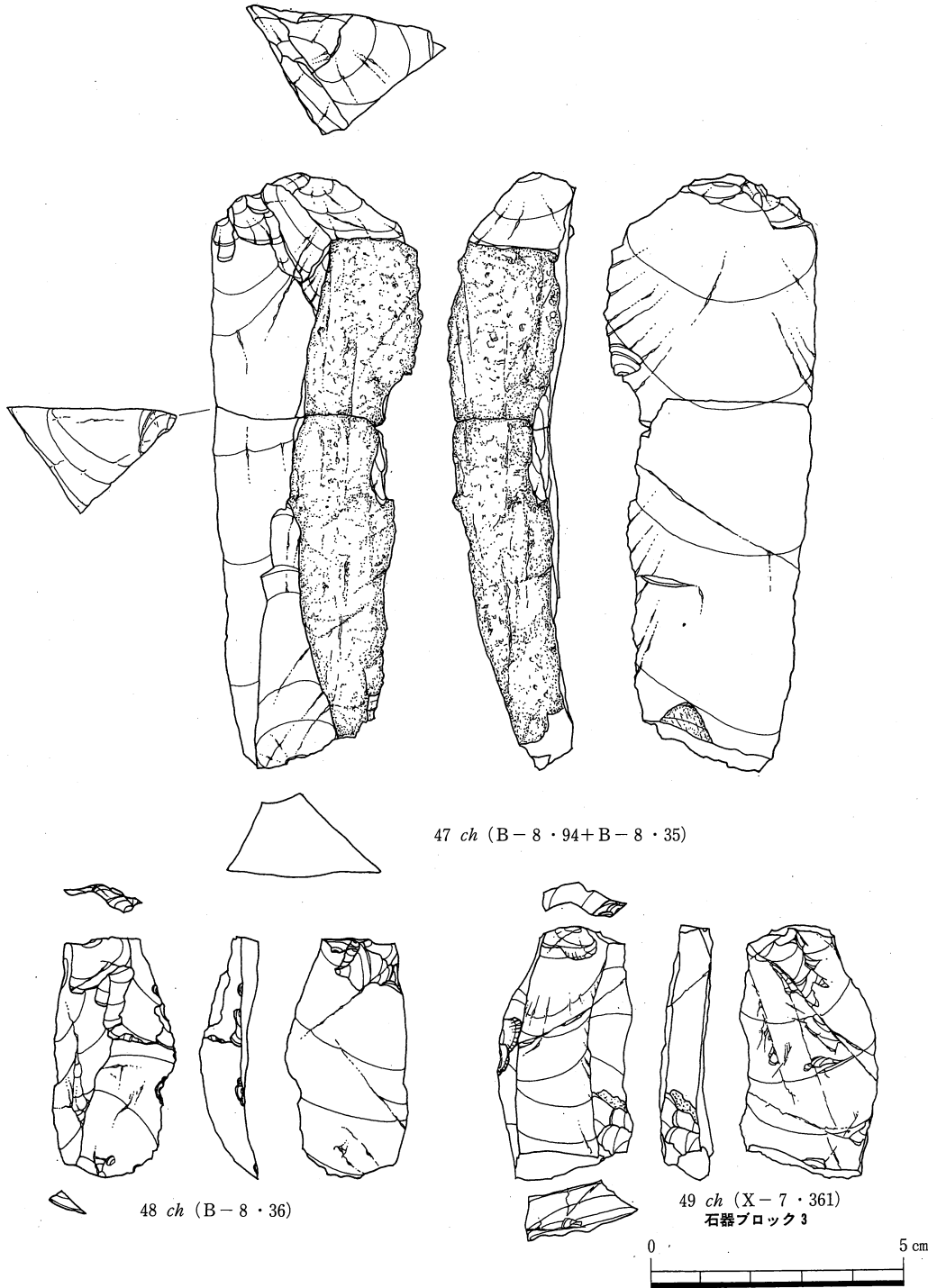


第84図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(5)抉入石器、細部調整剥片、微細剝離痕を有する剥片(3/4)



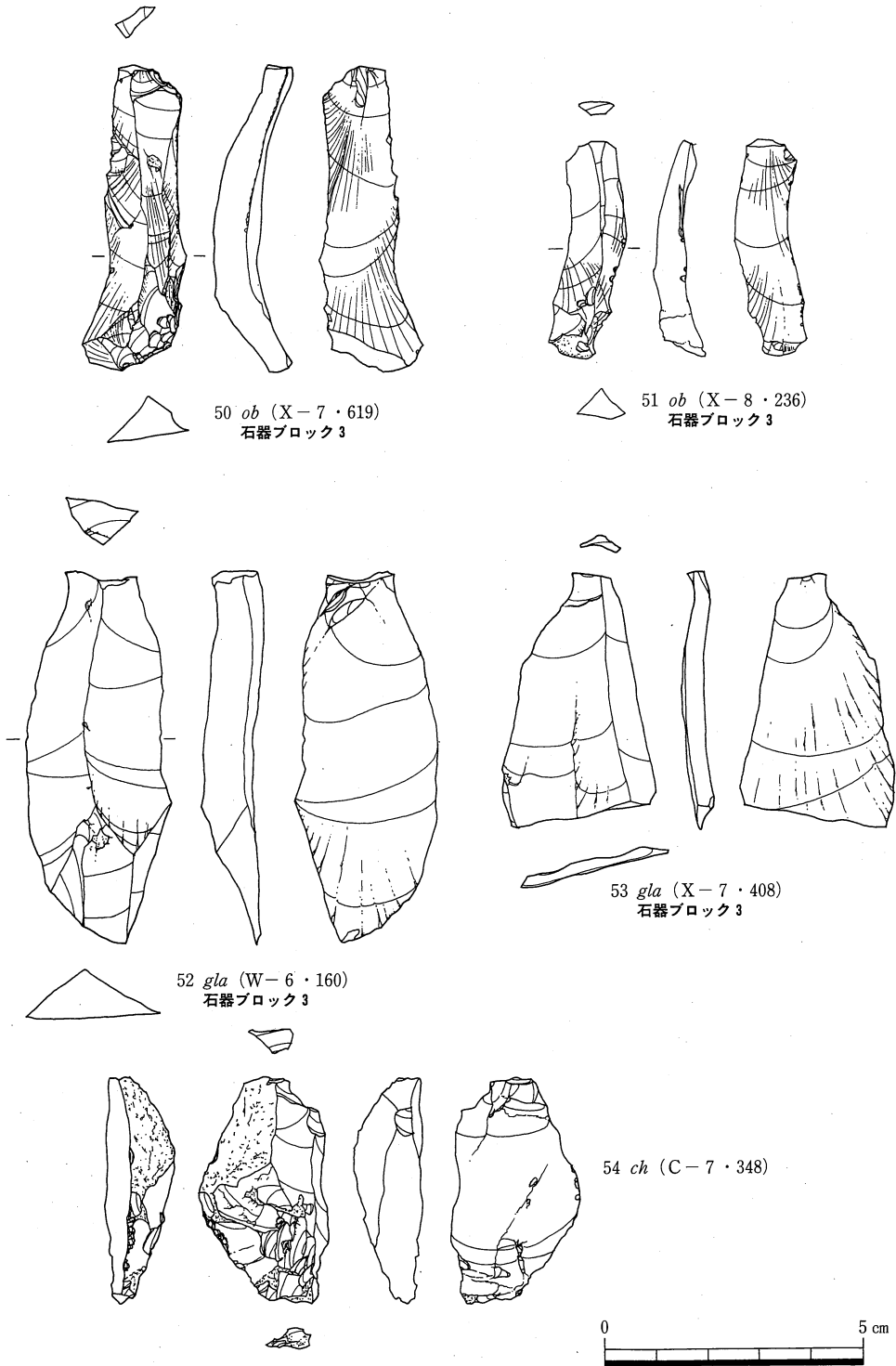
第85図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(6)楔形石器(3/4)

第3節 石器



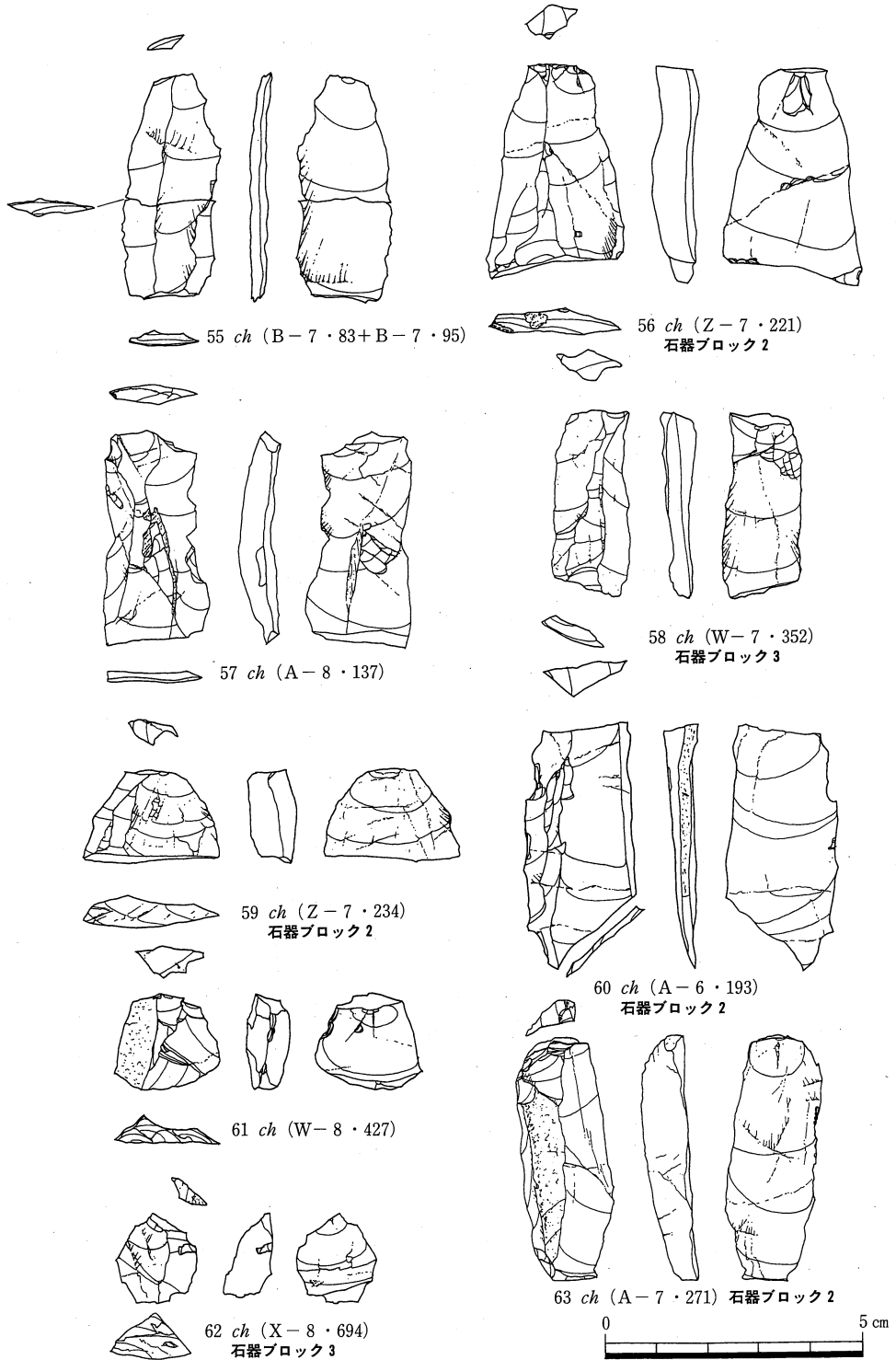
第86図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(7)石刃・石刃状剥片(3/4)

第IV章 第VI層L文化層

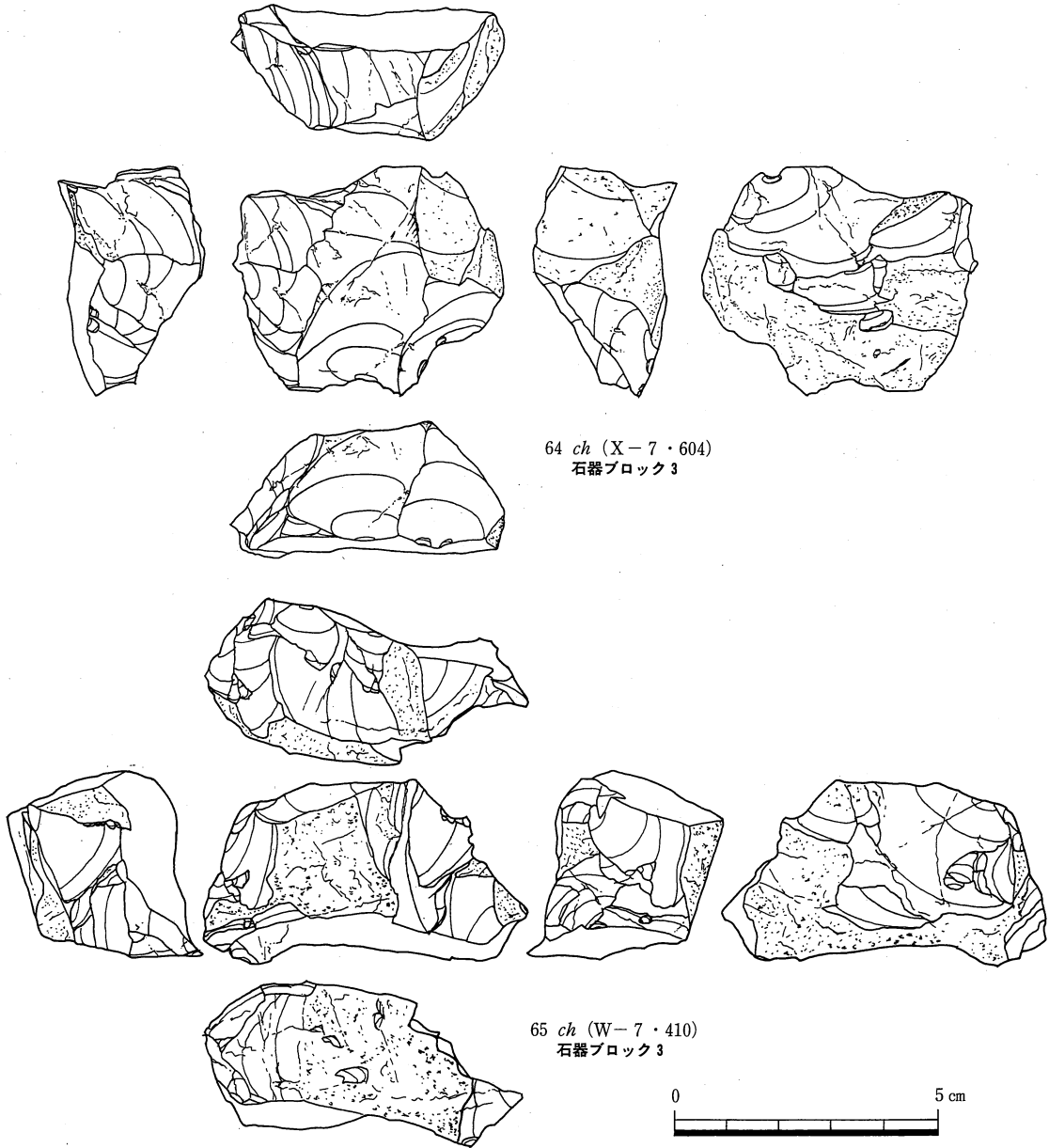


第87図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(8)石刃、石刃状剥片、細部調整剥片(3/4)

第3節 石器

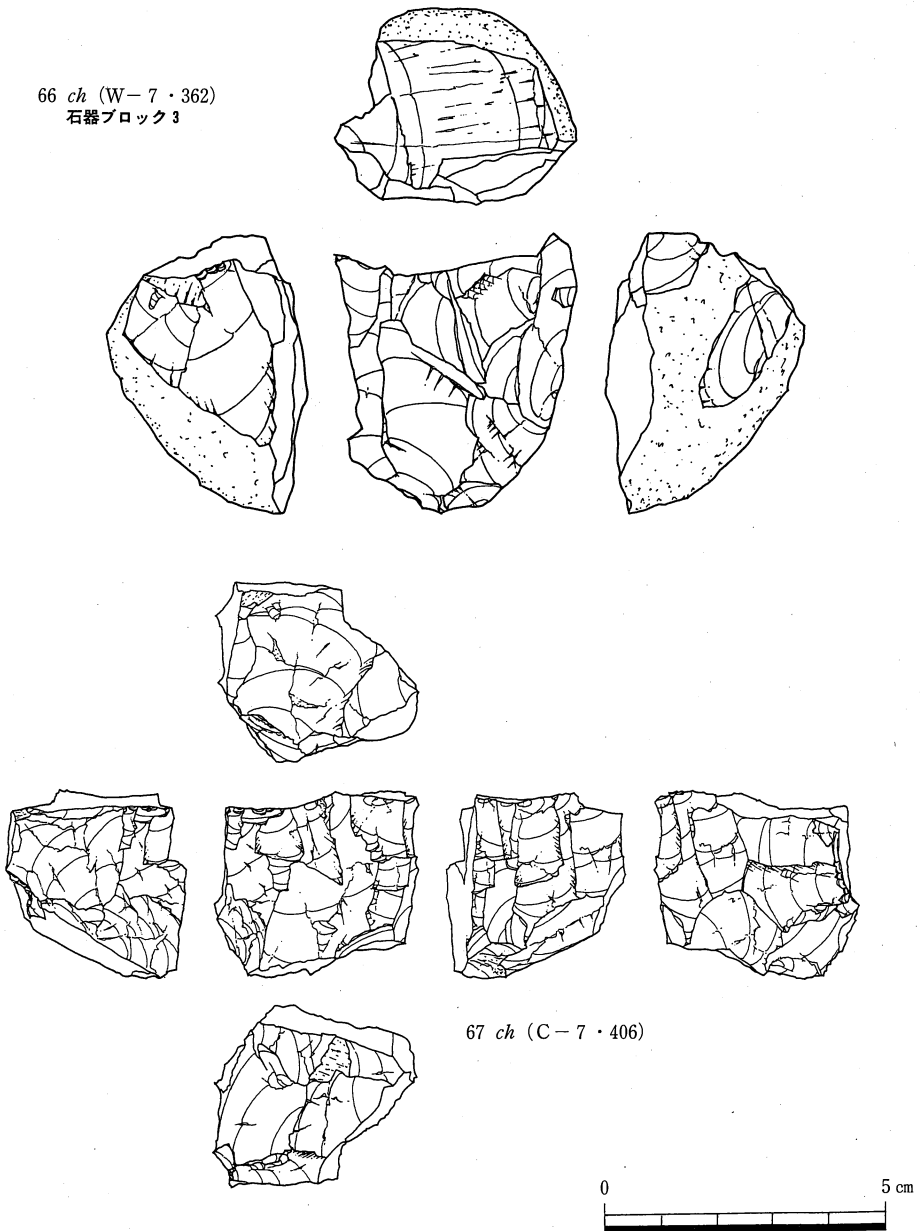


第88図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(9)石刃・石刃状剥片(3/4)

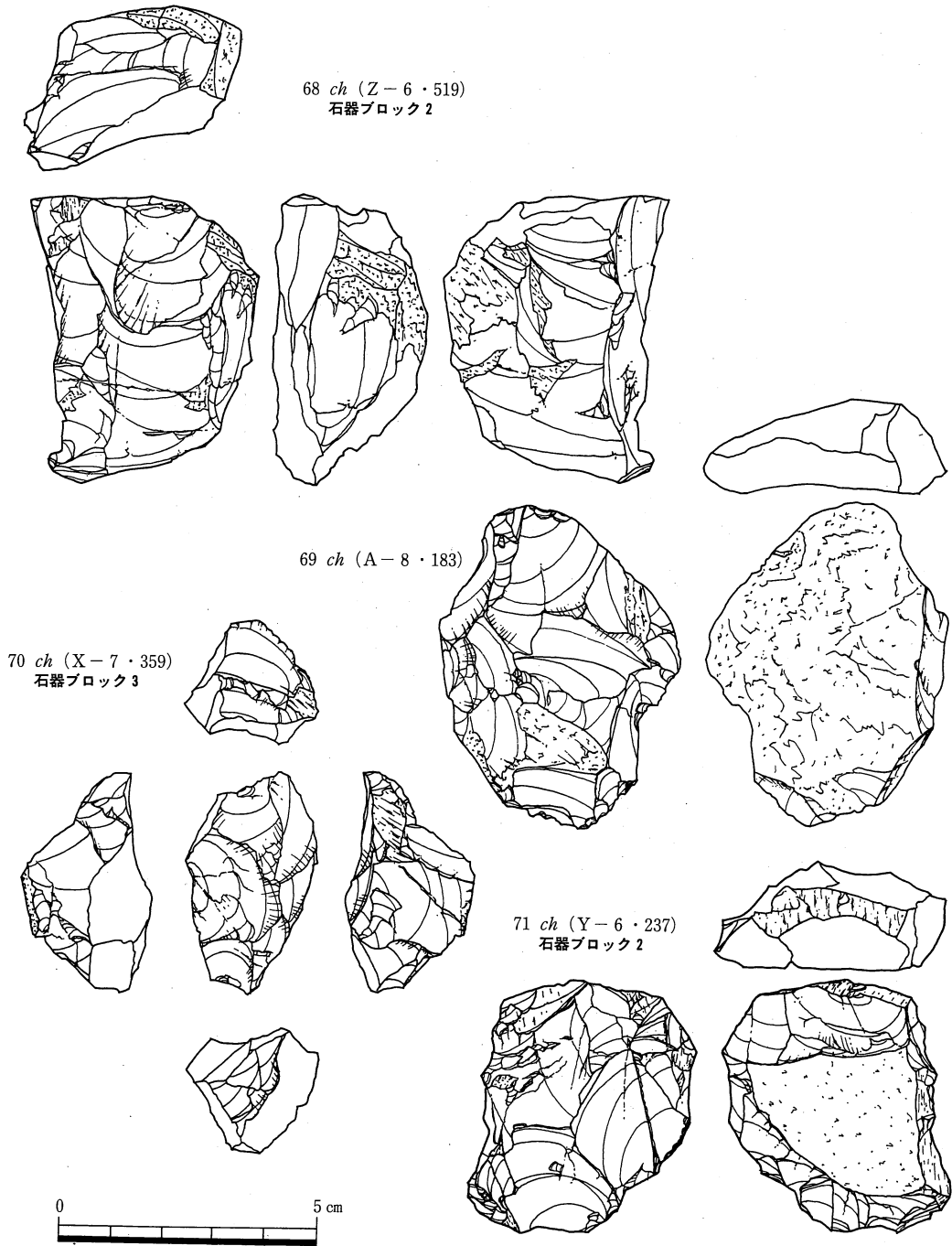


第89図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(10)石核(3/4)

第3節 石器



第90図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(1)石核(3/4)



第91図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層の石器(12)石核(3/4)

第4節 石器群の分布状態と内容

(1) 分布状態

当該文化層に帰属すると判断した資料は石器69点、剥片・碎片926点である。石器の器種別内訳はナイフ形石器8点、拇指状搔器1点、搔器1点、細部調整剥片24点、微細剝離痕を有する剥片5点、挟入石器5点、楔形石器1点、石刃16点、石核8点である。これらの石器群は調査区域のほぼ全域にわたって分布している。特にA、Y・Z-6・7区とW・X-6・7区の2カ所に集中する傾向が認められ、それぞれを石器ブロック2と石器ブロック3として把握することとした。

石器ブロック2は石器24点、剥片・碎片564点（第92図）、石器ブロック3は石器25点、剥片・碎片219点（第94図）で構成される。なお、石器ブロックを構成する資料点数に関しては、発掘区の重複している過去の調査成果を併せて検討したものであり、第7次調査における資料点数とは合致していないので注意されたい。

石器ブロック2は今回の調査の南壁際に位置し、調査区以南への広がりが予測される。石器ブロック3は石器ブロック2の北東に位置している。なお、第VI層L文化層の石器ブロックは、他に第2次調査と第4次調査で確認された石器ブロック1があり、石器ブロック2や石器ブロック3の北側に位置している。石器ブロック1についての詳細は、第2次調査報告書（小林・谷口編 1992）と第4次調査報告書（谷口・宮尾編 1995）を参照されたい。

石器ブロック2のひろがるA、Y・Z-6・7区には第3号礫群、第4号礫群が、また石器ブロック3の広がるW・X-6～8区には第5号礫群、第6号礫群が確認され、石器ブロックそれぞれは、複数の礫群を覆うように分布している。石器ブロックと礫群の位置関係については、関連性がすでに指摘されているが（小林・谷口編 1992、谷口・宮尾編 1995）、今回確認された石器ブロックと礫群の間にも同様な関係が認められ注意を要する。特に石器ブロック2では、石核を代表に複数の石器が、第2号礫群や第3号礫群に食い込むように検出されており、具体的な剥片剝離工程との関わりが示唆されるところである。

石器ブロック2と石器ブロック3の規模と形状を比較すると、石器ブロック2ではA、Y・Z-6・7区全体に石器、剥片・碎片が分布し、確認できた範囲では直径約4mの半月状である。石器ブロック3はX-7区に石器、剥片・碎片が密集し、把握できた範囲では、直径約3mの楕円形状にひろがる。石器ブロック2より石器ブロック3は範囲に比べ密度が濃い。

各石器ブロックの石器器種組成は、石器ブロック2は石器24点、剥片・碎片564点合計593点、内訳はナイフ形石器4点、細部調整剥片7点、挟入石器3点、石刃2点、石刃状剥片2点、微細剝離痕を有する剥片4点、石核2点。石器ブロック3は石器25点、剥片・碎片219点合計248点、内訳はナイフ形石器2点、搔器1点、拇指状搔器1点、細部調整剥片6点、挟入石器2

点、楔形石器1点、石刃3点、石刃状剥片4点、微細剥離痕を有する剥片1点、石核4点である。石器ブロック2は石器ブロック3よりも剥片・碎片の割合が高い。

チャート石材の母岩別資料9つと、黒曜石石材の母岩別資料3つの計12の母岩別資料が認定され、第6次調査までに報告されている4つの母岩別資料と合わせて16の母岩別資料を報告する。母岩別資料は個々のブロックで接合・分布が完結するもの、複数のブロックにまたがって分布するものがあり、石器ブロックと母岩別資料の関係を知る手掛かりとなろう。これまでの報告の母岩別資料を含め、それぞれの石器ブロックに含まれるの母岩別資料の接合・分布状態を整理すると下記のようになる。

石器ブロック1 :	1	2	3	4	5	7	8	9	(11)	12	16	(20)					
石器ブロック2 :						(7)	9	(11)	12	13	14	15	16	17	18	(19)	
石器ブロック3 :						(7)	9	10	11	12	13	(14)	(15)	16	(18)	(19)	(20)

()は接合資料はみられないが、同一母岩資料の分布していることを示す。

このような母岩別資料の分布状態は、複数の石器ブロック相互の関連を明確に伝え、文化層という共時的な関係として把握できることを傍証するものである。また、各母岩別資料の接合資料から復元された剥片剥離工程と接合する個々の資料の分布する石器ブロックとの関連は、各石器ブロックの場の役割とその連関とを推定することもかのうであろう。

なお、石器石材について見ると、石器ブロック2の内訳はチャート18点、黒曜石10点であり、石器ブロック3の内訳はチャート20点、黒曜石7点、玻璃質安山岩2点である。

石器ブロック2、石器ブロック3ともにチャートを石材とするものが多いが、石器ブロック2では、特に黒曜石の割合が高いことが注意される。玻璃質安山岩は石器ブロック2では確認されず、石器ブロック3では2点と少なく、第VI層L文化層では玻璃質安山岩の利用が低比率であることを追認している。

(2) 石器ブロック2

〈規模と形状〉

A、Y・Z-6・7区に広がる石器・剥片の集中的な分布を指す(第92図)(表8~10)。石器29点、剥片・碎片564点、合計593点から構成され、総重量は2084.64gである。南隅にあたり調査区外に広がると思われ全体像は把握できないが、現状では直径約4mの半月状に広がっている。第3号礫群と第4号礫群とをほぼ覆うように分布している。

〈石器器種組成〉

石器29点、剥片・碎片564点の合計593点から構成され、石器の占める割合が低く、剥片・碎片が多い。石器の器種別内訳はナイフ形石器7点、細部調整剥片7点、抉入石器4点、石刃2点、石刃状剥片2点、石核2点である。槍先形尖頭器は今回の調査では確認されていないが、第3次調査において確認された槍先形尖頭器のうち3点が今回把握した石器ブロック2の範囲

第4節 石器群の分布状態と内容

表8 第VI層L文化層石器ブロック2 石器器種別石材別点数

単位=点

器種	チャート	黒曜岩	玻璃質 安山岩	珪質頁岩	安山岩	総計
ナイフ形石器	1	5	0	1	0	7
細部調整剥片	5	2	0	0	0	7
挟入石器	2	2	0	0	0	4
石刃	2	0	0	0	0	2
石刃状剥片	2	0	0	0	0	2
石核	3	0	0	0	0	3
微細剥離痕を有する剥片	3	1	0	0	0	4
剥片	150	16	1	0	0	167
碎片	354	36	4	2	1	397
総計	522	62	5	3	1	593

表9 第VI層L文化層石器ブロック2 石器器種別石材別重量

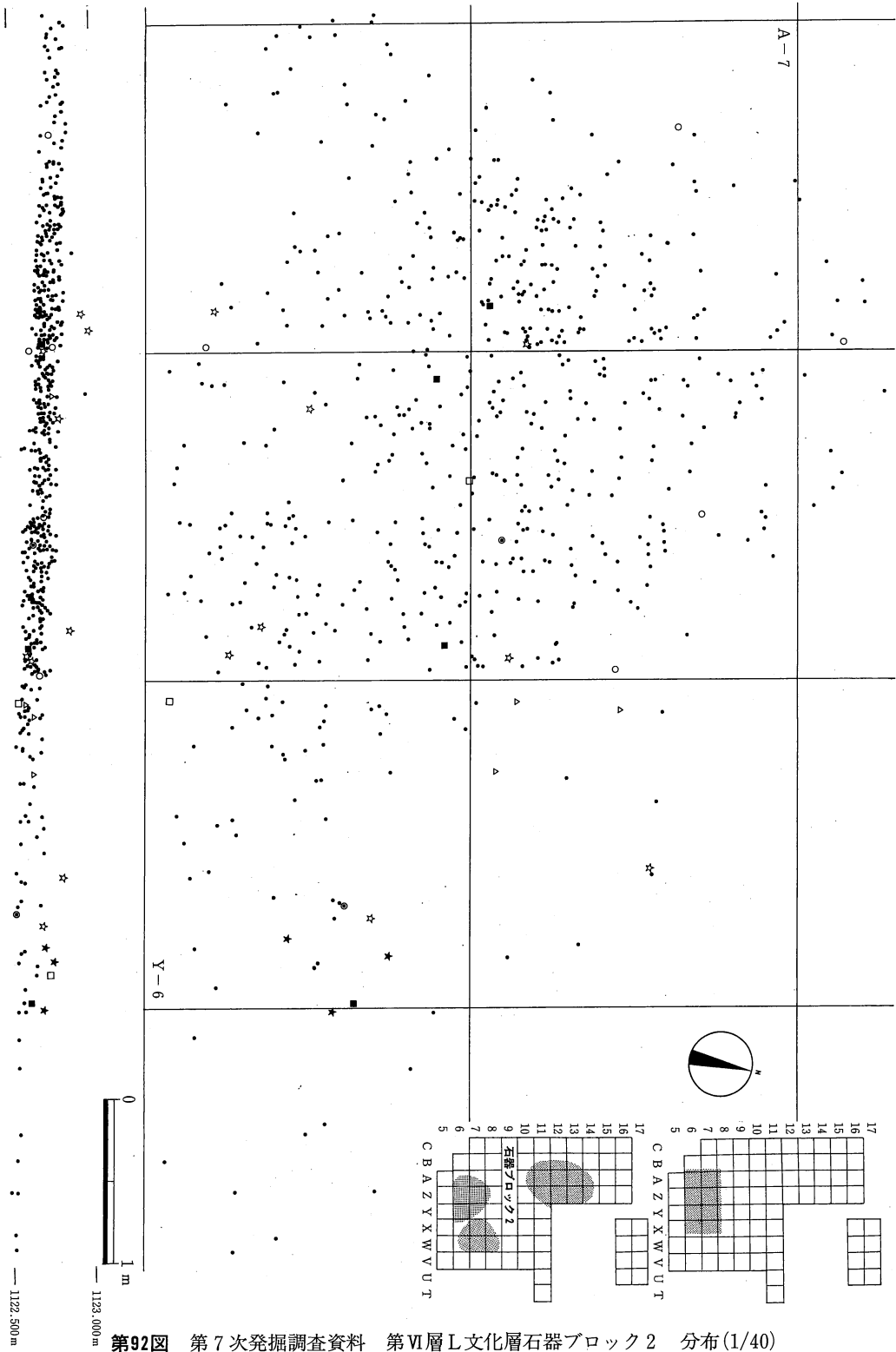
単位= g

器種	チャート	黒曜岩	玻璃質 安山岩	珪質頁岩	安山岩	総計
ナイフ形石器	1.36	12.51	0.00	4.47	0.00	18.34
細部調整剥片	102.29	9.78	0.00	0.00	0.00	112.07
挟入石器	10.88	3.48	0.00	0.00	0.00	14.36
石刃	13.29	0.00	0.00	0.00	0.00	13.29
石刃状剥片	11.67	0.00	0.00	0.00	0.00	11.67
石核	181.24	0.00	0.00	0.00	0.00	181.24
微細剥離痕を有する剥片	10.01	2.00	0.00	0.00	0.00	12.01
剥片	1286.15	19.35	3.72	0.00	0.00	1309.22
碎片	399.70	11.77	0.28	0.09	0.60	412.44
総計	2016.59	58.89	4.00	4.56	0.60	2084.64

表10 第VI層L文化層石器ブロック2 石器器種別石材別割合

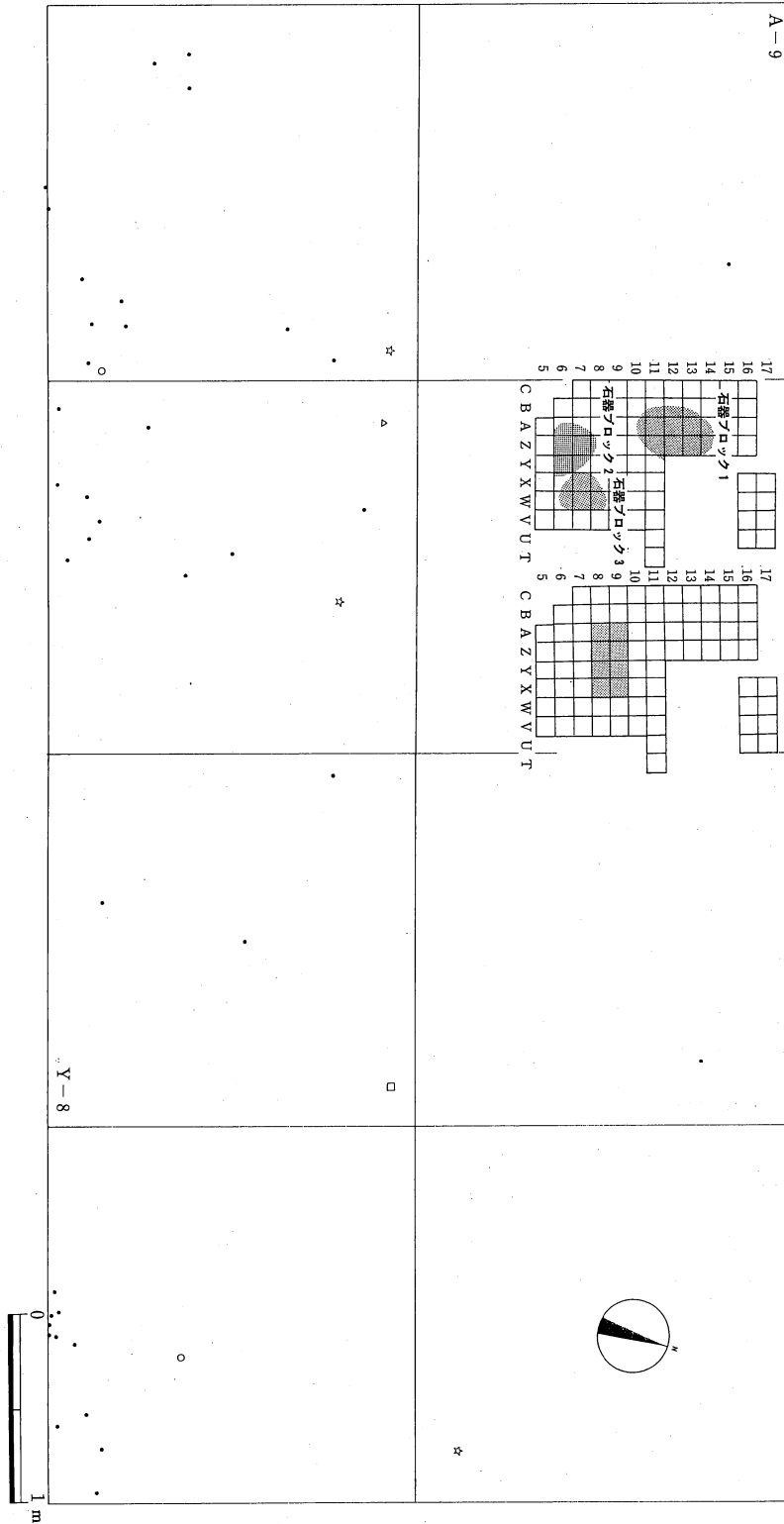
単位=%

器種	チャート	黒曜岩	玻璃質 安山岩	珪質頁岩	安山岩	総計
ナイフ形石器	0.17%	0.84%	0.00%	0.17%	0.00%	1.18%
細部調整剥片	0.84%	0.34%	0.00%	0.00%	0.00%	1.18%
挟入石器	0.34%	0.34%	0.00%	0.00%	0.00%	0.67%
石刃	0.34%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.34%
石刃状剥片	0.34%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.34%
石核	0.51%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.51%
微細剥離痕を有する剥片	0.51%	0.17%	0.00%	0.00%	0.00%	0.67%
剥片	25.30%	2.70%	0.17%	0.00%	0.00%	28.16%
碎片	59.70%	6.07%	0.67%	0.34%	0.17%	66.95%
総計	88.00%	10.46%	0.84%	0.51%	0.17%	100.00%



第92図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層石器ブロック2 分布(1/40)

第4節 石器群の分布状態と内容



第93図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層石器ブロック外 分布(A、Z、Y、X列)(1/40)

内にある。挟入石器は、今回確認された5点の内、3点が石器ブロック2の範囲内にある。第6次調査まで当該文化層には1点が確認されているだけであり、過去の調査を上回る点数が確認されている。石器ブロック2の形成に関わる場の性格を知るうえで注意される。

〈母岩別資料〉

母岩別資料7・9・12・13・14・15・16・17・18・19が含まれている。母岩別資料17は、石器ブロック2にのみに分布し、他のブロックには分布していない。一方、その他の母岩別資料は、石器ブロック2、石器ブロック3やブロック外に分布し、石器ブロック2に内包されるこれらの母岩別資料の分布状況は、複数の石器ブロックにまたがる当該文化層の三カ所の石器ブロックの共時的な関係を保証する根拠となろう。母岩別資料9・12・16は石器ブロック1、石器ブロック2、石器ブロック3の3つのブロックにまたがる接合資料がある（第117図）。

〈石器石材〉

石器石材の内訳はチャート18点(0.62%)、黒曜石10点(0.34%)であり、チャートが非常に多い。各石材の総重量はチャート330.74g、黒曜石27.77gである。このブロックには玻璃質安山岩製の石器は今回の調査では1点も確認されていない。剥片を加えた各石材の内訳でもチャート522点(88.03%)、黒曜石62点(10.46%)、玻璃質安山岩5点(0.84%)、その他4点(0.67%)となる。それぞれの総重量はチャート2016.59g、黒曜石58.89g、玻璃質安山岩4g、その他4.62gと算出される。第VI層L文化層の玻璃質安山岩の利用が低比率であることを追認している。

(3) 石器ブロック3

〈規模と形状〉

W・X-6～8区に広がる石器29点、剥片・碎片219点の合計248点が分布する（第94図）（表11～13）。遺物の総重量は1647.55gである。今回の調査区の東側に位置し、調査区外に広がると思われる。X-7区に石器・剥片が最も集中しており、確認できた範囲では北西-南東を軸とする直径約3mの不正楕円形状に広がっている。分布範囲に照らして石器、剥片・碎片の点数を考えた場合、石器ブロック2に比して石器、剥片・碎片の分布密度が高い。第5号礫群、第6号礫群を覆うように分布している。

〈石器器種組成〉

石器29点、剥片・碎片219点の合計248点で構成され、石器の内訳はナイフ形石器2点、搔器1点、拇指状搔器1点、挟入石器2点、細部調整剥片6点、楔形石器1点、石刃3点(0.10%)、石刃状剥片4点、微細剥離痕を有する剥片3点、石核7点である。槍先形尖頭器は石器ブロック2と同様に今回の調査では確認されていないが、過去の調査において確認されているV-6、W-5の槍先形尖頭器は、石器ブロック3の範囲内に含まれるものと考えられる。挟入石器は、今回の調査で確認された5点のうち2点が含まれる。石器ブロック2と同様に、過去の調査を上回る点数が確認されており、石器ブロック3の場の性格を考えるうえで注意される。

第4節 石器群の分布状態と内容

表11 第VI層L文化層石器ブロック3 石器器種別石材別点数

単位=点

器種	チャート	黒曜岩	玻璃質 安山岩	総計
ナイフ形石器	2	0	0	2
搔器	1	0	0	1
拇指状搔器	0	1	0	1
挟入石器	1	0	0	1
細部調整剥片	5	1	0	6
石刃	0	1	2	3
石刃状剥片	3	1	0	4
石核	7	0	0	7
楔形石器	0	1	0	1
微細剥離痕を有する剥片	1	2	0	3
剥片	67	10	0	77
碎片	119	21	2	142
総計	206	38	4	248

表12 第VI層L文化層石器ブロック3 石器器種別石材別重量

単位=g

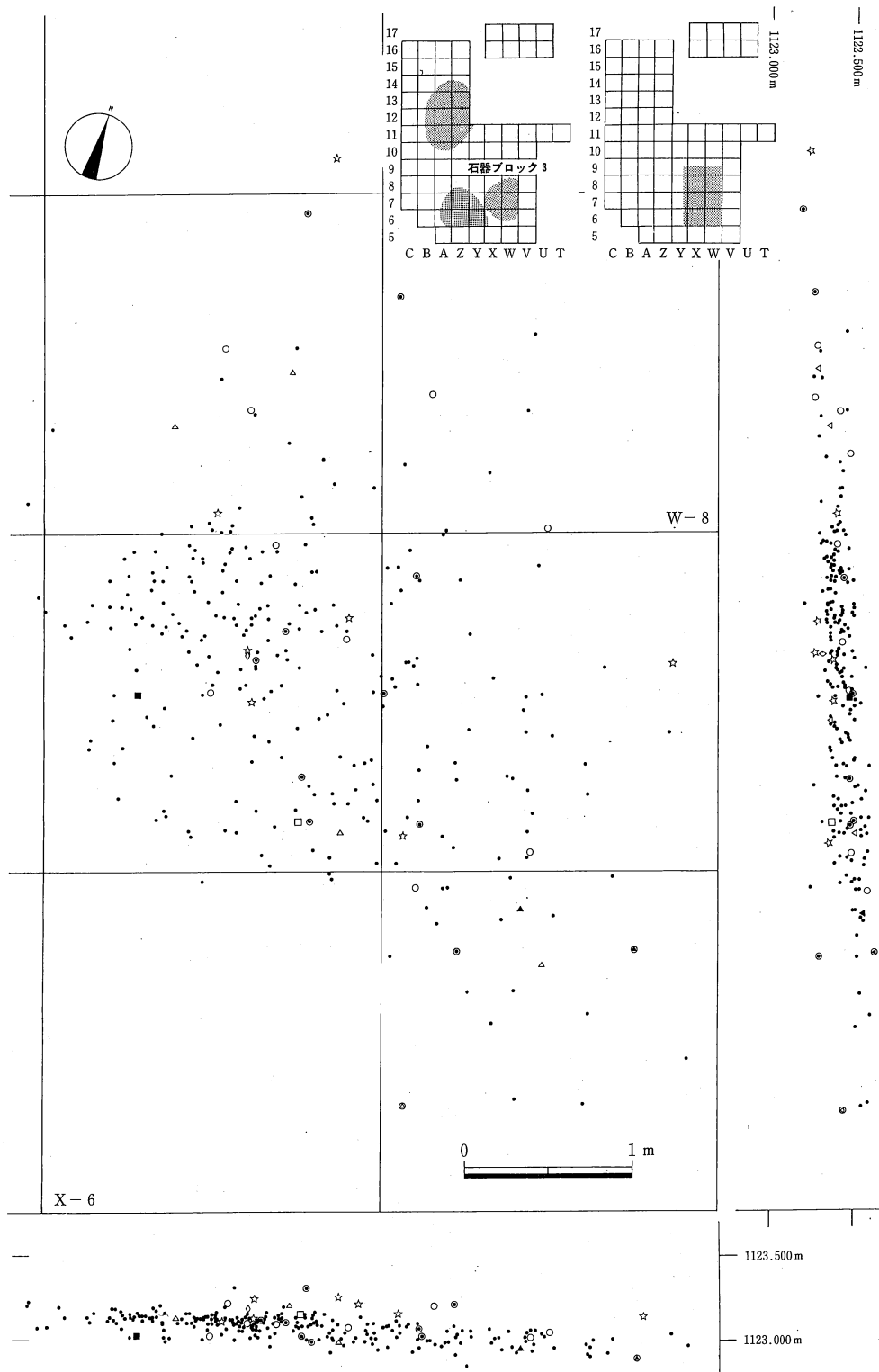
器種	チャート	黒曜岩	玻璃質 安山岩	総計
ナイフ形石器	5.38	0.00	0.00	5.38
搔器	22.60	0.00	0.00	22.60
拇指状搔器	0.00	1.24	0.00	1.24
挟入石器	13.29	0.00	0.00	13.29
細部調整剥片	76.77	7.86	0.00	84.63
石刃	0.00	8.10	22.87	30.97
石刃状剥片	21.76	2.66	0.00	24.42
石核	346.55	0.00	0.00	346.55
楔形石器	0.00	8.24	0.00	8.24
微細剥離痕を有する剥片	24.84	0.86	0.00	25.70
剥片	953.12	10.08	0.00	963.20
碎片	109.96	11.14	0.23	121.33
総計	1574.27	50.18	23.10	1647.55

表13 第VI層L文化層石器ブロック3 石器器種別石材別割合

単位=%

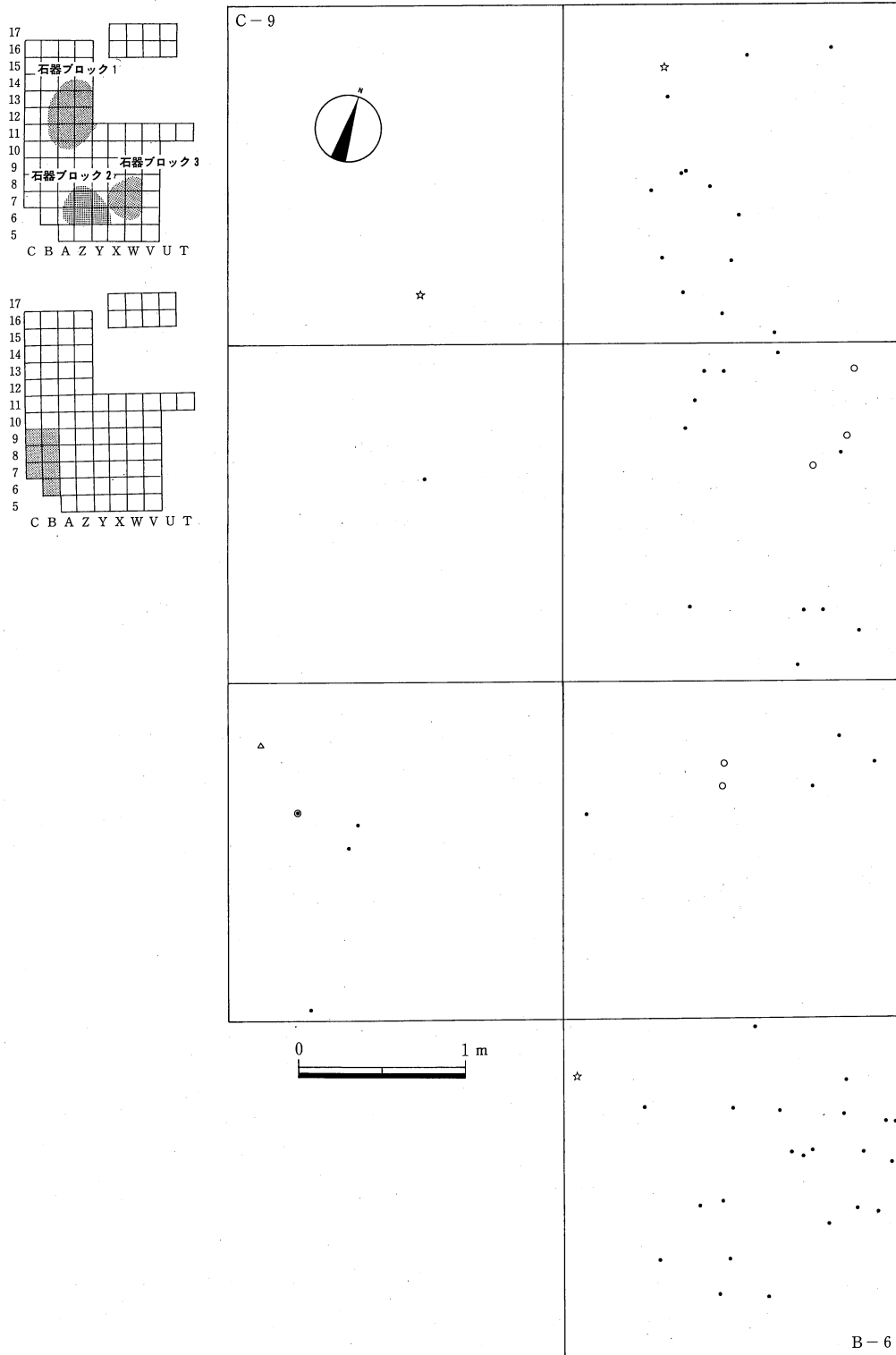
器種	チャート	黒曜岩	玻璃質 安山岩	総計
ナイフ形石器	0.81%	0.00%	0.00%	0.81%
搔器	0.40%	0.00%	0.00%	0.40%
拇指状搔器	0.00%	0.40%	0.00%	0.40%
挟入石器	0.40%	0.00%	0.00%	0.40%
細部調整剥片	2.02%	0.40%	0.00%	2.42%
石刃	0.00%	0.40%	0.81%	1.21%
石刃状剥片	1.21%	0.40%	0.00%	1.61%
石核	2.82%	0.00%	0.00%	2.82%
楔形石器	0.00%	0.40%	0.00%	0.40%
微細剥離痕を有する剥片	0.40%	0.81%	0.00%	1.21%
剥片	27.02%	4.03%	0.00%	31.05%
碎片	47.98%	8.47%	0.00%	57.26%
総計	83.06%	15.32%	0.81%	100.00%

第IV章 第VI層L文化層



第94図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層石器ブロック3 分布(1/40)

第4節 石器群の分布状態と内容



第95図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層石器ブロック外 分布(B・C列)(1/40)



第96図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層石器ブロック外 分布(B・C列) (1/40)

〈母岩別資料分析〉

石器ブロック3には母岩別資料9、10、11、12、13、16、19、20が含まれる。母岩別資料10・11は石器ブロック3にのみ分布し、母岩別資料9・12・16は石器ブロック1、石器ブロック2、石器ブロック3の3つのブロックにまたがる接合資料があり、母岩別資料13・19は石器ブロック2、石器ブロック3に分布し、母岩別資料20は石器ブロック1、石器ブロック3に分布している。石器ブロック2でも示したように、このような母岩別資料の共有関係は、各ブロックの共時性を示す根拠となろう。

〈石器石材〉

石器石材の内訳はチャート20点(0.69%)、黒曜石7点(0.24%)、玻璃質安山岩2点(0.07%)であり、チャートが圧倒的に多い。それぞれの石材の総重量もチャート511.19g、黒曜石28.96g、玻璃質安山岩22.87gとなり、チャートの頻度が高い。剥片を加えた点数はチャート206点(83.06%)、黒曜石38点(15.32%)、玻璃質安山岩4点(1.61%)、総重量はチャート1574.27g、黒曜石50.18g、玻璃質安山岩23.1gとなる。このことから、石器ブロック2と同様に玻璃質安山岩の利用頻度が低いことが追認された。

(宮下治枝)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

これまでの母岩別資料分析によって、第VI層L文化層に帰属する母岩別資料8つを報告している。第7次調査における母岩別資料分析では、既報告の母岩別資料のうち、4つの母岩別資料(1、2、4、7)に新たな接合事例や同一母岩資料を加えたほかに、12個の母岩別資料(9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20)を新規に把握した。

なお、第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)で第V層文化層母岩別資料13とした資料について、第7次調査の出土資料について行なった平面分布と垂直分布とに基づく文化層の分離と母岩別資料分析との結果から、文化層の誤認定であると判断し、第V層文化層から第VI層L文

化層へ帰属文化層を変更し、既報告の第V層文化層母岩別資料13を欠番としたうえで、第VI層L文化層母岩別資料9と改めた。そのために第V層文化層の母岩別資料については、通し番号で21までが付されているが、把握している母岩別資料の個数は20個になる。

ところで石材の観点から見た場合、第VI層L文化層では既報告の母岩別資料7が黒曜石である以外はすべてチャートである。黒曜石は各文化層を通じて主要石材であるチャートに比べ、資料点数が少なく、母岩別資料分析がほとんど行えていなかった。第7次調査では第VI層L文化層の剥片・碎片を含む石器で比較的多数の黒曜石が確認されたため、視覚的特徴を分類基準に設けて、既報告の母岩別資料7のほかに、母岩別資料18、19、20の3つの母岩別資料を分類し得た。しかしながら、剥片・碎片を含むすべての石器相互には接合をほとんど確認できなかったうえ、石核等の剥片剥離工程復元に大きく寄与する資料も得られておらず、剥片剥離工程の具体的なあり方は理解できていない。あるいは黒曜石製石器に見られるこのような石器器種組成の偏りは、柳又遺跡A地点において原石にはじまる剥片剥離工程の存在しないことを傍証しているのかもしれない。

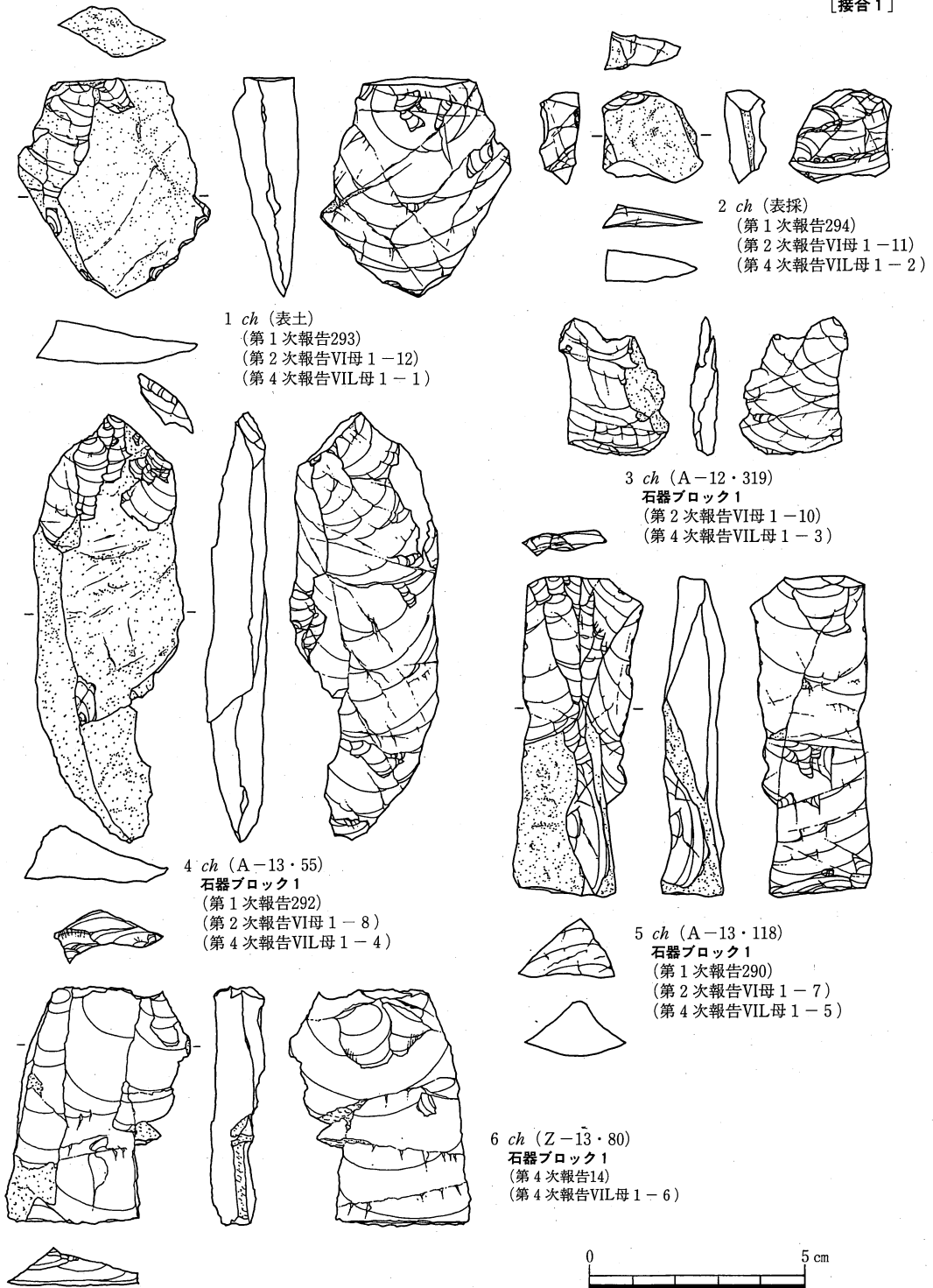
なお、黒曜石を母岩別資料に分類した肉眼観察可能な視覚的特徴は以下のとおりである。すなわち、母岩別資料7は霜降り状の縞があり透明度が高いものを、母岩別資料18は霜降り状の縞が入る透明度が高い黒曜石で母岩別資料7に類似するが、赤みを帯びるものを、母岩別資料19は非常に透明度が高くて縞の入らないものを、母岩別資料20はくすんで透明度が低く縞の入らないものを、それぞれ一括している。

これらの黒曜石の母岩別資料は、岩石学的な肉眼観察の所見によると、母岩別資料7と母岩別資料18とが比較的類似する性質で、かつ第V層文化層の石器群に使用されている黒曜石に近く、母岩別資料19と母岩別資料20とが比較的類似する性質で、第V層文化層の石器群には見られない黒曜石であるとのことである。第VI層L文化層に帰属させたこれらの黒曜石の母岩別資料は第VI層L文化層の指標的な石器といえるナイフ形石器を含んでおり、文化層の誤認定とは考えられない。それゆえに視覚的な属性で分類した母岩別資料を優先し報告する。

なお、第VI層L文化層に帰属する母岩別資料は、剥片剥離工程上、両設打面の石核を準備したいわゆる砂川型石刃技法が顕著な特徴となっている。今回の報告書に掲載した新たに把握された第VI層L文化層の母岩別資料においても認められ、当該文化層の編年的な位置を理解する資料となっている。

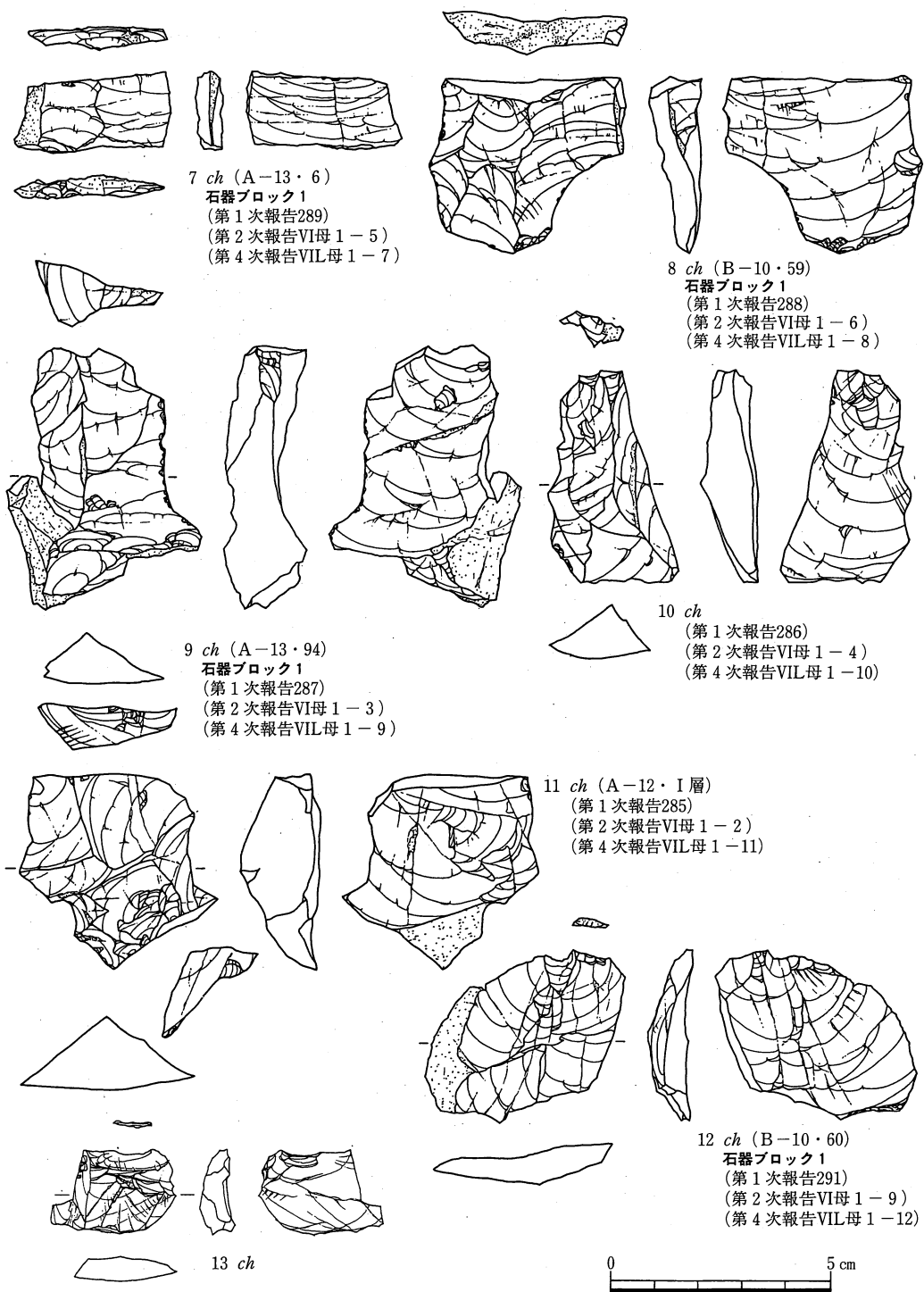
同時に今回の報告にあたって注意された点として、剥片剥離工程で生じる石刃を代表とする目的的な剥片以外の、いわば調整剥片とも考えられる不定形な剥片に細部調整が施されていたり、微細剥離痕が観察される場合が多いことが挙げられる。これらは定形的な石器器種（製品）となるような目的剥片に限定せずに石器群を分析しなければならないことを改めて意識させる資料であり、今後とも注意が必要な特徴であろう。

[接合1]



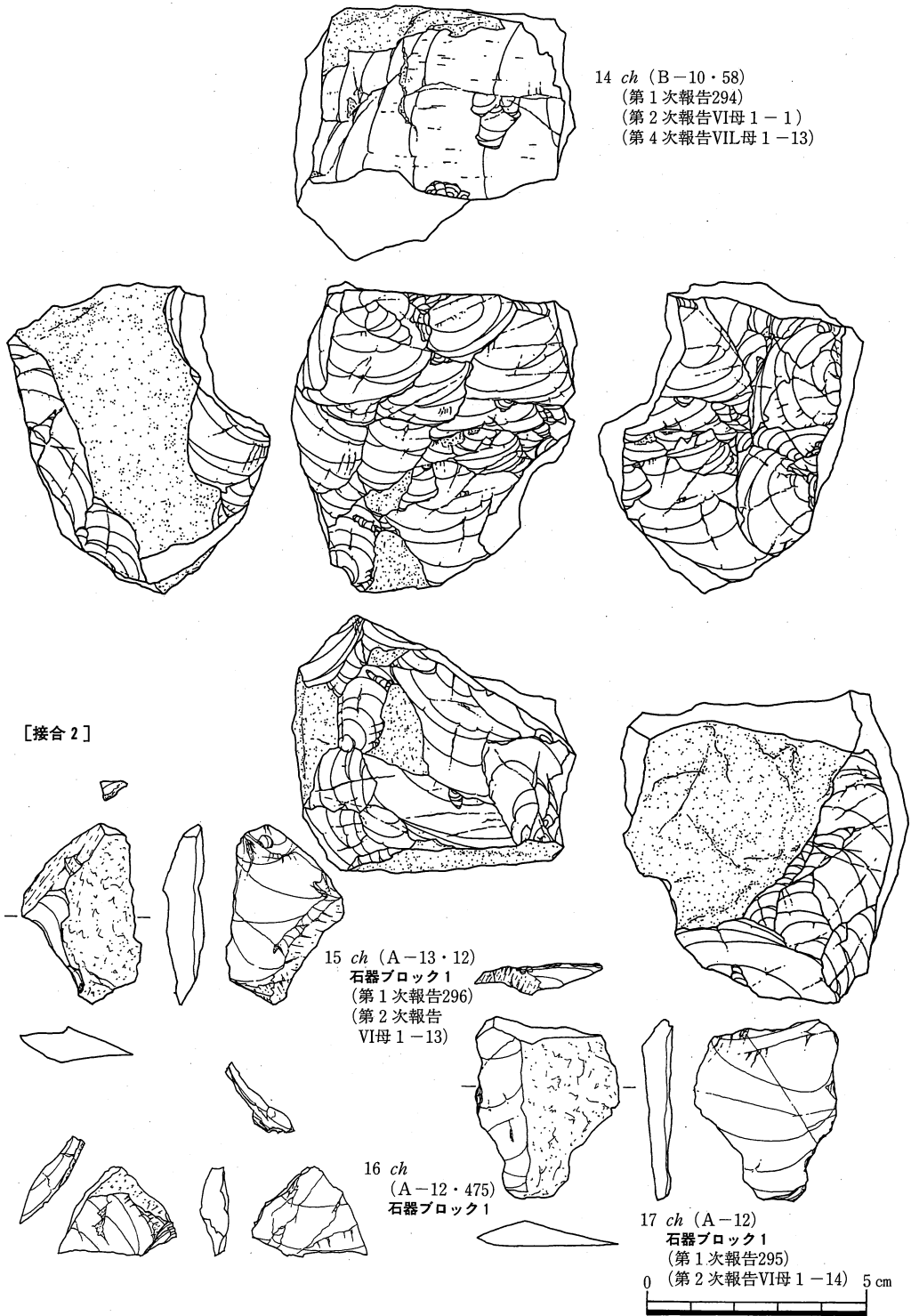
第97図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料1(1)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



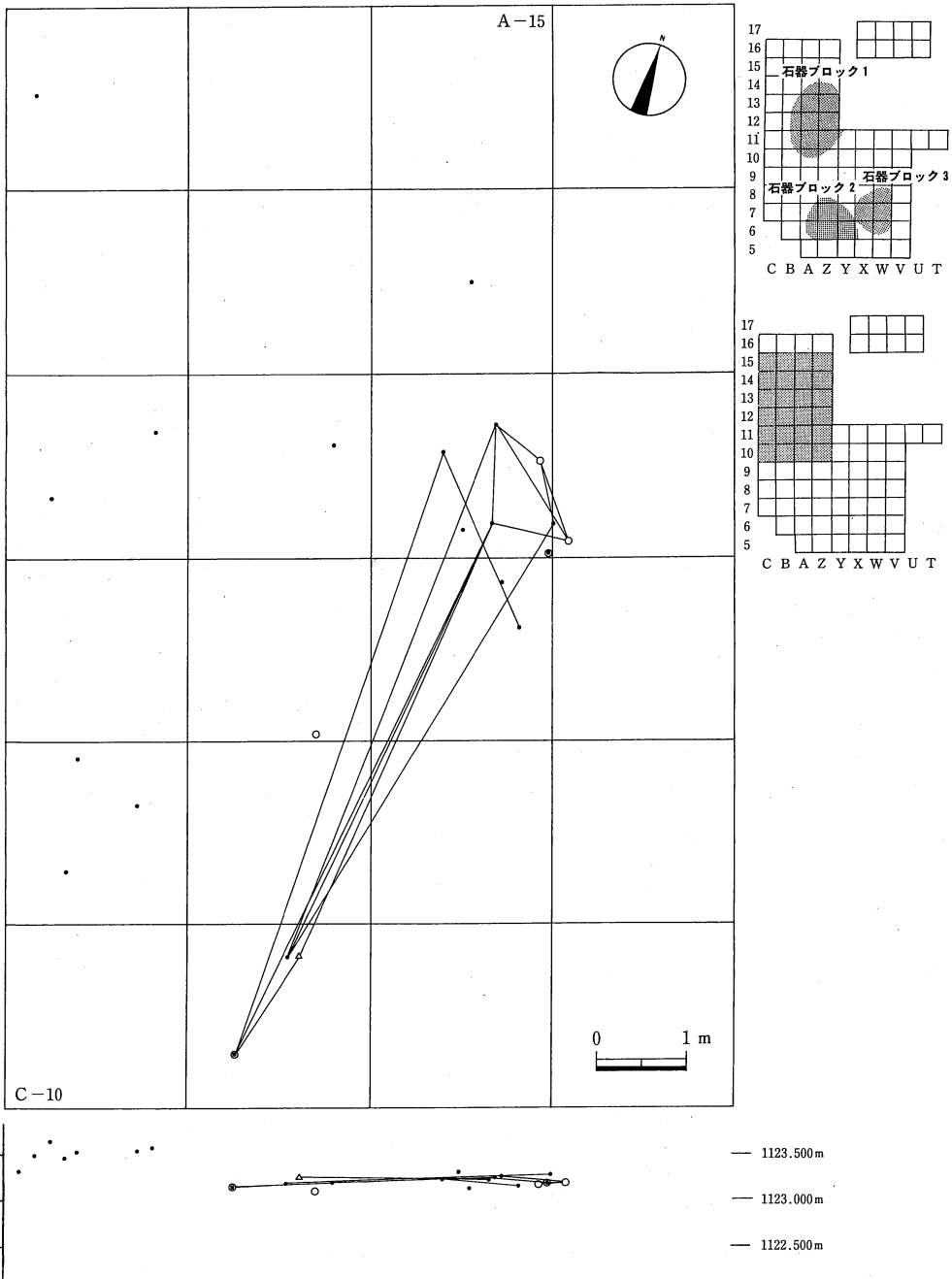
第98図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料1(2)(2/3)

第IV章 第VI層L文化層



第99図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料1(3)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第100図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料1：分布(1/80)

(1) 母岩別資料1 (第97~100図)

石材 チャート。

石質 石材の縦横に多数の節理が見られるが、石質は均質かつ緻密で脂肪光沢がある。割れ口は貝殻状断口を呈する良質な石材である。色調は薄い紺色で所々に黒色の節理が入る。

素材 角礫の一部を節理に沿って分割したもの。

資料 本母岩別資料はすでに第2次調査報告(小林・谷口編 1993)、第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)に提示されているが、〔接合1〕に1点(第98図13)、〔接合2〕に1点(第99図16)が接合資料として追加された。

13と16ともには不定形の剥片である。16は頭部付近が大きく折損しているため打面は無い。背面上部にわずかに原礫面を残している。

接合資料と剥片剥離工程

〔接合1〕 素材の分割から石核の整形、打面形成と打面転位を繰り返して剥片剥離を行う工程の復元がすでに報告されている。石核の正面を作業面にして、石刃・石刃状剥片などを作成した後、数回の180°打面転位を伴い剥片剥離を行っている。13は最後に180°打面転位した後、剥離された剥片である。具体的には、○→○→○→○→5石刃状剥片→○=○=6+7石刃→○=○→8剥片=9剥片→○=○=10剥片→11剥片→○→○→13剥片→14石核の工程(○は未検出の剥片を、=は180°打面転位後の剥離を、→は打面転位なしの剥離を示している)となる。12剥片は6+7石刃の後に同一打面から剥離されているが、180°打面転位する8剥片との前後関係が不明なため除外してある。

〔個体2〕 15・17が同一方向から剥離された後、打面を180°転位して16を剥離している。

分布 A~C、Z-10~14区に分布する(第100図)。今回追加された資料は点数も少なく、全体としての分布状況はこれまでに報告した様相を逸脱するものではない。

(田村令子)

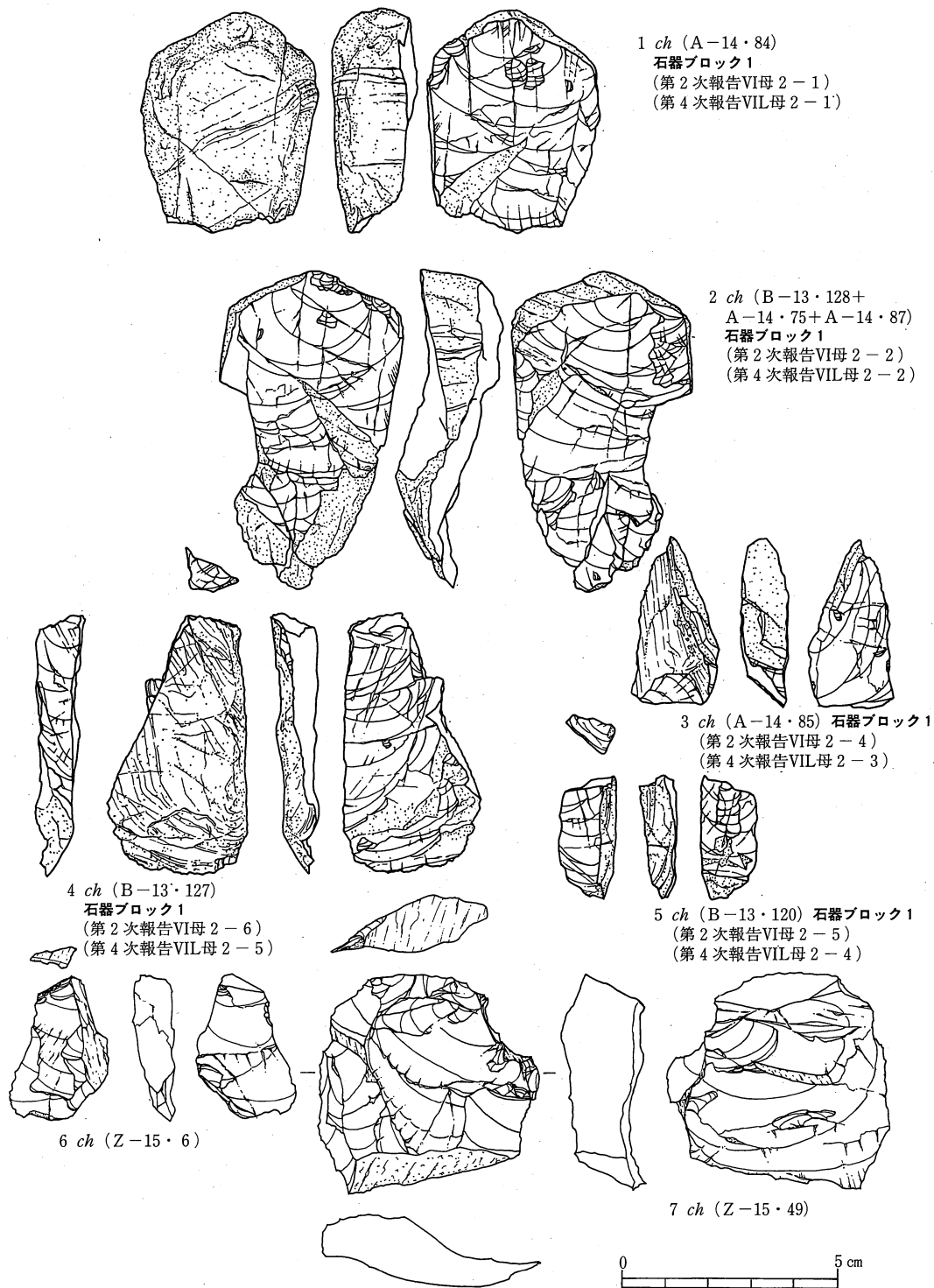
(2) 母岩別資料2 (第101~103図)

石材 チャート。

石質 緻密で脂肪光沢があり、割れ口は貝殻状断口を呈するが、節理が縞状に入り部分的に角状に破碎する。色調は全体に青く、剥片は半透明を呈する。

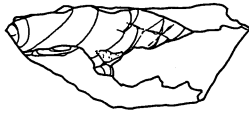
資料 第2次調査報告(小林・谷口編 1993)、第4次報告書(谷口・宮尾 1995)ですでに報告されている母岩別資料である。新たに剥片4点(第101図6、7、11、12)が接合したが、いずれも第7次調査で出土した資料ではなく、整理作業の途上で過去の調査資料を扱った際に接合が確認されたものである。6は打面再生剥片である。打面および左側面には節理面が残されている。7も6と同様に打面再生を行った際の剥片である。上部及び末端には原礫面が残されている。11と12は石核に残る打面を形成するために行なわれた剥離、つまり最後の打面再生

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

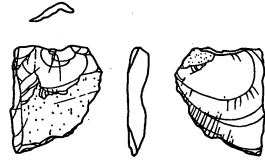
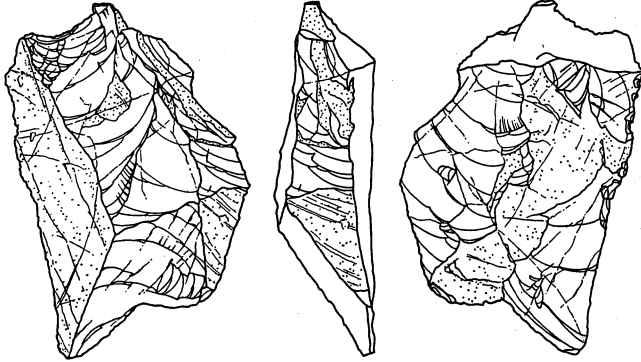


第101図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料2(1)(2/3)

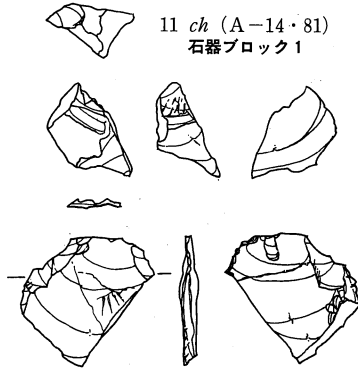
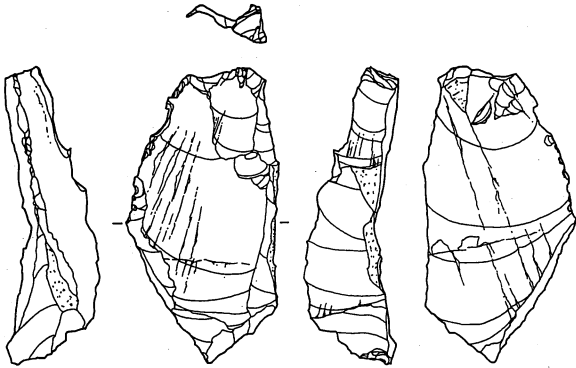
第IV章 第VI層L文化層



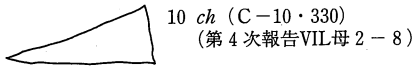
8 ch (A-14・59)
石器ブロック1
(第2次報告VI母2-7)
(第4次報告VII母2-6)



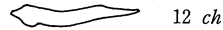
9 ch (A-14・92)
石器ブロック1
(第2次報告VI母2-8)
(第4次報告VII母2-7)



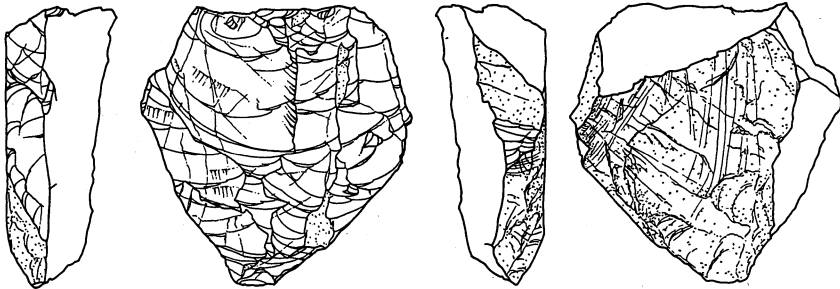
11 ch (A-14・81)
石器ブロック1



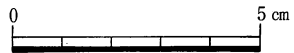
10 ch (C-10・330)
(第4次報告VII母2-8)



12 ch

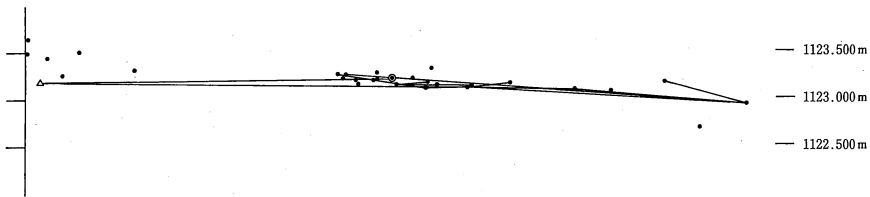
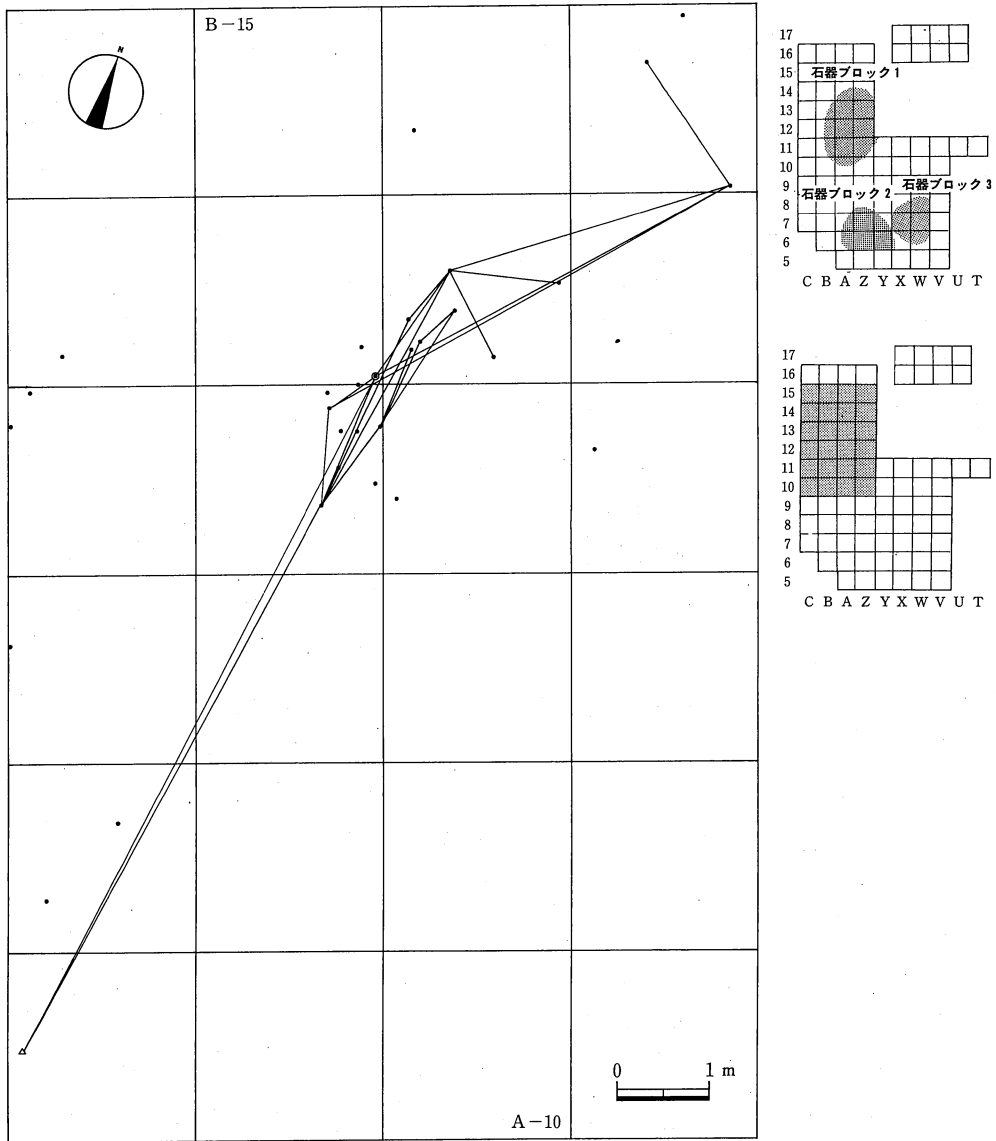


13 ch (B-14・136)
石器ブロック1
(第2次報告VI母2-9)
(第4次報告VII母2-9)



第102図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料2(2)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第103図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料2：分布(1/80)

に伴う剥片であるが、いずれも破碎が著しい。

接合資料と剥片剥離工程 石核13、細部調整剥片10、剥片1～9・11・12の13点からなる接合資料であり、素材原礫から打面形成・剥片剥離に至る一連の工程の復元がすでに報告されている。

追加した資料は、いずれも打面の更新に関わる剥片であり、これまでに復元した工程を後づける資料となっている。

分布 当該資料はA～C、Z-10～16区、さらに、A・B-13・14区にかけて分布しており、特にA・B・Z-13・14区にその集中が見られる（第103図）。今回追加された資料は点数も少なく、全体としての分布状況はこれまでに報告した様相を逸脱するものではない。

（千葉博俊）

（3）母岩別資料4（第104～第107図）

石材 チャート。

石質 節理が多く見られるものの緻密かつ均質であり、割口は貝殻状断口をなす。色調は全体的に赤褐色を呈する。

素材 角礫を節理面に沿って分割した状態の石塊を素材としたものと思われる。

資料 すでに第4次調査報告書（谷口・宮尾編 1995）に提示されている接合資料〔接合1〕に1点（第104図5）の接合が確認されたほか、〔接合2〕〔接合3〕〔接合4〕〔接合5〕（第105～106図）という相互に接合の確認できない4つの接合資料が新たに得られた。

〔接合1〕すでに報告されている資料に、石刃が1点が追加された。

5は背面→腹面方向に折断された石刃が接合したものである。背面を構成する3枚の剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は単剥離打面であり、微細な打面調整が認められる。

〔接合2〕8と9は剥離の際に節理面で折損したものが相互に接合する不定形な剥片である。上部も折損している。背面の右側縁に原礫面、下部に節理面が残され、剥離面は左横方向からの剥離を示している。10は縦長剥片である。背面には下端に原礫面が、左側縁に節理面が残される。背面の剥離は右斜め上方向からの剥離によるもので、本剥片に残される単剥離打面とは異なる打面からの剥離を示している。

〔接合3〕11は端部側が大きく折損した剥片である。打面と背面は原礫面で構成されており、剥片剥離工程の初期に位置づけられよう。12は節理に沿って剥離した剥片の一部である。13は11とは逆に頭部側を腹面→背面方向に折損した剥片であるが、折れ面に断続的な調整が施された細部調整剥片である。端部には原礫面が残されている。14は13を剥離した際に出た破片で、原礫面が残されている。

〔接合4〕15は縦長剥片を素材とした細部調整剥片である。細部調整は左側縁下半部に連続

的に施されている。背面には原礫面が大きく残されている。背面を構成する剥離面は腹面と同じ上方向からの剥離を示している。打面は背面方向からの単剥離面打面である。16は頭部が破碎し、下半部が節理面に沿って折れている薄い碎片である。背面には大きく原礫面が残されている。17は縦長剥片である。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は点打面である。18は分厚い剥片で下部が折損している。背面には大きく原礫面が残されている。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。19は小形の縦長剥片である。背面を構成する剥離面で右側縁側のものは右斜め上方向からの剥離によるものである。打面は腹面方向からの単剥離面打面である。左側縁の下半部には断続的に腹面側に微細剥離痕が観察される。20は縦長剥片で下半部は腹面方向から折損している。背面を構成する剥離面はいずれの腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は複剥離面打面で、背面方向から打面調整が行われている。また、微細な頭部調整が観察される。21は縦長剥片で下半部は腹面方向から折損している。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は背面方向からの単剥離面打面である。

[接合5] 22は縦長剥片で下部は腹面方向から折損している。背面を構成する剥離面は腹面と同じ上方向からの剥離と、横方向からの剥離のものが見られる。打面は背面方向からの単剥離面打面である。23は幅広の縦長剥片である。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は複剥離面打面で、右横方向から打面調整が施されている。

接合資料と剥片剥離工程 相互に接合しない5つの接合資料がある。すなわち、1～7が接合する接合1と、8～10が接合する接合2、11～14が接合する接合3、15～21が接合する接合4、22・23が接合する接合5である。

接合1はすでに第4次調査で一連の剥片剥離工程を復元的に記してある資料である。今回新たに確認された石刃は、その作業面に接合する目的的な剥片である。

また、他の接合資料それぞれは、いずれも断片的な資料であり、多くのことを推測に頼らざるを得ないが、いずれも大振りの剥片であり、原礫面を大きく残す点を考えると剥片剥離工程初期の調整に関わる剥片である可能性が高い。

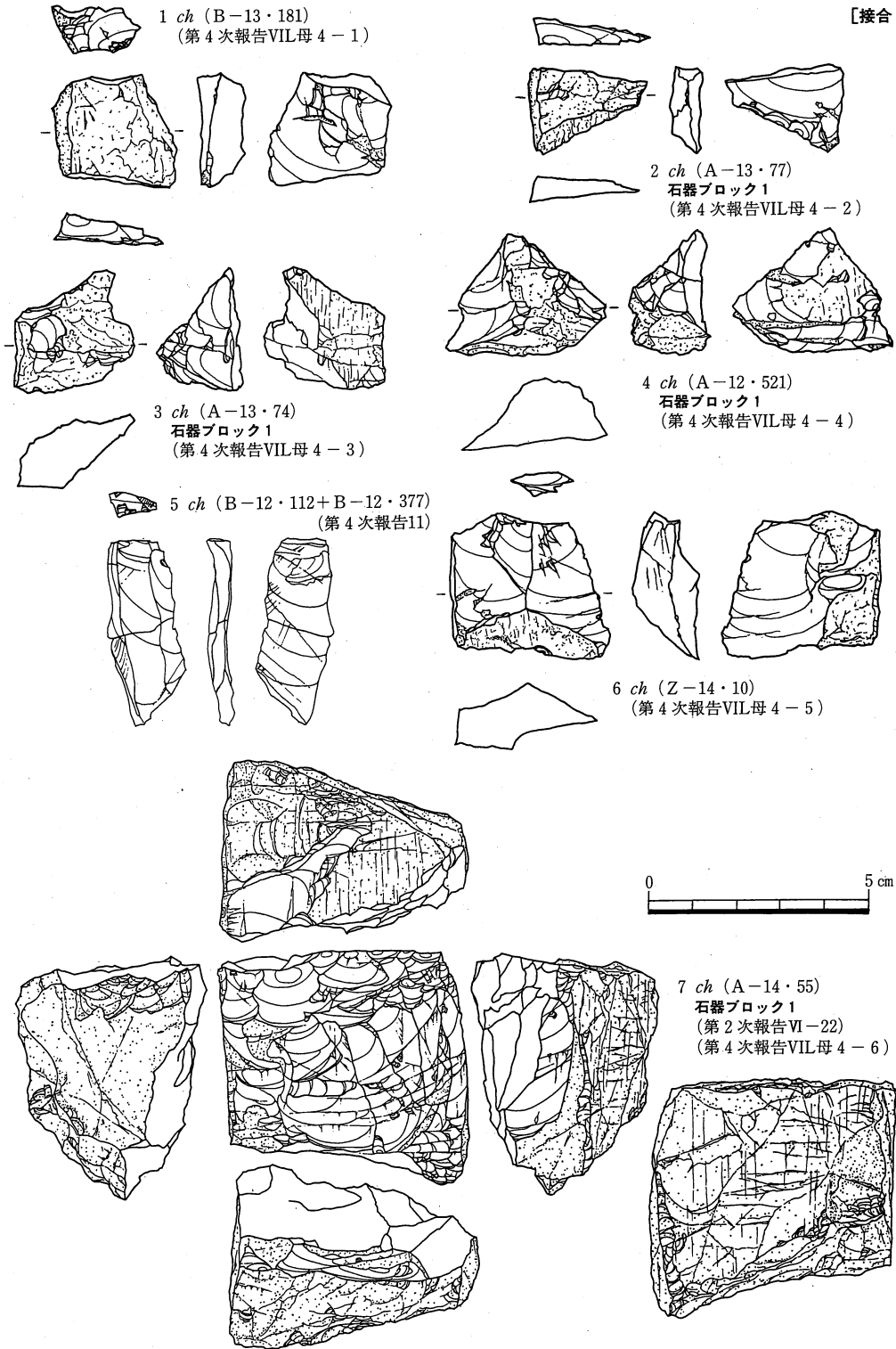
分布 資料総数は30点である。

接合1はB-12・13、A-12～14、Z-14区にかけて分布している(第107図)。

特に石核7を支点に石刃、剥片・碎片が南東方向へ扇状に広がるような分布を示している。また、接合2と接合4とはC-7・8、A-8区にかけて分布し、接合3はC-14、B-16、Z-16区にかけて分布している。

なお、接合5は1点がX-8区出土あることを除くと表採資料の接合であるため分布は明らかではない。これらの個々の接合資料のうち、接合1に関しては第4次調査報告(谷口・宮尾

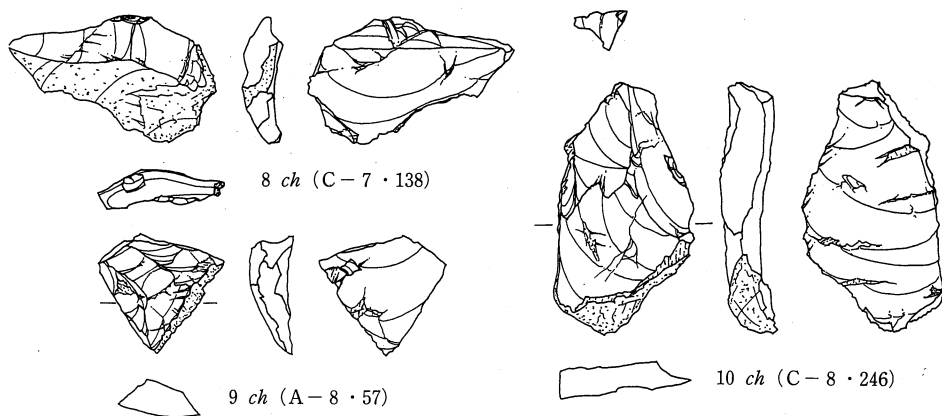
[接合1]



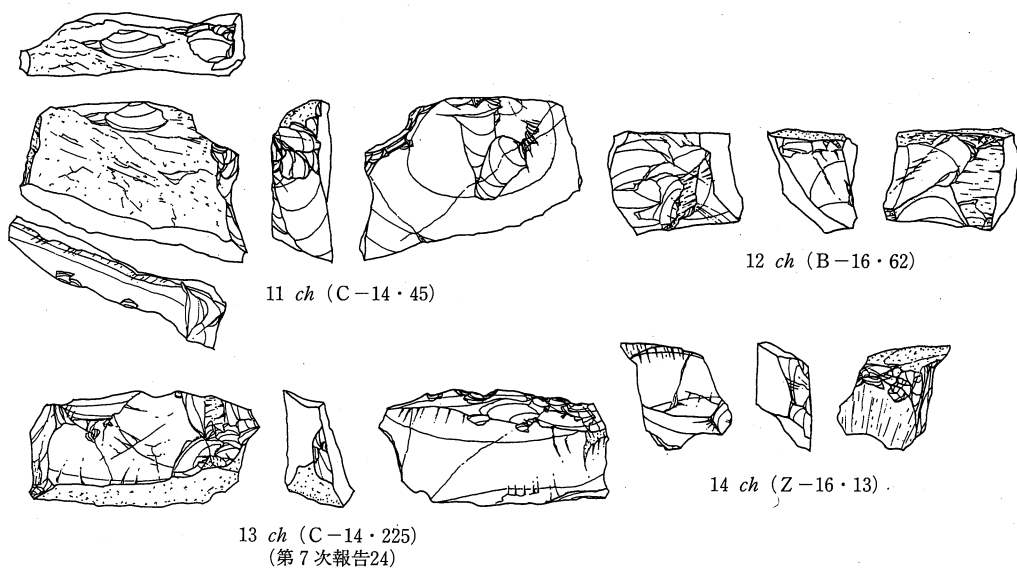
第104図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料4(1)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

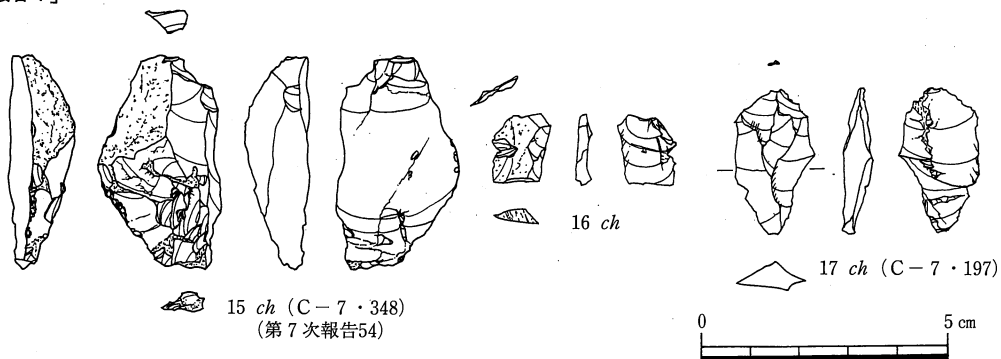
[接合 2]



[接合 3]



[接合 4]



第105図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料4(2)(2/3)

編 1995) ですでに明らかなように剥片剥離工程が復元できるものであり、母岩別資料1・2と一部重複するように分布している。

しかし、その他の相互に接合はしない接合資料は、接合1とは分布範囲を違えており、剥片剥離工程の初期段階と、具体的な剥片剥離工程で場を移動しているようすが推察できる。

ただし、これらの接合資料は相互には接合していないので、母岩別資料の分類に誤認がある可能性も残されており注意が必要である。

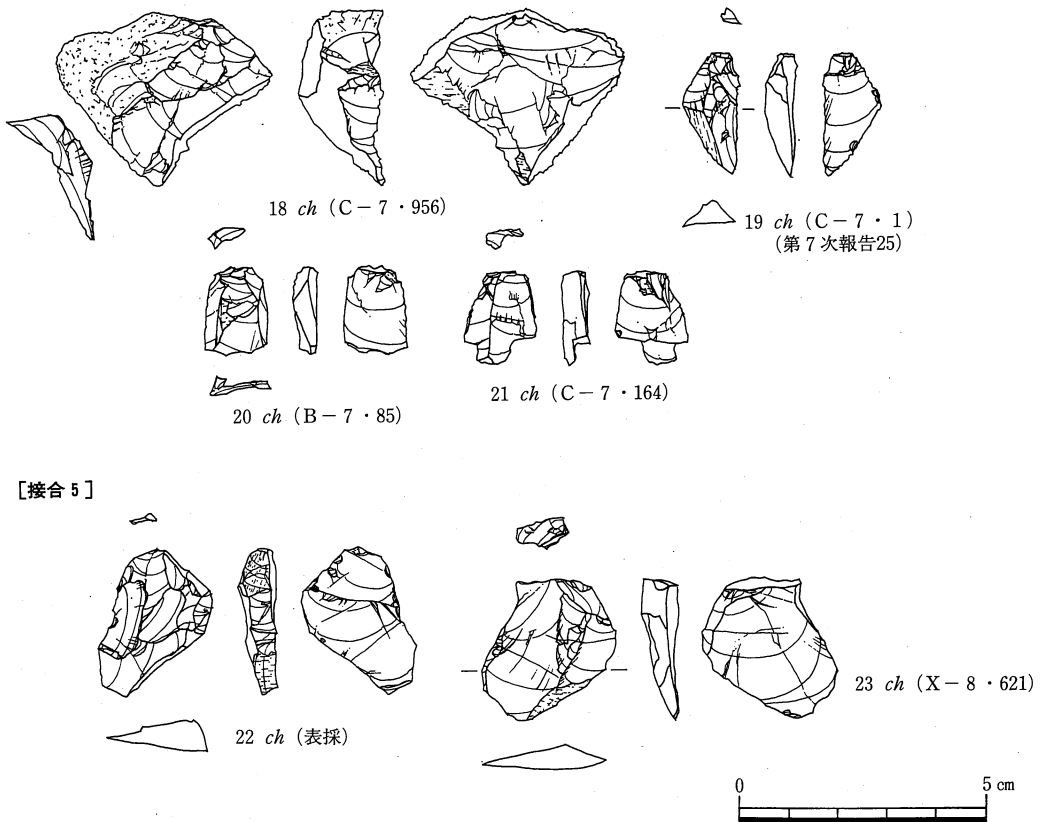
(笠井洋祐)

(4) 母岩別資料7 (第108・109図)

石材 黒曜石。

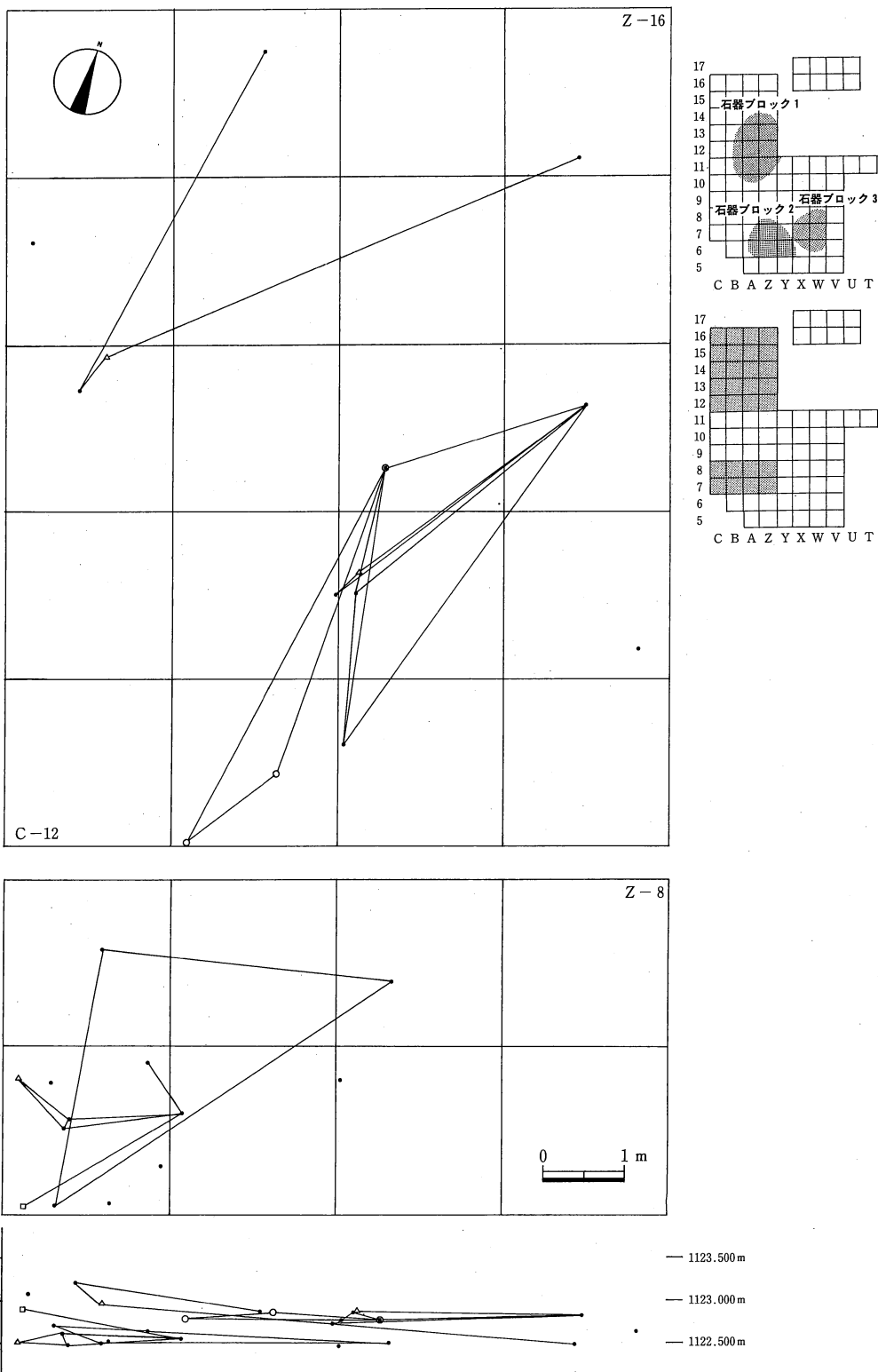
石質 緻密で割れ口は貝殻状断口をなす。霜降り状の縞があるが透明度が高い。

素材 石核が検出されていないうえ、石刃素材のナイフ形石器とそれに伴う剥片・碎片のみで構成されているため、明確な素材は推定できない。しかしながら、このような状況を積極的に評価するならば、本遺跡に持ち込まれた黒曜石がすでに一定の加工を施したものであったと



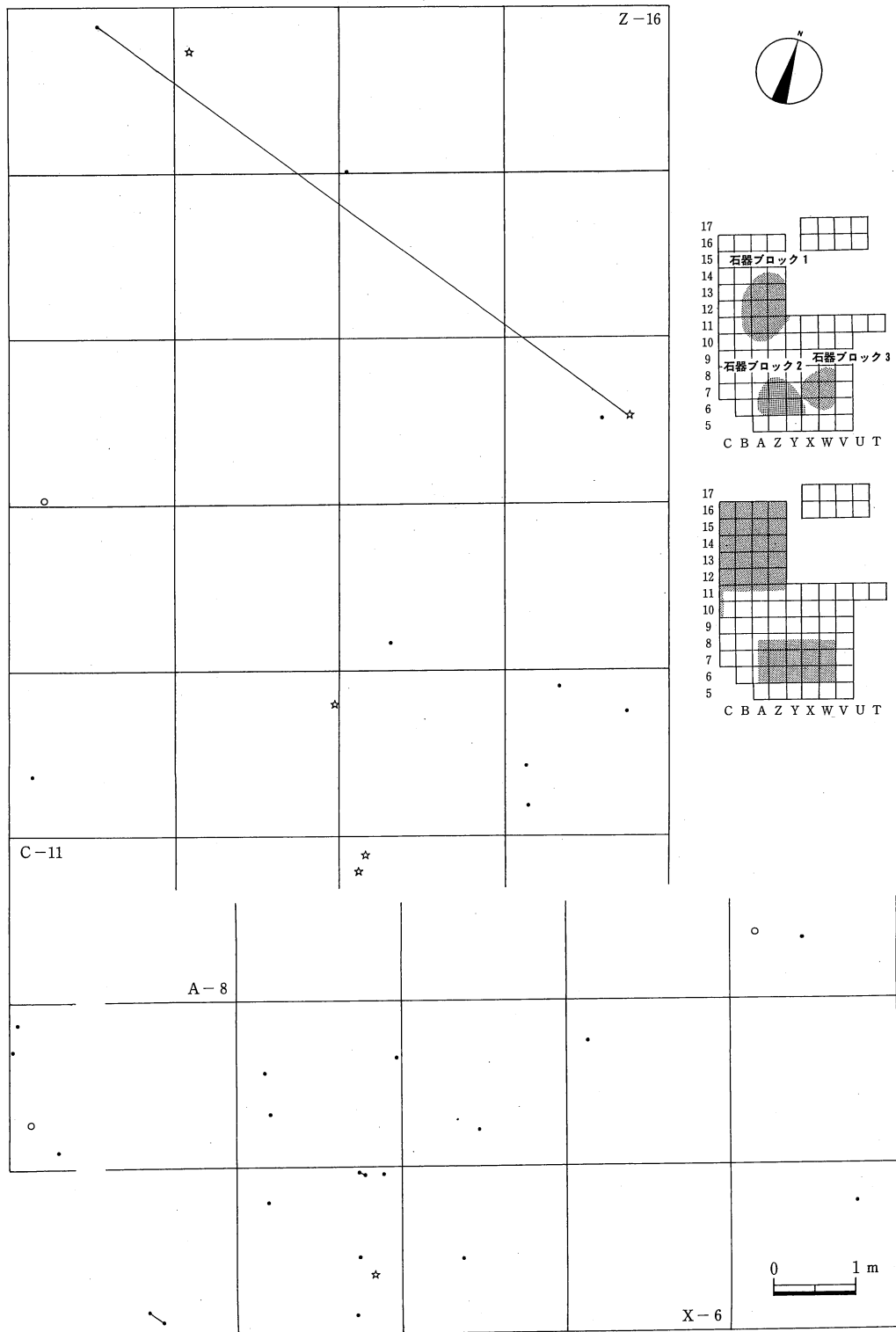
第106図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料4(3)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第107図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料4：分布(1/80)

第IV章 第VI層L文化層



第108図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料7：分布(1/80)

いえるかもしれない。

資料 母岩別資料7は第5次調査において確認されたナイフ形石器4点、ナイフ形石器ブランディングチップ2点、剥片5点の合計11点の資料(小林・宮尾編 1996)であったが、第7次調査において検出された黒曜石について、肉眼観察に基づいて母岩別資料分類した結果、同一母岩と認定した資料が多数あり、これらをすでに報告してある母岩別資料7にまとめて報告する。

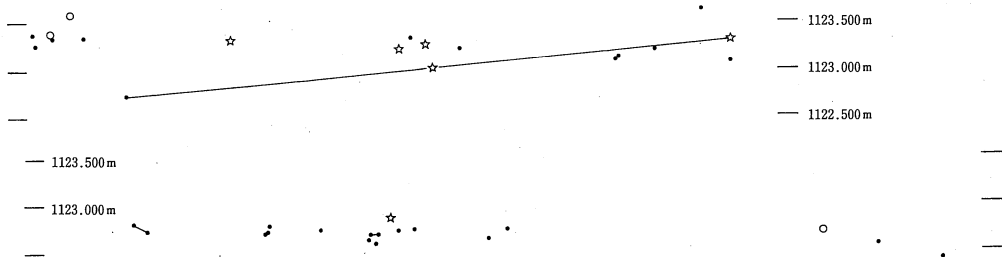
ナイフ形石器7点(第226図5・7・8、第228図32)、搔器1点、拇指状搔器1点(第231図56)、挟入石器1点、石刃3点、剥片・碎片27点の合計40点がある。なお、これらの資料間では、第5次調査報告で示されているナイフ形石器の素材石刃主要剥離面と接合する剥片とに断片的な剥片剥離が見られるだけであり、具体的な剥片剥離工程を推定し得る資料が含まれていない点は、石材の入手に関わって、示唆的である。

それにもかかわらず、石器器種分類されるような製品が多数含まれており、本遺跡において、黒曜石がすでに一定の加工を施されて、搬入されたようすを予想させる。この点に関しては、開田高原で黒曜石が入手できないという事実も踏まえて、その背景を解釈してゆく必要がある。

ひるがえて、第VI層L文化層にかぎらず、本遺跡で把握できた母岩別資料の石材の多くは、チャートであることを考慮すれば、より鮮明に母岩別資料7を含む黒曜石を石材とする母岩別資料の性格は見えてくると思われる。特に、第VI層L文化層のチャートを石材とする母岩別資料の接合資料が素材を復元し得るところまで達していることとは、際だったちがいを示していることは注意すべきであろう。

分布 資料総数は40点である。接合資料のナイフ形石器と剥片が分布するC・B-16区やZ-14区付近では散漫な分布を示しているが、A・Z-11・12区の石器ブロック1とZ・Y-6・7区石器ブロック2とにそれぞれ分布のまとまりが認められる。これらはいずれもナイフ形石器やナイフ形石器の碎片、それに伴うブランディングチップが主体を占めており、石器ブロック内におけるナイフ形石器の使用と、使用に際して生じた破碎と再調整のようすを連想させる。

(笠井洋祐)



第109図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料7：分布(1/80)

(5)母岩別資料9 (第110～117図)

石材 チャート。

石質 割口は貝殻状断口をなすが、無数の節理が縞状に入る。部分的に大きな節理面をもち、節理面に沿って不規則に割れたり折れたりする。色調は青灰色あるいは青緑色を呈する。

素材 剥片2・36に残る原礫面、剥片27の背面、剥片48の腹面などの節理面から類推すると、楕円形の河原石を節理面に沿って分割した状態の石塊を素材にしたものと考えられる。

資料 第4次調査で第V層文化層母岩別資料13として報告(谷口・宮尾編 1995)されていた資料である。今回の調査で検出された資料と過去の調査資料について、再度行なった母岩別資料の分類と接合作業によって、多くの接合資料が新たに確認され、その出土層位や接合から推察される剥片剥離工程の検討から、第7次調査報告において第VI層L文化層へと帰属を訂正した。相互には接合しない2つ接合資料、〔接合1〕34点、〔接合2〕14点の計48点を図示した(第110～116図)。

〔接合1〕 第4次調査報告で既に触れられているものに、新たに接合した資料が加わる。

石核34は正面を作業面とし、幅広の縦長剥片を剥離している。打面、側面には石核整形の剥離面が残されている。本母岩別資料で唯一接合の確認できた石核である。

細部調整剥片7・9・28・29・32のうち、28は幅広の剥片を素材とし、左側縁には腹面→背面方向の細部調整が、右側縁は上半部に背面→腹面方向、下半部に腹面→背面方向の細部調整が施されている。打面は背面方向からの単剥離面打面である。30は比較的分厚い剥片を素材とし、背面下端に腹面→背面方向の細部調整が施されている。打面は背面方向からの単剥離面打面である。32は縦長剥片を素材とし、下面に腹面→背面方向の細部調整が施されている。打面は背面方向からの単剥離面打面である。7・9は、既に第4次調査報告の中で触れられている。

微細剥離痕を有する剥片22は縦長剥片であり、右側縁に微細な剥離痕を有する。

剥片および碎片である1・6・8・10・21・23・27・30・31・33のうち、1は縦長剥片であり、打面は背面方向からの2枚の剥離面をもつ複剥離面打面である。2は比較的分厚い剥片であり、背面に原礫面を大きく残している。打面は背面方向から加撃された剥離面をもつ単剥離面打面である。3・4・10・12・16・20・30は縦長剥片であり、打面は背面方向からの剥離面をもつ単剥離面打面である。10は左側縁下部に腹面方向から2箇所の折損が見られる。5は縦長剥片であり、打面は右側面方向から加撃された剥離面をもつ単剥離面打面である。12は背面を構成する剥離面はいずれも腹面を同じ上方向からの剥離によるものである。20は打面右側縁に微細な剥離痕が見られる。11は碎片で下半部は腹面方向から折損している。13は横長の剥片であり、打面は背面方向から加撃された剥離面をもつ単剥離面打面である。14・26は縦長剥片であるが、上半部を14は腹面方向から、26は右側面方向から折損している。18は縦長剥片であり、背面に節理面を残している。打面は背面方向からと左側縁方向からの2枚の剥離面をもつ

複剥離面打面である。21・23は右側面方向からの剥離面をもつ単剥離面打面の剥片である。27は幅広で分厚い剥片であり、打面は右側面方向からと背面左方向からの剥離面をもつ複剥離面打面である。31は縦長剥片であり、打面は背面方向からの2枚の剥離面をもち、中央に節理面を残す複剥離面打面である。33は左側縁下半部い背面方向からの折損が見られる。背面を構成する剥離面はいずれも腹面を同じ上方向からの剥離によるものである。打面は背面左方向からの剥離面をもつ単剥離面打面である。15・17・19・24・25・30・31は碎片である。

[接合2] 微細剥離痕を有する剥片46は横長の剥片であり、右側縁に微細な剥離痕が存在する。打面は背面方向からの剥離面をもつ単剥離面打面である。

剥片および碎片である35～45・47・48のうち、35・38は碎片である。36は幅広で分厚い剥片であり、背面上部～上面にかけては原礫面を残す。打面は腹面方向から加撃された2枚の剥離面をもつ複剥離面打面である。37は縦長剥片であり、打面は腹面方向からの3枚の剥離面をもつ複剥離面打面である。39・40は横長の剥片であるが、剥片剥離の際の加撃によって破碎したものである。打面は背面方向からの剥離面をもつ単剥離面打面である。41は縦長剥片であり、右側面に2面の腹面方向からの折損が見られる。打面は背面方向から加撃された2枚の剥離面をもつ複剥離面打面である。42は縦長剥片であるが、背面下端に腹面方向からの調整を施して挟入部を作出するための調整に伴って、3つに破碎したものである。43は横長の剥片であり、打面は腹面方向からの多数の剥離面をもつ複剥離面打面である。44は背面方向の剥離面をもつ単剥離面打面である。45は微細剥離痕を有する剥片46の右側縁に接合する碎片である。45は46が剥片剥離される際に節理に沿って割れたものである。46は挟入石器に加工された剥片である。47・48は縦長剥片であり、打面は背面方向からの剥離面をもつ単剥離面打面である。48は背面を構成する剥離面はいずれも腹面を同じ上方向からの剥離によるものであり、腹面下部には節理面が見られる。

接合資料と剥片剥離工程 相互に接合しない2つの接合資料である。接合1は1～34(第110～114図)、個体2は35～48(第115・116図)がそれぞれ接合する。

[接合1] 石核1点、細部調整剥片5点、微細剥離痕を有する剥片1点、剥片27点の計34点からなる。素材の分割から石核の整形、打面形成と打面転位を繰り返しながら剥片剥離を行う一連の工程を復元できる。剥片27の背面に見られる平坦な節理面は、素材の最も初期の分割面と考えられ、このような点から剥片剥離に用いられた素材は、楕円形の河原石を節理面に沿って分割した石塊であることが推察される。

最初に素材長軸の頂部を断ち割り最初の打面を形成する。1～11はその際の打面形成剥片であり、目的剥片とは考えられないが、6、7、9、14に細部調整もしくは微細剥離痕が観察される。なお、これらの剥片は第4次調査報告でも指摘されているが、それぞれの主要剥離面の加撃方向と背面の剥離面構成およびその加撃方向は、90°打面転位する関係にある。すなわち、

剥片1→90°打面転位→剥片2→90°打面転位→剥片3→90°打面転位→剥片4→90°打面転位→剥片5→90°打面転位→剥片6+細部調整剥片7→90°打面転位→剥片8→90°打面転位→細部調整剥片9→90°打面転位→剥片10・碎片11と振子のように打面を変え、前段階の剥離面と直交する方向から加撃され、恰も本母岩の石質の際だった特徴である節理を処理するように剥ぎ取られている。

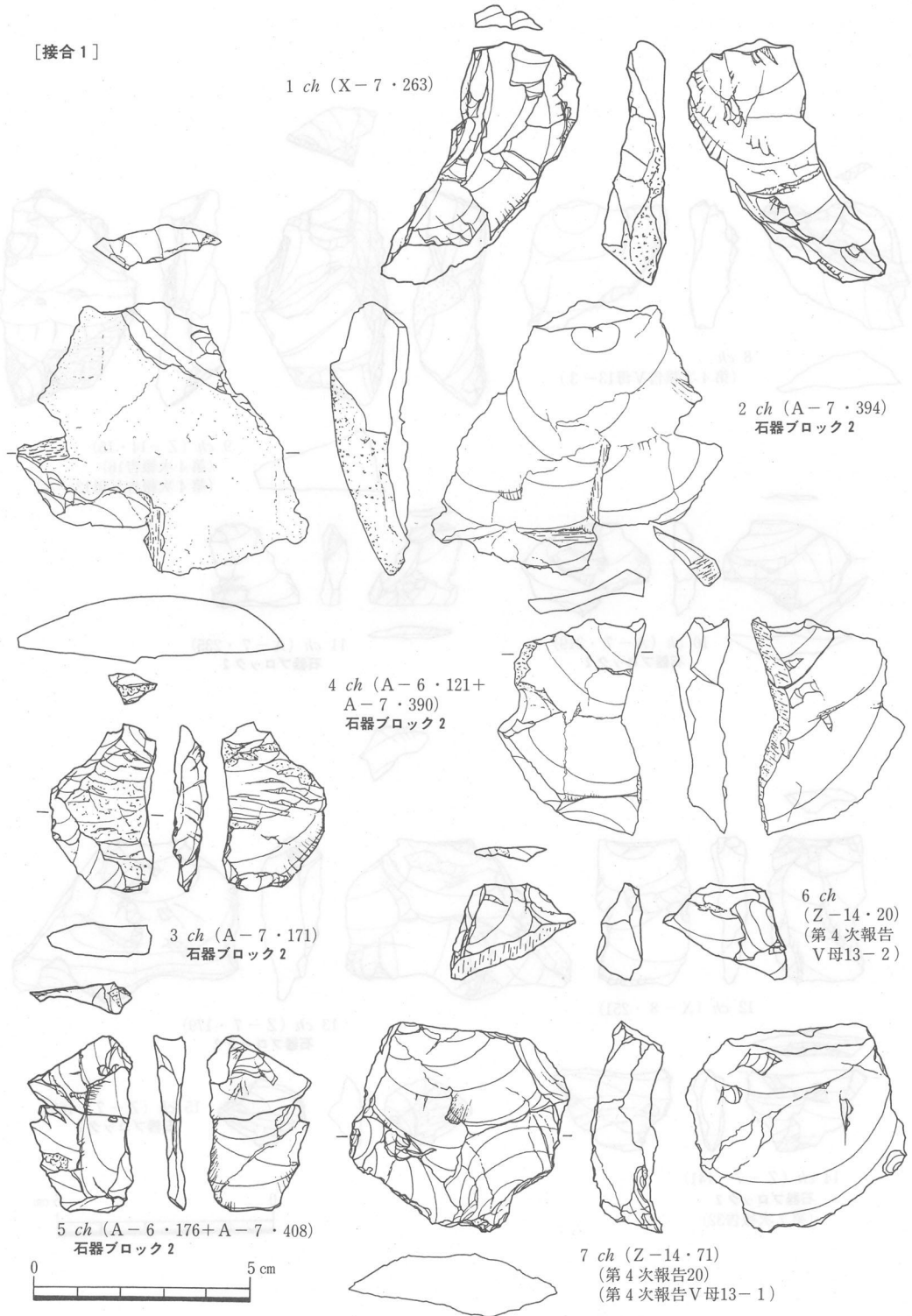
以上のような剥片剥離を経て形成された上設打面から剥離した剥片が12～14である。その後90°打面転位し、作業面調整が行なわれて16～19が剥離される。さらに最初に形成された打面を20・21の剥片剥離によって再生し、更新された打面から目的的に剥片剥離されたものが22・23である。22には微細剥離痕が観察される。なお、24～33は再び上設打面から180°打面転位した下設打面から目的的に剥片剥離されたものであり、28、29、31には細部調整もしくは微細剥離痕が観察される。最終的に残された石核34には上設打面からの剥離面しか見られないが、剥片剥離工程の復元によって両設打面石核であったことが明らかとなった。しかしながら、その一方で本接合資料では石刃は生産されておらず、わずかに縦長剥片が見られるに過ぎない。また、細部調整剥離痕や微細剥離痕が観察される場合は、目的的に剥離されたと考えられる縦長剥片にではなく、石核の打面整形や側面調整に伴うような矩形の剥片に多い。細部調整剥離痕や微細剥離痕が、使用を意識した、または使用された可能性を示すものであると積極的に評価すれば、剥片剥離工程と生産される剥片における「石器の扱い方」に関わって注意される。特に石刃素材のナイフ形石器に見られる執拗な再調整を考慮すれば、かたちにかかわる石器とかたちにこだわらない石器という分類が可能であり、第VI層L文化層における道具に対する観念に二重性のあることが示唆される。

〔接合2〕 微細剥離痕を有する剥片1点、剥片13点からなる接合資料が得られた。

35～38にかけての剥片剥離工程には接合1と同様の手順、すなわちそれぞれの主要剥離面の加撃方向と背面の剥離面構成およびその加撃方向が、90°打面転位する関係にある。つまり、剥片35→90°打面転位→剥片36→90°打面転位→剥片37→90°打面転位→剥片38という剥片剥離工程が復元される。そのため、これらの剥片の背面には求心的な剥離面が見られる点が特徴的である。なお、側面調整のために資料正面右方向から剥離された剥片が39・40である。以上のような剥片剥離工程を踏んで、節理の大きく入った部分が除去された後、41～48の剥片剥離はすべて同一方向から行なわれている。このうち、42、46に抉入部の調整が見られるが、42は調整に伴って破碎したため廃棄されたものであろう。これらは剥片剥離工程に即して見れば、接合1とは一転して、目的的に剥離された剥片のみが用いられているといえるが、矩形の剥片である点は、接合1における剥片の用いられ方と共通しており、示唆的である。

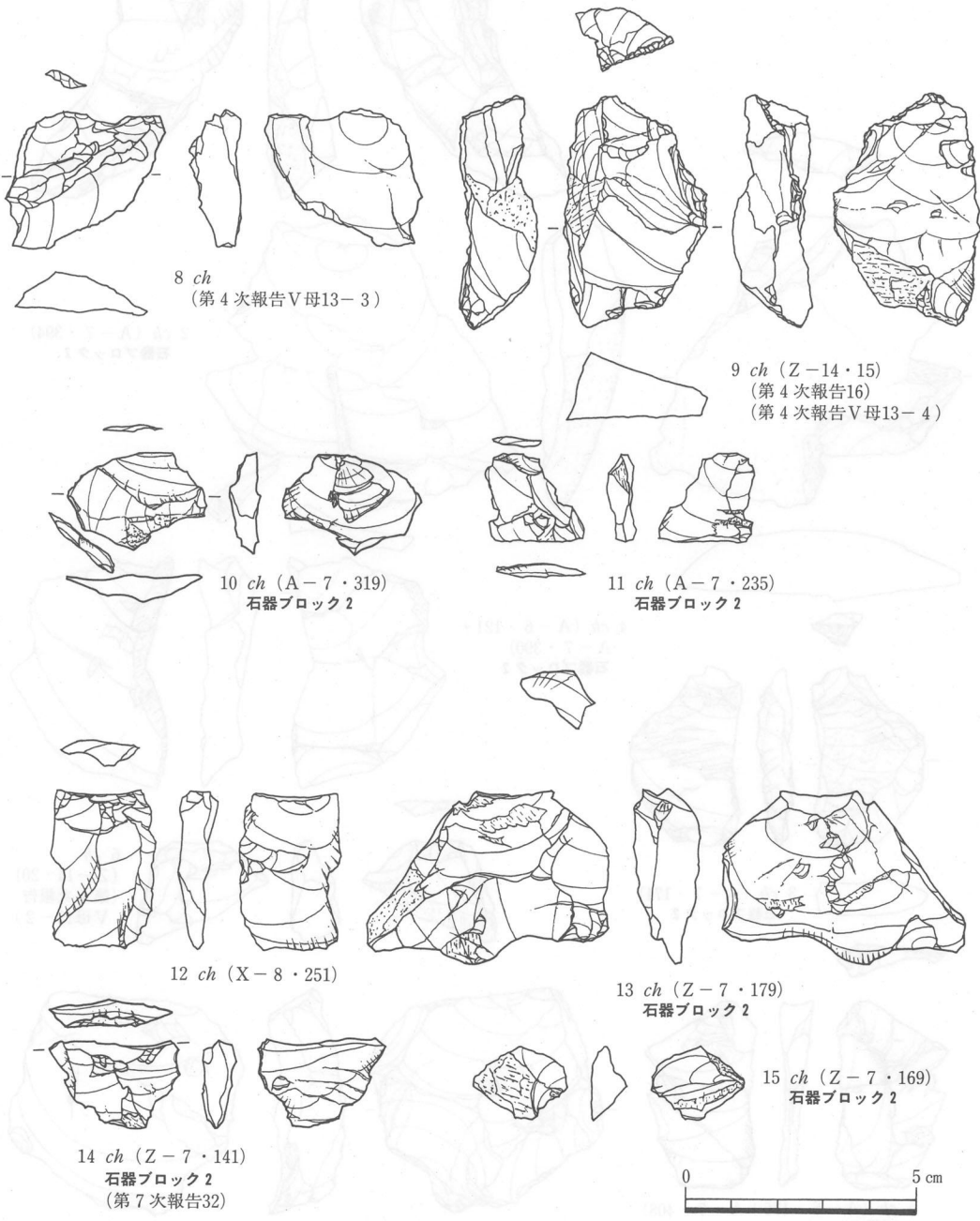
分布 総資料数は91点である(第117図)。第4次調査ではZ-13・14区を中心として分布することが明らかにされているが、今回の調査資料の追加によって、A-6～8・12・13区、B-

[接合1]



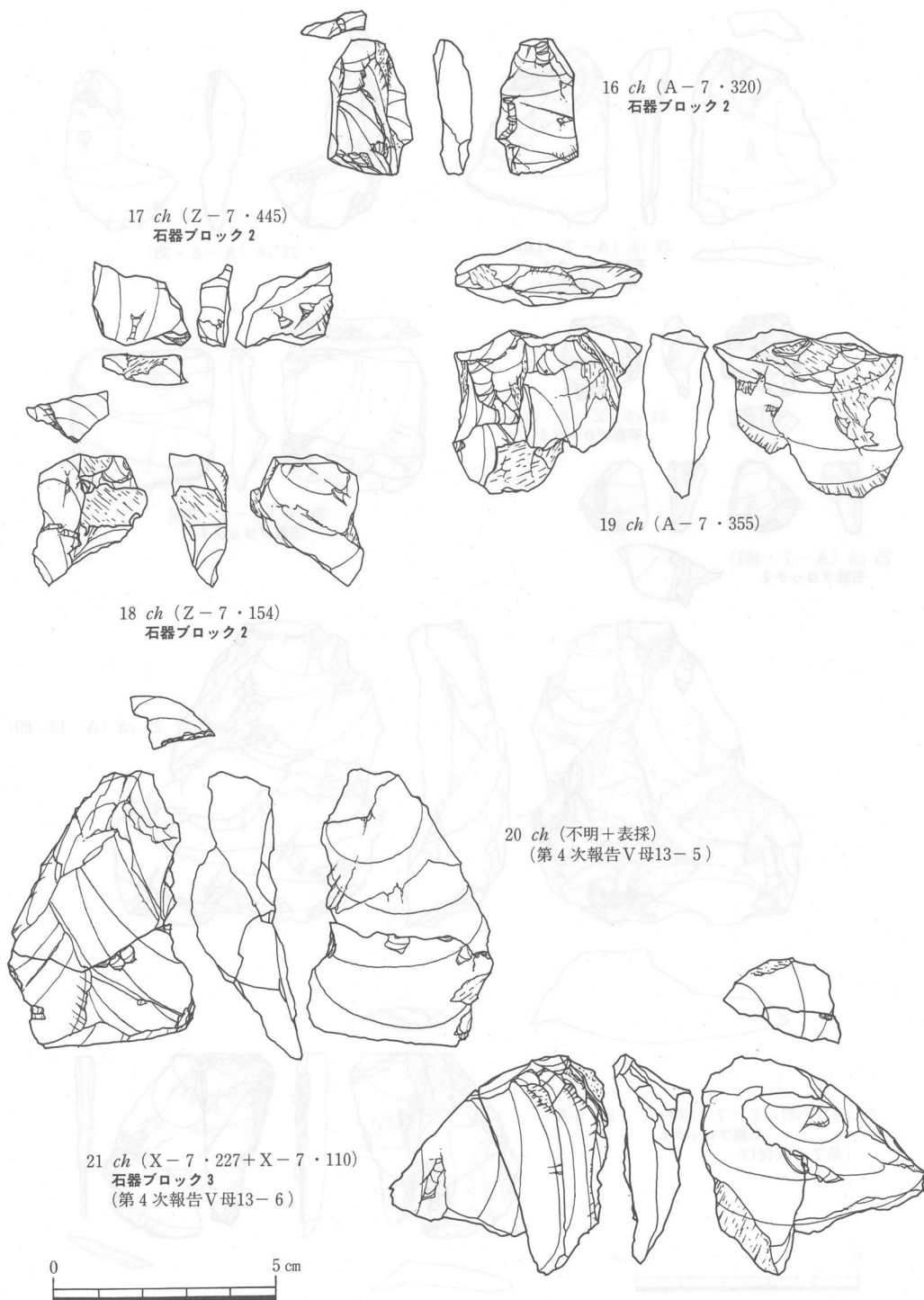
第110図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料9(1)(2/3)

第IV章 第VI層L文化層

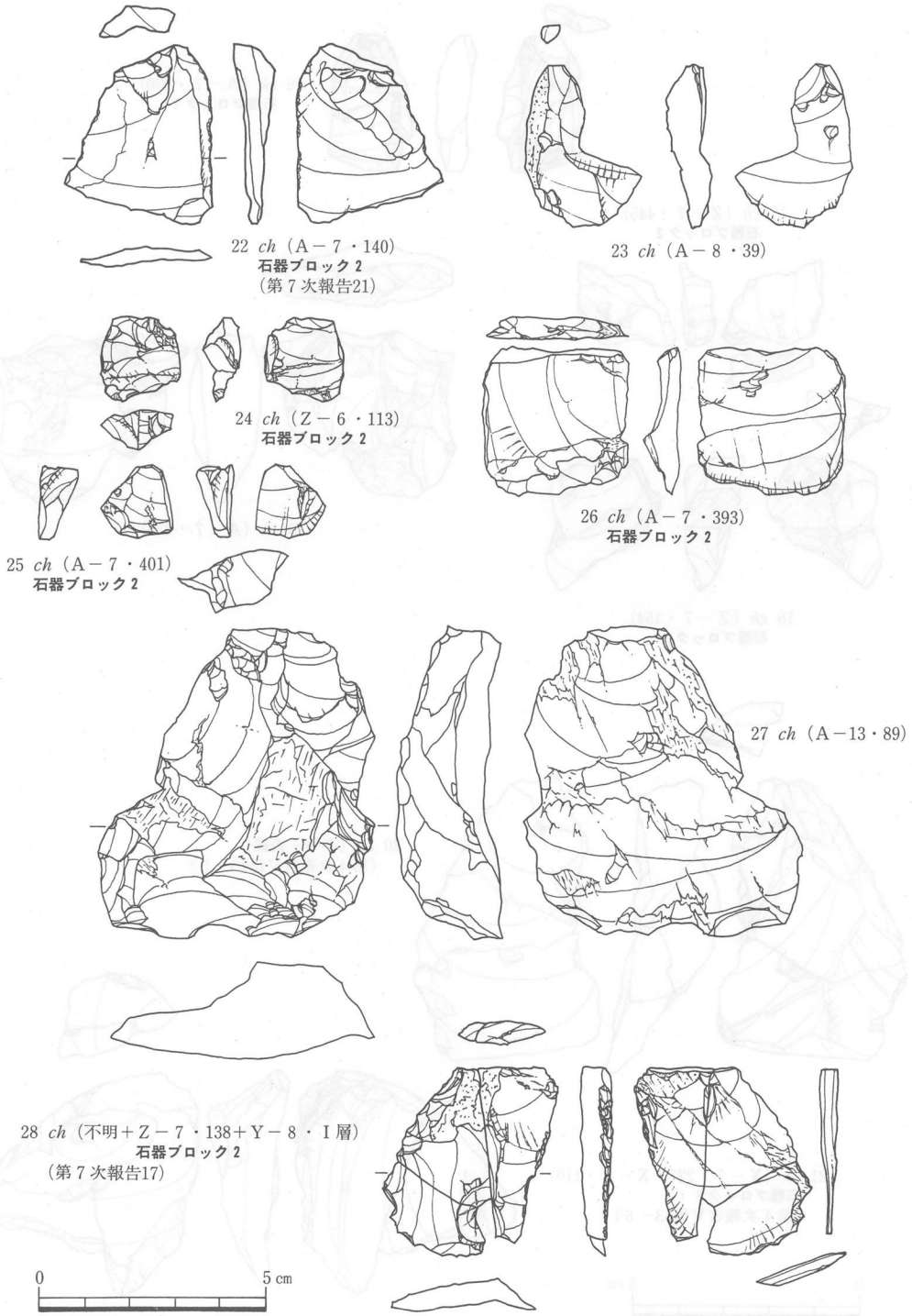


第111図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料9(2)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

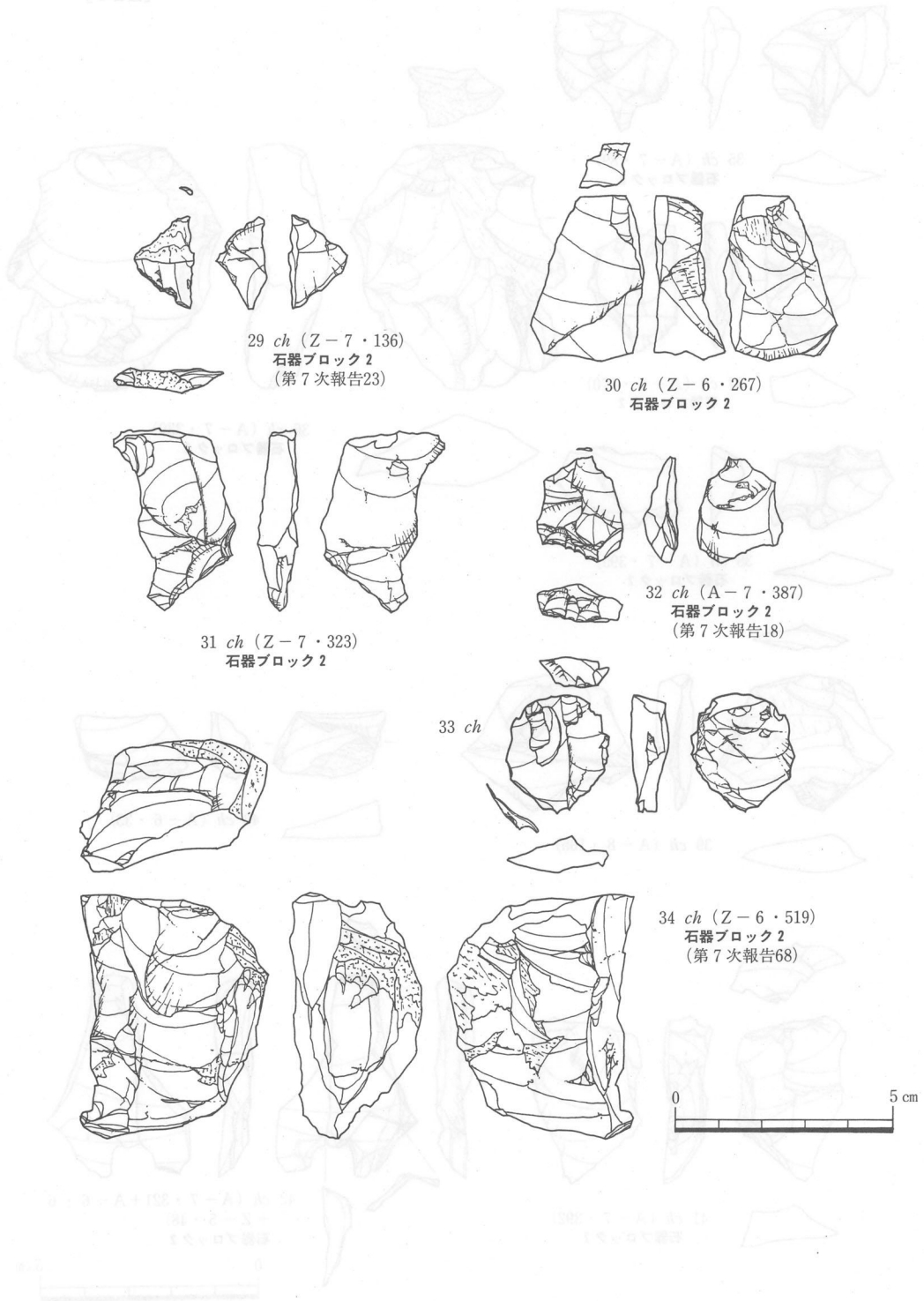


第112図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料9(3)(2/3)



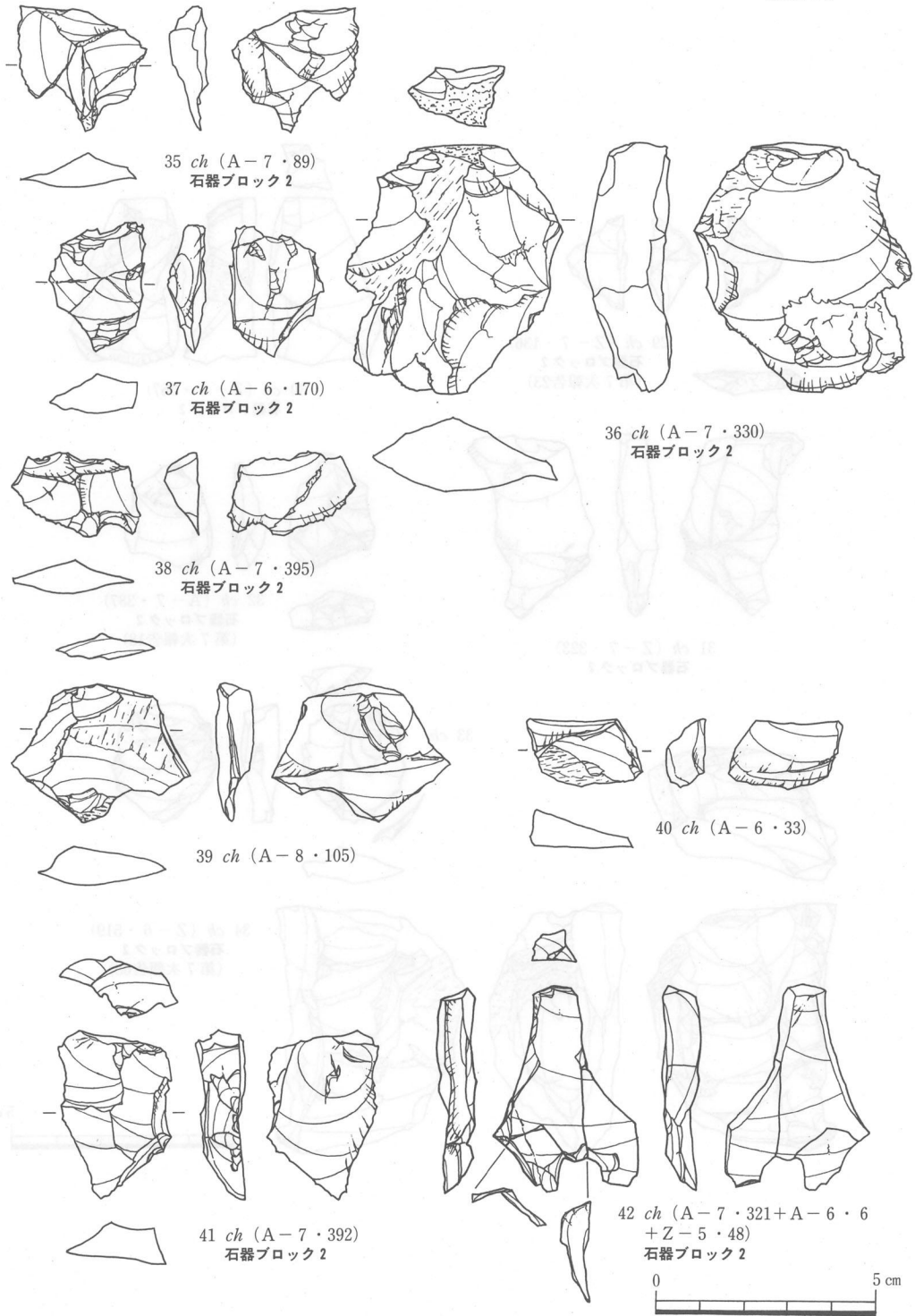
第113図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料9(4)(2/3)

【参考】



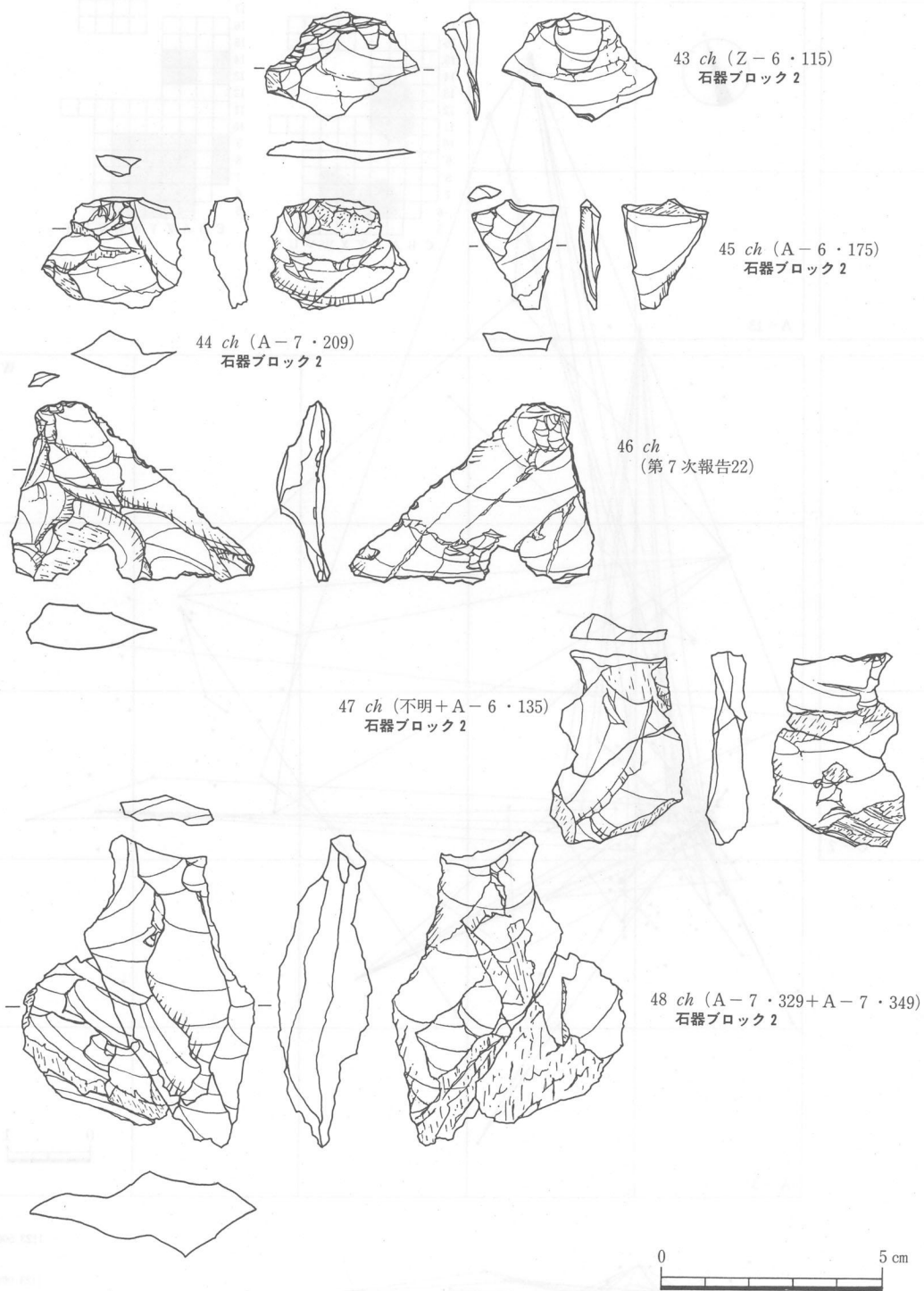
第114図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料9(5)(2/3)

[接合2]

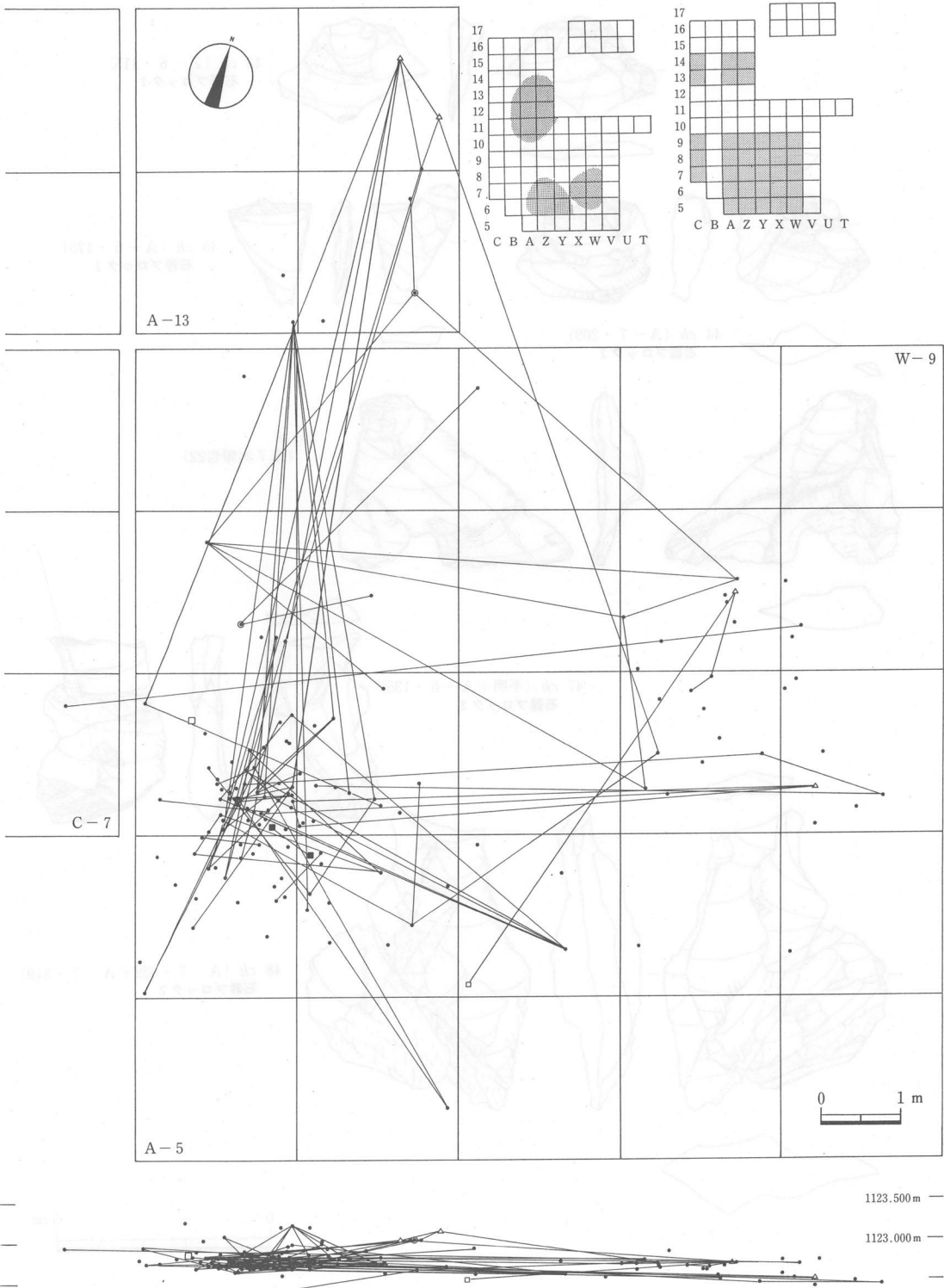


第115図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料9(6)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第116図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料9(7)(2/3)



第117圖 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料9：分布(1/80)

7・8区、C-7区、W・X-6～8区、Y-6・10区、Z-5～8・12～14区に分布が見られ、石器ブロック2の形成されているA・X～Z-6・7区と石器ブロック3の形成されるW・X-6～8区とに集中箇所が認められる点である。

剥片剥離工程を復元できる本母岩の分布が、今回確認された2ヶ所の石器ブロックと重複することから見て、これらの石器ブロックが剥片剥離の場であった可能性は高い。加えて、接合2の調整途上で破碎したと見られる挟入石器42が、石器ブロック2に含まれることや接合1の細部調整剥片、微細剥離痕を有する剥片の一部が石器ブロック2に含まれることから、石器製作と石器の使用も推察できよう。

また、すでに石器群の分布の節で記してあるように石器ブロック2の下部に第3号礫群と第4号礫群とが、石器ブロック3の下部に第5号礫群と第6号礫群とがあり、そのうち石器ブロック2と重複する第4号礫群に食い込むように接合1の石核34が出土していることを考慮すれば、礫群が剥片剥離に関わっている可能性をも指摘できよう。

第4次調査報告で、第V層文化層に帰属することを前提に石器製作の場を移動したようすが想定されているが、第VII層L文化層へ帰属文化層が変更され、かつ接合1により具体的な剥片剥離工程が復元された結果から見て、その評価・解釈は訂正する必要があるだろう。つまり細部調整剥片7や9を含む一部の剥片が、Z-14区に分布する状況は接合1に復元される剥片剥離工程の進行順序とは関わっておらず、むしろ石器ブロック2から持ち出された状況を想起させる。

(栗田一生)

(6) 母岩別資料10 (第118～122図)

石材 チャート。

石質 均質かつ緻密で脂肪光沢があり、節理構造を持つ。全体に翡翠色の色調を呈し、割口は貝殻状断口をなす。

素材 拳大の河原石を素材としている。

資料 挟入石器1点、細部調整剥片1点、微細剥離痕を有する剥片2点、石核4点、剥片11点の接合資料19点からなる。本接合資料は個体分割の後に剥片剥離を行ったものであり、以下に個体別に記載する。

【個体A】 1は分厚い剥片である。素材を分割した際の分割面が上面に残る。上面には微細な剥離痕が見られる。2は3の剥離に伴い剥落した小型の剥片である。1・2は背面が原礫面をなす。3は第1次調査で搔器として報告(小林・谷口編 1990)されたものであるが、石器の観察所見に基づいて挟入石器に訂正した。4は細部調整剥片である。小形な縦長剥片を素材とし、右側縁に腹面→背面方向に調整を加えている。5は長幅がほぼ同じである部厚い剥片で、背面に原礫面を残す。3・5はいずれも素材の分割面を打面としている。6は原礫面が残る剥片である。7はやや縦長の剥片である。8・9は節理に沿って折断した単設打面石核である。

8の下面と9の裏面が接合する。10は縦長剥片で、下部は折損している。11は下面を作業面とした単設打面石核である。

[個体B] 12は部厚い剥片で節理に沿って石核から剥離している。下端部右側に微細な剥離痕が見られる。14は縦長剥片である。14は13の腹面における節理による剥落で生じ、剥片剥離が行われたのは1回のみである。15は縦長剥片で剥片中央部で折断している。16は長幅がほぼ同じ剥片である。15・16はいずれも背面に個体分割の分割面を残す。17は小形の縦長剥片で背面には主要剥離面と同方向の加撃を示す剥離面が見られる。18は両設打面石核である。作業面は正面・左側面のみで裏面は原礫面をなす。左側面は上設打面のみから作業を行っている。正面は下設打面を用いているが、右方向からの剥離面を残すことから、90°打面転位していることがわかる。

本母岩別資料ではいずれの剥片・石核も頭部調整、打面調整は認められない。

接合資料と剥片剥離工程 接合資料19点は2個体（個体A・個体B）に分割されて行われた剥片剥離工程が復元される。個体Aは1～11の接合資料であり（第118図～第120図）、個体Bは12～18の接合資料である（第121図）。個体Aと個体Bは接合して、ほぼ原礫素材の状態にまで復元される。以下に個体別の剥片剥離工程と個体分割について記載する。

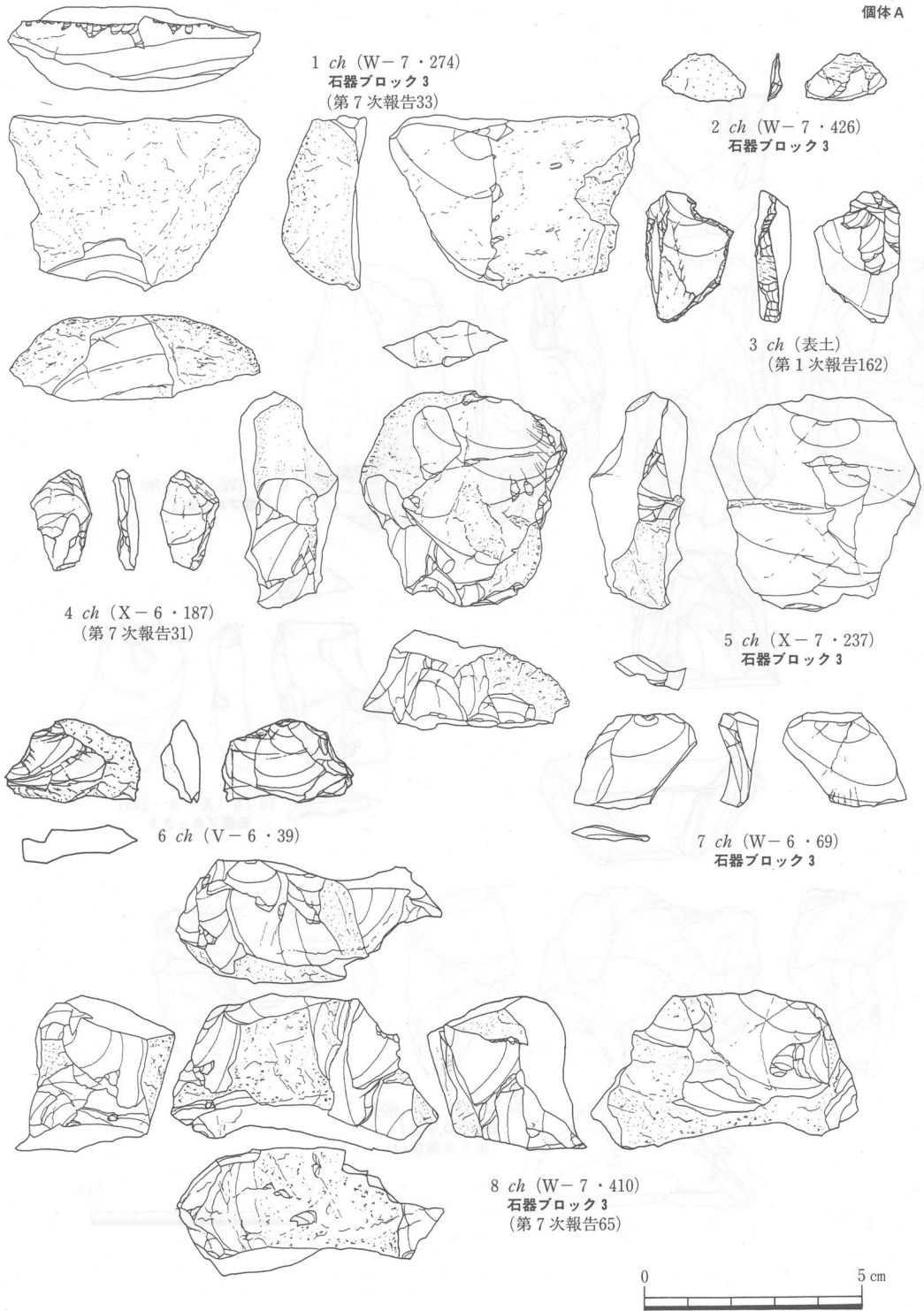
[個体A] 原礫素材である河原石を二分割した一方、ネガティブな分割面を有する方を用いて、剥片剥離を行っている。剥片1は分割の際の加撃によって生じている。その後、石核の整形を行っており、その結果が剥片3・5・6である。5は抉入石器に利用されている。剥片3の剥離により形成された打面を用い剥片7を含み、最低2回の打撃が加えられる。原礫面から加撃し、石核8+9と石核10に分割される。さらに節理に沿い、石核8と石核9が折断されているが、石核8・9ではその後剥片剥離作業は見られない。石核10は裏面を打面とし剥片剥離を行っている。最終的な剥離によって生じたのが剥片10である。

[個体B] 原礫素材である河原石を二分割した一方、個体Aとの分割面に対応するポジティブな分割面を有する方を用いての剥片剥離を行っている。個体Aとの分割面を作業面に用い、その他はほぼ原礫面を残す。

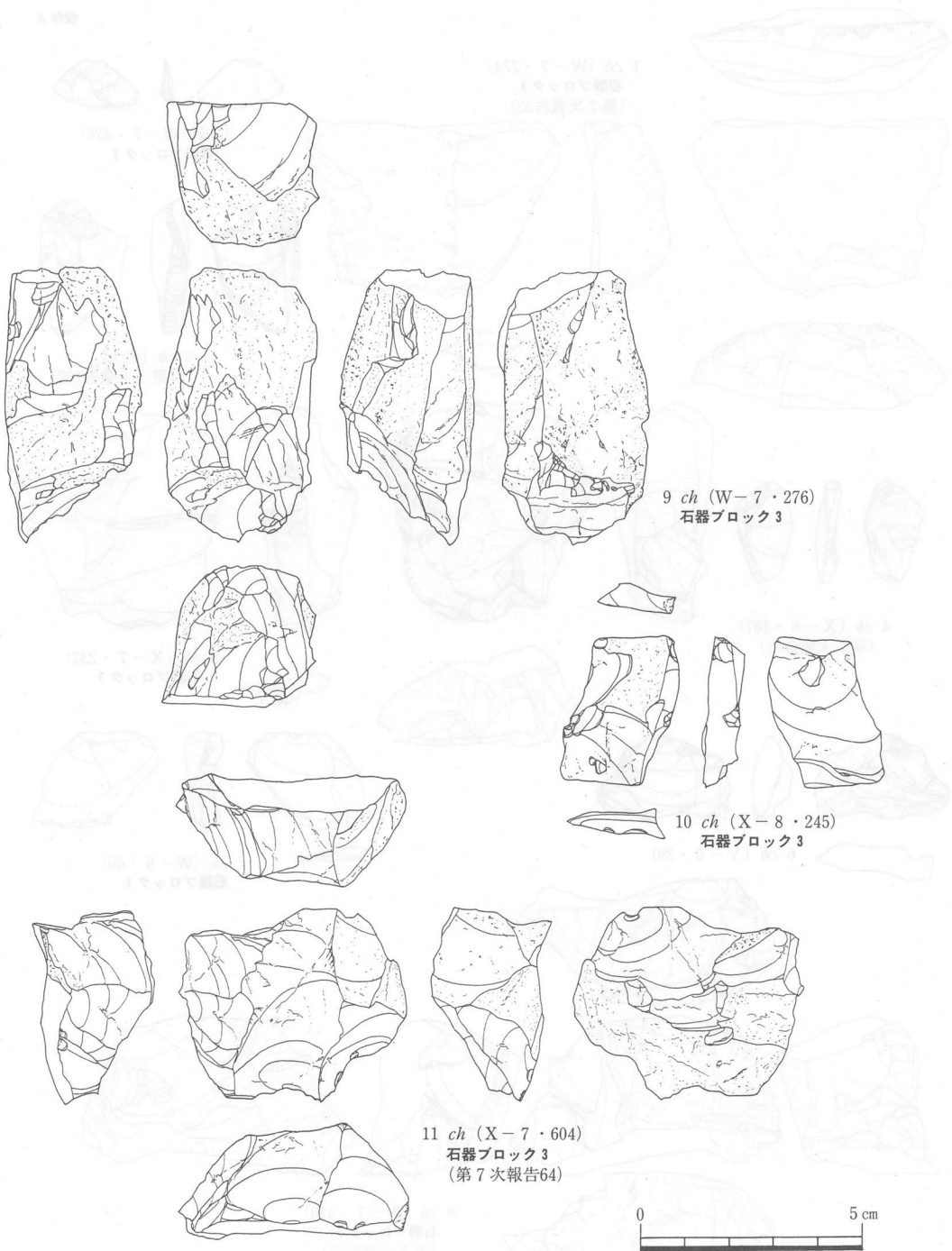
個体分割の際に節理面に沿って剥落した剥片12の剥離面を上設打面とし、下面に残存する原礫面を下設打面とする両設打面石核を用いている。上設打面からの加撃は、正面に残る剥離面と剥片13・14の剥離の2回のみである。下設打面からの加撃で15→16の順で剥片を作出し、その後90°打面転位し、右方向から剥片剥離を行っている。剥片17は右方向からの加撃で剥ぎ取られている。上設打面と下設打面の新旧関係は不明である。

[個体A+個体B] 個体Aの剥片3・5の上面、石核9の上面、石核11の左側面と、個体Bの剥片12・15の正面、剥片14の右側面が接合する。このような接合状態から原礫面を直接加撃して分割し、それぞれを石核として用いていることがわかる。

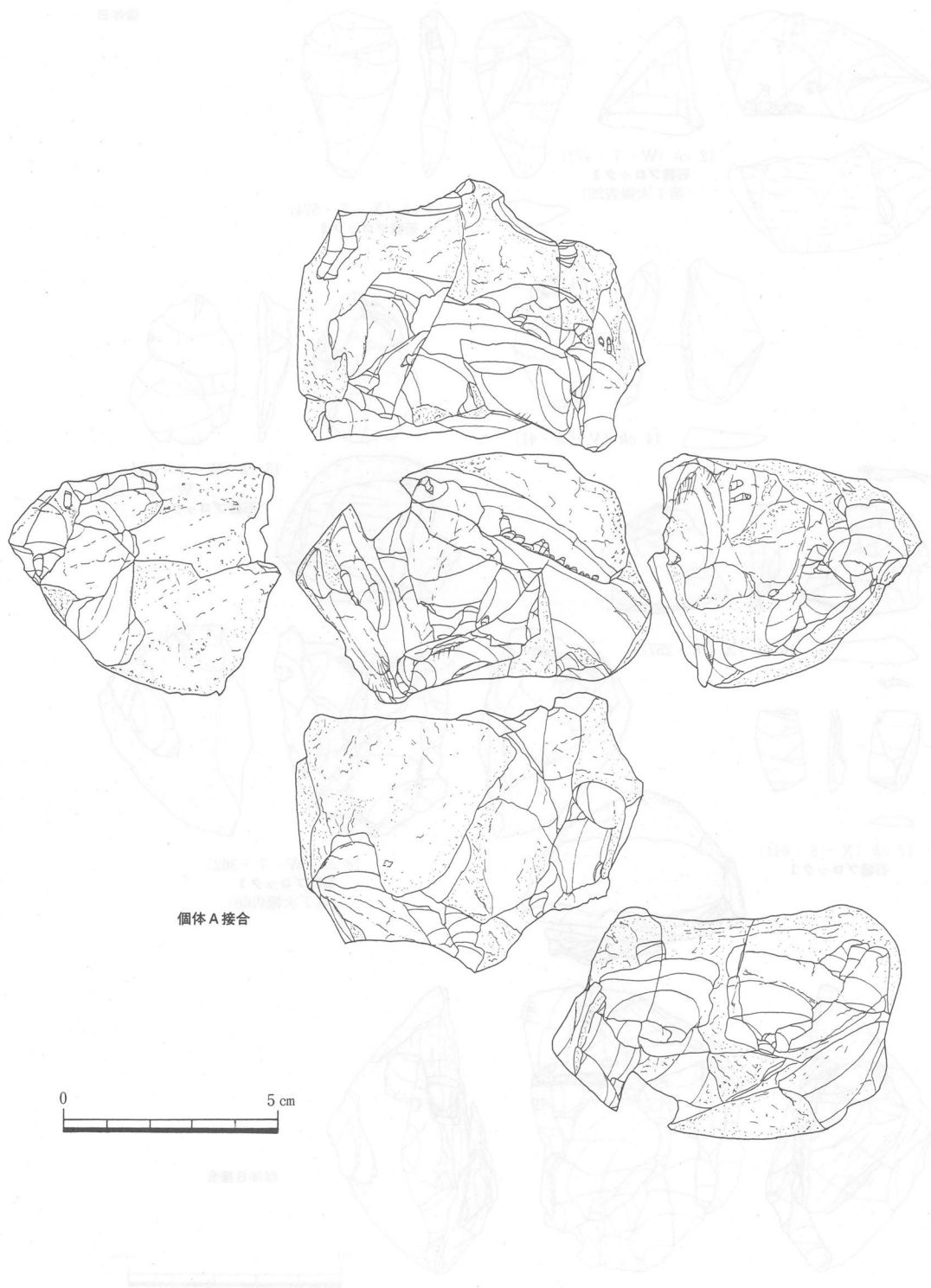
第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第118図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料10(1)(2/3)



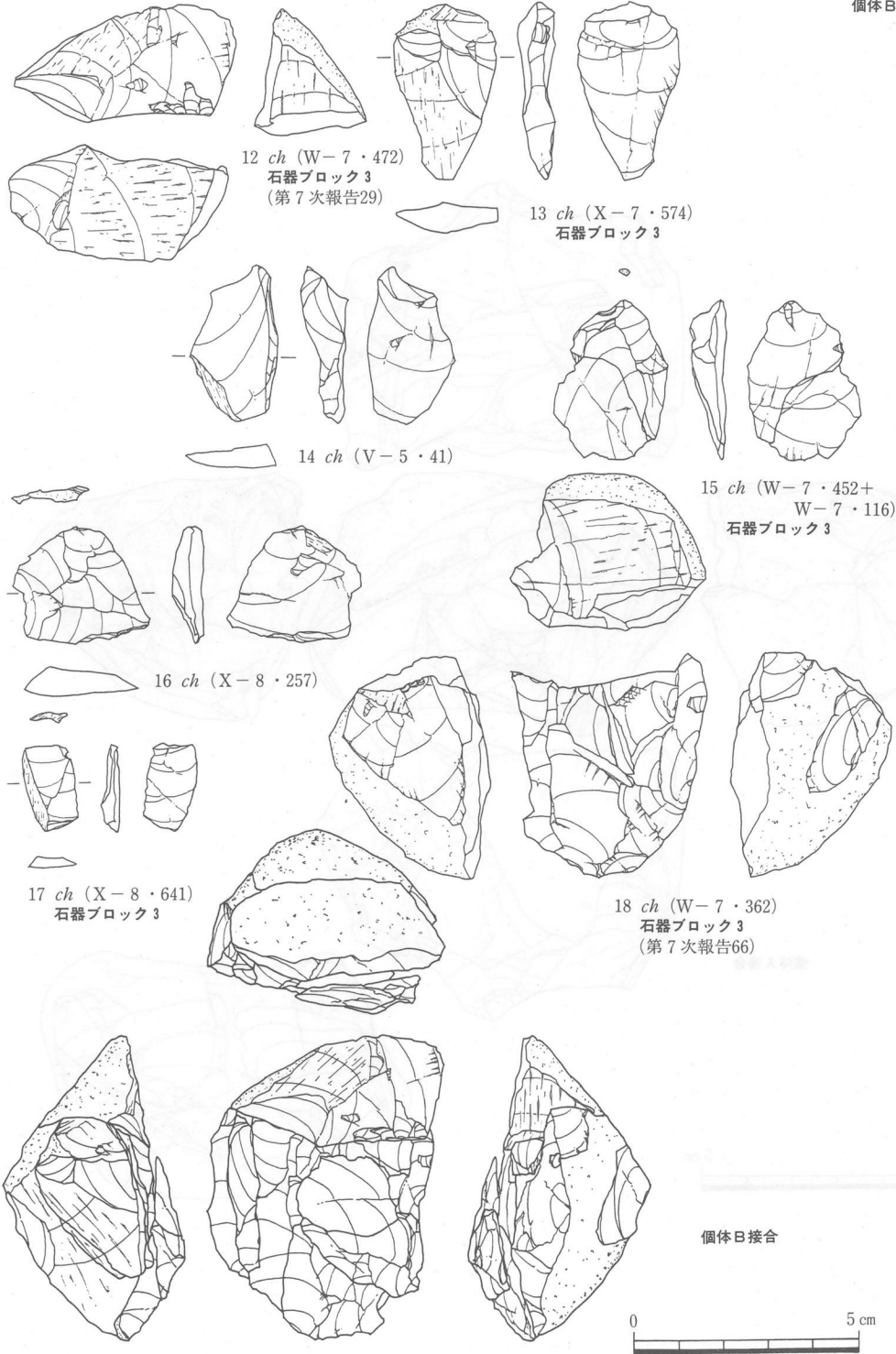
第119図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料10(2)(2/3)



第120図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料10(3)(2/3)

第IV章 第VI層L文化層

個体B



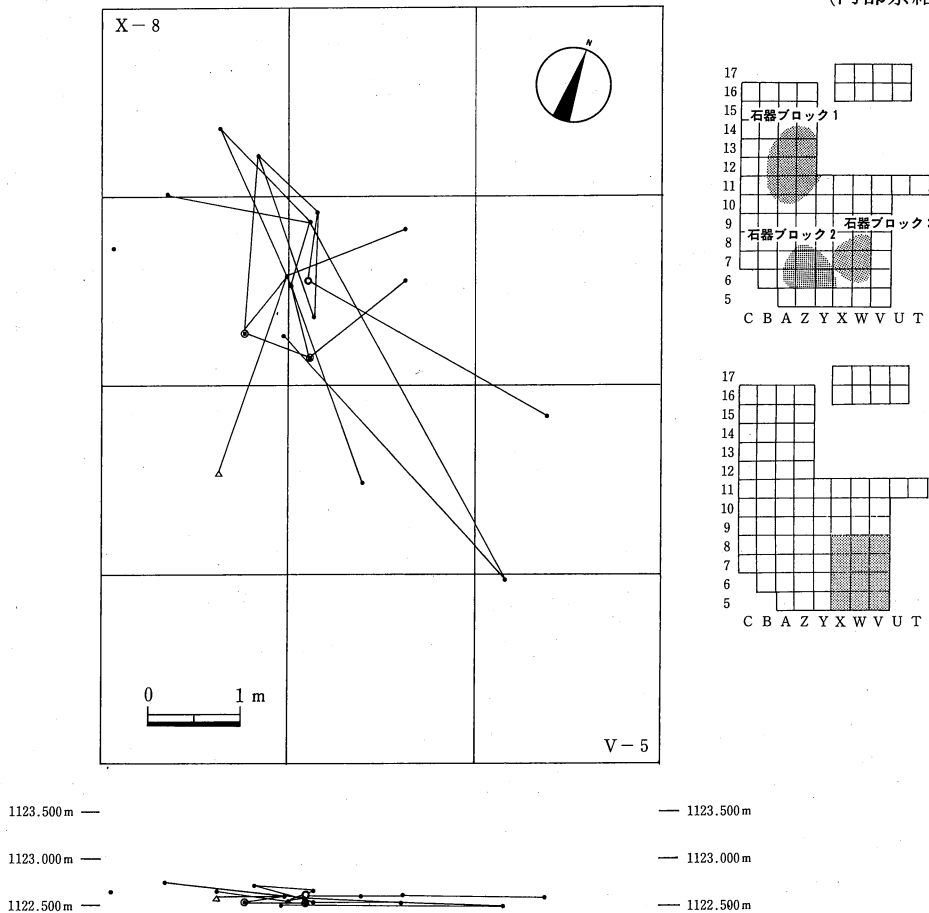
第121図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料10(4)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

分布 資料総数20点からなる（第122図）。石器ブロック3の形成されるV～X-5～8区に集中的な分布を示す。表土出土資料もあるが、素材礫を分割し、それぞれを用いて行った剥片剥離の工程が復元できる接合資料はほとんど石器ブロック3に含まれている。この点から素材の搬入から剥片剥離を経て、抉入石器3を代表とする石器の製作や使用に関わった場として、石器ブロック3を評価できる知見を提供している。

なお、本母岩別資料10は、第VI層L文化層の母岩別資料の中で、唯一石器ブロック3に限定的に分布するものである。たしかに母岩別資料1～5、8は石器ブロック1にのみ限定的に分布し、母岩別資料17は石器ブロック2にのみ限定して存在しているのであるが、一方で母岩別資料7、9、11、12、16のように2ヶ所の石器ブロックに分布する場合や、母岩別資料13～15、18～20のように2ヶ所の石器ブロックに分布する場合があって、石器ブロック相互の関連を示唆している。その中で本母岩別資料10のように、石器ブロック3に限定的にあつて、石器の製作と使用に関わる一連に資料がとりそろっており、注意される。

(阿部奈緒美)



第122図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料10：分布(1/80)

(7) 母岩別資料11 (第123~127図)

石材 チャート。

石質 縦横に節理が入り、部分的に節理面をもつ。色調は、上部、下部はほぼ青緑色、中央部は赤茶褐色を呈する。

素材 原礫面を有するラグビーボール状の河原石。

資料 石核3点、抉入石器1点、細部調整剥片1点、剥片57点があり、これらのうち接合資料32点、石核1点を図示したうえで記載する。

1~7は剥片である。8は縦長剥片を素材とした抉入石器である。抉入部は左側縁の中央部付近に腹面から背面方向に施されている。背面を構成する剥離面は、求心的な剥離を示している。打面は節理面を利用したものである。9は頭部に原礫面をもち、正面に90°転位し剥片剥離作業を行ったことを窺える。12も同様に背面の剥離面から、石核を側面調整したことがわかる。13は背面に上下二方向からの剥離面がみられる。14~19は剥片である。20は原礫面をもち、打面形成のために剥離された剥片であると思われる。21~25は剥片、27は接合していないが、剥片剥離工程の復元に基づいて、接合1に関わると判断した石核である。28と30は細部調整剥片である。いずれも端部に急斜度の調整が施されている。29は剥片で、端部が折損しているため、28と30と同様の細部調整が施されていたとしても確認できない。

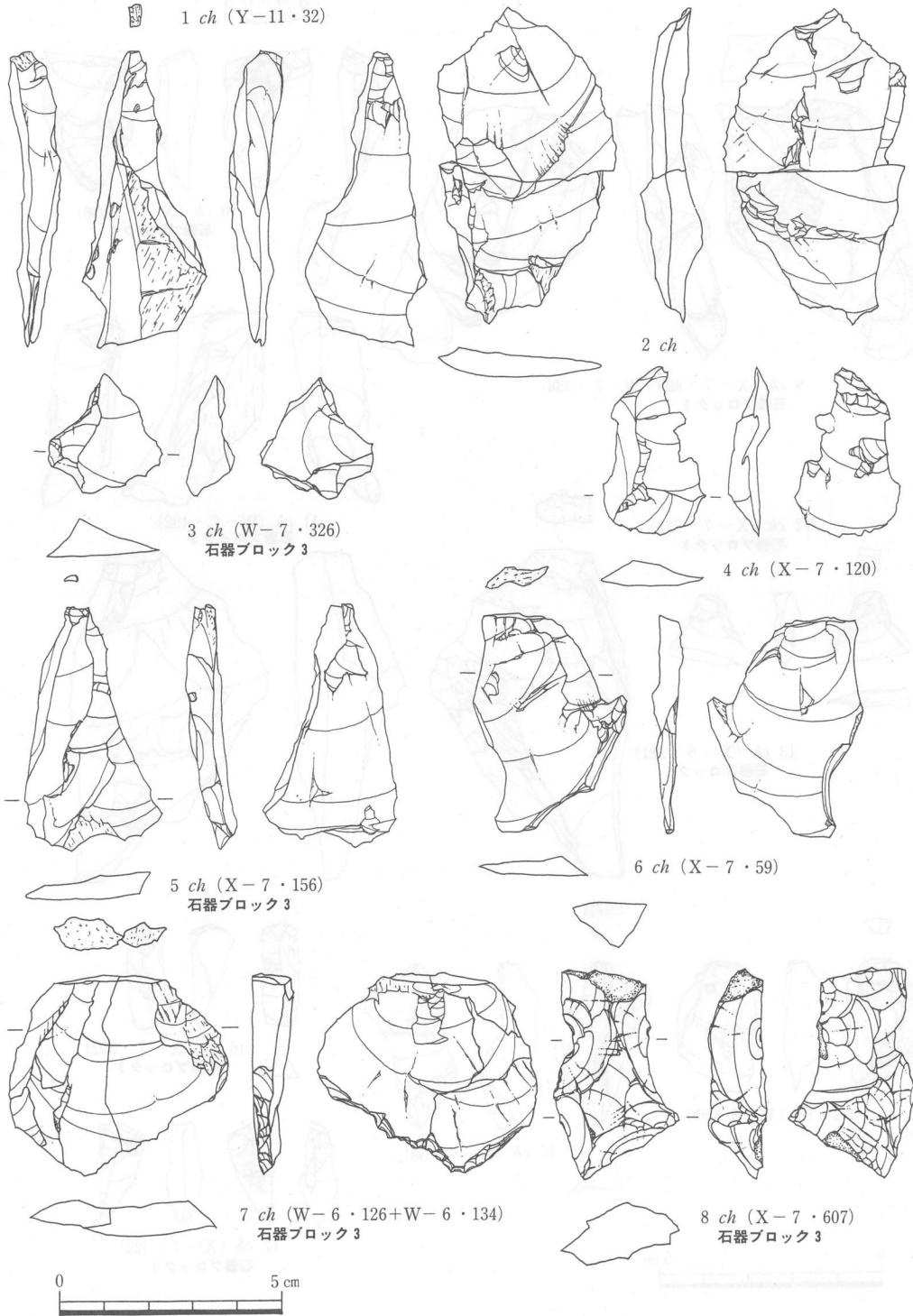
接合資料と剥片剥離工程 抉入石器8、剥片1~7、9~28の28点からなる接合1、細部調整剥片2点、剥片1点の3点からなる接合2がある。

[接合1] 打面は基本的に素材の長軸方向に設定される。最初に原礫面を打面として、1→2→5→6→7の順に連続的な剥片剥離を行う。そのうえで、打面を180°転位し、かつ作業面も180°転位して8を剥離している。さらに90°打面を転位し、かつ作業面を90°転位して、最初の作業面を打面とした石核の側面調整をしていることが、9及び12の背面の剥離面から判断される。また、9、12、11、13の背面の剥離面構成から判断して、その後に打面を90°転位し、かつ作業面も90°転位して、反対側の石核の側面調整をしている。そのうえで最初の打面を用いて9を剥離する。次に180°打面転位し、作業面を固定して10を剥離するが、その際に11も同時割れで剥離している。また、90°打面転位して12、13、14+15、16+17+18が剥離される。14+15、16+17+18はそれぞれ剥離に際して節理に沿って破碎したもので、特に16+17+18は頭部が縦割れを起こした結果、三分割してしまっている。

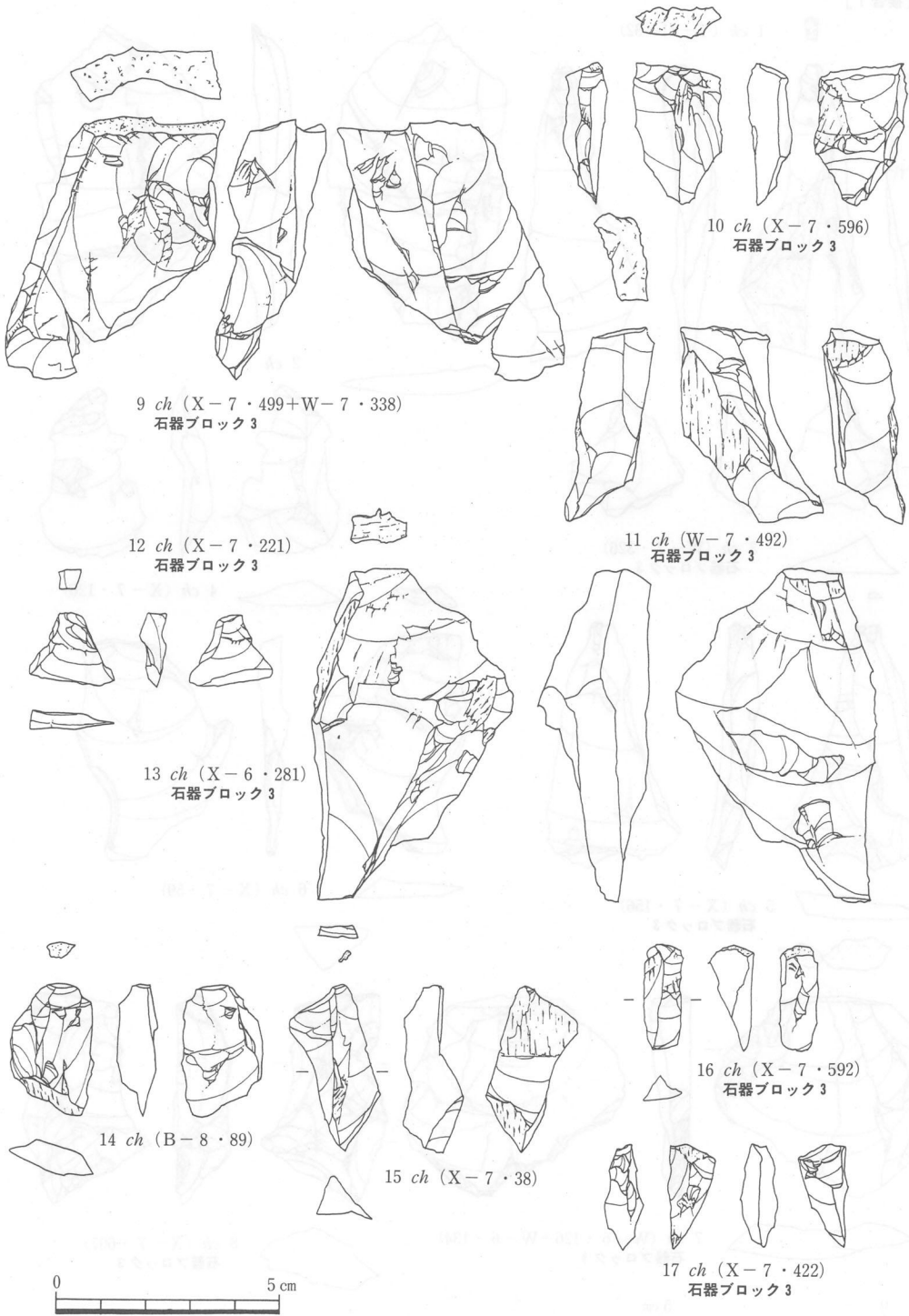
19は8を剥離した打面と同じく原礫面を加撃したものである。そして、最初の作業面に90°転位して、石核を回転させるように加撃部を側方に90°づつ動かしながら20、21、22を剥離する。このようにして形成された打面から、連続的に○→○→24→23→○→25(○は未発見の剥片を示す。)の剥片剥離をする。

接合1では、恰もサイコロを転がすように90°単位に加撃部を変えながら、頻繁に打面形成を

[接合1]

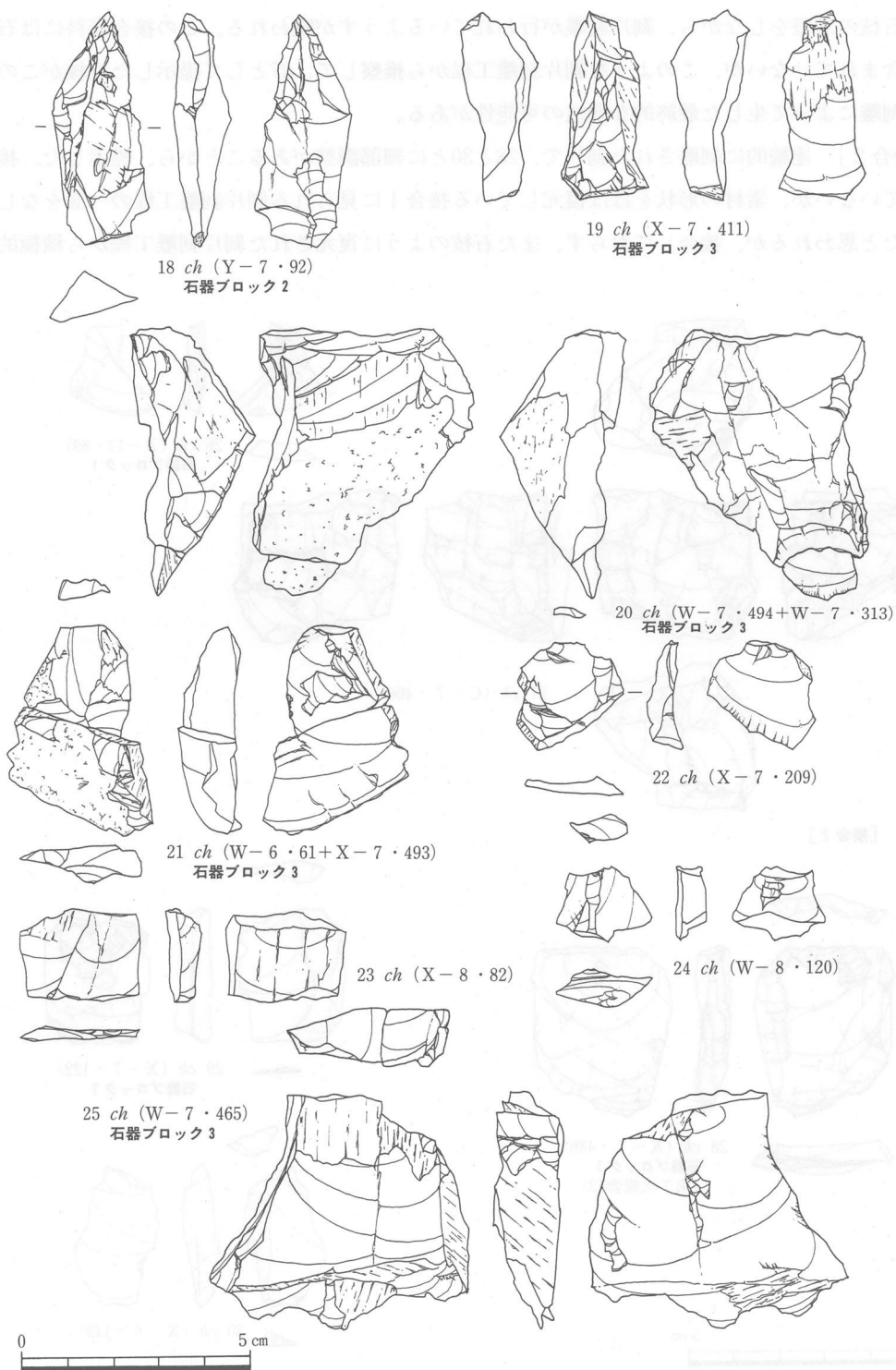


第123図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料11(1)(2/3)



第124図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料11(2)(2/3)

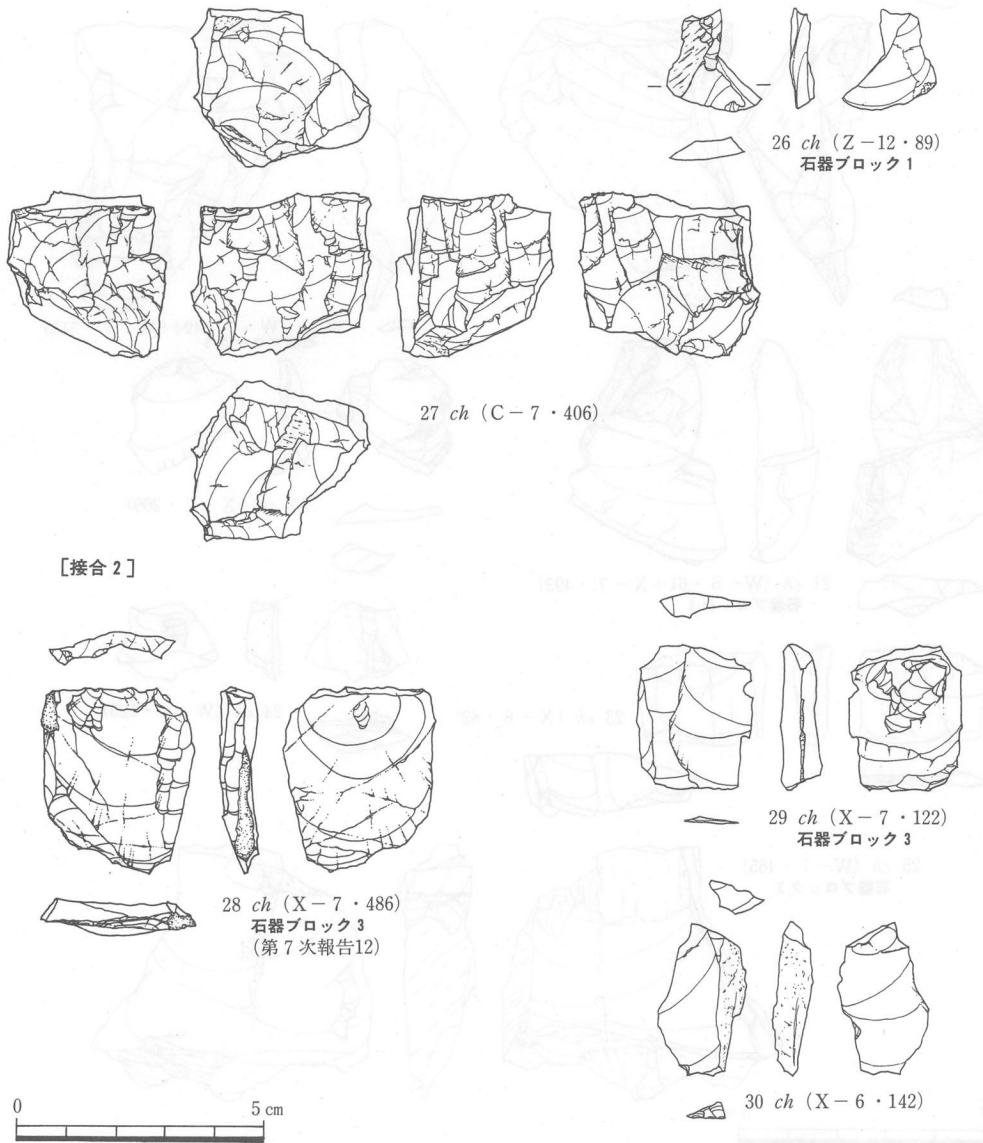
第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第125図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料11(3)(2/3)

含む石核の調整をしながら、剥片剥離が行われているようすが窺われる。この接合資料には石核が含まれていないが、このような剥片剥離工程から推察して、27として提示した石核がこの剥片剥離によって生じた最終的な残核の可能性がある。

〔接合2〕 連続的に剥離された剥片で、28と30とに細部調整があることから、提示した。接合していないが、素材の形状をほぼ復元している接合1に見られる剥片剥離工程の一部をなしていたと思われるが、接合しておらず、また石核のように復元された剥片剥離工程から積極的

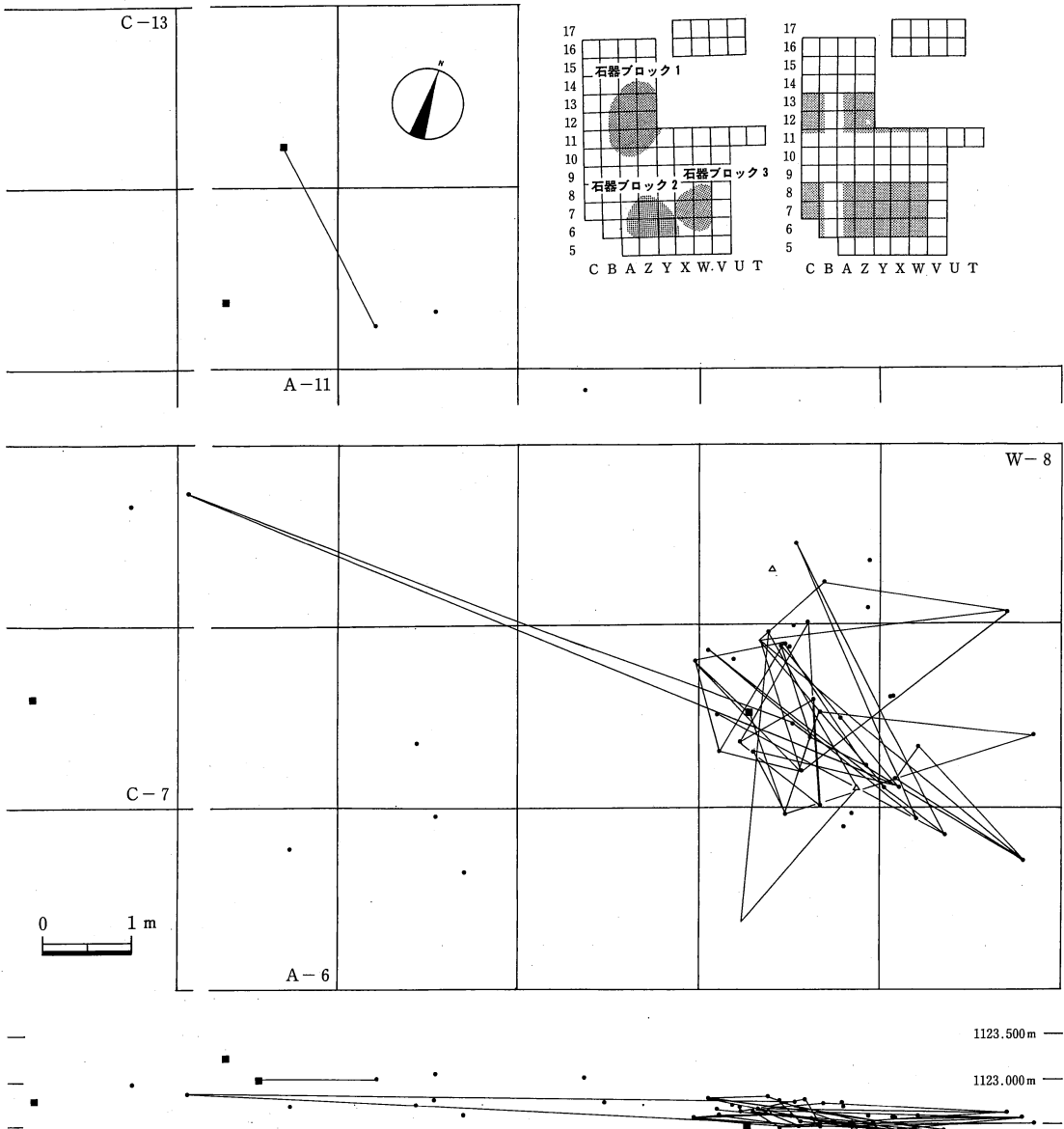


第126図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料11(4)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

に接合1に含まれることが判断できなかったので、接合2として別に提示した。

分布 資料の総点数は62点である。A～C、W～Z-6～13区にかけて分布しており、第VI層L文化層に把握された3ヶ所の石器ブロックそれぞれを構成している。特に石器ブロック3の形成されているW・X-6～8区に集中しており、石器ブロックの形成と場の性格を示唆する母岩別資料といえよう。前述の抉入石器8や細部調整剥片28・30を含む剥片剥離工程の復元できる接合資料は、ほぼすべて石器ブロック3に集中しており、この場における石器の製作と



第127図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料11：分布(1/80)

使用を推定させる。その一方で、この剥片剥離工程の中でも中盤に位置する剥片14がB-8区から出土しており、石器ブロック3から遊離して点で意図的な石器の持ち運びが窺われる点や、接合していないがこの剥片剥離工程に伴う残核と目せる石核27は、C-7区から出土であって、他の資料とは分布の異なっている点に注意される。

(宮下治枝)

(8) 母岩別資料12 (第128~130図)

石材 チャート。

石質 節理が多く見られるものの緻密かつ均質で、割口は貝殻状断口をなす。脂肪光沢を持ち色調は全体に青緑色を呈する。

素材 資料に残る平坦な原礫面から角礫を素材として用いたことが想定される。

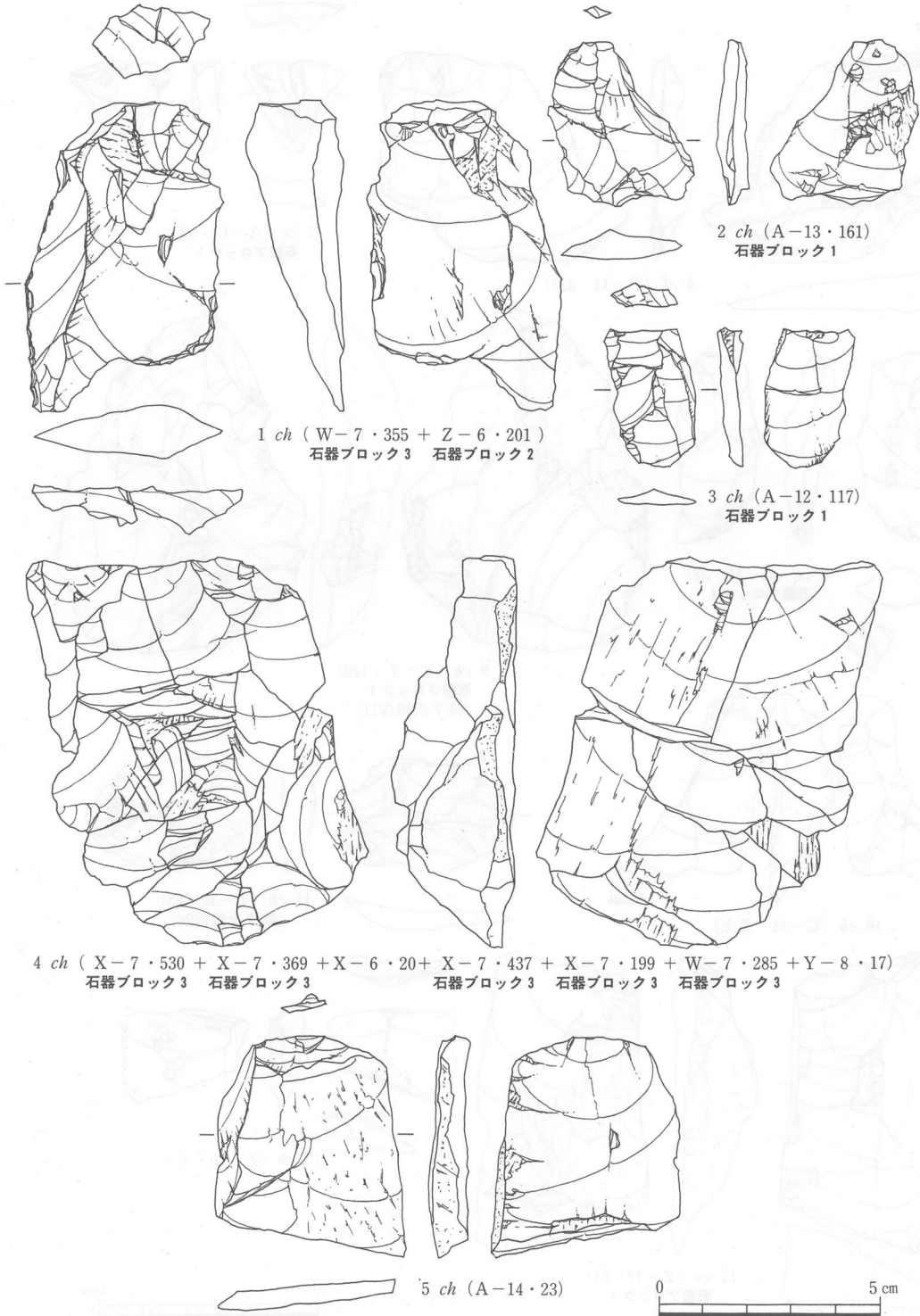
資料 細部調整剥片1点、微細剥離痕を有する剥片3点、剥片16点の20点からなる接合資料を図示した。1は部厚い縦長剥片である。左側縁および右側縁から下端部にかけて微細な剥離痕が認められる。末端が破碎しており、小片が接合している。2・3は縦長剥片である。いずれも背面を構成する剥離面は腹面と同方向から加撃している。6は不定形剥片である。背面には横方向からの剥離面が見られ、90°打面転位を示している。7は小形の剥片で、頭部・右側面は折損している。8は縦長剥片である。比較的厚みがあり背面には同方向からの加撃を示す剥離面が残る。9は比較的厚みのある大形の縦長剥片に調整を加えた細部調整剥片である。10は不定形剥片で、背面を構成する剥離面は対向する二方向からの加撃を示す。11は不定形な剥片である。9の右側縁裏面側から作出された剥片で、上部に微細な剥離痕が認められる。12は裏面に大きく節理面を残す部厚い不定形な剥片である。13は頭部・下部・右側縁が腹面→背面の同一方向に折断している。これらには打面調整や頭部調整などの剥片剥離に先立つ処理が認められない。

接合資料と剥片剥離工程 細部調整剥片9、微細剥離痕を有する剥片1・7、剥片2~8・10~13からなる。本母岩別資料は石核を伴わないが、上面のみを打面をした単設打面石核を用いた剥片剥離工程が想定される。

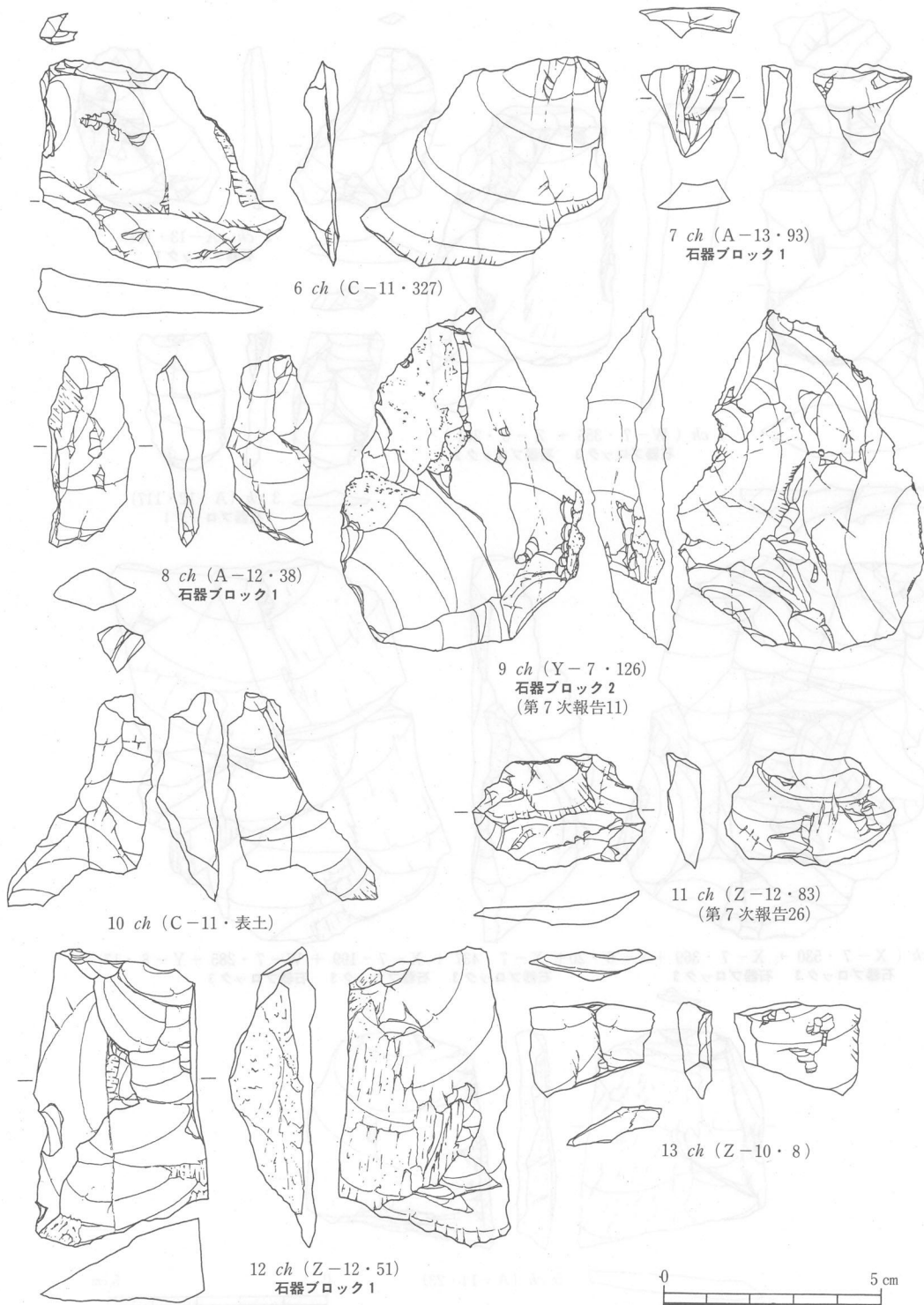
角礫を素材として用い、剥片4・5・12の右側面に残る原礫面から加撃し、打面形成を行ったと思われる。形成された打面に加撃し、剥片1~5を作出している。一旦、右方向に90°打面転位するが剥片6の剥離後、再び上面を打面としている。7の剥離後、右方向から加撃し、打面再生を行っている。剥片8・10はこの際に生じた打面再生剥片である。剥片7は剥片8の下端に接合し、8は剥片10の背面に接合する。打面再生後、剥片剥離作業は再開され、剥片9・12・13が剥離される。9からはさらに11が剥離されている。

剥片1と剥片2の新旧関係は明らかではないが、2→3→4→5→90°打面転位→6→90°打面転位→7→8(打面再生)→10(打面再生)→9→12→13の剥片剥離工程が復元される。

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

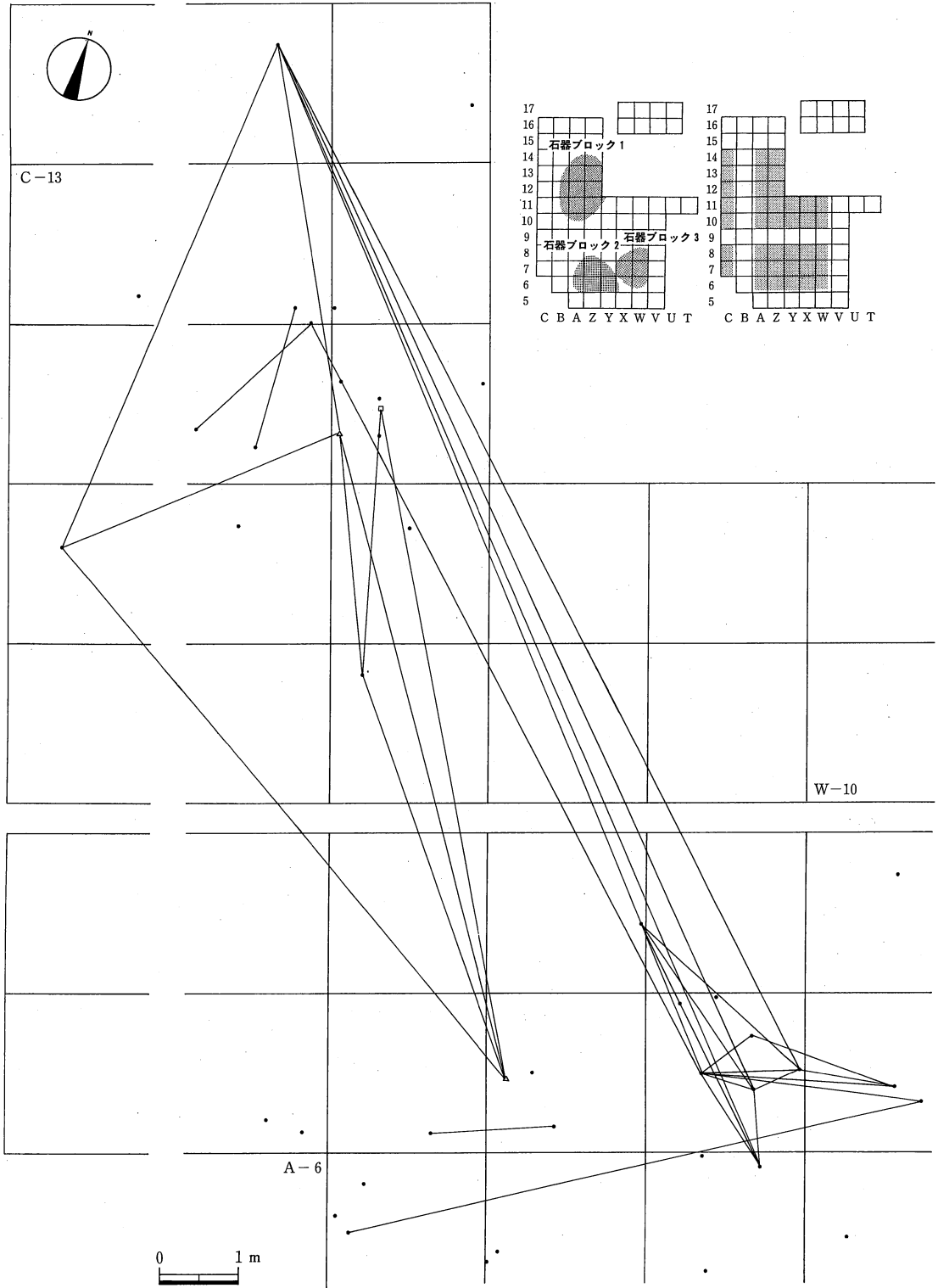


第128図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料12(1)(2/3)



第129図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料12(2)(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第130図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料12：分布(1/80)

分布 資料総数42点からなる。W～C-6～14区の広範囲にわたって分布し、第VI層L文化層に把握された3か所の石器ブロックそれぞれを構成しており、当該文化層へ帰属させる妥当性を与えている。

剥片剥離工程の復元し得る接合資料それぞれの3ヶ所の石器ブロックにまたがる分布から、その剥片剥離工程の進捗と関わって3か所の石器ブロックそれぞれに分布している状態、すなわち、石器ブロック2か石器ブロック3→石器ブロック1→石器ブロック3→石器ブロック1→石器ブロック2→石器ブロック1という具体的な剥片剥離の場の移動と見ることも、剥片剥離工程の進捗に関わらずに、むしろ使用に関わって3か所の石器ブロックそれぞれに分布している状態、すなわち、具体的な剥片剥離の場としての石器ブロック1周辺と、そこから持ち出されたもの、2つに折れた細部調整剥片1（石器ブロック2と石器ブロック3）、破碎した剥片3（石器ブロック3）、微細剥離痕を有する剥片9（石器ブロック2）など、と見ることも可能であり、どちらか一方の状態を採用する根拠には乏しい。

(阿部奈緒美)

(9) 母岩別資料13 (第132～135図)

石材 チャート。

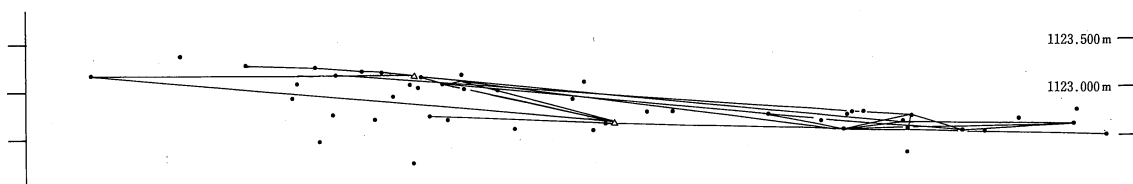
石質 石材の所々に節理が入っているものの、石質は均質かつ緻密である。割れ口は貝殻状断面を呈す。色調は黒色ならびに白灰色である。

素材 4つの接合資料があるが、相互に接合しないため素材の形状を把握できない。

資料 石核4点、槍先形尖頭器1点、搔器1点、細部調整剥片1点、剥片・碎片72点が含まれる。このうち、4つの接合資料を構成するものを図示した。

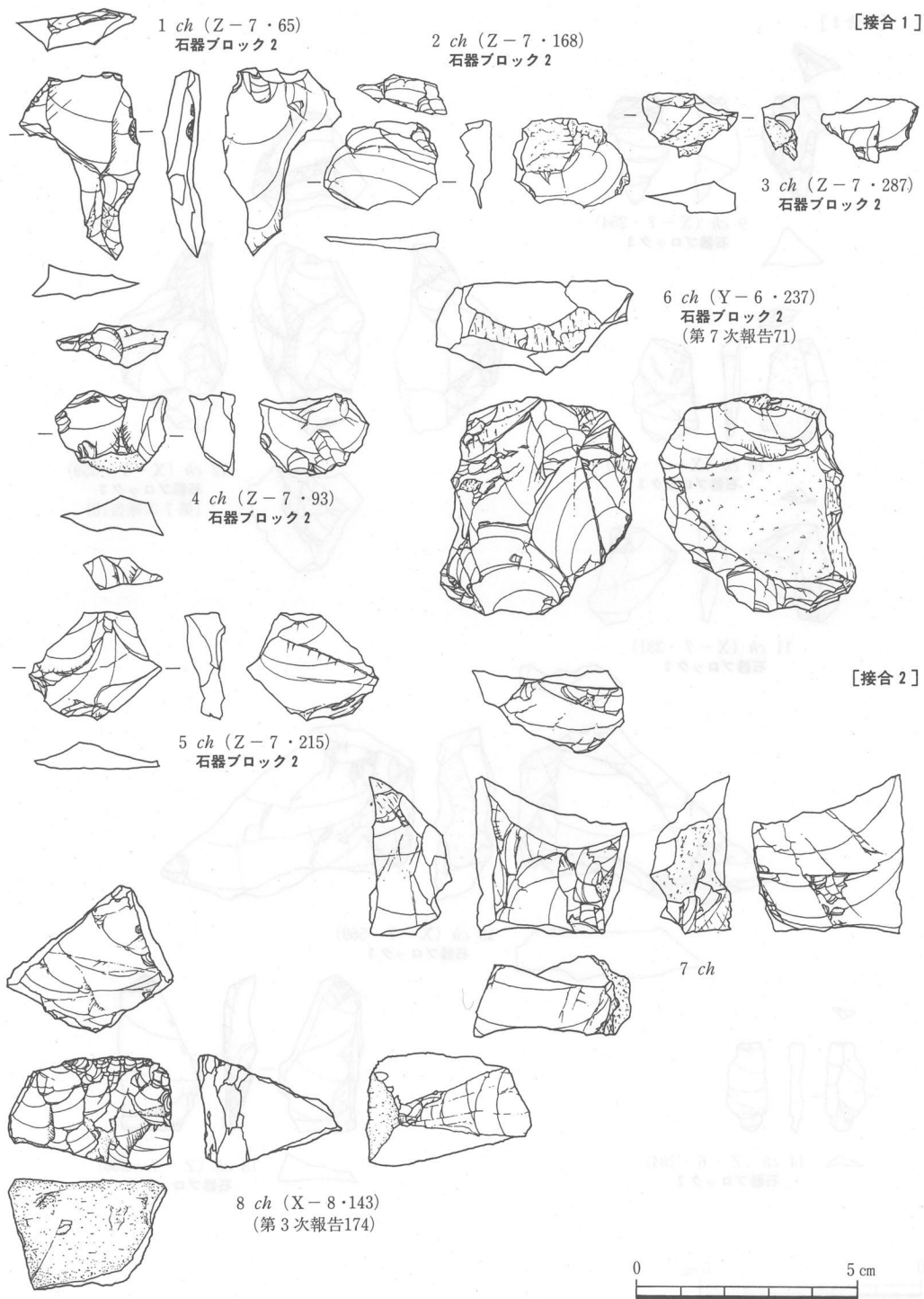
[接合1] 1は縦長剥片である。左下部が節理によって背面→腹面に折損している。2～5も剥片である。6は石核である。正面ならびに裏面に作業面を持つ。はじめに正面を作業面とし、裏面を打面として不定形剥片を剥離している。その後、裏面を作業面とし、再び剥離を行っている。裏面には大きく原礫面が残されている。

[接合2] 6は剥片である。7は第3次調査報告(永峯・谷口編 1993)に掲載されている石核である。単設打面石核の頂部を剥離した打面再生の可能性がある。右側面は平坦な節理面である。打面は後方から剥離された単一の剥離面で、打面調整は行われていない。



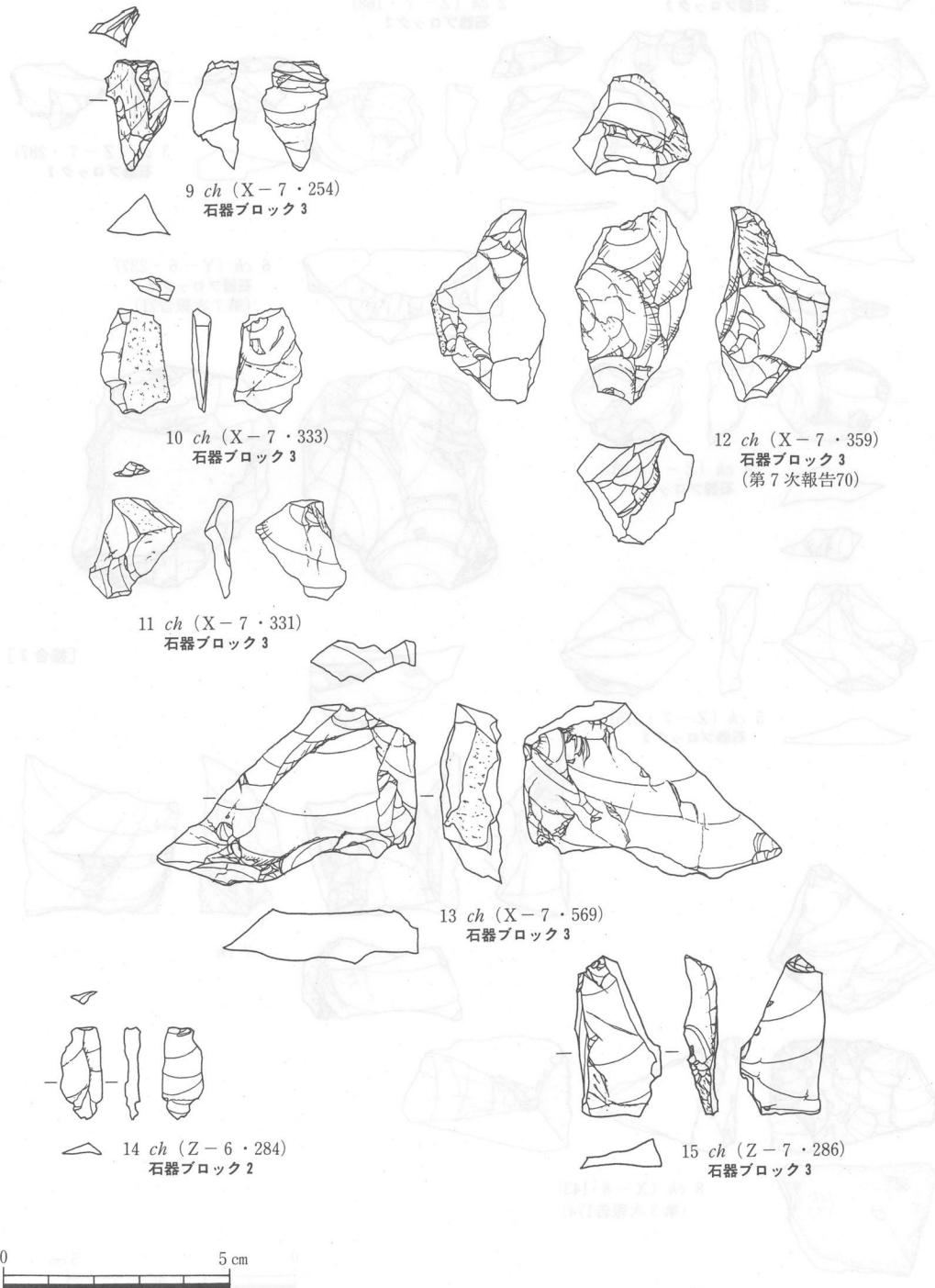
第131図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料12: 分布(1/80)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第132図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料13(1)(2/3)

[接合 3]

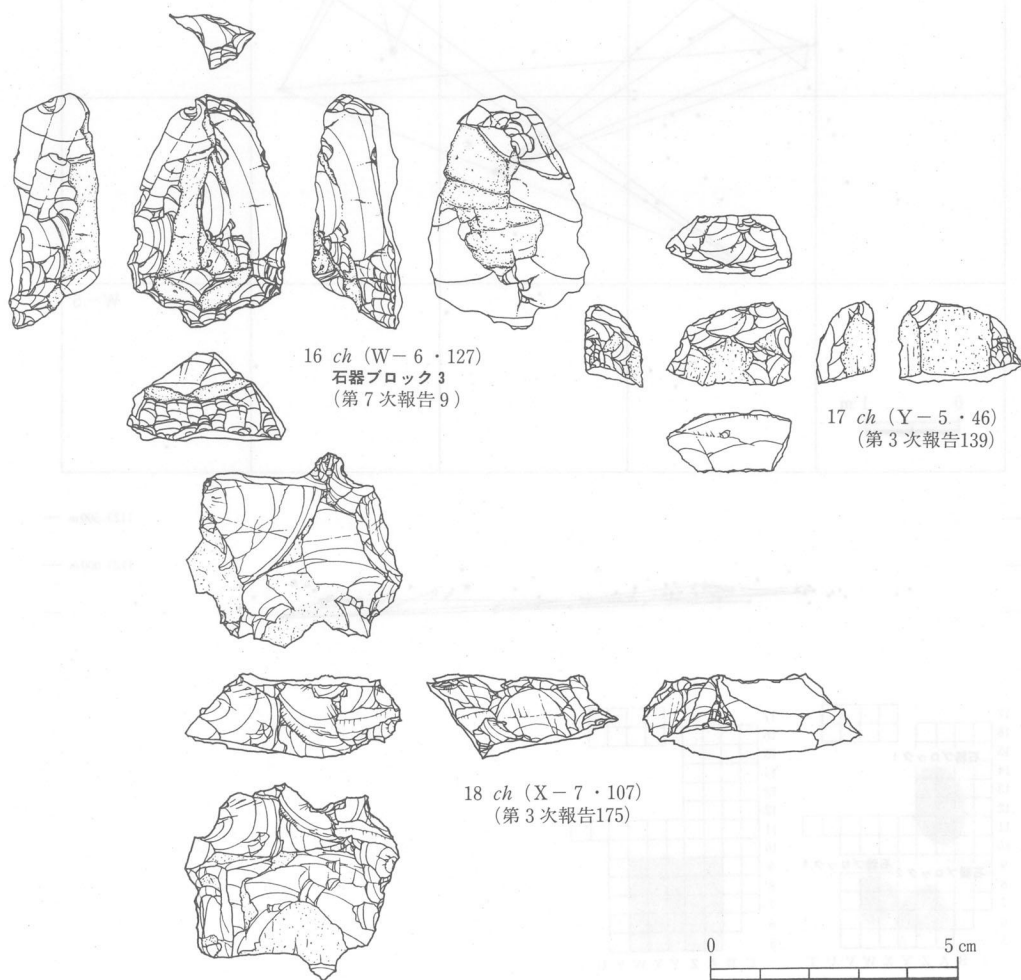


第133図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料13(2)(2/3)

[接合3] 8・9・10・13・14は剥片である。12は本資料の中では比較的大きい横長剥片である。右側面に節理面が残っている。11は複設打面の石核である。作業面は正面に位置し、剥片剥離を行っている。両側縁また上下両面に石核整形の調整が行われている。

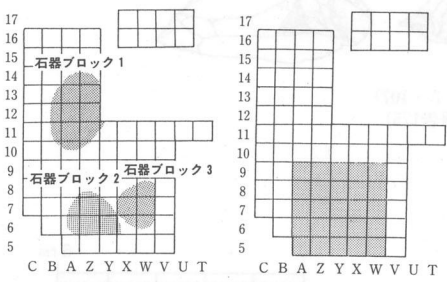
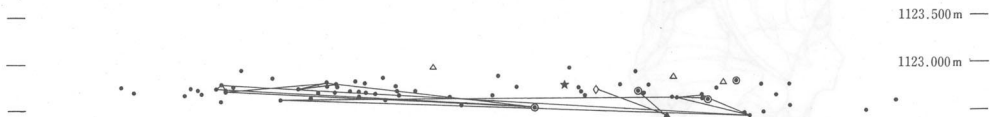
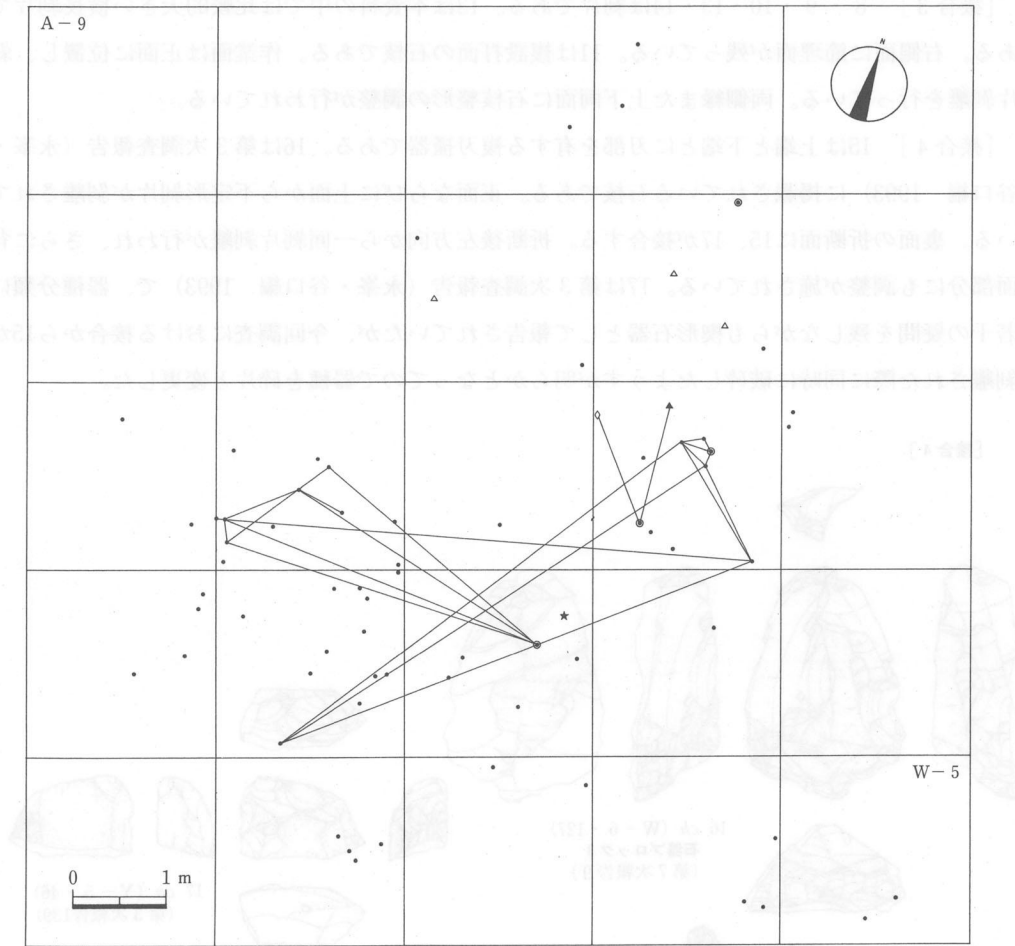
[接合4] 15は上端と下端とに刃部を有する複刃搔器である。16は第3次調査報告(永峯・谷口編 1993)に掲載されている石核である。正面ならびに上面から不定形剥片が剥離されている。裏面の折断面に15、17が接合する。折断後左方向から一回剥片剥離が行われ、さらに背面部分にも調整が施されている。17は第3次調査報告(永峯・谷口編 1993)で、器種分類に若干の疑問を残しながらも楔形石器として報告されていたが、今回調査における接合から15が剥離された際に同時に破碎したようすが明らかとなったので器種を碎片と変更した。

[接合4]



第134図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料13(3)(2/3)

第IV章 第VI層L文化層



第135図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料13：分布(1/80)

接合資料と剥離工程 4つの接合資料があるが、いずれも断片的な接合資料であり、具体的な剥片剥離工程を復元し得る資料ではなく、資料の項で記載した内容にとどまる。その中ではこれらの資料がいずれも求心的な剥離面構成を示している点に注意される。

分布 資料の総点数は79点である。X～Z-6～8区を中心に広範囲に分布している。接合資料を中心に、分布の集中は特に石器ブロック2と石器ブロック3と関わっており、石器ブロック相互の共時的な場のあり方を推定させる手掛かりになりそうである。接合資料に含まれる石器器種構成を考慮すれば、石器ブロック2と石器ブロック3とは、素材を共有する密接な関係にあって石器の製作と使用に関わる場として、積極的に評価できそうである。

(田村令子)

(10) 母岩別資料14 (第136・137図)

石材 チャート。

石質 節理がやや多く見られるものの緻密かつ均質である。色調は全体的には黒色を呈するが、白灰色に黒色の縞が入る。

素材 原礫面と節理面の残された資料から、節理面に沿って分割された石塊が予想される。

資料 石核1点、剥片・碎片45点の合計46点からなる。接合資料6点を以下に記載する。

1は横長剥片である。3は幅広の縦長剥片である。2は3を剥離した際に破砕した碎片である。4は横長剥片で、剥離の際に節理に沿って折損している。5は幅広の縦長剥片である。下端には一部原礫面が残されている。6は分厚い幅広の剥片である。下端の一部には原礫面が残されている。

接合資料と剥片剥離工程 剥片・碎片6点の接合資料である。断片的な接合資料であり、多くのことを判断できない。

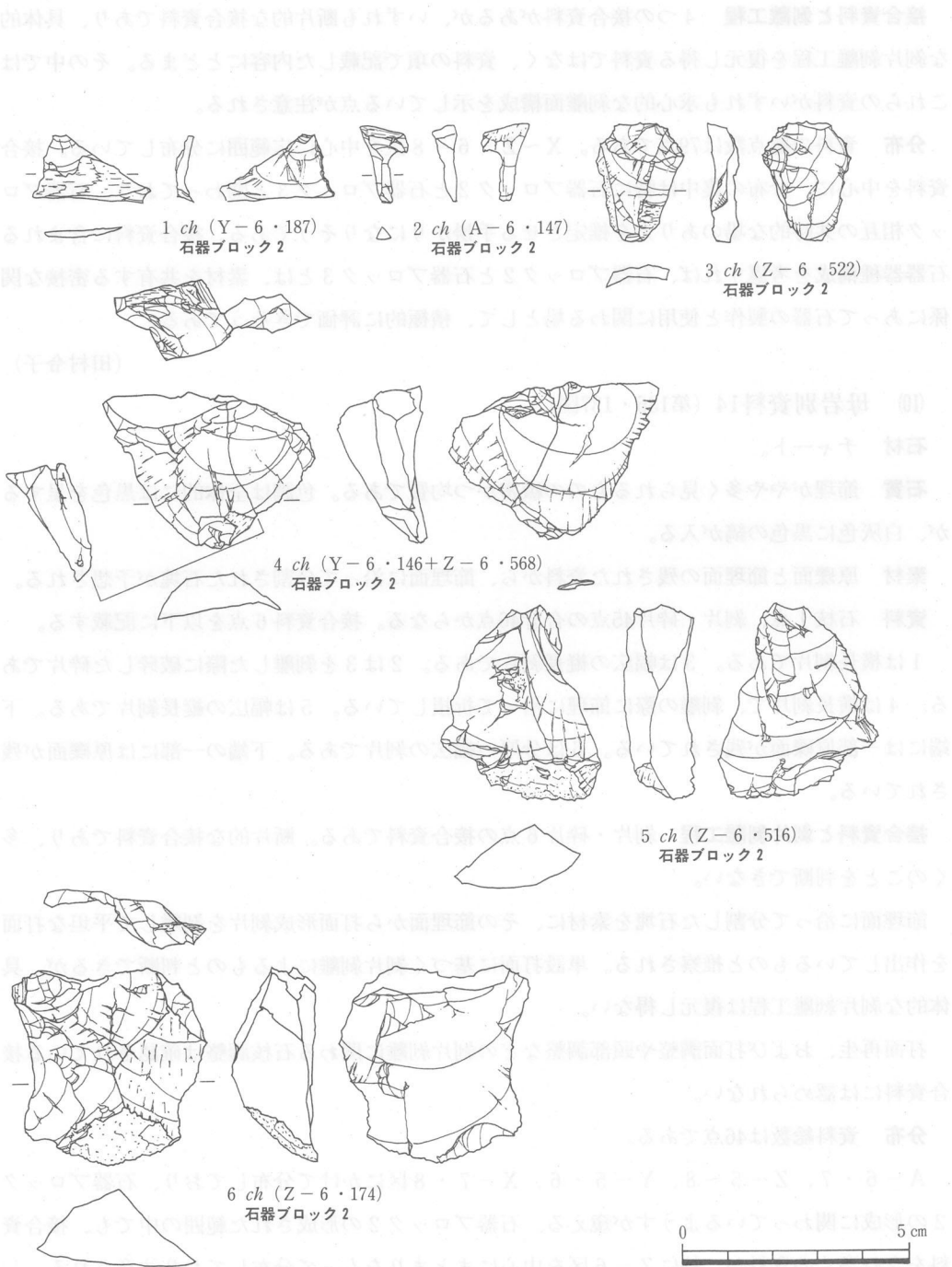
節理面に沿って分割した石塊を素材に、その節理面から打面形成剥片を剥離して平坦な打面を作出しているものと推察される。単設打面に基づく剥片剥離によるものと判断できるが、具体的な剥片剥離工程は復元し得ない。

打面再生、および打面調整や頭部調整などの剥片剥離に関わる石核調整は確認されている接合資料には認められない。

分布 資料総数は46点である。

A-6・7、Z-5～8、Y-5・6、X-7・8区にかけて分布しており、石器ブロック2の形成に関わっているようすが窺える。石器ブロック2の形成された範囲の中でも、接合資料を含む多くの資料が、特にZ-6区を中心にまとまりをもって分布しており注意される。しかしながら、接合資料と剥片剥離工程の項で記したように、具体的な剥片剥離工程を復元し得ないために、このような分布状態から石器ブロックの形成された場について、性格や機能などに言及できないことは残念である。

(笠井洋祐)



第136図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料14(2/3)

(II) 母岩別資料15 (第138・139図)

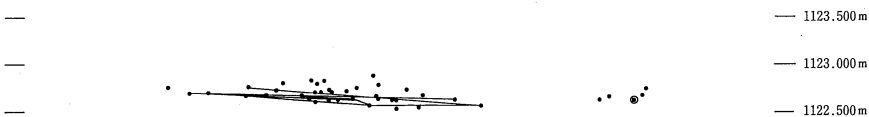
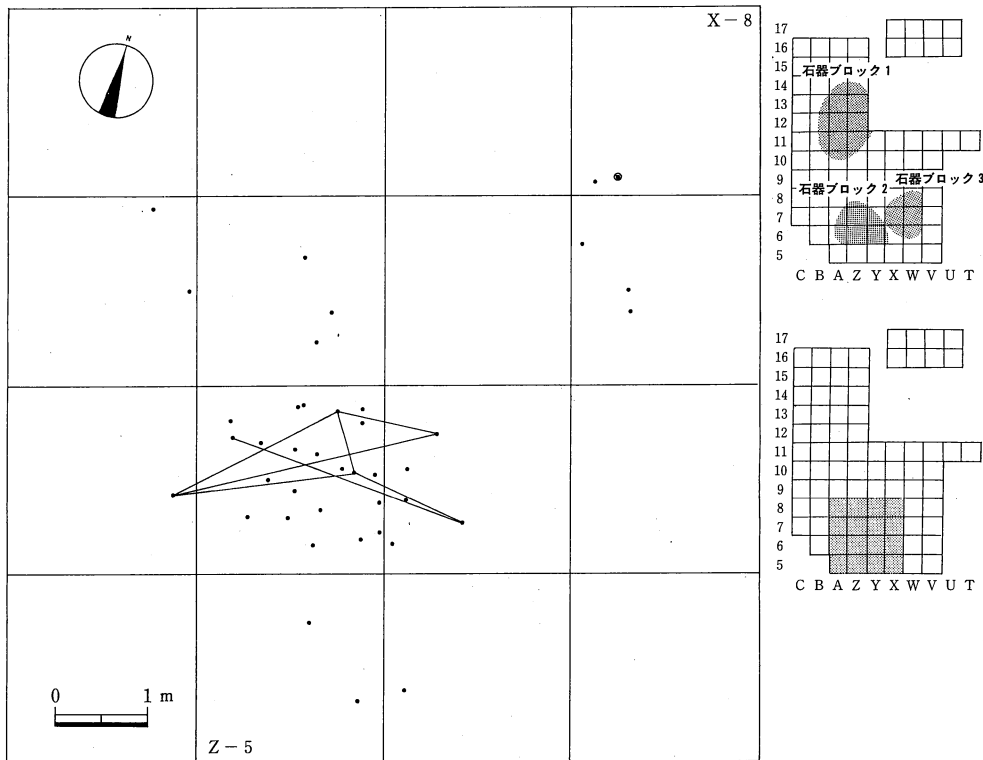
石材 チャート。

石質 均質かつ緻密で比較的良好。色調は全体的に赤褐色で、原礫面近くには緑色の縞が入っている。

素材 平坦な原礫面を持ち、節理面に沿って分割した角柱状のものと思われる。

資料 石核1点、微細剥離痕を有する剥片1点、剥片・碎片8点の合計10点からなる。これらのうち、接合資料5点を以下に記載する。

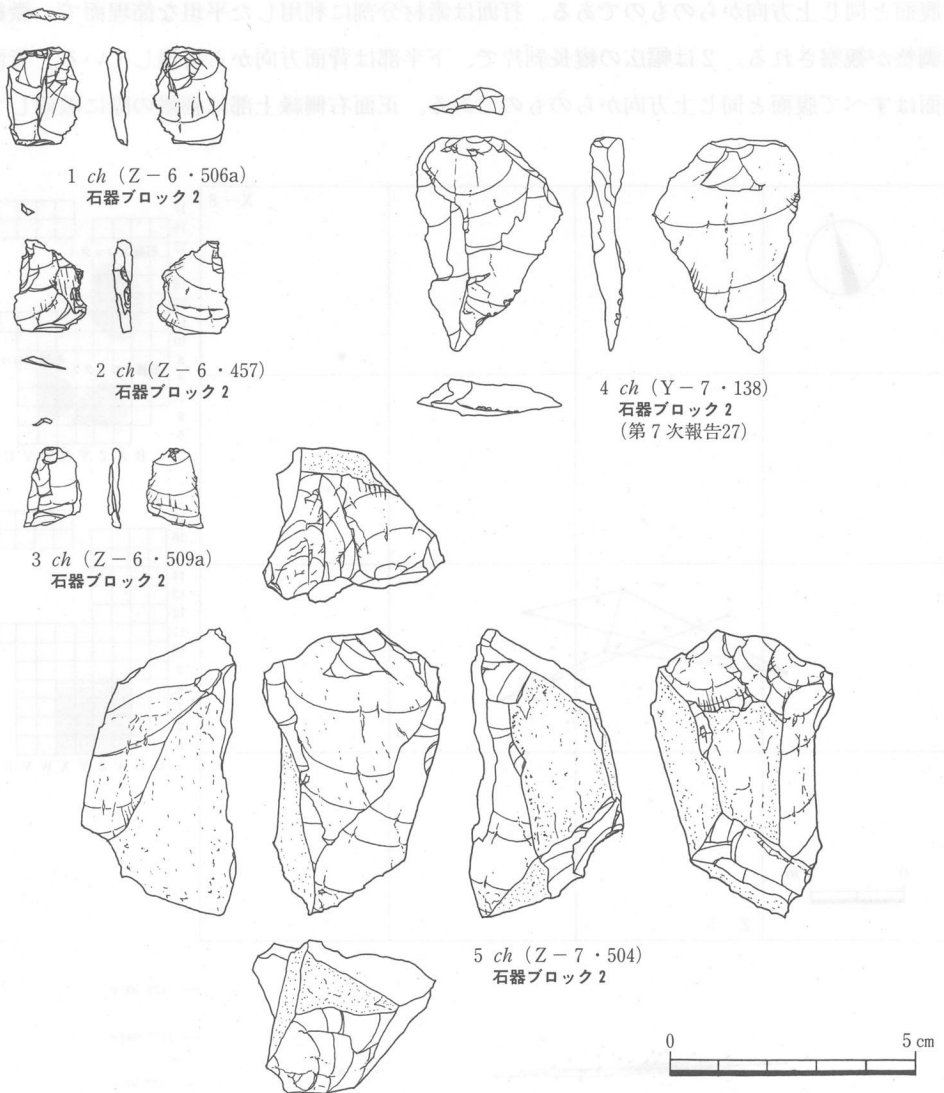
1は幅広の縦長剥片で、末端部形状がヒンジフラクチャーとなっている。背面の剥離面はすべて腹面と同じ上方向からのものである。打面は素材分割に利用した平坦な節理面で、微細な頭部調整が観察される。2は幅広の縦長剥片で、下半部は背面方向から折損している。背面の剥離面はすべて腹面と同じ上方向からのものである。正面右側縁上部は剥離の際に破碎している



第137図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料14：分布(1/80)

る。また、右側縁には連続的な微細な細部調整が施されている。打面は左横方向からの単剥離面打面である。3は縦長剥片で、下半部は腹面方向から折損している。背面の剥離面はすべて腹面と同じ上方向からのものである。打面は単剥離面打面である。4は幅広で平面形状が三角形を呈する縦長剥片である。背面の剥離面はすべて腹面と同じ上方向からのものである。右側縁の下半部には連続的な微細剥離痕が観察される。打面は複剥離面打面で、左横方向から打面調整が行われている。5は複設打面石核である。

接合資料と剥片剥離工程 石核1点、微細剥離痕を有する剥片1点、剥片3点の接合である。角礫を節理面に沿って分割して角柱状の素材とし、下面・正面・上面を作業面としている。



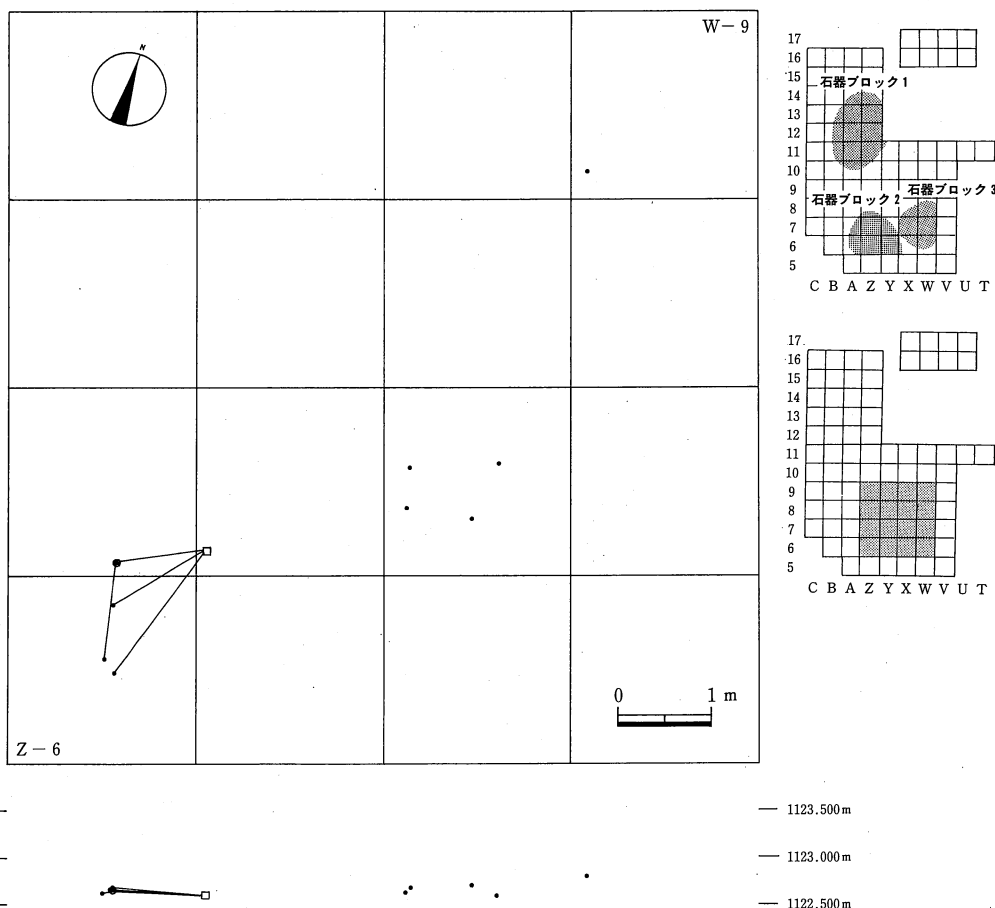
第138図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料15(2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

まず、下面の作業面で剥片1を剥離し、90°打面転位をして正面を作業面とする。ここで剥片3、2、微細剥離痕を有する剥片4を剥離する。剥片3を剥離した後に打面再生および打面調整を行ってから2・4を剥離していることが接合状況から判断できる。また、正面を作業面として剥片剥離をしている際に微細な頭部調整が行われている。次いで作業面としていた正面を打面とし、上面を作業面に転位する。ここでは幅広の縦長剥片が剥離されていることが剥離面から判断できるが、接合資料はない。

分布 資料総数は10点である。Z-6～7区、Y-7区にかけて分布し、X-7区にも接合しない資料の分布が見られる。接合資料を中心に石器ブロック2を構成している。

(笠井洋祐)



第139図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料15：分布(1/80)

(12) 母岩別資料16 (第140・141図)

石材 チャート。

石質 全体に緑色を呈し、縞状の節理が入る。割口は貝殻状断口を呈す。

素材 平坦な原礫面を持つ河原石と思われるが、接合する資料から多くは推定できない。

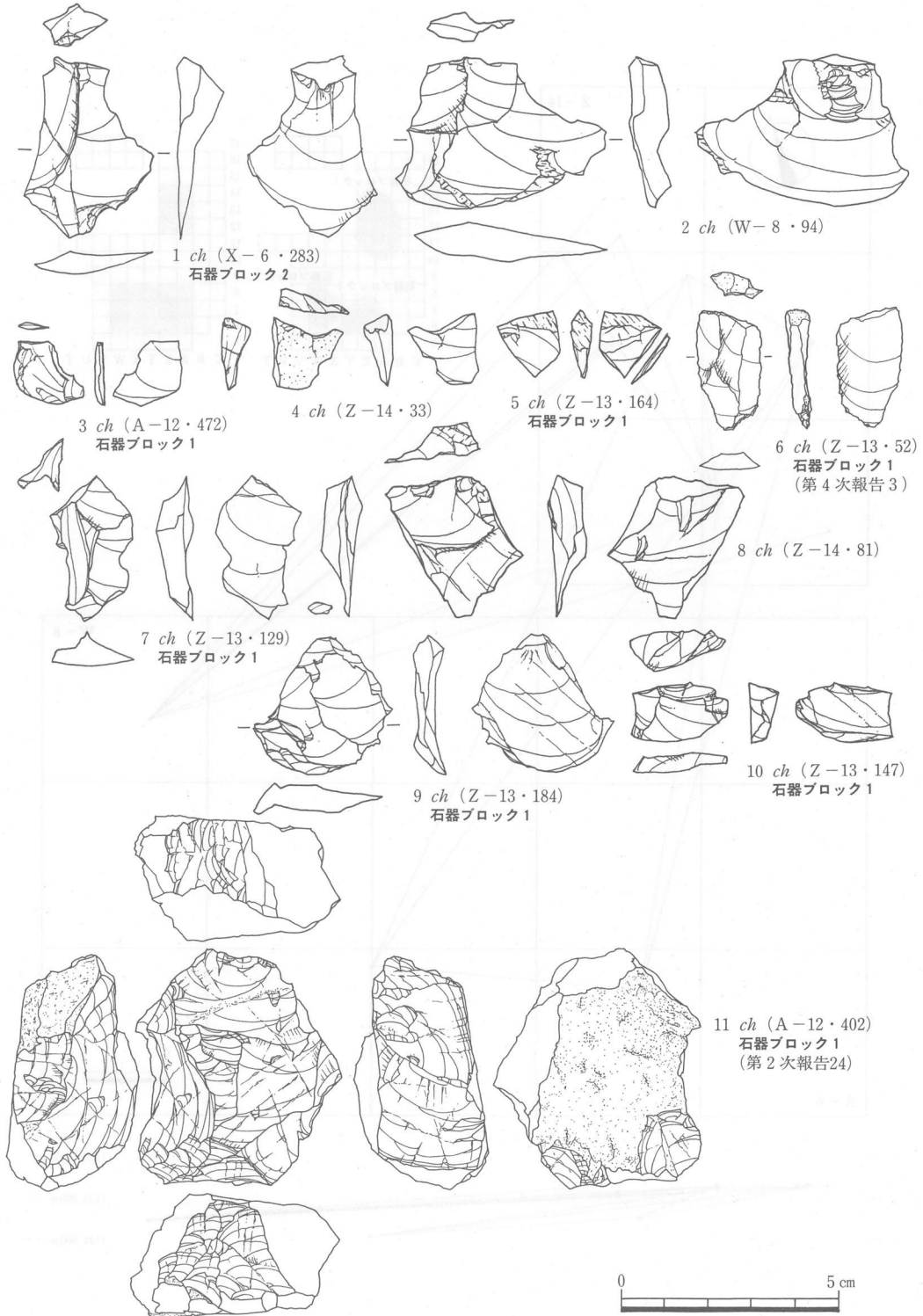
資料 剥片・碎片9点、ナイフ形石器1点、石核1点の11点からなる接合資料を図示した。

1は不定形な縦長剥片である。背面は2枚の剥離面で構成されており、右側縁下端部に細部調整らしき剥離痕がみうけられる。2は不定形な横長剥片である。背面は3枚の剥離面で構成されており、所々に節理面が入る。3・4・5は2の前段階に剥離され、破碎したものであり、4は背面に平坦な節理面を有する。6は第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)に掲載されている部分調整のナイフ形石器である。上半部は節理にそって折断しているため先端部の調整や形状は観察できない。素材の石刃末端を折断し基部調整を加えているが、両側縁には調整が認められない。基部調整は主要剥離面からなされている。7は不定形な縦長剥片である。背面は7枚の剥離面で構成されている。8は不定形な縦長剥片である。背面に主要剥離面と対向する方向からの剥離面を持つ。9は不定形な縦長剥片である。背面に見られる複数の剥離面は、下端部の2枚を除き、主要剥離面と同方向から剥離されている。10は横長剥片である。下端部は節理により折損している。背面には前段階の剥離面が3枚認められる。11は第2次調査報告(小林・谷口編 1992)に掲載されている複設打面石核である。剥片剥離の過程で打面転移を頻繁に行った結果、多方向からの剥離面で構成される多面体状を呈する。

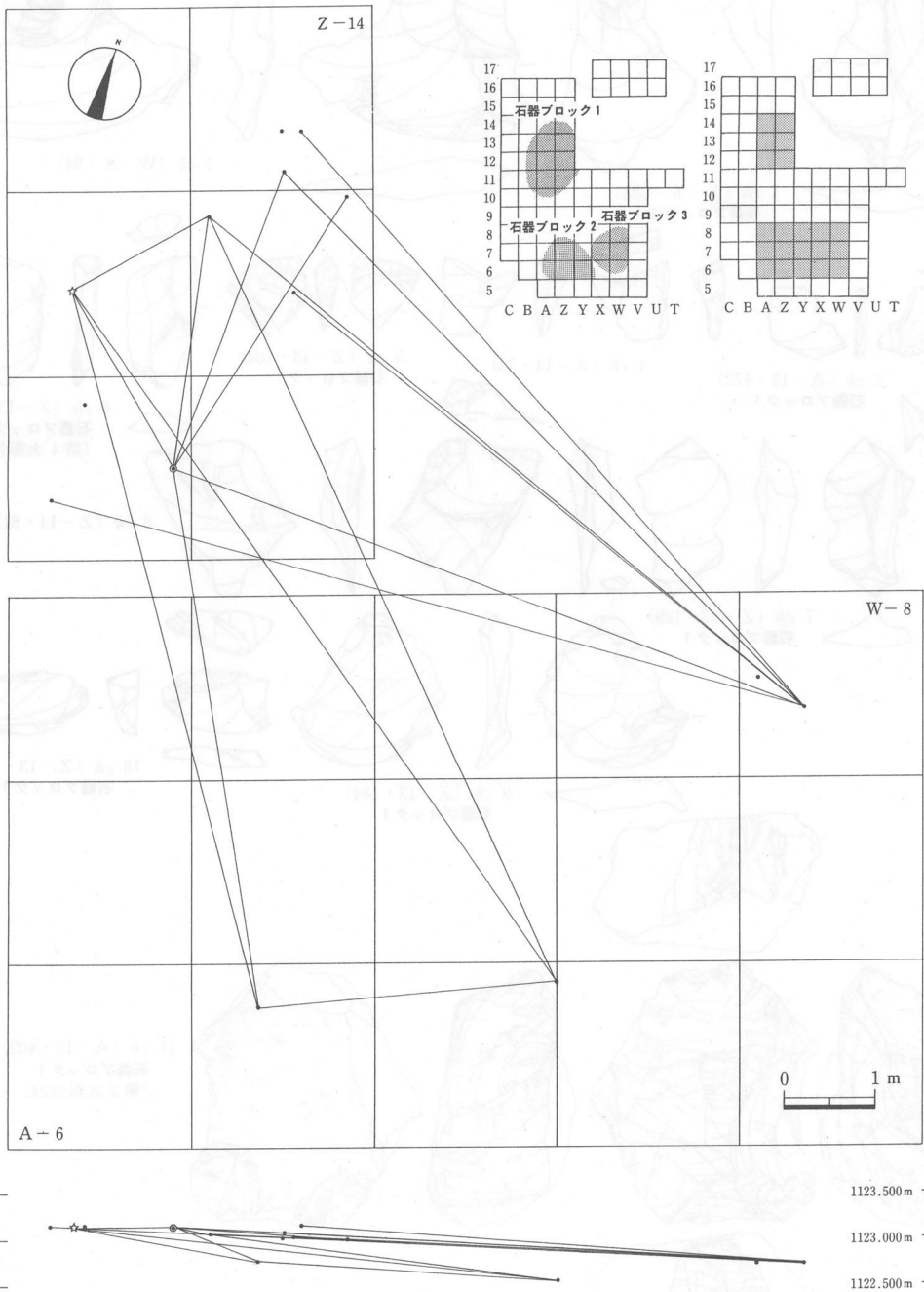
接合資料と剥片剥離工程 剥片・碎片1～5・7～10、ナイフ形石器6、石核11の11点からなる。

1の背面下部の剥離面は2の背面左側、6の背面左側の剥離面と一体をなし、平坦な剥離面を構成する。剥離の方向は1と対向し、6と同方向であり、前段階の剥離が多方向からなされていたことを示している。剥離は石核の右側面を打面とし、正面で行われている。主要剥離面が6の下端部7の背面に接合する。打面を90°転位し剥離したものが2であり、前段階に剥離された背面に3・4・5が接合する。1と対向する方向から剥離されたのが第4次調査で報告(谷口・宮尾編 1995)された6であり、上半部は節理により折断している。主要剥離面が7の背面下端に接合する。7は6から打面を180°転位し、1と同方向から剥離されている。主要剥離面は石核11の正面に接合する。8は7から打面を90°転位し、2と同方向から剥離されたものであり、背面上部に2が接合し、背面下部の対向する方向からの剥離面に接合するものは見つからない。主要剥離面が石核11に接合する。9は石核に裏面の原礫面を打面とし剥離されたもので、背面を構成する複数の剥離面に接合する資料は下端部に接合する6・7を除き、見つからない。主要剥離面は石核11に接合する。10は石核右側面の剥離面を打面とし剥離されたものであり、下半部は節理により折損している。11は裏面に節理面を残す複設打面石核であり、

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第140図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料16(2/3)

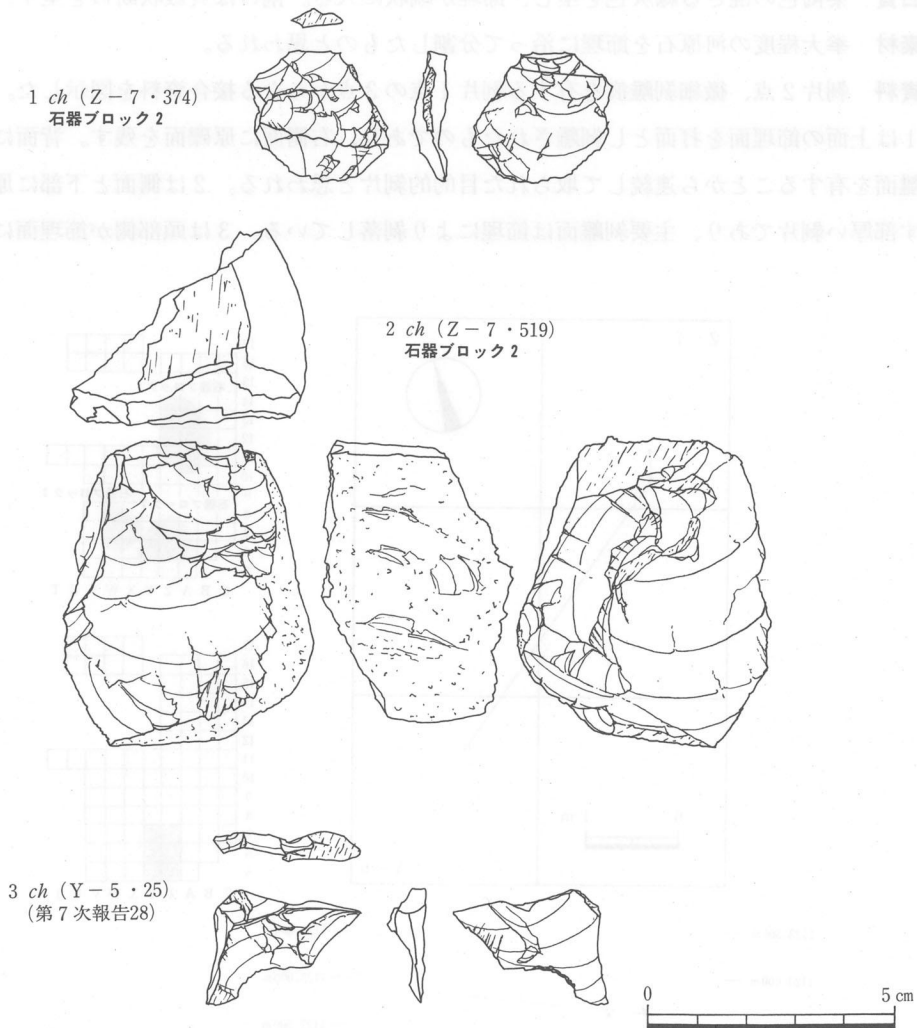


第141図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料16：分布(1/80)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

接合する資料は9・10を除き、すべて正面に接合する。正面の作業面では右横方向から剥離された上面を打面として縦長剥片・不定形剥片が剥離されているが、これらの剥離の後、この作業面と背面の原礫面等を打面として左側面・右側面において剥片剥離が行われている。

分布 資料総数16点からなる。接合資料はA・Z-12~13区、Y・Z-6区、W・X-8区という広範囲に分布し、それぞれが第VI層L文化層で把握された3ヶ所の石器ブロックを構成する資料となっている。剥片剥離工程を復元できる接合資料の大部分は石器ブロック1と石器ブロック2や石器ブロック3に分布している。ナイフ形石器6と石核11を含む大部分の接合資料は石器ブロック1に分布しているが、石器ブロック2や石器ブロック3にも接合資料の一部が分布している点に注意される。すなわち、接合資料に基づいて復元されている限りの剥片



第142図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料17(2/3)

剥離工程に即してみた場合、早い段階に剥片剥離された資料が石器ブロック2や石器ブロック3周辺に分布し、続いて剥片剥離された資料と残核は石器ブロック1に分布しており、剥片剥離の進行とともに、石器製作と使用という作業の場を移していった、あるいは素材の受け渡しがあった可能性が指摘できよう。ただし、石器ブロック2や石器ブロック3周辺には接合資料に伴う同一の母岩別資料がほとんどない点を積極的に評価すれば、石器ブロック1を具体的な剥片剥離の場として、生産された剥片が石器ブロック1から持ち出されたとも解釈できる。

(小久保拓也)

(13) 母岩別資料17 (第142・143図)

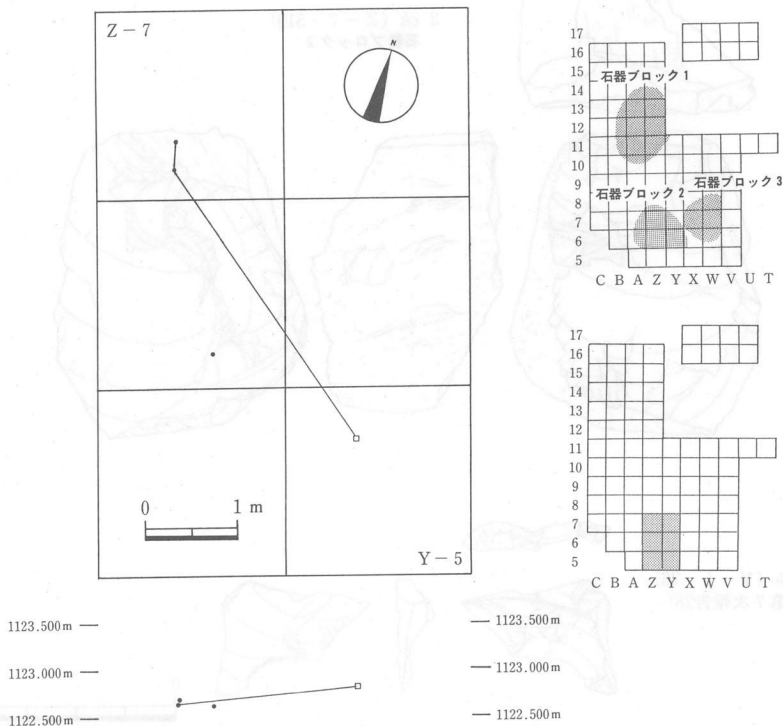
石材 チャート。

石質 茶褐色の混ざる緑灰色を呈し、節理が縞状に入る。割口は貝殻状断口を呈す。

素材 拳大程度の河原石を節理に沿って分割したと思われる。

資料 剥片2点、微細剥離痕を有する剥片1点の3点からなる接合資料を図示した。

1は上面の節理面を打面とし剥離されたものであり、右側面に原礫面を残す。背面に複数の剥離面を有することから連続して取られた目的的剥片と思われる。2は側面と下部に原礫面を残す部厚い剥片であり、主要剥離面は節理により剥落している。3は頭部側が節理面に沿って



第143図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料17：分布(1/80)

折損しているが、下端部に挟入状の微細な剥離痕が認められる。

接合資料と剥片剥離工程 拳大程度の素材を分割整形し、できた平坦な節理面を打面とし剥片剥離を行なっているようである。

剥片1の背面に見られる複数の剥離面は前段階の剥離が同一方向から行なわれていることを示し、1・2・3の順で連続して剥片剥離が行なわれたと思われるが、石核は見つかっていないし、接合資料の点数からいっても、具体的な剥片剥離工程は復元できない。

分布 資料総数4点からなる。

接合資料はY-5区とZ-7区に分布し、微細剥離痕を有する剥片3はY-5区から出土している。Y-5区は第7次調査の発掘区外であるが、本母岩別資料の接合を考慮すれば、石器ブロック2の範囲として把握してよいであろう。

ちなみに、本母岩別資料17は石器ブロック2にのみ限定的に分布する母岩別資料である。

具体的な剥片剥離工程が詳らかでない断片的な資料なので、これ以上の言及はできないが、複数の石器ブロックにひろく母岩別資料が多く存在することと対称をなす母岩別資料として注意する必要がある。

(小久保拓也)

(14) 母岩別資料18 (第144図)

石材 黒曜石。

石質 緻密で割れ口は貝殻状断口をなす。霜降り状の縞が多く入り赤みを帯びる。

素材 石核が検出されていないうえ、石刃素材のナイフ形石器とそれに伴う剥片・碎片、挟入石器、石刃、剥片・碎片のみで構成されているため、明確な素材は推定できない。

しかしながら、このような状況を積極的に評価するならば、本遺跡に持ち込まれた黒曜石がすでに一定の加工を施したものであったことを示している可能性がある。

資料 第7次調査資料と過去の調査資料とを併せ、肉眼観察に基づいて同一母岩と認定した資料が該当する。

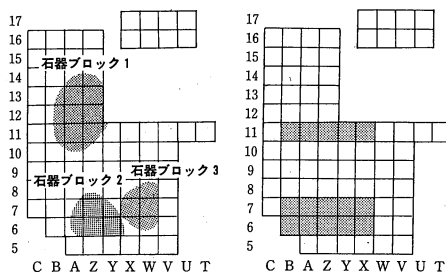
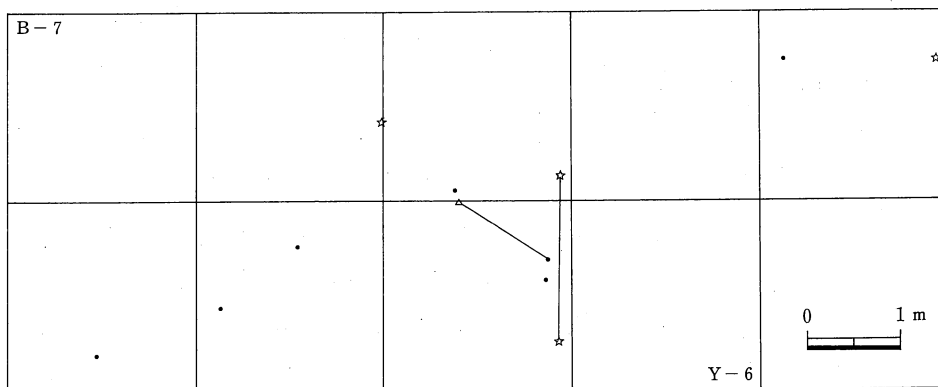
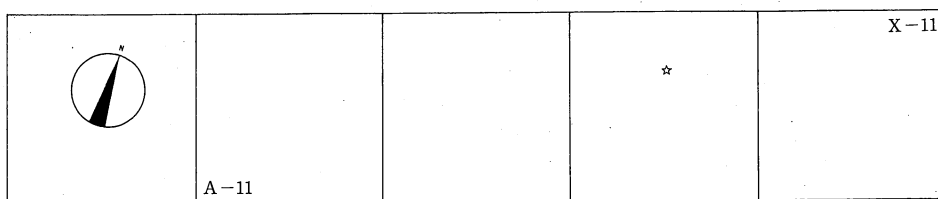
ナイフ形石器5点(第226図6、第227図17、第228図34、第80図2+3=第229図35+36)、挟入石器1点、微細剥離痕を有する剥片1点(第84図42=第233図67)、石刃1点、剥片・碎片8点の合計16点を分類した。

第7次調査出土資料のナイフ形石器(第80図2+3=第229図35+36)における接合例、微細剥離痕を有する剥片(第84図42=第233図67)とその主要剥離面に接合する剥片(第84図43)の例については、すでに本章第3節で触れているので参照されたい。なお、微細剥離痕を有する剥片(第84図42=第233図67)とその主要剥離面に接合する剥片(第84図43)は、本母岩別資料における剥片剥離を断片的ながら示す資料として注意されるが、具体的な剥片剥離工程を復元できるまでにはいたっていない。

第IV章 第VI層L文化層

分布 資料総数は16点である。散漫な分布を示しているものの、石器ブロック2の範囲A・Z-6・7区にややまとまっており、2つの接合例も含まれており、場の性格に関わって示唆的である。

使用に関わる折損と折損面の一部に施されたブランディングという再調整の過程を推察されるナイフ形石器や、微細剥離痕を有する剥片とその主要剥離面に接合する剥片の存在によって、石器ブロック2における剥片剥離、および製品への加工と使用、再調整という一連の行為があった場とも想定されるが、他に剥片剥離に関わる資料の発見されていない点に留意しなければならない。なお、石器ブロック2の北西に位置する石器ブロック3でもナイフ形石器が1点出土



第144図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料18：分布(1/80)

している。

(笠井洋祐)

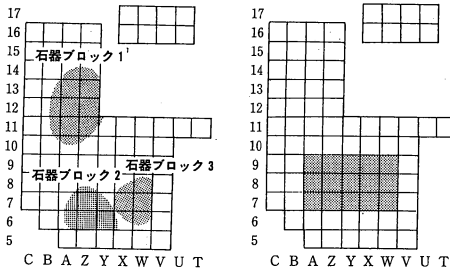
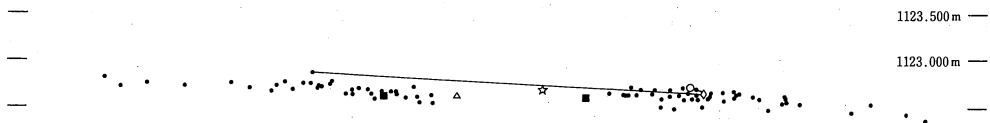
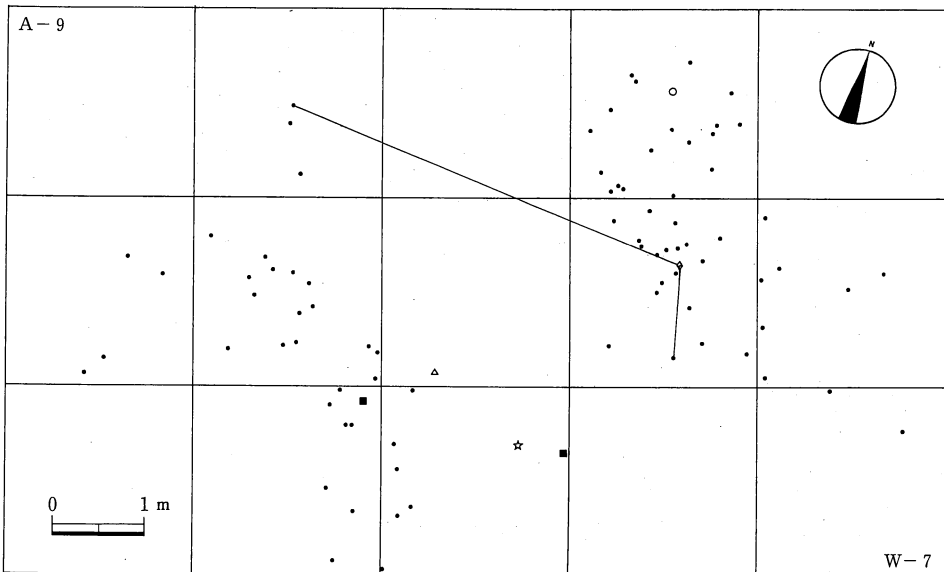
(15) 母岩別資料19 (第145図)

石材 黒曜石。

石質 緻密で割れ口は貝殻状断口をなす。非常に透明度が高い。

素材 石核が出土しておらず、明確な素材に関しては推定できない。

資料 ナイフ形石器 1点 (第80図4 = 第226図12)、抉入石器 2点 (第84図34・66 = 第234図82・83)、楔形石器 1点 (第85図44 = 第233図64) と接合する碎片 2点 (第85図45・46 = 第233図65・



第145図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料19: 分布(1/80)

66)、細部調整剥片1点(第84図37=第234図77)、石刃状剥片1点(第87図51=第238図113)、剥片・碎片79点の合計87点である。

楔形石器と接合する碎片の一部に原礫面が見られ、小規模な原礫素材が楔形石器として用いられた結果生じた両極剥離を推察させるが、母岩別資料全体として、他の資料をも含めて見た場合には、母岩別資料の素材を示す痕跡は認められず、また、具体的な剥片剥離工程のもとに一連の行為を理解する内容はもっていない。

分布 資料総数は87点である。石器ブロック2の形成されたZ・Y-6・7区に分布するものと、石器ブロック3W・X-6~8区に分布するまとまりに大きく分かれる。

石器ブロック2の範囲にはナイフ形石器とそのプランティングチップ、挟入削器、細部調整剥片などがあり、石器ブロックを構成する石器製品の中核を担っている。

一方、石器ブロック3には、楔形石器と接合する剥片、石刃状剥片が含まれているが、やや大きめの剥片が多数を占めていて石器製品の少ない点は注意される。

本母岩別資料は、石器ブロック2と石器ブロック3とで共通するが、石器ブロック相互を結ぶ接合資料はない。また、本母岩別資料の石器ブロックそれぞれを構成する器種の内容は、大きく異なっているようであり、他の母岩別資料には見い出せなかった石器ブロック毎に相違する特徴といえよう。

(笠井洋祐)

(16) 母岩別資料20(第146・147図)

石材 黒曜石。

石質 緻密で割れ口は貝殻状断口をなす。透明度はなく、非常にくすんでいる。

素材 石核が出土しておらず、明確な素材に関しては推定できない。

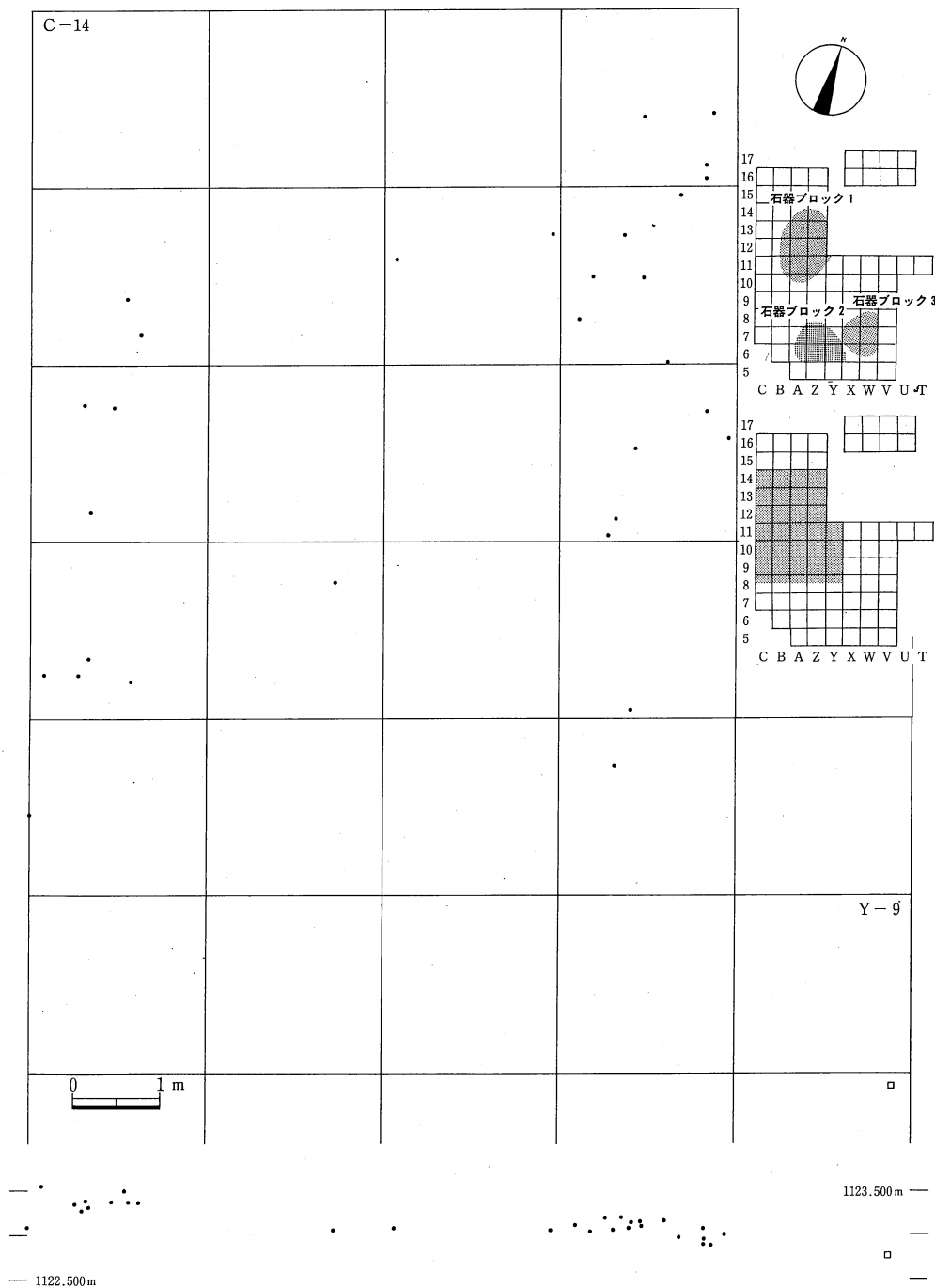
資料 細部調整剥片1点(第84図40=第234図81)、微細剥離痕を有する剥片2点(第84図35=第233図69、第233図70)、剥片・碎片30点の合計33点である。断片的な資料であり、接合資料はまったく含まれていない。そのために、剥片剥離工程を推定できない。また、定形的な石器製品は含まれていないことが、他の黒曜石の母岩別資料とは相違する。

分布 資料総数は33点である。C-11~13区、Z-10~14区、W~Y-6~8区に散漫な分布を示している。第2次調査・第4次調査で把握された石器ブロック1と、第7次調査では把握された石器ブロック3とに関連する母岩別資料といえる。

しかしながら、石器ブロックそれぞれに分布する資料は、石器ブロックの内外を問わず相互には接合していない。また、いずれの石器ブロックにも定形的な石器製品はなく、剥片・碎片のみで構成されているだけであって、具体的な石器生産と石器ブロックなどの場の関連は定かではない。

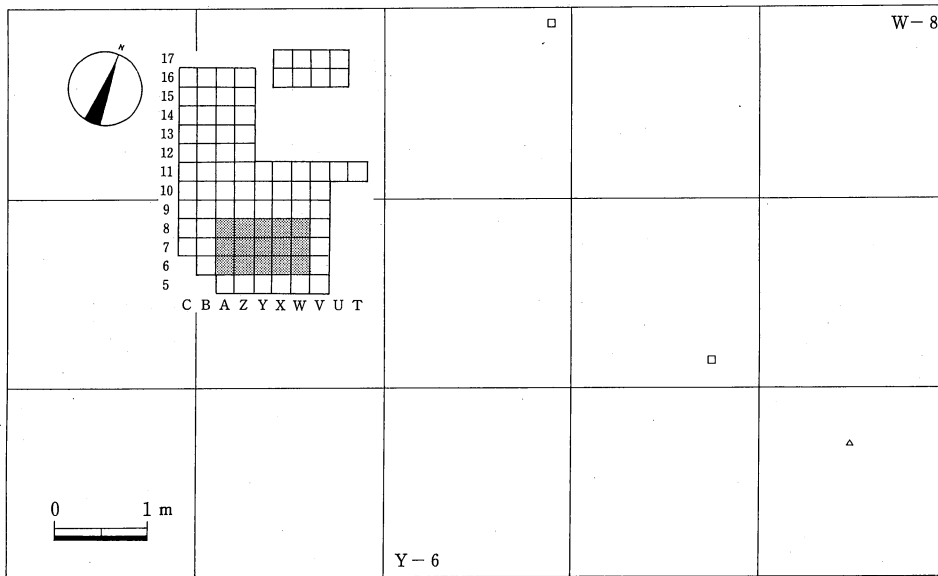
(笠井洋祐)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第146図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料20：分布(1)(1/80)

第IV章 第VI層L文化層



— 1123.500 m

— 1123.000 m

— 1122.500 m

第147図 第7次発掘調査資料 第VI層L文化層母岩別資料20：分布(2)(1/80)

第V章 第VII層文化層

第1節 概要

第VII層文化層は、ナイフ形石器を主体とする石器群の文化層である。第4次調査（谷口・宮尾編 1995）において確認された文化層で、第5次調査（永峯・宮尾編 1996）で資料の追加が図られた。これまでに礫群2基と石器ブロック3ヶ所が把握されている。検出層位は第VII層上部に求められ、第VI層L文化層の下位に位置している。また、礫群2基と石器ブロック3ヶ所の形成位置、すなわち礫や石器の分布は、いずれも7年次にわたる発掘区の最西側に偏在しており、第VI層L文化層のそれとは重複していない。これらの礫群や石器ブロックは、いずれも第4次調査の発掘区壁際で確認されたために、全容を把握することができなかったが、北側A～C、Z-15・16区については第5次調査で、南側C-7～9区、A・B、W～Z-6～9区については第7次調査で、順次発掘区をひろげ、各石器ブロックの理解に努めてきた。

第7次調査では、C-10・11区を中心に確認されていた第1号礫群と石器ブロック1について、B・C-8・9区への連なりを検出し得た。特に第1号礫群については、第4次調査報告（谷口・宮尾編 1995）において未調査の南側と東側とに向かって環状に分布する礫を想定していたが、意に反して南東方向に直線的にひろがっていることが判明した。また、第1号礫群や石器ブロック1の南方、C-7区を中心にひろがる破碎した小規模な礫の分布を確認し、第3号礫群として新たに把握することにした。さらに同範囲では石器群の集中も確認され、石器ブロック4として新たに把握することにした。この新たに確認された第3号礫群と石器ブロック4も、これまでに確認されている礫群2基と石器ブロック3ヶ所同様に、7年次にわたる発掘区の西側に偏在しており、第7次調査で新たに確認された第VI層L文化層の5基の礫群や2ヶ所の石器ブロックと排他的な位置関係にある。また、第VII層文化層の合計3基の礫群と4ヶ所の石器ブロックだけに限定して見た場合、直線的な位置関係を示しており、礫群や石器ブロックの形成場所に言及するにあたって、旧地形とも関わって示唆的である。

また、今回の調査ではC-7区の一部について第IX層まで精査し、パリオ・サーヴェイ株式会社の協力のもと土壌の自然科学分析のための試料を採集した。この分析結果については、付編報告に詳しいが、広域テフラとして指標となるATが第VII層下部にピークをもって検出されたことが特筆され、最下層の文化層である第VII層文化層の包含層準よりも下位にあたることから、柳又遺跡A地点において確認された各文化層は、いずれもAT降灰以後に位置づけられることが判明した。

なお、今回の調査によって追加された資料は、石器17点、剥片・碎片292点、礫367点の合計

676点である。石器17点の器種別内訳は、ナイフ形石器2点、搔器1点、細部調整剥片2点、石刃7点である。なお、第VII層文化層の主体となるナイフ形石器に関しては、特に小形の不定形剥片を素材とした切出形のものが特徴的である。今回の調査で発見されたナイフ形石器も同様の特徴をもっており注意される。

また、石器石材の選択傾向から見ると、第V層文化層や第VI層L文化層と同じくチャートが卓越するが、その一方で第V層文化層や第VI層L文化層と異なって黒曜石は稀少である。また、玻璃質安山岩は第VI層L文化層に比べて高い頻度を示しており、大きな特徴となっており注意される。なお、今回の調査資料ではないが、玻璃質安山岩の母岩別資料2に含まれる大形の石核に見られる滑らかな原礫面は、これらの玻璃質安山岩が転石であることを示唆しており、開田高原には存在しない原石の入手先を検討する手掛かりとなろう。(大堀あずさ)

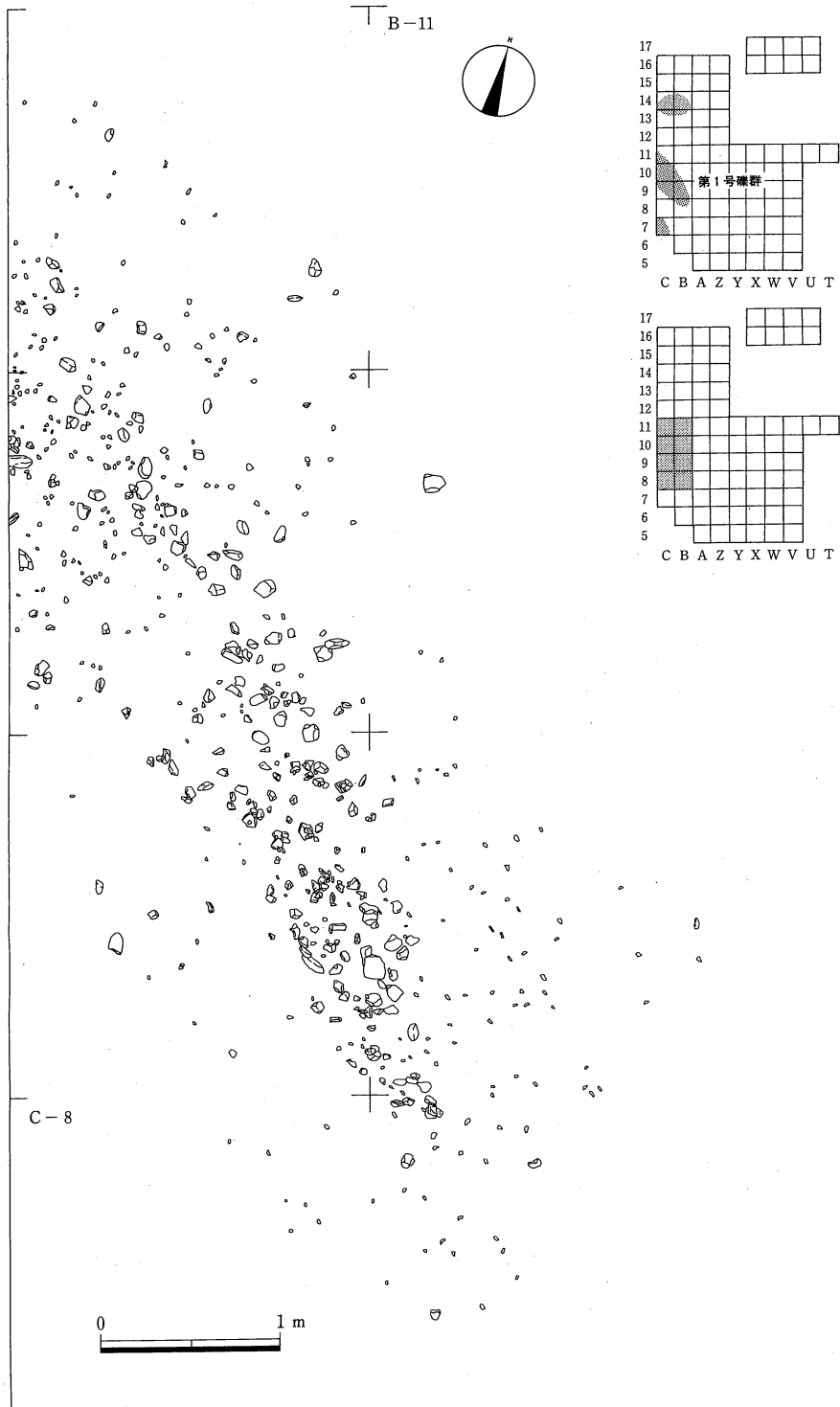
第2節 礫群の位置と内容

(1) 各礫群の位置

第VII層文化層の礫群は、これまでに2基の存在が明らかにされている。すなわち、第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)で示されたB・C-10・11区の第1号礫群とB・C-14区の第2号礫群である。今回の調査では、B・C-10・11区で確認された第1号礫群の南東部延長部分をB・C-8~9区で確認した。さらに第1号礫群の南方、C-7区を中心にひろがる破碎した小規模な礫の分布を確認し、第3号礫群として新たに把握した。この結果、礫群は3基となったが、すべて7年次にわたる発掘区の西側に偏在しており、旧地形に関わって注意される。また、礫群はすべて当該文化層の石器ブロックと重複する位置関係にあり、石器群が礫群を覆うように存在していることは、礫群と石器ブロックとの関係を考えるうえで示唆的である。

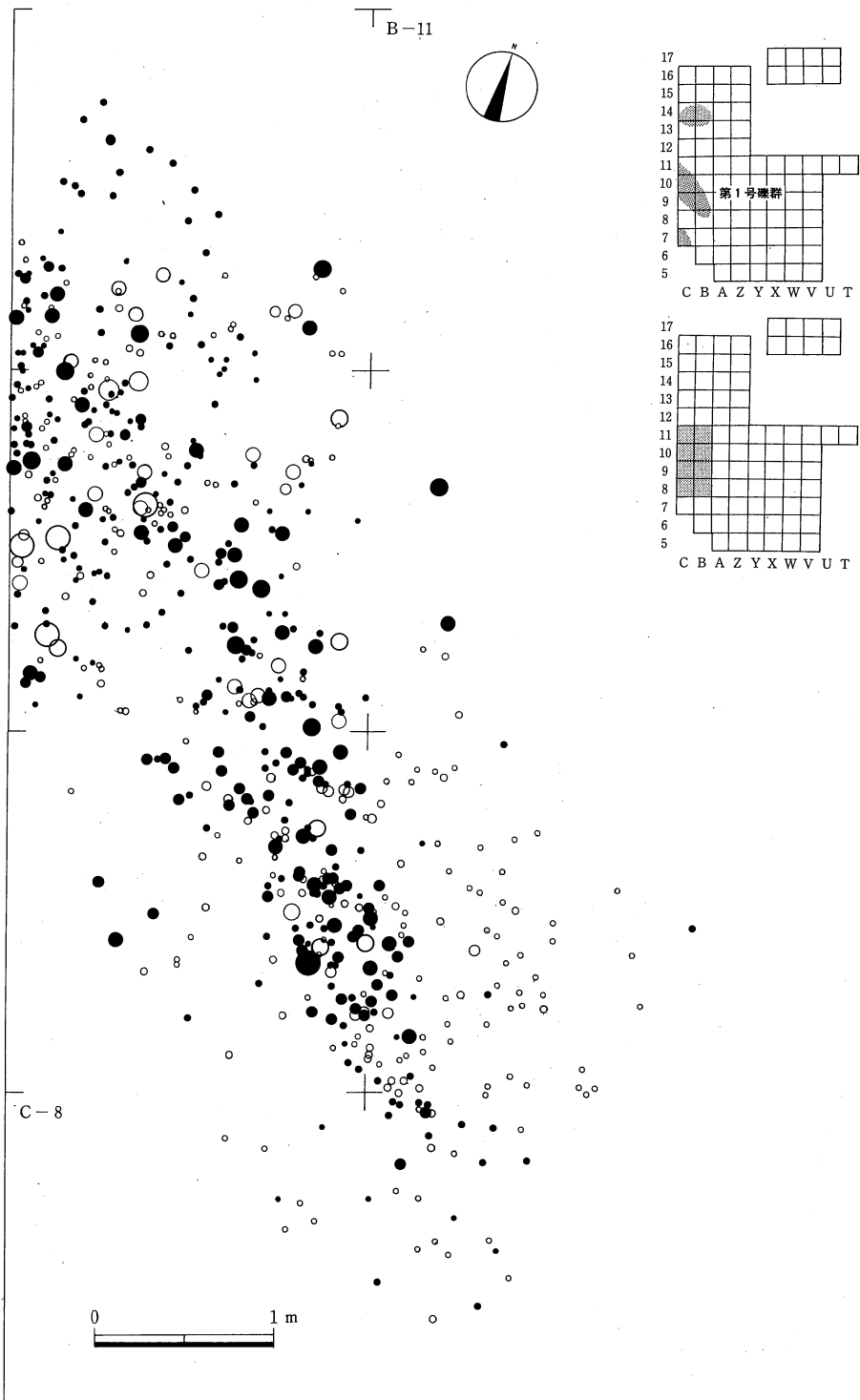
以下に第7次調査で確認された第1号礫群と第3号礫群についてそれぞれ詳述する。ところで第1号礫群に関しては、すでにB・C-10・11区部分について第4次調査報告書に記されているが、今回判明したB・C-8~9区部分を加えたうえで改めて全体に触れる。また、すでに第4次調査報告書で触れられているが、当該文化層の礫群は第VI層L文化層の礫群との間にも構成礫の接合関係が存在し、構成礫の一部あるいは礫群全体の帰属について誤認定の可能性も考えられる。しかしながら、第VII層文化層における石器ブロックと礫群の平面位置関係とそれぞれの検出層位を重視し、かつ接合する礫破碎片についてより新しい第VI層L文化層の礫群内に接合する礫破碎片のより大形の一方が残存することを根拠として、文化層を越える礫の持ち出し行為を想定した。なお、構成礫の遺存状態は、第3次調査報告(永峯・谷口編 1993)で提示した基準に従い、A：完形、B：全体の約3/4以上を残す破碎礫、C：全体の約1/2を残す破碎礫、D：全体の約1/4を残す破碎礫、E：小部分の破碎片に分類してある。

第2節 礫群の位置と内容



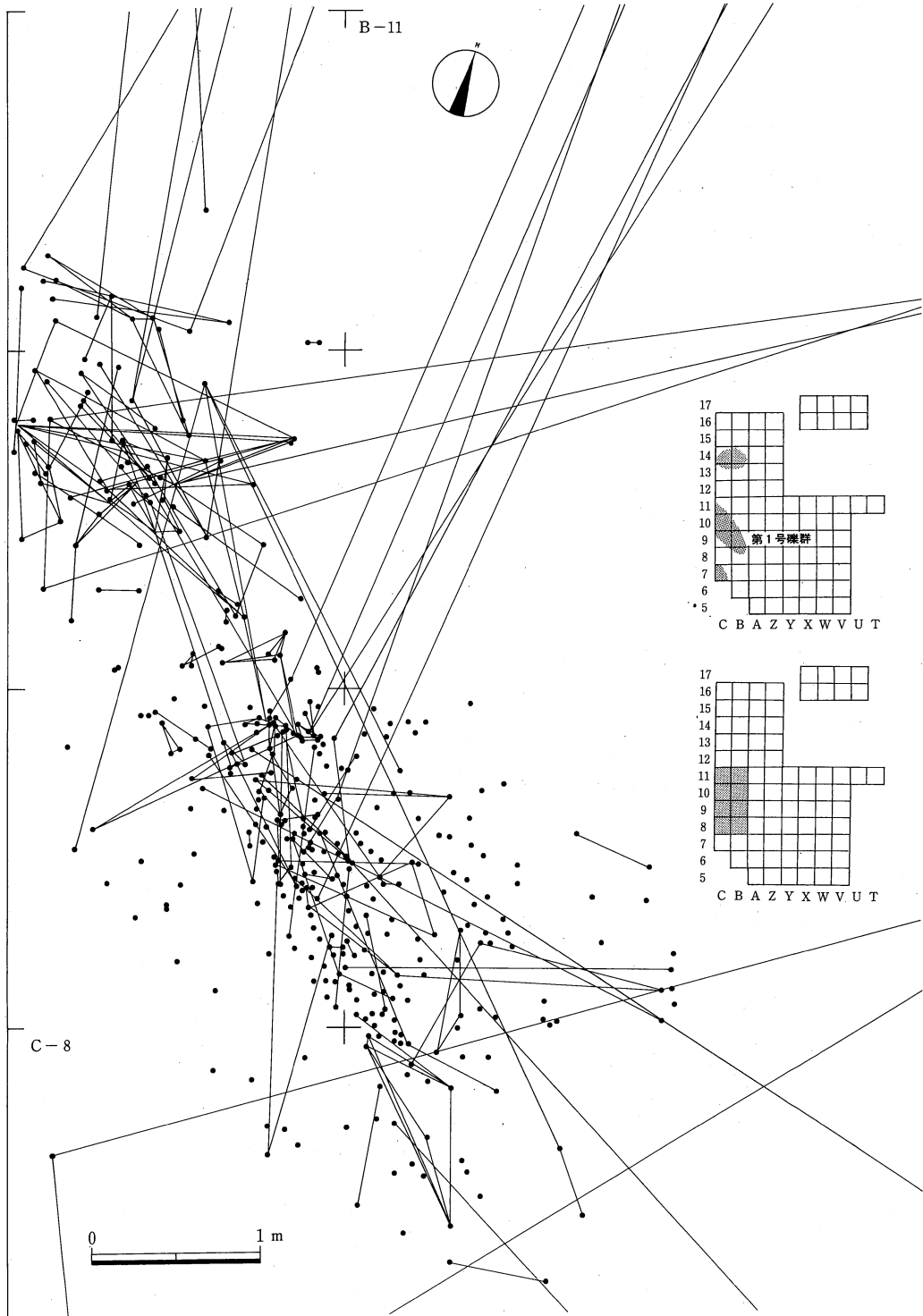
第148図 第7次発掘調査資料 第Ⅶ層文化層第1号礫群(1/40)

第V章 第VII層文化層



第149図 第7次発掘調査資料 第VII層文化層第1号燼群 構成礫の重量・被熱状態(1/40)

第2節 礫群の位置と内容



第150図 第7次発掘調査資料 第Ⅶ層文化層第1号礫群 接合状態(1/40)

第V章 第七層文化層

表14 第七層文化層第1号礫群 構成礫諸属性

遺存度 (g)	A		B		C		D		E	
	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱
1250-1260		1(1)								
1240-1250										
1230-1240										
1220-1230										
1210-1220										
1200-1210										
() 内の点数は第7次発掘調査資料分を示す。										
990-1000										
980-990										
970-980										
960-970										1(1)
950-960										
940-950										
930-940		2(1)								
920-930										
910-920										
900-910										
890-900										
880-890	1									
870-880										
860-870										
850-860										
840-850										
830-840										
820-830										
810-820										
800-810										
790-800										
780-790										
770-780	1									
760-770										
750-760										
740-750			1(1)							
730-740					1(1)					
720-730										
710-720										
700-710	1(1)									
690-700		1(1)								1(1)
680-690	1			1						
670-680	1(1)									
660-670										
650-660										
640-650						1(1)				
630-640	1(1)		1		1(1)					
620-630										
610-620		1(1)								
600-610										
590-600	1									
580-590										
570-580										
560-570										
550-560	2				1					
540-550										
530-540	2(2)		1(1)							
520-530										
510-520										1(1)
500-510							1			
490-500										
480-490		1(1)								
470-480							2(1)			
460-470										
450-460		1	1(1)							
440-450						2(1)				
430-440										
420-430						1(1)				
410-420										
400-410										
390-400			1(1)							
380-390										
370-380	1(1)			1(1)		1(1)				
360-370										
350-360										
340-350	1	1	1			1	1			
330-340	1(1)		1(1)							
320-330										
310-320										
300-310										
290-300	3(3)			1(1)			1(1)			
280-290		1(1)				1				
270-280	1		1			1(1)				
260-270	1(1)						1(1)			
250-260	1(1)	1					1(1)			
240-250	1(1)					1(1)	2(1)			
230-240	2	1(1)	3(1)			1				
220-230		1					2(1)		1(1)	
210-220							1			
200-210							1(1)			
190-200							1(1)			
180-190			1			2	4(4)		1	
170-180						1(1)				
160-170		1(1)					2	1(1)		
150-160	2					1(1)		1(1)		
140-150									2(2)	
130-140	1(1)		1(1)			1(1)				
120-130		1(1)						1(1)	2(1)	
110-120								1(1)		1(1)
100-110						1(1)	4(1)	3(3)		1(1)
90-100						1(1)	5(4)	1(1)		1(1)
80-90							5(2)	4(3)		
70-80		1	1	1(1)		1(1)	4(2)	5(3)		
60-70							5(4)	1(1)	4(3)	1(1)
50-60						1	6(5)	2(2)	6(3)	2(2)
40-50							1(1)	1(1)	10(5)	4(2)
30-40									12(5)	7(6)
20-30	1				1		2	1(1)	28(7)	9(8)
10-20									34(14)	20(11)
0-10	2(1)						3	2(1)	51(9)	182(88)
TOTAL	29(15)	16(9)	15(7)	4(3)	22(12)	5(3)	63(36)	13(11)	166(61)	229(120)

(2) 第1号礫群(第148~151図)(表14)

〈規模と形状〉

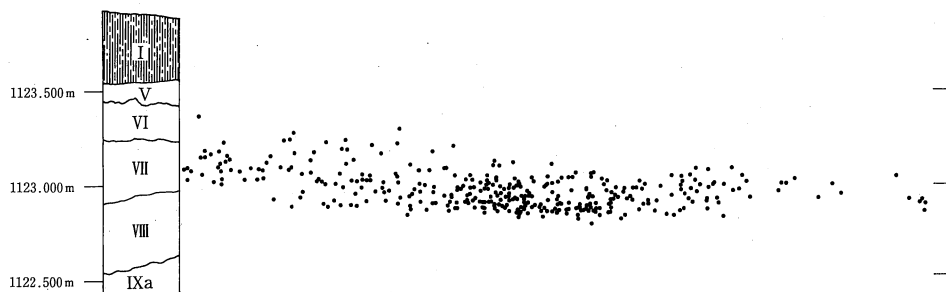
B・C-8~11区の範囲で、北西-南東の軸をもって長径約6.4mの規模が確認されているが、C-11区の西側未調査部分へと構成礫の分布は延びており、全容は把握されていない(第148図)。総数は564点で、総重量は42705.03gである。やや大形の礫が分布のほぼ中央に弧状に配列されたように検出されている。

〈構成礫の石質〉

構成礫564点の石質別内訳は、チャートが233点(41.3%)、砂岩が160点(28.4%)、安山岩が166点(29.4%)、その他5点(0.9%)とチャートの割合が多いが、完形礫45点に限ってみればチャート2点(4.4%)、砂岩(8.9%)、安山岩39点(86.7%)となり、安山岩の占める比率が突出することがわかる。一方、全体で最も点数の多いチャートは破碎礫519点に限ってみるとチャート231点(44.5%)、砂岩156点(30.0%)、安山岩127点(24.5%)、その他5点(1.0%)となり、破碎したチャートが点数比で多くを占めている。つまり、全体で最も点数の多いチャートは破碎した結果を示すデータといえる。

〈構成礫の遺存状態〉

構成礫564点の遺存状態別内訳は、A(完形礫)が29点(5.1%)、Bが19点(3.4%)、Cが27点(4.8%)、Dが76点(13.5%)、Eが395点(70.0%)となっている。消息不明の資料2点についてはデータを把握できなかった。完形礫では100g未満のものから構成礫中で最大の1444.90gのものまでである。一方、破碎礫は200g未満のものが471点(90.7%)と多数を占めているものの、500gを越えるものが11点含まれており、完形礫に匹敵する破碎礫といえる。ちなみに構成礫中で最大の1444.90gを量る礫や破碎礫中で最大の975.40gを量る礫は、いずれも安山岩である。完形・破碎の区別とは別に、前述したような安山岩を代表とする大形の礫は、構成礫の分布のほぼ中央に弧状に配列されたように存在する。



第151図 第7次発掘調査資料 第VII層文化層第1号礫群(1/40)

〈構成礫の被熱状態〉

構成礫564点中295点(52.3%)と半数以上に被熱に関わる赤色変化が観察された。特に遺存状態Eを除いた比較的大形の礫では、169点中129点(77.7%)と高い比率を示している。また、同時に被熱礫の多くには炭化物の付着物が認められる。被熱が認められる破碎礫の中でも200g以上の大形の礫は、構成礫の分布のほぼ中央に弧状を呈して存在している一方で、被熱の認められない大形の破碎礫は、その周辺に多い傾向がある。

〈構成礫の接合状態〉

礫群の範囲全域にわたって、構成礫相互の接合が認められる。特にC-10・11区内で完結する接合とB・C-8・9区内で完結する接合とが顕著に認められる。同時にC-10・11区とB・C-8・9区とを結ぶように接合する構成礫があり、一連の礫群と考える根拠になっている。また、第1号礫内で完結する接合の他に、第七層文化層第2号礫群の構成礫と接合する構成礫があり、同一文化層に帰属する礫群の共時性を傍証している。しかしながら、第VI層L文化層第1号礫群の構成礫や第VI層L文化層第3号礫群の構成礫と接合する構成礫が存在しており注意される。すなわち、構成礫の一部あるいは礫群全体の帰属について誤認定の可能性も考えられる。これまでも第七層文化層における石器ブロックと礫群の平面位置関係とそれぞれの検出層位を重視し、かつ接合する礫破碎片についてより新しい第VI層L文化層の礫群内に接合する礫破碎片のより大形の一方が残存することを根拠として、文化層を越える礫の持ち出し行為を想定している。

(3) 第3号礫群(第152図)(表15)

〈規模と形状〉

発掘区南西隅にあたるC-7区に小規模にひろがる破碎礫を中核としたまとまりである。長軸約1.4m、短軸0.6mの部分を検出しているが、土壤の自然科学的分析に用いる試料採取のために先行して精査を行った範囲で確認された礫群で、必ずしも今回の調査において他の区域と同じ精度で確認されていない。現状で把握されている限り、構成礫はすべて破碎礫であるが、ひじょうに濃密に分布している点に特徴がある。構成礫総数は90点、総重量は2432.32gである。

〈構成礫の石質〉

構成礫90点の石質別内訳を見ると、チャート63点(70.0%)、砂岩20点(22.2%)、安山岩7点(7.8%)となっている。構成礫がすべて破碎礫である点は第1号礫群や第2号礫群と大きく異なっている点であり、石質別内訳に見られるチャートの高い比率は直接的に礫群の特徴を示すものである。

〈構成礫の遺存状態〉

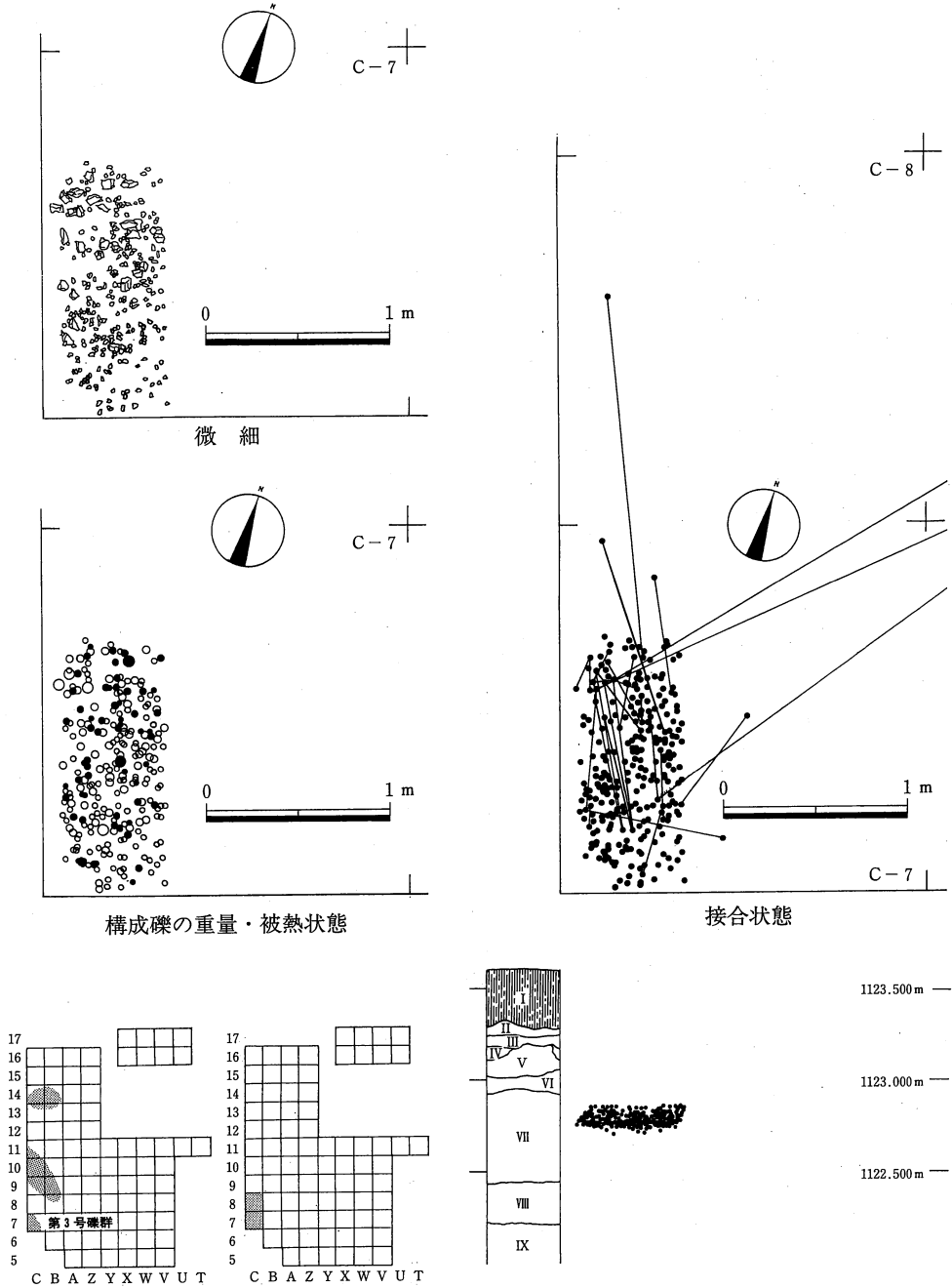
すでに触れたように構成礫90点の遺存状態別内訳では、A(完形礫)やBに分類されるものが存在せず、さらにCが2点(2.2%)、Dが9点(10.0%)と乏しくて、Eが79点(87.8%)

第2節 礫群の位置と内容

表15 第Ⅶ層文化層第3号礫群 構成礫諸属性

遺存度 (g)	A		B		C		D		E	
	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱	被熱	非熱
990-1000										
980-990										
970-980										
960-970										
950-960										
940-950										
930-940										
920-930										
910-920										
900-910										
890-900										
880-890										
870-880										
860-870										
850-860										
840-850										
830-840										
820-830										
810-820										
800-810										
790-800										
780-790										
770-780										
760-770										
750-760										
740-750										
730-740										
720-730										
710-720										
700-710										
690-700										
680-690										
670-680										
660-670										
650-660										
640-650										
630-640										
620-630										
610-620										
600-610										
590-600										
580-590										
570-580										
560-570										
550-560										
540-550										
530-540										
520-530										
510-520										
500-510										
490-500										
480-490										
470-480										
460-470										
450-460										
440-450										
430-440										
420-430										
410-420										
400-410										
390-400										
380-390										
370-380										
360-370										
350-360										
340-350										
330-340										
320-330										
310-320										
300-310										
290-300										
280-290										
270-280										
260-270										
250-260										
240-250										
230-240										
220-230										
210-220										
200-210										
190-200							1			
180-190										
170-180										
160-170										
150-160										
140-150										
130-140								1		
120-130						1	1	1		
110-120										
100-110										
90-100										1
80-90									1	1
70-80							1			1
60-70										1
50-60					1		1		4	5
40-50								1		1
30-40								2	3	6
20-30									4	13
10-20									5	34
0-10										
TOTAL	0	0	0	0	1	1	4	5	17	62

第V章 第VII層文化層



第152図 第7次発掘調査資料 第VII層文化層第3号群(1/40)

第3節 石器

と大多数を占めている。構成礫中最大のものは197.42gを量る砂岩であり、数少ない遺存状態Dの礫である。大多数は遺存状態と相関するように200g未満に収斂する。特に20g未満の礫が56点にのぼり、構成礫中62.2%を占める点は第2号礫群の際立った特徴といえよう。

〈構成礫の被熱状態〉

さらに被熱礫に関してみると、構成礫90点中わずか22点(24.4%)と低調である。石質別に被熱礫を数えると、チャート13点、砂岩7点、安山岩2点と一見チャートが多く見え、意図的にチャートへの加熱を図っているようにも見えるが、石質別被熱率に直すとチャート20.6%、砂岩35.0%、安山岩28.6%となって石質に関わらず、構成礫に均質な被熱を確認できる。実際にチャートが全体に占める比率の高いことに起因しているが、特にチャートの加熱を目的にしているわけではなさそうである。

〈構成礫の接合関係〉

構成礫の分布範囲全体にわたって接合が認められるが、接合する構成礫は少なく、破碎礫が礫原形にまで復元されることはない。第VII層文化層第1号礫群と同様に、第VI層L文化層第3号礫群の構成礫と接合する構成礫が存在しており注意される。(森一欽)

第3節 石器

第7次調査によって新たに追加された資料は、石器17点、剥片・碎片292点、合計309点である。本節における資料点数および提示資料は、第7次調査における検出資料のみに限定している。しかしながら、石器ブロックに関わる分析とその記載にあたっては、第4次調査報告(谷口・宮尾編 1995)に多くの点で依拠している。特に石器ブロック1については、大部分の資料が第4次調査で検出されたものであり、今回の検出資料にそれらを合わせて記載した。石器ブロックを含む石器群の分布状態とその内容についての詳細は、第4節に記載しているので参照されたい。

(1) 石器器種組成と石器石材

石器器種組成

今回新たに追加された資料は、石器17点、剥片・碎片292点、合計309点である。石器17点の器種別内訳は、ナイフ形石器2点、搔器1点、細部調整剥片2点、石刃7点である(表1・2)。

第VII層文化層の石器群は、第VI層M文化層や第VI層L文化層と同じくナイフ形石器を主体とするが、第VI層L文化層のように槍先形尖頭器を組成しない。また、ナイフ形石器自体に関しても、第VI層L文化層のナイフ形石器が石刃を素材のものが卓越していたのに対して、第VII層文化層では小形の不定形剥片を素材としたものが多数を占め、切出形に特徴がある(谷口・宮尾編 1995)。今回の調査で発見されたナイフ形石器の中にも同様の特徴を有するものがあり、

第VII層文化層の石器群の特徴の1つとして注意される。

石器石材

今回新たに追加された資料における石器石材を見ると、チャート271点、玻璃質安山岩20点、珪質頁岩12点、黒曜石3点、ホルンフェルス2点、砂岩1点である(表1・2)。第4次調査報告書(谷口・宮尾編 1995)に示された第VII層文化層の石器石材における選択傾向は、第V層文化層や第VI層M文化層、第VI層L文化層と同じくチャートが卓越するが、その一方で第V層文化層や第VI層L文化層と異なって黒曜石が稀少である点が注意されている。同時に2つの母岩別資料を得られるほどに玻璃質安山岩が存在し、特にそのうちの1つ、第VII層文化層母岩別資料1は、原礫面を多く残した大振りの石核を含むものであった。このように第VII層文化層においては玻璃質安山岩が第VI層L文化層に比べて高い頻度を示しており、大きな特徴となっている。今回新たに追加された資料に関しても、同様の傾向が認められるものの、新たに玻璃質安山岩の母岩別資料を分類するほどには検出されていない。今回の調査資料ではないが、玻璃質安山岩の母岩別資料2に含まれる大形の石核に見られる滑らかな原礫面は、これらの玻璃質安山岩が転石であることを示唆しており、開田高原には存在しない原石の入手先を検討する手掛かりとなろう。

(2) 石器

ここでは石器17点を提示し、器種別に記述する。石器器種組成で示した点数と一致していないのは、第7次発掘調査資料の中で図示しなかった石核が1点ある一方で、7年次の調査を通して得られた資料の中で母岩別資料分析を通して文化層を判断できたため、併せて提示したためである。なお、本文中の石器番号は図中の文化層別の通し番号であり、石器それぞれの各種計測値は巻末にまとめた出土グリッド登録番号順に配列した石器計測一覧を参照されたい。

ナイフ形石器 (第153図1・2)

ナイフ形石器は2点出土した。2点ともチャート製である。

1は石刃を素材とした右刃形の二側縁調整ナイフ形石器である。石刃を折断して形状を整えている。素材石刃の端部側を基部に、また素材石刃の鋭利な縁辺を刃部としている。素材石刃背面左側縁上部の折断面と右側縁下部に連続的で急斜度の調整、ブランディングが施されている。背面を構成する3枚の剥離面はいずれも腹面と同じ方向からの剥離によるものである。刃部には微細な剥離痕が観察される。石器ブロック1出土。

2は小形の不定形剥片を素材とした左刃形の基部調整ナイフ形石器である。素材剥片の頭部側を基部として、素材剥片背面から腹面に向かって調整は施される。そのため打面および打瘤付近は除去されている。素材剥片端部についても片側に腹面から背面に向かって浅い調整が施され、歪な切出形を呈する。背面を構成する2枚の剥離面はいずれも素材剥片の主要剥離面と腹面と大局的には同じ方向からの剥離による。石器ブロック4出土。

搔器 (第153図3)

搔器は玻璃質安山岩製のものが1点出土している。比較的大形で背面に原礫面を残す縦長剥片を素材とする。素材剥片背面端部に弧状の刃部を作出しているが、調整剥離は急斜度であるが浅い。他に腹面左側縁の一部にも調整が施されている。素材剥片の頭部側は背面→腹面方向に折断されている。背面に原礫面が多く残されており、剥片剥離工程初期に得られる剥片を素材としていることが窺われ、前述した玻璃質安山岩の母岩別資料1に見られるような拳大の河原石を持ち込み、素材剥片の剥離から石器製品の調整へといたる一連の工程が存在したことを推定させる。石器ブロック1出土。

細部調整剥片 (第153図4・5)

細部調整剥片は2点出土した。石材はともにチャート製である。

4はチャート製の分厚い縦長剥片である。細部調整は背・腹両面に施されている。まず背面に全周縁から大きな剥離面の調整を行い、次いで裏面の上部と右側縁下部から下端にかけて調整を行う。その後背面に戻り、左側縁を除く上端から下端にかけて微細な調整を連続的に施している。全体形状は楕円をなし、亀甲状を呈する。石器ブロック4出土。

5はチャート製の石刃状剥片で、先端部は節理面に沿って折損している。細部調整は左側縁の端部と左側縁中部には腹面→背面方向に、左側縁上部には背面→腹面方向に施されている。左側縁中部の調整は抉入状となっている。背面を構成する剥離面の右側縁側は右横方向からの剥離を示し、左側縁側は腹面と同じ上方向からの剥離であることから、90°打面転移が行われた石核から剥離されたものと考えられる。打面は複剥離面打面で微細な打面調整が施されている。石器ブロック1出土。

微細剥離痕を有する剥片 (第154図13)

チャート製のウートラパッセした石刃状剥片。単剥離面打面で、断面が三角形を呈している。背面は節理面、主要剥離面と同方向からの加撃した剥離面、断面を三角形にする稜からの加撃した剥離面から構成される。背面右側縁＝腹面左側縁全体に微細剥離痕が観察される。第7次調査で検出された資料ではないが、母岩別資料7に属し、石核と接合することから提示した。

石刃・石刃状剥片 (第153～154図6～12)

石刃・石刃状剥片は合計7点出土した。石材別内訳はチャート製6点、玻璃質安山岩製1点である。

6はチャート製の石刃である。背面を構成する3枚の剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるもので、端部には大きく原礫面が残されている。右側縁には微細な剥離痕が観察される。打面は複剥離面打面である。石器ブロック1出土。

7はチャート製の石刃である。背面を構成する剥離面は上下2方向からの剥離を示しており、両設打面石核から剥離されたことが分かる。打面は複剥離面打面である。石器ブロック1出土。

8はチャート製の石刃である。背面を構成する3枚の剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるもので、一部原礫面が残されている。打面は背面方向からの単剥離面打面である。石器ブロック1出土。

9はチャート製の石刃である。背面を構成する3枚の剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるものである。打面は右横方向からの単剥離面打面である。石器ブロック4出土。

10は玻璃質安山岩製の石刃状剥片で、下半部は腹面→背面方向に折断されている。背面を構成する3枚の剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離を示している。打面は背面方向からの単剥離面打面である。石器ブロック1出土。

11はチャート製の石刃状剥片で、下半部は腹面→背面方向に折損している。背面を構成する3枚の剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離を示している。打面は複剥離面打面である。母岩別資料7に属する。

12はチャート製の石刃である。背面を構成する剥離面はいずれも腹面と同じ上方向からの剥離によるもので、右側縁には一部原礫面が残されている。打面は背面方向からの単剥離面打面である。母岩別資料6に属する。石器ブロック4出土。

石核 (第155図14~17)

石核は4点出土した。石材はすべてチャート製である。

14はチャート製の単設打面石核である。原礫面が多く残され、その形状から角柱状のものを素材とした石核と思われる。上面に打面を形成し、図上の左側面から正面にかけてを作業面として石刃あるいは石刃状の縦長剥片を目的とした剥片剥離が行われている。母岩別資料6に属する。母岩別資料6に属する。石器ブロック4出土。

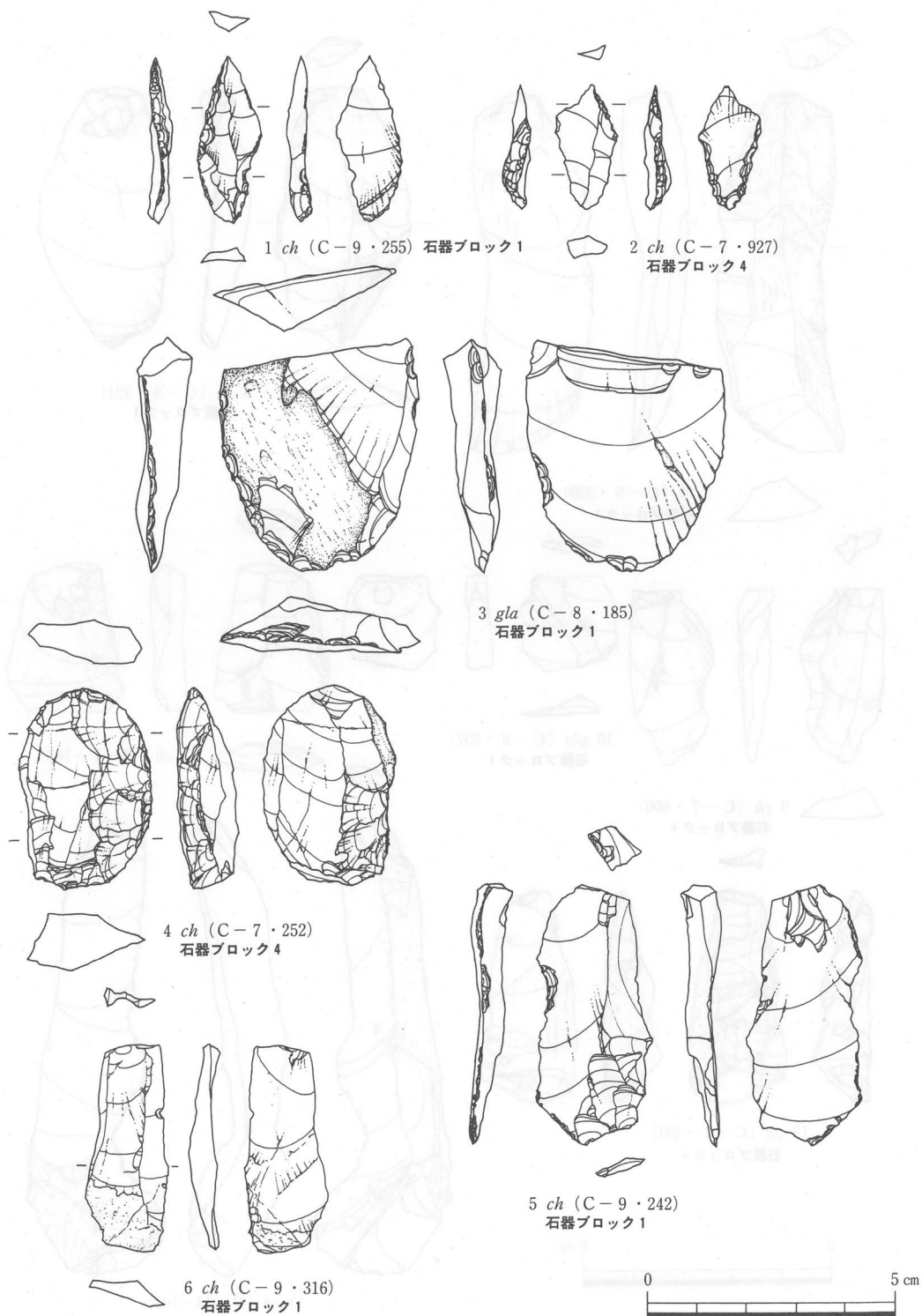
15はチャート製の単設打面石核である。作業面は図上の正面で、やや幅広の縦長剥片が剥離されている。石器ブロック4出土。

16はチャート製の単設打面石核である。扁平な三角錐状を呈し、剥片剥離工程の最終段階の残核と思われる。図上の裏面には原礫面が残され、正面から右側縁にかけてを作業面とし、やや幅広の縦長剥片が剥離されている。石器ブロック4出土。

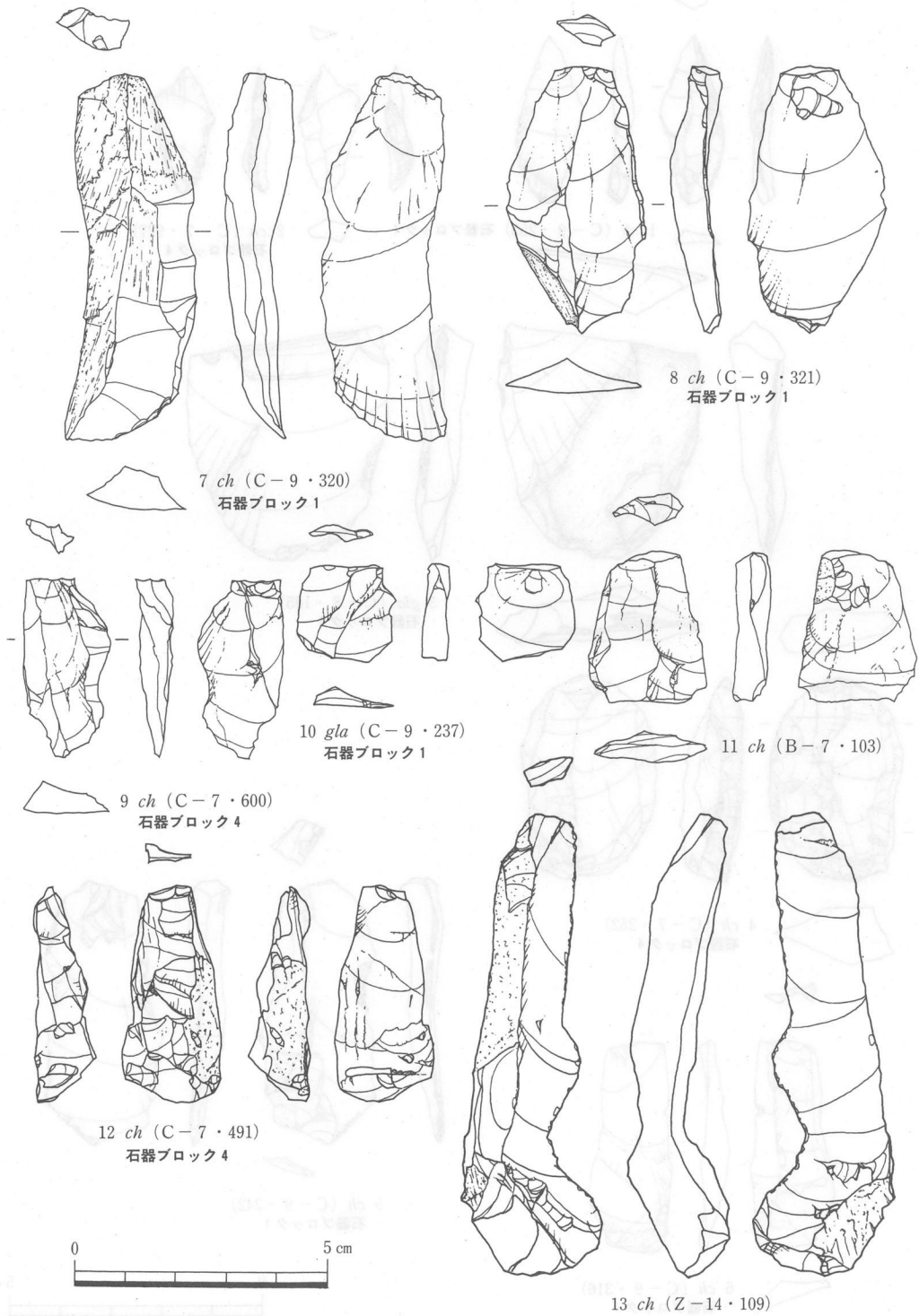
17はチャート製の両設打面石核である。図上の左側縁から裏面にかけて原礫面が残されている。作業面は図上の正面から右側縁にかけてで、幅広の不定形剥片あるいは縦長剥片が剥離されている。左側縁の下端には正面、裏面両側から石核整形を目的としたと思われる微細な調整が施されている。打面は正面方向からの単剥離面打面である。石器ブロック4出土。

(笠井洋祐)

第3節 石器

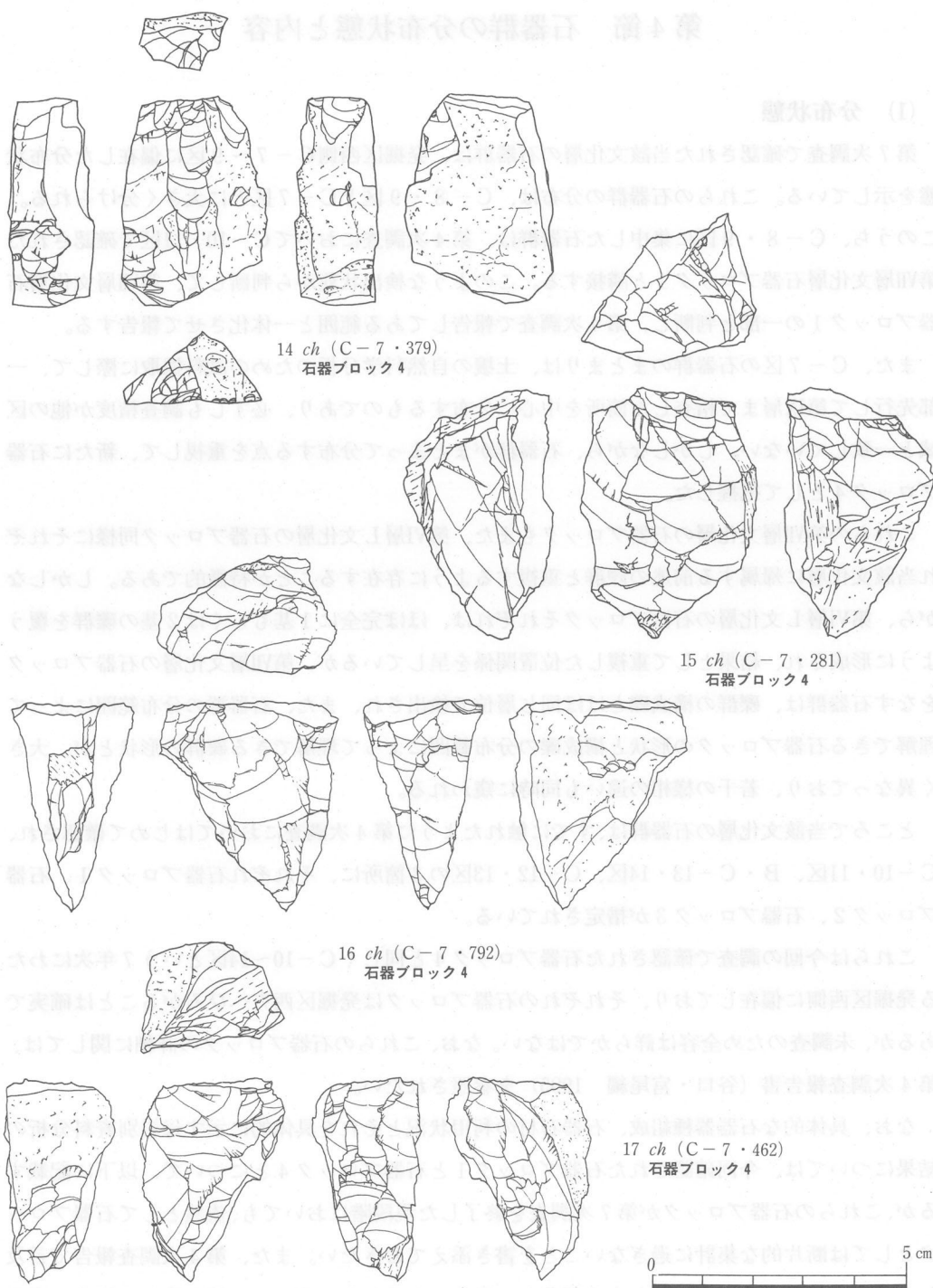


第153図 第7次発掘調査資料 第Ⅶ層文化層の石器(1)ナイフ形石器、搔器、細部調整剥片、石刃(3/4)



第154図 第7次発掘調査資料 第VII層文化層の石器(2)微細剝離痕を有する剥片、石刃、石刃状剥片(3/4)

第3節 石器



第155図 第7次発掘調査資料 第Ⅶ層文化層の石器(3)石核(3/4)

第4節 石器群の分布状態と内容

(1) 分布状態

第7次調査で確認された当該文化層の石器群は、発掘区西側C-7~9区に偏在した分布状態を示している。これらの石器群の分布は、C-8・9区とC-7区とに大きく分けられる。このうち、C-8・9区に集中した石器群は、第4次調査においてC-10・11区で確認された第VII層文化層石器ブロック1と隣接する。このような検出状態から判断して、第VII層文化層石器ブロック1の一部と判断し、第4次調査で報告してある範囲と一体化させて報告する。

また、C-7区の石器群のまとまりは、土壌の自然科学分析のための試料採取に際して、一部先行して第IX層まで精査した箇所を中心に分布するものであり、必ずしも調査精度が他の区域と一致していない。しかしながら、石器群がまとまって分布する点を重視して、新たに石器ブロック4として把握した。

これらの第VII層文化層の石器ブロックもまた、第VI層L文化層の石器ブロック同様にそれぞれ当該文化層に帰属する前述の礫群と重複するように存在することが特徴的である。しかしながら、第VI層L文化層の石器ブロックそれぞれは、ほぼ完全に1基もしくは2基の礫群を覆うように形成され、結果として重複した位置関係を呈しているが、第VII層文化層の石器ブロックをなす石器群は、礫群の構成礫とほぼ同じ層位で検出され、また、石器群の分布範囲によって理解できる石器ブロックの形状と構成礫の分布範囲によって理解できる礫群の形状とが、大きく異なっており、若干の様相の違いも同時に窺われる。

ところで当該文化層の石器群は、すでに触れたように第4次調査においてはじめて確認され、C-10・11区、B・C-13・14区、C-12・13区の3箇所、それぞれ石器ブロック1、石器ブロック2、石器ブロック3が指定されている。

これらは今回の調査で確認された石器ブロック4と同じくC-10~14区という7年次にわたる発掘区西側に偏在しており、それぞれの石器ブロックは発掘区西方へひろがることは確実であるが、未調査のため全容は詳らかではない。なお、これらの石器ブロックの詳細に関しては、第4次調査報告書(谷口・宮尾編 1995)を参照されたい。

なお、具体的な石器器種組成、石器石材の利用状況とそれを具体的に示す母岩別資料分析の結果については、今回確認された石器ブロック1と石器ブロック4とについて、以下に記載するが、これらの石器ブロックが第7次調査を終了した現段階においても、依然として石器ブロックとしては断片的な集計に過ぎないことを書き添えておきたい。また、第4次調査報告で言及した内容について訂正を必要とする部分と、ほとんどそれらのデータに読み取れる傾向に変化のない部分とがある。

(2) 石器ブロック1

〈規模と形状〉

第7次調査によって、C-8~11区を中心にひろがる石器群の分布が明らかになった(第156図)。石器47点、剥片・碎片419点の合計466点から構成され、総重量は3162.11gである(表16~18)。すでに触れたとおり発掘区西方へひろがることは確実であるが、未調査のため全容は詳らかではないが、確認されている範囲内ではC-10区を中心に直径約6m程度の規模で、ほぼ半円形状に石器群が分布する。第4次調査で報告したC-10・11区に比べて、第7次調査で判明したC-8・9区は分布が粗笨であるために、石器ブロック北側に分布が濃密で、石器ブロック南側に分布が散漫なようすが見て取れる。

石器器種別に見た場合も、第4次調査で報告したC-10・11区に密集するように各石器器種が存在し、特に敲石を中心に石刃・石刃状剥片、石核・石核素材等は取り巻くような分布状況を呈する点では、状況に変化はない。なお、第1号礫群と形成場所が重複するが、第1号礫群が今回の調査でB・C-8・9区へ直線的に延伸したのに対して、石器ブロック1はC-8・9区へ環状にひろがっており、重複する部分と重複しない部分のあることがわかる。畢竟、石器群の分布範囲からなる石器ブロック1の平面形状と、第1号礫群を構成する礫の分布範囲からなる平面形状は、大幅に異なっている。この点では同様に礫群と重複する関係にある第VI層L文化層の石器ブロックと礫群とに見られる形成場所の重複状態とは、若干様相を違えている。

〈石器器種組成〉

石器47点、剥片・碎片419点の合計466点から構成される。石器の器種別内訳を見ると、ナイフ形石器8点(その中で3点が接合して1点のナイフ形石器を復元する)、彫器削器1点、搔器1点、楔形石器1点、細部調整石刃3点、細部調整剥片4点、石刃15点、石刃状剥片6点、石核6点、素材1点、敲石1点となっている。特筆すべき点は、第4次調査では組成していなかった搔器1点に加わったことであろう。他に今回の調査では、ナイフ形石器1点、細部調整剥片1点、石刃4点に加わっている。なお、第VI層L文化層で組成する槍先形尖頭器は、石器ブロック1に限らず、当該文化層では確認されていない。

石器ブロック1の石器器種組成には、ナイフ形石器のような狩猟具、搔器や彫器削器、細部調整石刃・剥片のような加工用具有り、同時にその生産に必要な石核・石核素材や敲石が存在する点に特徴がある。このような点から第4次調査では石器ブロック1を、石器製作の素材となる石刃・石刃状剥片等を含む剥片剥離から各石器器種への調整にいたる石器生産の場であっただけではなく、その着柄等の作業場としても機能したことが示唆されている。

〈母岩別資料分析〉

今回の調査で新たに把握された母岩別資料はなく、石器ブロック1に関連しての新知見はない。すでに第4次調査の報告で述べられているように5つの母岩、母岩別資料1、2、3、5、

第V章 第VII層文化層

表16 第VII層文化層石器ブロック1 石器器種別石材別点数

単位=点

器種	チャート	黒曜岩	玻璃質安山岩	珪質頁岩	凝灰岩	凝灰岩質頁岩	安山岩	ホルンフェルス	総計
ナイフ形石器	3	0	5	0	0	0	0	0	8
楔形石器	0	1	0	0	0	0	0	0	1
石刃	15	0	0	0	0	0	0	0	15
石刃状剥片	5	0	1	0	0	0	0	0	6
石核	2	0	4	0	0	0	0	0	6
細部調整石刃	1	0	1	0	0	1	0	0	3
彫器削器	0	0	1	0	0	0	0	0	1
搔器	0	0	1	0	0	0	0	0	1
素材	1	0	0	0	0	0	0	0	1
敲石	0	0	0	0	0	0	1	0	1
細部調整剥片	2	0	2	0	0	0	0	0	4
剥片	295	10	85	0	1	0	1	6	398
碎片	13	0	5	2	0	0	1	0	21
総計	337	11	105	2	1	1	3	6	466

表17 第VII層文化層石器ブロック1 石器器種別石材別重量

単位=g

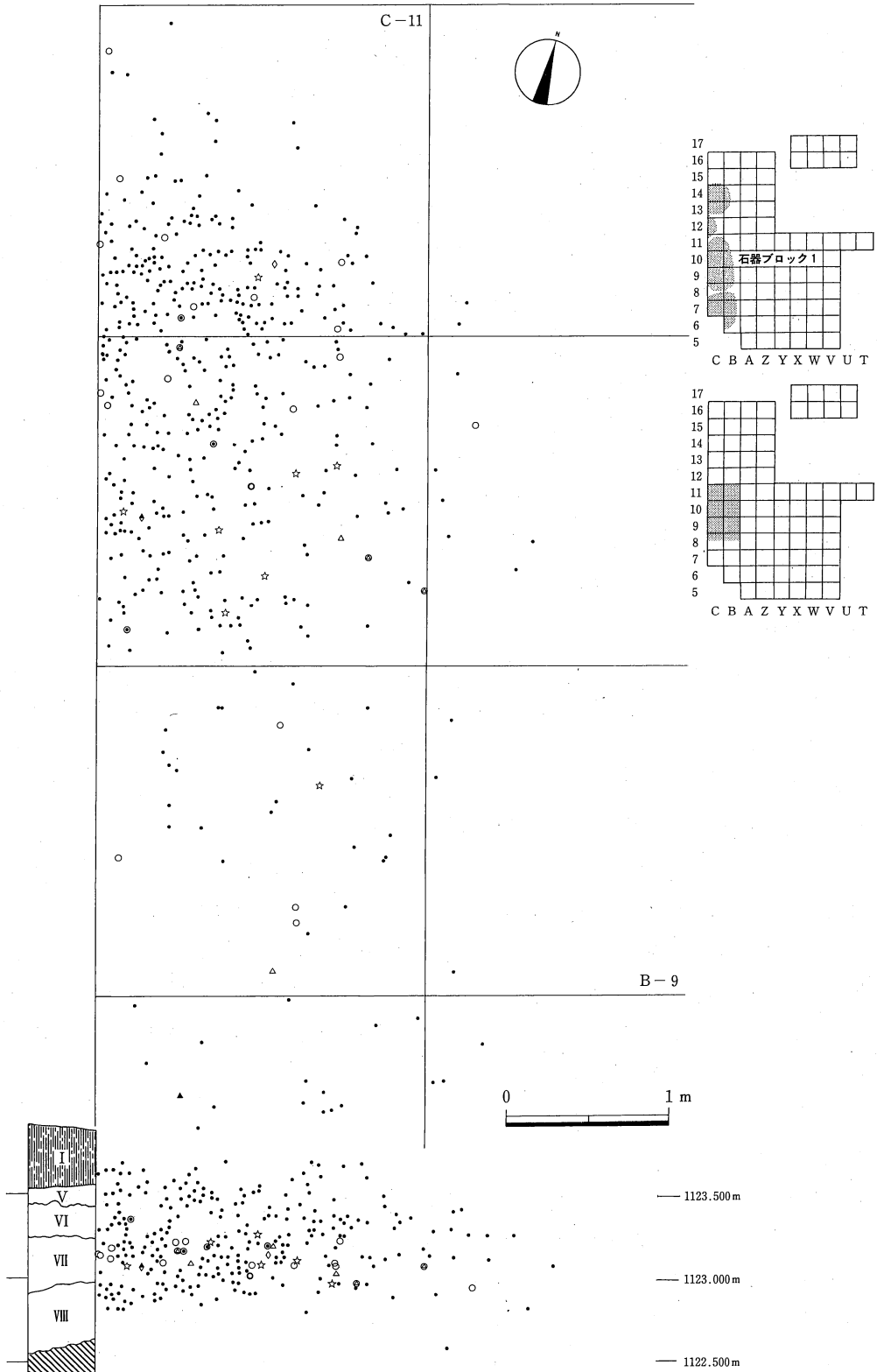
器種	チャート	黒曜岩	玻璃質安山岩	珪質頁岩	凝灰岩	凝灰岩質頁岩	安山岩	ホルンフェルス	総計
ナイフ形石器	5.53	0.00	11.78	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	17.31
楔形石器	0.00	2.71	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.71
石刃	126.61	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	126.61
石刃状剥片	45.80	0.00	1.64	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	47.44
石核	58.24	0.00	795.80	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	854.04
細部調整石刃	7.49	0.00	2.31	0.00	0.00	7.45	0.00	0.00	17.25
彫器削器	0.00	0.00	39.35	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	39.35
搔器	0.00	0.00	15.80	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	15.80
素材	64.71	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	64.71
敲石	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	989.40	0.00	989.40
細部調整剥片	8.53	0.00	49.42	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	57.95
剥片	794.77	7.31	105.61	0.00	2.92	0.00	0.96	8.38	919.95
碎片	8.83	0.00	0.13	0.45	0.00	0.00	0.18	0.00	9.59
総計	1120.51	10.02	1021.84	0.45	2.92	7.45	990.54	8.38	3162.11

表18 第VII層文化層石器ブロック1 石器器種別石材別割合

単位=%

器種	チャート	黒曜岩	玻璃質安山岩	珪質頁岩	凝灰岩	凝灰岩質頁岩	安山岩	ホルンフェルス	総計
ナイフ形石器	0.64%	0.00%	1.07%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	1.72%
楔形石器	0.00%	0.21%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.21%
石刃	3.22%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	3.22%
石刃状剥片	1.07%	0.00%	0.21%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	1.29%
石核	0.43%	0.00%	0.86%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	1.29%
細部調整石刃	0.21%	0.00%	0.21%	0.00%	0.00%	0.21%	0.00%	0.00%	0.64%
彫器削器	0.00%	0.00%	0.21%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.21%
搔器	0.00%	0.00%	0.21%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.21%
素材	0.21%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.21%
敲石	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.21%	0.00%	0.21%
細部調整剥片	0.43%	0.00%	0.43%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.86%
剥片	63.30%	2.15%	18.24%	0.00%	0.21%	0.00%	0.21%	1.29%	85.41%
碎片	2.79%	0.00%	1.07%	0.43%	0.00%	0.00%	0.21%	0.00%	4.51%
総計	72.32%	2.36%	22.53%	0.43%	0.21%	0.21%	0.64%	1.29%	100.00%

第4節 石器群の分布状態と内容



第156図 第7次発掘調査資料 第VII層文化層石器ブロック1 分布(1/40)

6が石器ブロック1には含まれている。このうち石核を含む母岩別資料2（玻璃質安山岩）は、石器ブロック1に限定的に存在し、他の石器ブロック等には全く分布しない。一方、その他の母岩別資料は、石器ブロック2・石器ブロック3やブロック外にも分布する。母岩別資料1（玻璃質安山岩）は、石器ブロック1・石器ブロック2・石器ブロック3の三者に含まれているが、母岩別資料3（チャート）はB-16区出土の石核を介して、石器ブロック2内の剥片や石核と接合する資料がある。母岩別資料5（チャート）は石器ブロック2に分布する他にA-13区に接合資料が存在する（第147図）。母岩別資料6（チャート）はA-14区に接合資料が存在するうえに、Z-12・13区にも別の独立した接合資料が見られる。石器ブロック1に内包されるこれらの母岩別資料の分布状況は、石器ブロック1内部の石器器種組成や石器・剥片の分布状況から推察される場の機能が追認される。同時に複数の石器ブロックにまたがる母岩別資料の分布状況は、当該文化層の三箇所石器ブロックの関係を検討する根拠となろう。このような石器ブロック相互で、あるいはブロック外と母岩が共有される背景についての総合的な考察は、発掘調査途上でもあり、検討の基礎となる石器ブロックが暫定的なものに過ぎず、また母岩別資料も断片的なため、今後の課題といえよう。

〈石器石材〉

石器石材の内訳は、チャート337点（72.32%）、黒曜石11点（2.36%）、玻璃質安山岩105点（22.53%）、珪質頁岩2点（0.43%）、凝灰岩1点（0.21%）、凝灰岩質頁岩凝灰岩1点（0.21%）、安山岩3点（0.64%）、ホルンフェルス6点（1.29%）である。他の文化層における石器石材のあり方同様に、チャートが圧倒的多数を占める。しかしながら、点数比の上位3つの石器石材について、総重量を算出するとチャート1120.51g、玻璃質安山岩1021.84g、黒曜石10.02gとなり、チャートと玻璃質安山岩とは拮抗した量比を示すことが理解される。第4次調査で検出された玻璃質安山岩製の石核（母岩別資料2）が、389.53gを量る原礫に近い大形なものであることに、玻璃質安山岩の総重量が多くなることの一因は求められるが、石器石材に玻璃質安山岩の占める量比が大きい状態は、第VI層L文化層以降の石器群では見られない傾向であり、当該文化層の石器石材の特徴になろう。なお、このような石器石材の利用状況は、第4次調査報告でまとめられた傾向を逸脱するものではない。

(3) 石器ブロック4

〈規模と形状〉

C-7区を中心にB・C-7・8区にひろがり、直径約3mの不整形形状を呈する（第157図）。石器10点、剥片・碎片180点の合計190点から構成され、総重量は561.86gである（表19～20）。第7次調査の発掘区南西隅にあたり、発掘区南西に若干のひろがり予想される。土壌の自然科学分析のための試料採取に際して、一部先行して第IX層まで精査した箇所を中心に分布するものであり、必ずしも調査精度が他の区域と一致していない。石器ブロック4よりも小規模で、

第4節 石器群の分布状態と内容

表19 第Ⅶ層文化層石器ブロック4 石器器種別石材別点数

単位=点

器種	チャート	玻璃質 安山岩	珪質 頁岩	総計
ナイフ形石器	1	0	0	1
石刃	2	0	0	2
石刃状剥片	1	0	0	1
石核	5	0	0	5
細部調整剥片	1	0	0	1
剥片	61	1	0	62
碎片	111	4	3	118
総計	182	5	3	190

表20 第Ⅶ層文化層石器ブロック4 石器器種別石材別重量

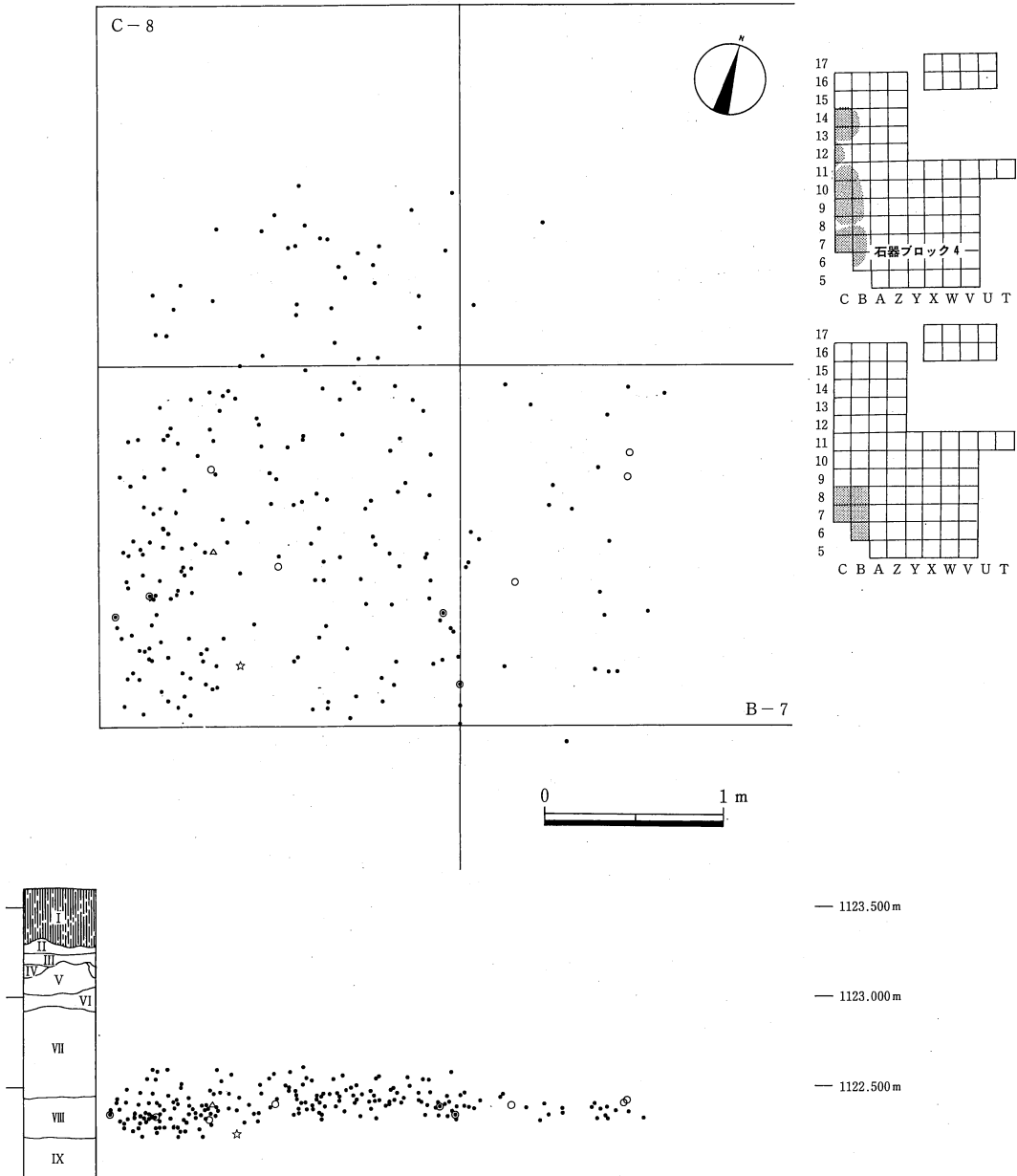
単位=g

器種	チャート	玻璃質 安山岩	珪質 頁岩	総計
ナイフ形石器	1.14	0.00	0.00	1.14
石刃	12.43	0.00	0.00	12.43
石刃状剥片	5.49	0.00	0.00	5.49
石核	143.66	0.00	0.00	143.66
細部調整剥片	15.08	0.00	0.00	15.08
剥片	258.71	11.40	0.00	270.11
碎片	112.43	0.72	0.80	113.95
総計	548.94	12.12	0.80	561.86

表21 第Ⅶ層文化層石器ブロック4 石器器種別石材別割合

単位=%

器種	チャート	玻璃質 安山岩	珪質 頁岩	総計
ナイフ形石器	0.53%	0.00%	0.00%	0.53%
石刃	1.05%	0.00%	0.00%	1.05%
石刃状剥片	0.53%	0.00%	0.00%	0.53%
石核	2.63%	0.00%	0.00%	2.63%
細部調整剥片	0.53%	0.00%	0.00%	0.53%
剥片	32.11%	0.53%	0.00%	32.63%
碎片	58.42%	2.11%	1.58%	62.11%
総計	95.79%	2.63%	1.58%	100.00%



第157図 第7次発掘調査資料 第VII層文化層石器ブロック4 分布(1/40)

構成礫の分布範囲からなる平面形状が異なる第3号礫群と重複する位置関係にあるが、同様に礫群と重複する関係にある第VI層L文化層の石器ブロックと礫群とに見られる形成場所の重複状態とは、若干様相を違えている。

〈石器器種組成〉

石器10点、剥片・碎片180点の合計190点から構成される。石器の器種別内訳は、ナイフ形石器1点、細部調整剥片1点、石刃2点、石刃状剥片1点、石核5点である。器種組成は貧弱であるが、石器ブロック1と同様にナイフ形石器を組成する。石器ブロック4に組成するナイフ形石器は、すでに述べられている第VII層文化層に特徴的な小形の不定形剥片を素材とし、歪ながら切出形を呈した基部調整を施したものである。また、石核が突出して多数組成している点は石器ブロック4の石器器種組成上の特色となっている。この点を積極的に評価すれば、剥片剥離工程の具体的な場として機能した結果、残核が大量に残された状態といえるかもしれないが、言及できるだけの資料内容をもっていない。

〈母岩別資料分析〉

母岩別資料3（チャート）と母岩別資料6（チャート）とが含まれている。ただし、どちらの母岩別資料に関しても、接合資料はブロック内で完結しており、積極的に他の石器ブロックとの関係を示していない。同一母岩であることに基づいて、石器ブロック相互の関係を理解しようとするれば、第4次調査と第5次調査、そして今回の第7次調査を通じて明らかとなった石器ブロック1、石器ブロック2、石器ブロック3と、石器ブロック4の共時性と、同時に母岩を共有する複数の場の関係を推定できる。それぞれが断続的な接合資料であるために、具体的に剥片剥離工程に則して評価できないことは遺憾である。

〈石器石材〉

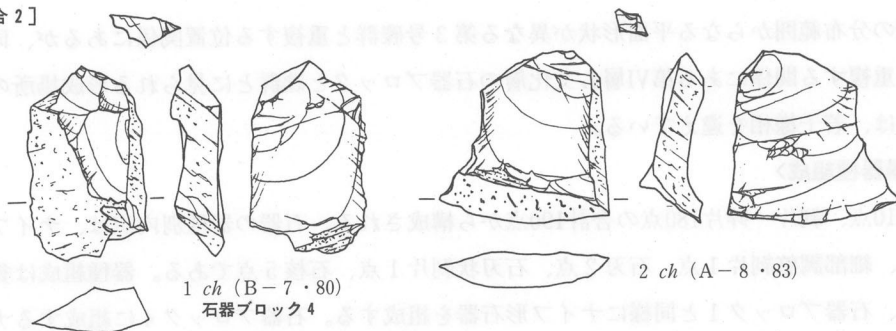
石器石材の内訳はチャート182点（95.79%）、玻璃質安山岩5点（2.63%）、珪質頁岩3点（1.58%）である。石器ブロック1同様にチャートが多数を占める。各石器石材の総重量を算出してみてもチャート548.94g、玻璃質安山岩12.12g、珪質頁岩0.58gであり、チャートが圧倒的に多い。なお、点数比に対して玻璃質安山岩の総重量が多い点は、当該文化層全般にわたる特徴となっている。

（千葉博俊）

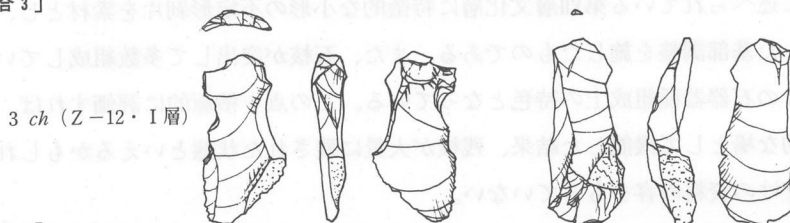
第5節 母岩別資料と剥片剥離技術

これまでに7つの母岩別資料を第VII層文化層に関しては報告している。第7次調査において実施した母岩別資料分析では、新たに母岩別資料を把握することはなかったが、既報告の3つの母岩別資料、すなわち、第4次調査で報告した母岩別資料3と母岩別資料6と、第5次調査で報告した母岩別資料7とについて、新たにそれらの同一母岩に属する資料を追加した。

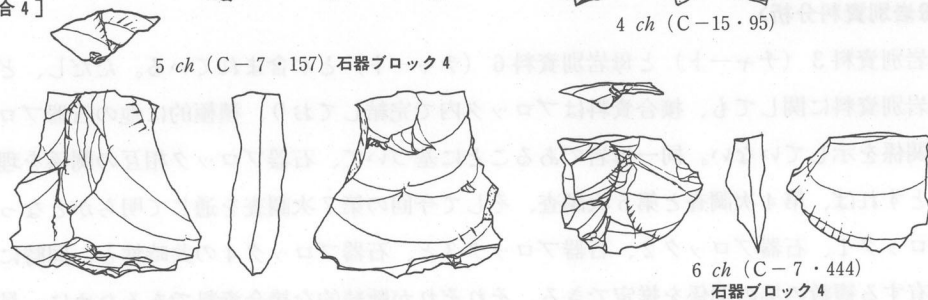
[接合 2]



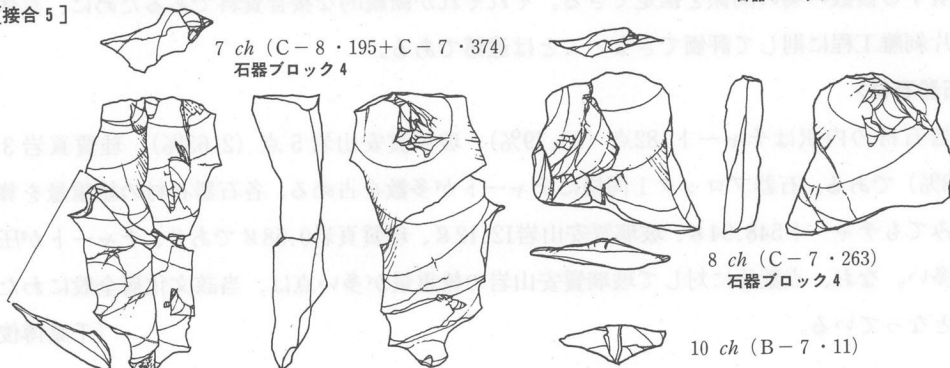
[接合 3]



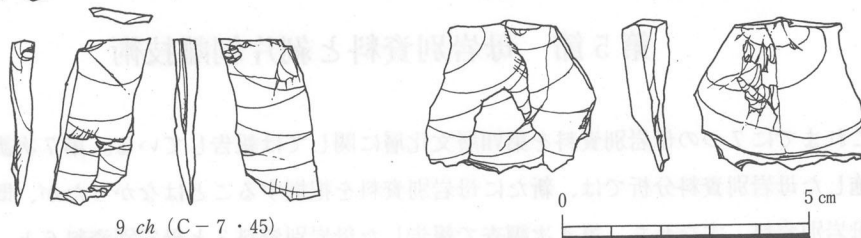
[接合 4]



[接合 5]

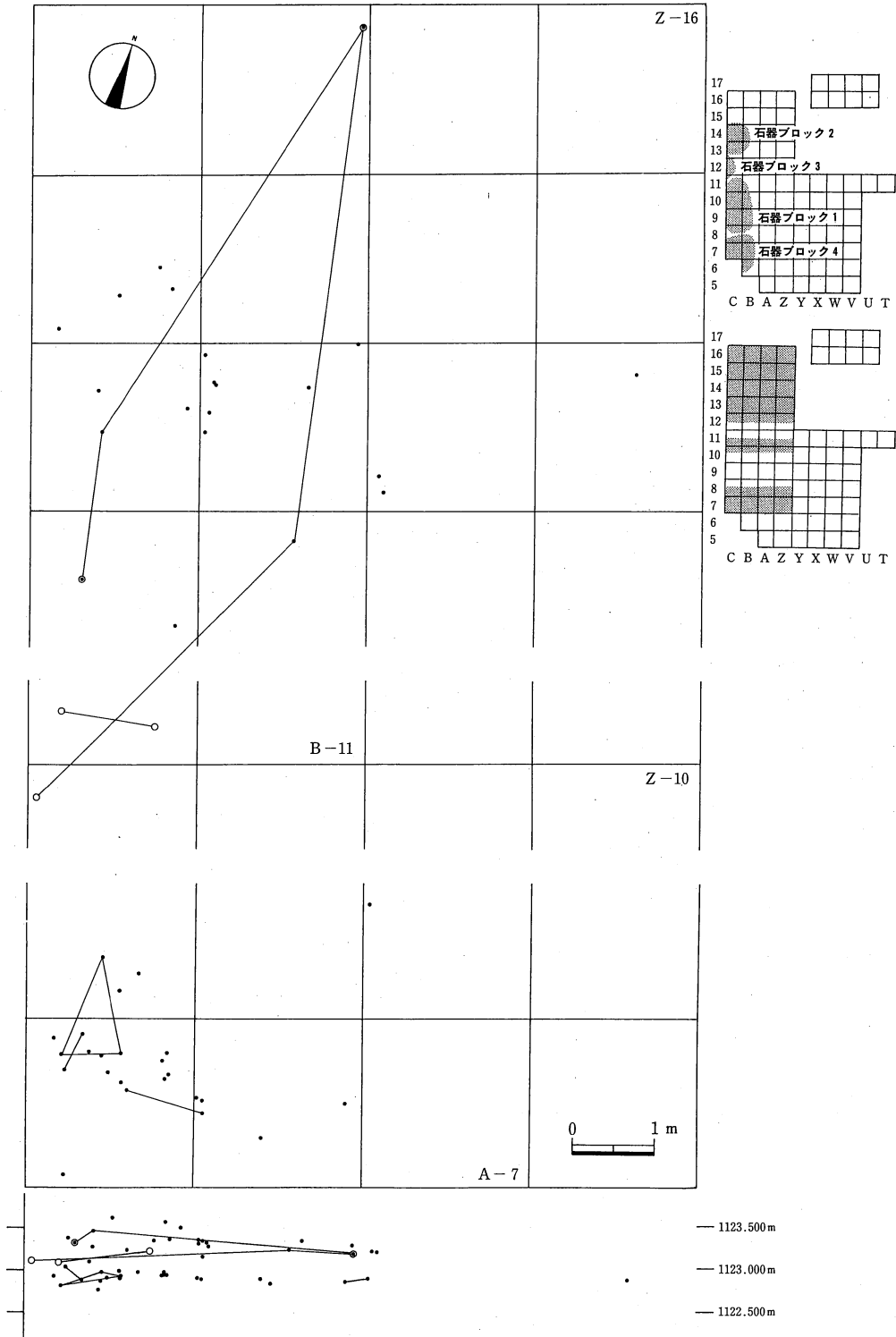


[接合 6]



第158図 第7次発掘調査資料 第七層文化層母岩別資料 3 (2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



第159図 第7次発掘調査資料 第Ⅶ層文化層母岩別資料3：分布(1/80)

各母岩別資料で旧知の接合資料に関わる接合事例はないが、それらとは別個に接合する事例があり、これらについて本報告書に提示する次第である。そのために第4次調査報告書(谷口・宮尾編 1995)や第5次調査報告書(小林・宮尾編 1996)で提示してある母岩別資料それぞれの詳細に関しては、前書を参照されたい。

なお、第4次調査報告書や第5次調査報告書において提示されている各母岩別資料が一連の接合資料の場合、それらを接合1とみなして、本報告書に提示する接合資料各個には接合2以降の接合番号を付してある。対して前書で提示されている各母岩別資料の中で複数の接合資料があり、それらに個体番号などの付されている場合でも、剥片剥離工程上に明確な個体分割の復元できない接合資料それぞれについては、個体番号を接合番号に読み替えて、それらに続くように接合資料各個に接合番号を付してある。前者には母岩別資料3と母岩別資料7とがあり、後者には母岩別資料6がある。

すなわち、母岩別資料3には接合2から接合6までの相互に接合しない5つの接合資料があり、母岩別資料7には接合2から接合4までの相互に接合しない3つの接合資料があり、母岩別資料6では接合3から接合7までの相互に接合しない5つの接合資料がある。

また、以上のようにして本報告書に提示した接合資料をなす石器それぞれには、各母岩別資料毎に通し番号を付してあるが、第4次調査報告書や第5次調査報告書において提示されている各母岩別資料の通し番号とは独立しているので注意されたい。

(1) 母岩別資料3 (第158~159図)

石材 チャート。

石質 均質かつ緻密で比較的良質であるが、節理も多く破碎しやすい。割口は貝殻状断口を呈する。色調は青灰色で縞状の濃淡がある。

素材 ラグビーボール状の川原石を分割し、それぞれを石核素材としている。

資料 接合2から接合6までの相互に接合しない5つの接合資料を提示してある。

[接合2] 1・2の縦長剥片2点からなる。2の背面に1の腹面が接合する。同一の複剥離面打面から連続的に剥離された剥片である。1・2ともに背面に原礫面や節理面を残す。さらに1の背面には、右側方からの調整剥離や1の剥片剥離に伴う頭部調整が認められ、素材原石からの剥片剥離工程最初期に位置する資料であることがわかる。

[接合3] 3・4の縦長剥片2点からなる。3の背面に4の腹面が接合する。4の剥片剥離後に打面の更新がなされ、3の剥片剥離の行なわれたようすを示す資料である。4は単剥離面の点打面、3は複剥離面打面である。

[接合4] 5・6の縦長剥片が3つ以上に折断された碎片の中の2点からなる。5の腹面端部にみえる折断面に6が接合する。剥片剥離にかかる頭部付近は検出されていないが、5と6の接合した状態を見ると、剥片端部付近で大きく屈曲しており、剥片剥離に際してウートラパッ

せしているようすを窺わせる。折断方向はいずれも背面→腹面方向を示している。

[接合5] 7・8の縦長剥片2点からなる。7・8ともに背面→腹面方向に折断しており、7は検出時には2点に折断していた資料の接合したものである。なお、8の端部は検出されていない。8の背面右の剥離面に7の腹面が接合し、7と8との間に最低2枚の剥片剥離があり、7の単剥離面打面から8の複剥離面打面へと打面の更新が行われているようすが理解できる。

[接合6] 9・10の剥片2点からなる。10の背面右に9の腹面が接合する。9と10との接合によって、同一の複剥離面打面から連続的に剥片剥離されたようすが理解できる。9は剥片剥離に伴って縦割れした剥片半分のみが検出されたものである。また、10の腹面端部に見られる折断面は5 [接合4] と類似しており、5+6 [接合4] 同様にウートラパッセした剥片の端部の欠落した剥片であろう。

接合資料と剥片剥離工程 第4次調査で報告した接合資料 [接合1] は、2個体に分割して行なわれた剥片剥離工程を示し、個体分割以前の状態にまで復元できるものであった (谷口・宮尾編 1995)。第7次調査で報告する接合2から接合6までの相互に接合しない5つの接合資料は、いくつかの連続的に剥片剥離を理解できるが、第4次調査で復元した剥片剥離工程に具体的に則して説明することのできない断片的なものである。

分布 資料の総数は46点である。すでに第4次調査報告書に石器ブロック1・石器ブロック2に多くが分布することが指摘され、ブロック外への接合資料の拡散も注目されている。第7次調査で追加した資料の大部分は石器ブロック4に分布し、石器ブロック1や石器ブロック2と石器ブロック4の相互の関連を示唆している。

しかしながら、今回報告した接合資料はこれらの石器ブロックを越えて確認されたものではなく、いずれも石器ブロック4に限定されているため、第4次調査報告書と同じく個体分割や各個体からの剥片剥離の場を特定することに寄与していない。

(2) 母岩別資料6 (第160・161図)

石材 チャート。

石質 緻密かつ比較的均質であるが、節理が多く不規則な割れや折れが生じている。色調は青灰色であるが、部分的に暗灰色を縞状に含む。

素材 河原石を少なくとも3つ以上に分割し、それぞれを石核素材としている。

資料 接合3から接合7までの5つの相互に接合しない接合資料を提示してある。

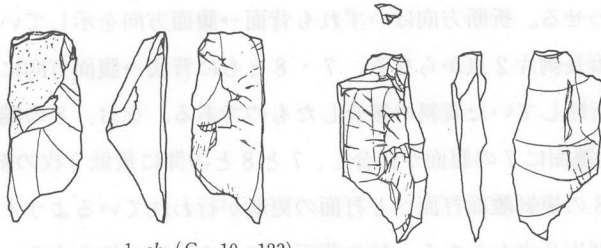
[接合3] 1・2の剥片2点からなる。

2の背面に1の腹面が接合する。1と2の接合によって、90°打面転位した剥片剥離が理解できる。1は背面の一部を節理面が占める。1・2ともに第4次調査で検出された資料が接合したものである。

[接合4] 3・4の剥片2点と5の石核1点とからなる。

第V章 第七層文化層

[接合 3]

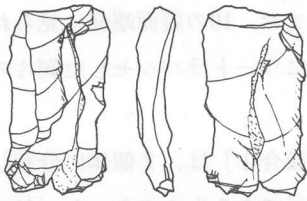


1 ch (C-10・123)

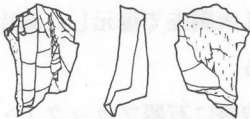
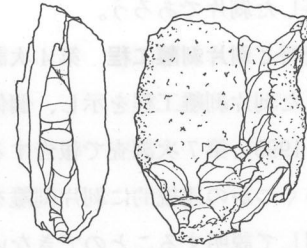
2 ch (C-10・224)

[接合 4]

3 ch (C-8・159)

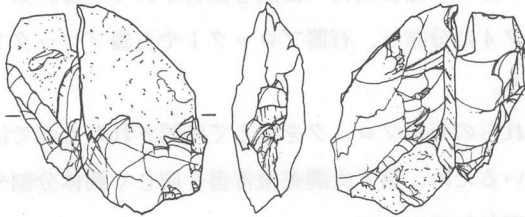


5 ch (C-10・235)
石器ブロック1
(第4次報告54)



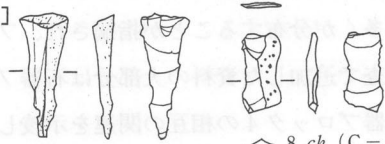
4 ch (C-9・189)
石器ブロック1

[接合 5]



6 ch (C-11・338+C-10・420)
石器ブロック1

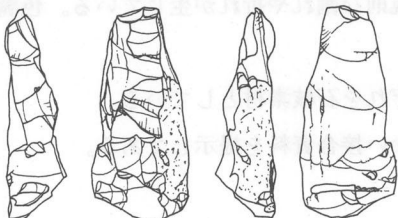
[接合 6]



7 ch (C-9・161)

8 ch (C-9・123)

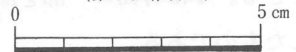
[接合 7]



9 ch (C-7・491)
(第7次報告12)

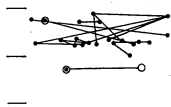
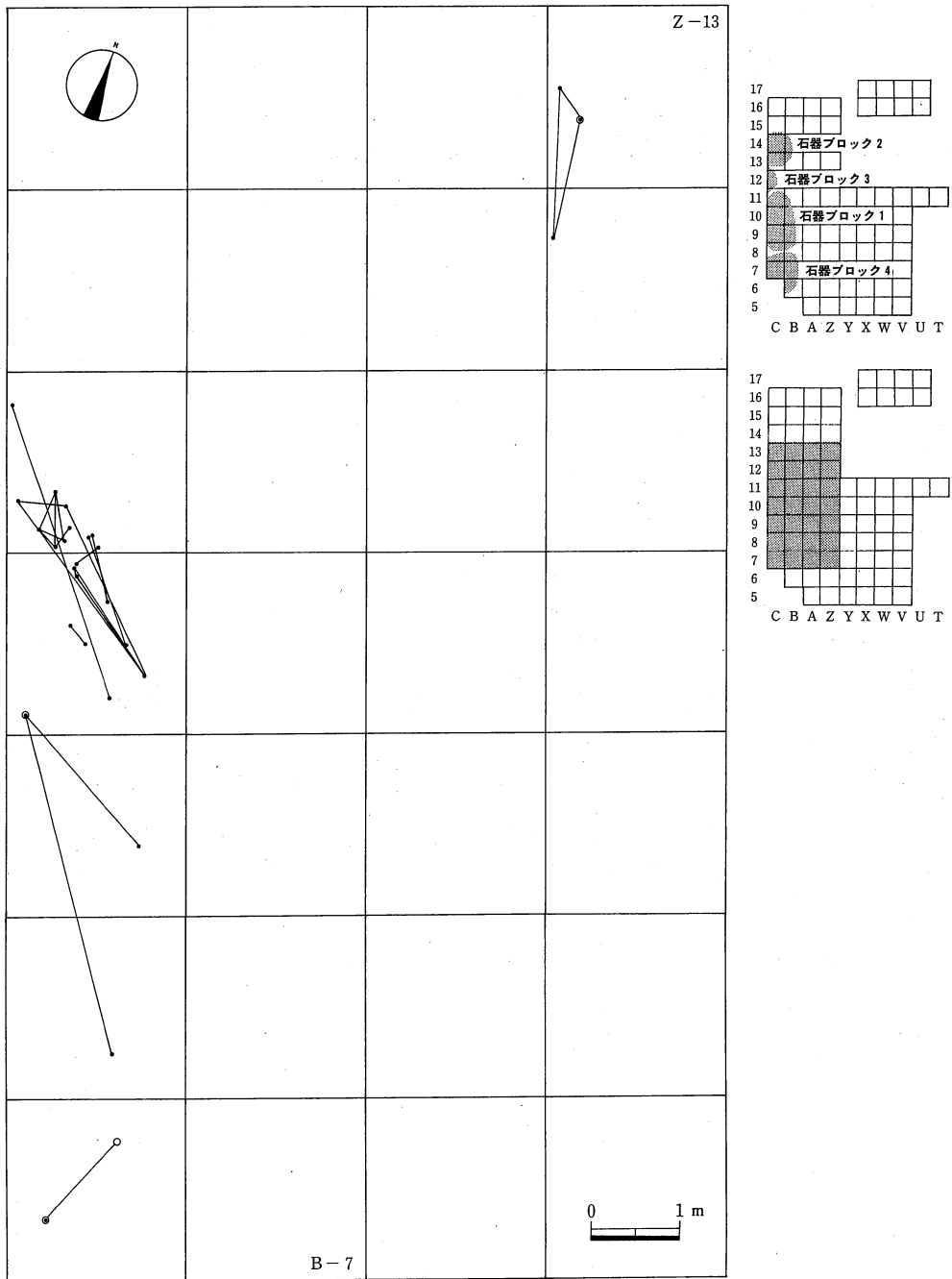


10 ch (C-7・379)
石器ブロック4
(第7次報告14)



第160図 第7次発掘調査資料 第七層文化層母岩別資料6 (2/3)

第5節 母岩別資料と剥片剥離技術



— 1123.500m
 — 1123.000m
 — 1122.500m

第161図 第7次発掘調査資料 第Ⅶ層文化層母岩別資料6：分布(1/80)

剥片3・4それぞれの主要剥離面が石核5の作業面に接合する。3は縦長剥片と考えられるが、頭部が背面→腹面方向の加撃で折損している。4は接合状態から3の剥片剥離に伴って、節理面に沿って剥落したものと考えられる。5は第4次調査で報告されている単剥離面で構成される単設打面石核である。裏面が原礫面で構成され、正面のみを作業面とする第VII層文化層に特徴的に見られる剥片剥離を示している。しかしながら接合資料はひじょうに断片的であるため、具体的な剥片剥離工程を復元し得ない。

〔接合5〕 6として図示した背面の多くを節理面が占める剥片。中央部の節理面に沿って剥片剥離の際に縦割れした碎片が接合する。腹面と背面を構成する剥離面の加撃は対向する二方向を示しており、180°打面転位が行なわれていることを物語っている。ちなみに第4次調査で検出された資料の接合である。

〔接合6〕 7・8の碎片2点からなる。

8の背面左に7の腹面が接合する。7・8ともに頭部が折損している。第2次調査で検出された資料の接合である。

〔接合7〕 石刃状剥片9と石核10の2点からなる。

石刃状剥片9の主要剥離面と石核10の作業面が接合する。9の背面には石核10の右側面に続く原礫面が残る。また、石核10の打面に連続する単剥離面打面がある。その単剥離面で構成される単設打面をもつ石核10は、裏面から右側面にかけては原礫面であり、作業面は正面のみにしか認められないという第VII層文化層に特徴的に見られる剥片剥離工程の結果を示している。しかしながら接合資料はひじょうに断片的であるため、具体的な剥片剥離工程を復元し得ない。

接合資料と剥片剥離工程 第4次調査で報告した相互に接合しない2つの接合資料〔接合1〕と〔接合2〕についても、具体的な剥片剥離工程はわずかにしか判明していないが、今回報告した接合3から接合7までの相互に接合しない5つの接合資料は、さらに断片的なものであって、具体的な剥片剥離工程を推測できない。

その中で石核を含む接合資料〔接合4〕と〔接合7〕とが把握され、第4次調査で報告した石核を含む接合資料〔接合2〕と合わせて少なくとも3つの以上に個体分割して、剥片剥離が行われていることが明らかとなった点は成果であろう。それらがそれぞれ具体的にどのような経過を辿ったのか判断できないが、いずれの石核についても残核には単剥離面で構成された単設打面が残され、また作業面は正面の一面のみにしか認められず、側面から裏面にかけては原礫面が残されていることから、第VII層文化層の剥片剥離工程に特徴的な、打面や作業面をそれぞれ一面に固定して加撃点を徐々に後退させて剥片剥離を行っているようすが推察される。

分布 資料総数85点である。すでに第4次調査報告書で、接合1が石器ブロック1に分布すること、接合2がZ-12・13区に分布することが明らかにされている。また、今回図示した接合資料についても、接合1同様に石器ブロック1に関連していることがすでに言及されている。

第7次調査で判明したことは、新たに石器ブロック4付近に分布する接合7が把握された点にあり、石器ブロック1との関連が示唆される。その一方で相互に接合する接合資料が得られた訳ではないので、具体的な剥片剥離工程に関わって積極的になどを評価できるものではない。ただし、石器ブロック4付近に分布する接合7は石核を含む接合資料であり、石器ブロック4の性格を推察するうえで注意される。

(3) 母岩別資料7 (第162・163図)

石材 チャート。

石質 緻密で脂肪光沢がある。色調は赤褐色を呈し、縞状に青灰色の部分がある。

素材 素材形状を明らかにできる資料はないが、接合資料それぞれに多数の節理面と滑らかな原礫面との見られるから河原石を節理面に沿って分割して用いたことが推察される。

資料 接合2から接合4までの相互に接合しない3つの接合資料を提示した。

[接合2] 微細剥離痕を有する剥片1と剥片2、石核3の3点からなる。

1・2それぞれが石核3に接合する。1はウートラパッセした剥片。単剥離面打面から剥離され、断面形は三角形を呈している。背面は節理面、主要剥離面と同方向からの加撃した剥離面、断面を三角形にする稜からの加撃した剥離面から構成される。背面右側縁=腹面左側縁全体に微細剥離痕が観察される。石核3の裏面作業面に接合する。2は背面が石核3の右側面の節理面に続く節理面で構成される剥片である。3は第5次調査で報告された石核である。

[接合3] 4・5の剥片2点からなる。

5の背面に4の腹面が接合する。4は頭部付近の破碎している剥片である。背面の一部に節理面が見られる。5は複剥離面打面の分厚い剥片である。背面端部に滑らかな原礫面が見られ、素材に河原石が用いられたことが推察される。

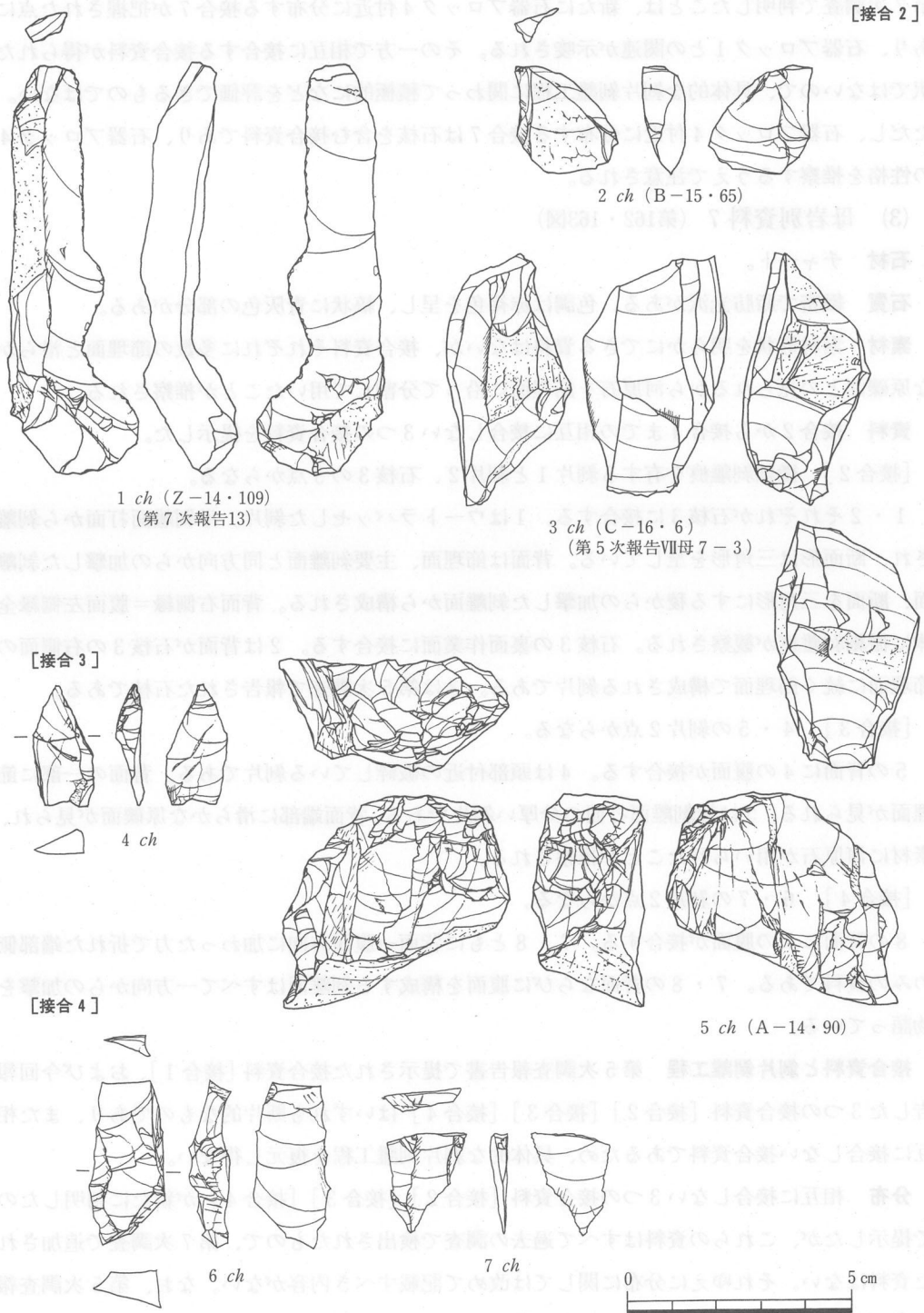
[接合4] 6・7の剥片2点からなる。

8の背面に7の腹面が接合する。7・8ともに背面→腹面方向に加わった力で折れた端部側のみの資料である。7・8の背面ならびに腹面を構成する剥離面はすべて一方向からの加撃を物語っている。

接合資料と剥片剥離工程 第5次調査報告書で提示された接合資料[接合1]、および今回報告した3つの接合資料[接合2][接合3][接合4]はいずれも断片的なものであり、また相互に接合しない接合資料であるため、具体的な剥片剥離工程を復元し得ない。

分布 相互に接合しない3つの接合資料[接合2][接合3][接合4]が新たに判明したので提示したが、これらの資料はすべて過去の調査で検出されたもので、第7次調査で追加された資料はない。それゆえに分布に関しては改めて記載すべき内容がない。なお、第5次調査報告書(小林・宮尾編 1996)では分布に関して詳述されているので参照されたい。

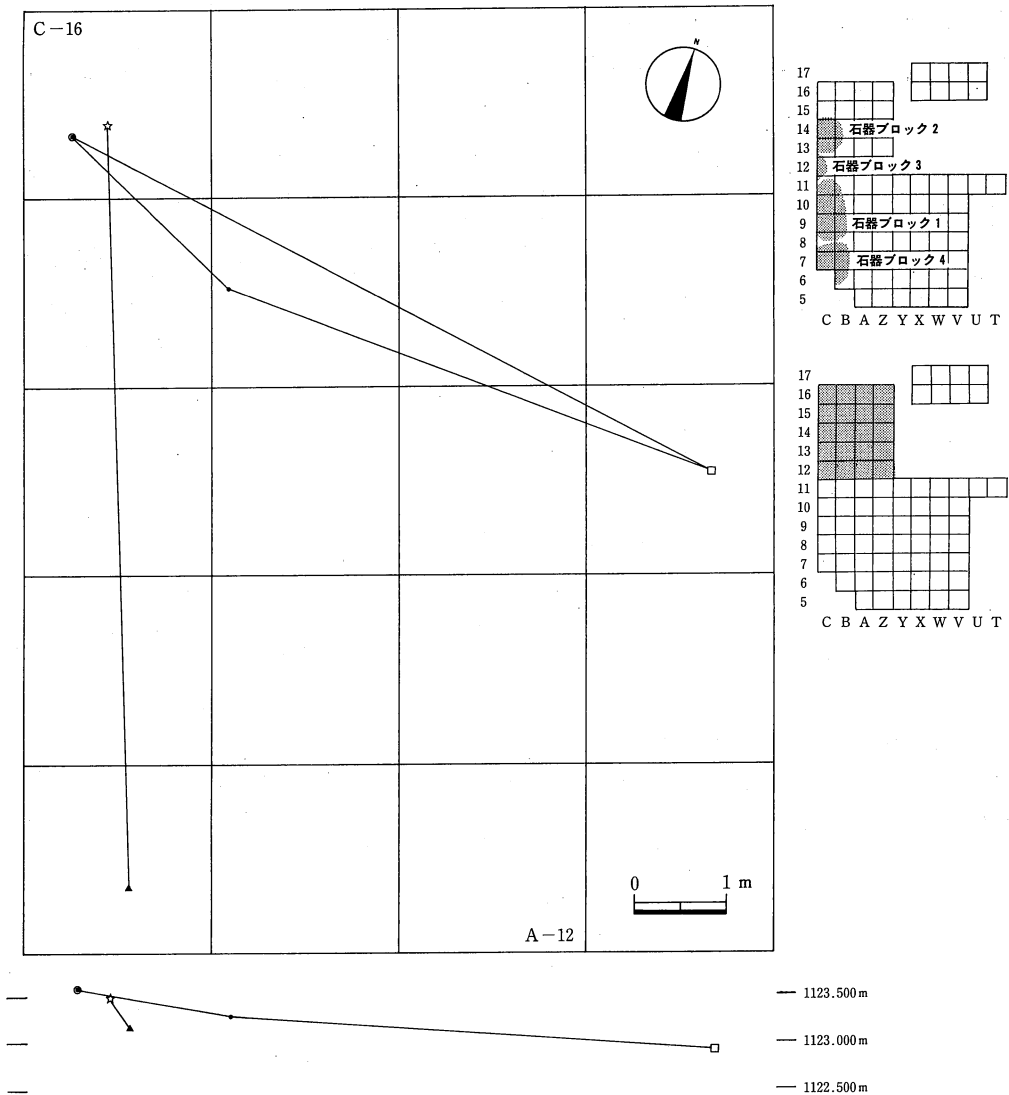
(大堀あずさ)



第162図 第7次発掘調査資料 第VII層文化層母岩別資料7(2/3)

追記

第VII層文化層の母岩別資料には、今回の調査で新たな資料の追加があった母岩別資料3、母岩別資料6、母岩別資料7などのチャートの他に玻璃質安山岩の母岩別資料があり、石器石材全体を見渡した場合も、チャートに匹敵する総量を有している。その一方で、第VI層L文化層のように黒曜石の母岩別資料は把握されていないうえ、石器石材全体としてみた場合もひじょうに点数、総量ともに少ない。この点は第VI層L文化層第V層文化層と比べると第VII層文化層の大きな特徴の一つである。



第163図 第7次発掘調査資料 第VII層文化層母岩別資料7：分布(1/80)

第V章 第VII層文化層

ところで、今回新たな資料の追加に伴って報告した母岩別資料6には側面から裏面にかけて原礫面を大きく残す、単剥離面で構成される単設打面石核が含まれており、このような石核から推察して、単設打面で作業面を正面に固定し、徐々に加撃点を打面の奥へと後退させていった剥片剥離工程が読み取れる。このような剥片剥離工程は第VII層文化層に特徴的であり、また、石刃を含む縦長剥片を目的的に剥離する石刃技法の顕在化が指摘（谷口・宮尾編 1995）されて、編年的位置を考察する手掛かりともなっている。

しかしながら、今回の調査では追加資料が得られなかった玻璃質安山岩の母岩別資料2（谷口・宮尾編 1995）では、同時にこのような石刃剥離工程の途上で生じた破碎塊を改めて石核に用いて行われるフレキシブルな剥片剥離も存在している。さらにこのような剥片剥離によって生産される剥片を素材として、第VII層文化層に特有の小形な切出形のナイフ形石器が製作されており、注意する必要があるだろう。

玻璃質安山岩の母岩別資料2には滑らかな原礫面が見られる石核が含まれ、河原石を石核素材としていることが明らかである。また、接合資料から復元し得る原石の大きさは拳大であって十分に石刃剥離工程を維持できると思われるにも関わらず、破碎した塊を改めて石核に用いて、不定形な小形剥片を剥離している状態は、素材と剥片剥離工程との間に矛盾があるように考えられる。

（笠井洋祐）